

---

# 西国の巫女

あすかK

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

西国の巫女

### 【Nコード】

N9892X

### 【作者名】

あすかK

### 【あらすじ】

北の国が、西の国の「巫女」を誘拐した。??西国の最高権威「巫女」になるべく「力」の修行を続けて来た少女。少女のことを命にかえても護ると誓った獣人。北国の次期皇帝でありながら、軍の人形と化した強大な「力」を持つ皇太子。??「力」に翻弄されるのは、軍が、国が、あるいは彼ら自身か……

## 序、獸人の子

少年は、鬱蒼と草木の生い茂る森の中を、がむしゃらに走っていた。少年は靴も履いておらず衣服さえも纏っていない。一糸まとわぬ全裸の状態だが、そんなことを気にしている場合ではなかった。とにかく、走らなくてはならない。ひたすら逃げなくてはならない。背後から追っ手の声がする。大の大人が幾人も、十にも満たぬ少年のことを追いかけて迫ってくる。大人たちは斧や刀など武器を抱えて少年のことを追っていた。捕まったら最後だ。もう、命はない。

少年は、鮮やかな赤い血の滴り落ちる利き腕を押さえながら、死にも狂いで走っていた。この傷はたった先刻、森の外、村の外れで村人の一人の投げた石槍にあたっただけのものだ。少年はその村人の名前を知らないが、顔を見たことはあった。その程度の知り合いだ。何故って、少年は生まれてから今までずっとその村に住んでいたのだ。当然住人の顔くらい知っている。名前はわからなくともそれが自分の住んでいた村の人間なのだということくらい、わかっていた。

村人たちは、昨日までは、少年にも優しくかった。他の少年少女に接するのと同じように、村の子供として可愛がってくれた。しかし何故だろう。今日になって、突然、彼らの態度が豹変した。「あいつを、殺せ」と言う。「このまま放っておいたら村の災いになる」と。「あいつは化け物だ」と。

捕われて殺される寸前だった少年を、村から逃してくれたのは、他にもない少年の母親だった。母親は、村人たちの目を盗んで少年を拘束していた縄をほどくと、両目にたっぷり涙を溜めながら「ごめんね」と謝った。少年にはなにがなんだかわからない。どうして自分がこのような目に遭っているのか、どうして母親が泣いているのか。何も知らない少年は、当然母も一緒にこの村から逃げ出してくれるのだと思った。自分を連れて、二人で逃げてくれるのだと思

った。しかし、母は町外れの森までくると、少年の手を放した。

「??お前は、私の手にも負えない。傍にいてやれない母を許しておくれ。」

母の言葉が、胸へと突き刺さる。

どういうことだ、と少年は目を丸くした。少年には父がいない。故に、ずっと母と二人暮らした。今までずっと、二人で傍にいたではないか。それなのにどうして突然、離れなくてはならないのか。

愕然とした少年が母の元を去ることができずに突っ立っていると、村の方から大人たちの「いたぞ!」という声が響いた。母ははっと息を呑んで、「はやくお逃げ!」と少年の背中を押した。少年は首を振る。いやだ。母と離れたくない。すると、母は少年を渾身の力で突き飛ばすと、叫んだのだ。??お前は、人間の村にはもうおれぬ。早く逃げなさい。

どういうことなのだ、どうして自分が人間の村にはいられないのだ。混乱する頭を抱えて、少年は母を振り返る。その背後から、大勢の大人たちが血相を変えて走ってくるのが見えた。手には武器を握っている。化け物を殺せ! と大人たちが叫んだ。少年は目を見開く。何故、自分のことを彼らは化け物と呼ぶのだろう。

大人の一人の投げた武器が、少年の腕を掠った。巨大な石槍だった。右腕に激痛が走る。服が裂けて、その下から皮膚と傷が見える??はずだった。しかし、少年は、自分の腕を見て、啞然とした。破れた衣服の下から覗いたのは、人の皮膚とはおおよそ思えない、まるで熊のような黒いけむくじやらの毛皮だったのである。それは、紛いも無く獣の腕だった。否、化け物の腕だった。

早く逃げなさいと、母親が叫ぶ。どうしていいのかわからずに、少年は森へと向かって駆け出した。このままでは殺される。何故かはわからない。しかし、村人の言うように、自分はあたかも化け物のような腕を持っている。

そして、森の中へ逃げ出す寸前に、母親の懺悔するような嘆きを、

聞いた。

「??ごめんね。本当にごめんね。獣人なんぞに産んでしまつて、本当に……！」

獣人、という響きが、少年の耳に残つた。初めて聞く言葉だ。それがなんであるかなんて皆目見当もつかない。しかし、その「獣人」とやらのせいで、自分は殺されんと追われているのだからという予想はついた。村人らの言う「化け物」とは、「獣人」のことを示しているのだ。そしてそれは、少年のことである。つまり自分は今までずっと人間だと思つていたけれど??人間ではなかつたのだ。

それから何時間も、少年は森の中を走り続けた。息が切れても、どんなに苦しくても、走り続けていた。足を止めれば大人たちに捕まってしまう。捕まれば、殺されてしまう。

森を走る間に、いつのまにか纏つていた服は裂けて、少年は全裸になつていた。走るだけで裂けるほど柔な服を着ていたつもりはない。しかし、まるで体が突然変化でもしたかのようにみるみるうちに膨張して、もとの少年の大きさからは考えられないほどに巨大化してしまつたのだ。ゆえに、少年の服はもう、纏うことができなくなつた。かわりに少年の体は、熊のような黒くて堅く分厚い毛皮に覆われていた。

村の外れで斬られた腕の傷が痛む。大量に血が流れた。走つても走つても村人たちを巻くことができないのは、恐らく森の中に点々と血痕が残つているためだろう。傷のある右腕は痺れ始め、感覚がない。そろそろ自由には動かせないほどに傷が進行していた。たくさん血を流すと、やがてはそれが原因で死ぬのだという。そのためだろうか、先ほどから走っているはずなのに、走つていくという感覚さえしない。まるで夢の中にいるみたいだ。頭がふわふわと浮いていて、そのまま気を失つてしまふようなほど。

少年は、木々の間を抜けて、森の中に、湧き出る泉を見つけた。こんなところまで来たのは初めてだった。もう帰り道はわからない。

もちろん、わかったところであの村へ帰られるわけもないのだが。

ちよろちよると水の流れる音がして、自ずと足がそちらへと引かれた。血を流しながらも走り続けたせいで、体が水分を欲している水が飲みたい。本能的にそう思った。

少年は泉の縁に腰を下ろすと、無我夢中で水の中に顔を突っ込んで喉を潤した。本当に獣みたいだ。だが仕方が無い。手を使って水をすくおうにも、両腕は化け物のそれのように変化しており、もはやこれが人間の手と同じ役割を果たせるのかもわからないからだ。

少年はひとしきり水を飲むと、息継ぎのためによやく顔をあげた。ぼたぼたと髪の毛を伝って水滴が水面に落ちた。波紋が広がっていく。その波紋の中に、少年は化け物の顔を見た。

一瞬、わけがわからなかった。

昨日まで、自分は母によく似た東国風の顔立ちをしていたはずだった。綺麗な黒髪を持つ、素朴な少年の顔をしていたはずだった。しかしながら、その泉の水面に映る姿は、どこからどう見ても人間のそれではない。白い、白骨化した頭蓋骨のような顔に、黄ばんだ白の長い髪の毛が生えている。ぼたぼたと雫が、この白い毛から滴り落ちて泉に波紋を作った。目は、頭蓋骨のそれのように暗くぼんでいて、どこにも瞳など見えなかった。そして、白い毛の間からは、二本の雄牛のような角が生えている。化け物だ。これがもし自分の姿ならば？自分は化け物だ。

少年は、己の姿に恐れおののいて、ふらふらと立ち上がるうとした。しかし、足に力が入らず、その場に転倒した。ずしん、と重みのある音がその場に響き渡る。小さな少年の倒れた音ではない。野獣の倒れたような重低音だ。腕から流れ出した血が、泉の澄んだ水をどす黒く染めていく。少年はそれを虚ろな視界の中で見つめていた。

嗚呼、力が入らない。立ち上がって逃げることも、できない。逃げたところで、こんな姿ではどこにも行けない。人間は化け物に救

いの手を差し伸べてくれないだろう。かといって森の中で一人で生きていく自信もない。八方ふさがりだ。

森の奥の方から、大人たちの怒号が聞こえた。彼らは少年を殺しにくるのだ。このまま生かしておいては村の災いになる。それはそうだ。だって少年はもう、人間ではないのだ。

このまま自分は死ぬのだろうと、遠のいていく意識の中で少年は思った。血を流して真っ赤に泉を染めて、干涸びるように死ぬのかもしれない。あるいはそうなる前に、村人に見つかって、首を切られて死ぬのかもしれない。だが、もう???どちらでもよかった。なんでもいい。このまま化け物として生きるくらいなら、死んだ方がいい。人間は恐ろしい化け物の命を絶えず狙うだろう。人に怯えて生きて行くことなど、まだ十にも満たぬ少年には、できなかつた。

少年は全てを諦めて、全身の力を抜いた。すると少し気が楽になった。逃げろと言ってくれた母には申し訳ないが、もう逃げる必要はないのだと思うと、一気に疲労が体を支配した。天国はどんなところだろうかと虚ろな意識の中で考える。いや、化け物には天国など用意されていないかもしれない。では、向かう先は地獄だろうか。何も悪事を働いた覚えなどなかつたけれども、獣として人々を脅かしてしまつたからには甘んじて地獄に向かうしかない。だとすれば、獣となつた自分は、地獄に向かうために生まれてきたのだろうか。それはなんと虚しい生涯だろう。己を人間と信じて生きて、最後は獣となりさがり殺され地獄へ向かう。こんなことなら、生まれてこなかつたって良かったろうに。悪戯な生涯を送つてしまつた。

朦朧としながらもそんなことを考えていると、ふと、目の前に人の気配を感じた。さく、さく、と遠いどこからか、草木を踏み分ける音がする。大人たちがようやく少年の存在を見つけたのだらうか。そう思ったが、あの怒号が聞こえない。もしも村人ならば、「化け物!」と叫び、「殺せ!」と喚くことだろう。しかし、近付いてくる人間は、至極静かだ。??では一体、誰だ?

少年は、一度閉じた目を開いて、ゆっくりと頭を持ち上げた。こ

んな森の奥に、一体誰がいると言うのだろうか。ここは人間の住まうような場所ではない。だとすれば、少年と同じ化け物か??あるいは、妖精の類いだ。

そう予想してから見上げたために、そこに立っていた者を見てまず少年が思ったのは、

??天女だ。

その一言だった。

少年が今まで一度だつて見たこともないような美しい着物を纏った少女だった。年の頃は、少年よりも若い。五つか、それくらいではないだろうか。しかしその容姿は、五歳かそこらの齡でありながら、村一番の別嬪と言われていた娘よりも美しかった。絵に描いたような美少女だ。

そのような美少女が、こんな森の奥に現れるわけもない。だからやはり、人間ではないのだ。この少女は天女だ。そして、自分をあの世へ迎えに来たのだと、少年は思った。

「三の君……！」

天女の後ろから、別の女の声が出た。慌てたように森の奥から現れたその女は、天女よりもずっと年上だった。少年の母よりは若く見えるが、恐らく成人しているだろう。天女の付き人だろうか。

「勝手に馬車を下りてはなりません……！」

付き人はそう天女に告げてから、ようやくその場に汚らしく転がる少年の姿に気付いたようだった。はっと息を呑んで、汚物を見たかのように顔をしかめ、いかにも上物とわかる服の袖で口元を押さえた。

「獣人……！」

獣人??。その名は、自らの母の口からも聞いた。獣人なんぞに産んでしまつてごめんなさいと、母が言った。ゆえにそれは少年を差し示す言葉だ。付き人が「獣人」と呼んで汚物のように忌み嫌っ



ているのは、少年の存在そのものだ。天女の付き人にさえ忌み嫌われる自分は？？やはり地獄へ落ちるしかないようだ。

そう悟って苦笑を浮かべ、少年は再び目を閉じようとした。どうせ天女は天国へは連れていってくれない。ならばこうして彼女を見上げていても仕方が無い。しかし、そう思っただけで瞑目した少年の方へ、さくさく草をかきわけながら近付いてくる足音がする。「三の君、近付いてはなりません！」と付き人の声が出た。ということは、近付いてくるのは天女だろうか。うっすらと少年が目を開くと、予想した以上の至近距離に、天女の姿が見えた。間近でみるその美しいかんばせに、息が詰まりそうになった。

「このままでは、彼は、死んでしまっわ」

天女が初めて声を発した。鈴の鳴るような、愛くるしい声であった。五歳かそこらとは思えないほどはつきりとした物言いで、天女は呟く。

「彼を、連れて帰る」

どうということだ、と少年は天女の姿を穴の開くほど見つめた。彼女は自分を、天国へ連れていってくれるというのか。付き人さえ忌み嫌うこの化け物を、連れて帰るというのか。

付き人は信じられないとばかりに首を横に振って、「なりません」と叫んだ。

「そのような穢らわしい化け物を、仮にも聖女様ともあるう方の横に置くわけにはまいりませぬ！」

「穢らわしい化け物ではないわ。獣人よ。私には仗身がないもの。仗身にするわ。それならいいでしょう。聖女の仗身は獣人と決まっているのだから」

仗身、と少年が聞き慣れないその言葉を呟くと、聖女は微笑んだ。

「護衛のことよ。私のことを、守るの」

「いいえ、なりませんわ、三の君」

付き人が厳しい声をあげた。この「三の君」というのがどうやら

天女の呼称らしい。名前ではないだろう。天女の世界にはきつと複雑な決め事があるに違いない。

「仗身となる獣人は、生まれたその時から聖女様の仗身となるために訓練させられるもの。しかしその化け物は育ち過ぎております。すでに獣の姿に変化してしまっているのに、これから仗身に育てあげるなんて危険なこと、できませんわ」

「それは、私の力次第でしょう。彼なら大丈夫?? だってほら、こんなに優しい目をしてる」

天女はそう呟いて屈むと、少年の顔に触れた。少年は目を見開く。村の大人たちがぞぞと「化け物」と呼んだこの顔を、少年自身泉に映った自分の顔を見て悲鳴をあげそうになった、この顔を、天女は少しも忌むことなく撫でた。そして、少しも怯むことなく、少年に問う。

「貴方、名前は?」

初対面の人間が質問するならば、あまりにも当然な問いかけだ。それなのに、何故か少年は泣きそうになった。泣きそうになるほど嬉しかった。

「……ゆたや」

ぼそりと答えると、天女は目をぱちくりさせた。やがて、花の咲き綻ぶような笑みを見せる。

「ゆたや……そう、貴方、東の国の出身なのね。嬉しいわ……私もね、東の出身なの。かぐわって言うのよ」

「三の君! 獣人に名前など……!」

付き人が悲鳴に近い苦言を吐いた。しかし、少年の耳には届かない。?? 東の出身。ということは、彼女は天女ではないのか。人間なのか。こんなにも美しい人間がこの世にいるのか。まるで天女のような人間が、存在しているのか。

「ゆたや……貴方さえよければ、私の仗身になってくれないかしら?」

そう呟いた天女のような少女の頼みを、少年は一生涯忘れること

はないと思った。このような化け物の姿になってしまった自分を、少しも忌み嫌うことなく求めてくれるならば、自分とてどんな求めにも応じようと。この瞬間に、誓った。

それは他の何よりも堅い契約で、少年をがんじがらめにして離さない。しかしそれこそが彼の幸福となった。

彼は己の命を、この少女に捧ぐことを誓った。

## 1、聖女カゲワ

世界は何故創始されたのか。理由なく世界が始まったのだとしたら、その存在に意義はあるのか。今尚存続するこの世界に生まれた命に、意味はあるのか。我々が何故この世に生を受けたのか、理由はあるのだろうか。もし理由なくして生まれてきたのだとしたら、我々は理由のない生の中で、何かを成すべきなのであるか。その中で、自分勝手な理由付けをして、生きながらえようとしてもいいのだろうか？？。

長々と世界と世界に生きる命に関する疑問を陳列させた古文書が読まれなくなり、何百年という月日が過ぎた。かつては貴人の教養であった書物は今では非生産な虚言と呼ばれ、一部の哲学者が研究の対象とするのみとなった。

人心が、世界の起源を知りたいとは望まなくなり、数百年。絶対王政の布かれた西国エウリアは、繁栄を極めていた。しかし、第二十五代国王のトゥアイド・ギル四世の治世十二年の頃の秋、突如国王が逝去した。享年三十四歳、若すぎる死であった。不自然な急逝の知らせに、国中がざわめきだった。国政の重鎮のうちの誰かの謀策だったのではないかという様々な憶測も飛んだ。が、死人に口はなく、真相はわからず終いであった。

エウリア君主国では第二十五代国王の急逝に伴い、大々的な葬儀が執り行われ、他国からも賓客が招かれることとなった。そしてその絢爛な儀式が終わると、次に待ち構えているのは次期国王の就任式であった。次帝になる権利を持った皇太子は、たったの二歳になったばかりであり、国政の如何のわかるうはずもなかった。宮廷では連日国会という名の騒動が開かれていた。

また、国政とは直接関係こそないが、先帝の崩御によって混乱を生じている場所がもう一つあった。国の中央に置かれた王宮の西側海に面した広大な土地に広がる俗世とは切り離された世界、「後宮」である。

エウリアにおいての「後宮」とは、国王の妻の住む宮を表しているのではない。この国には、政治の最高権威である「国王」とは別に、宗教の最高権威である「巫女」という権力者がいた。巫女は最も神に近い存在と言われ、神の言葉を国民に代弁する高貴な存在であった。巫女は、国王の代替わりと共に代替わりをし、その時の王の治世を神の代替人として見守った。そして、時の王が倒れると、次の王の治世のために新たな巫女が選ばれる。その候補となる女たちを、聖女と呼んだ。その聖女たちが俗世から切り離され、いずれ巫女となる日のために修行する場所が、「後宮」である。

聖女の中から選ばれた巫女が、最初に行く仕事は国王への宣下、そして次の代の巫女の候補となる聖女を国中から十人選ぶことであった。そして次の巫女は、その十人の中からただ一人選ばれる。その選定の儀は、国王でさえ見ることに適わない極秘裏の行事であった。

民衆にとっては雲の上にも等しい後宮においての騒動を知る者は、数えられるほどしかない。聖女たち自身、彼女たちに仕える従者たち、そして存在するともわからない神のみである。女たちは、自らが巫女に選ばれるために奔走しはじめていた。

高く透き通った蒼穹の中に、小さな雲がぽつかりと浮かんでいる。上空では風速もないのか、ゆっくりと流れて行く様はのどかだ。視界の端に映る黄色の木の葉が、風の吹き抜ける度に揺れた。一陣の大きな風が通ると、白いワンピースのような薄い着物の裾がめくれあがり、木の葉が数枚枝を離れて舞った。あちらへひらり、こちら

へひらり、と宙で迷った後、黄色のそれは少女の胸元に落ち着く。純白の衣装が汚れることも気にせず、少女は木の葉を退けることもせず、仰向けになって空を見上げていた。

外を歩いただけでも汗ばむような真夏を越えて、ようやく秋の色が見え始めていた。冬にはまだ遠く、心地良い風が吹いている。本当は少し考え事をしようと思ふと散歩に出たはずなのに、あまりにも心地良くて眠ってしまいそうだ。少女はゆっくり瞬きを繰り返してから、目を閉じた。

外界から隔離された後宮の地は、ひよっとすると他とは違う時間の流れの中にあるのかもしれない。物心ついた頃からこの場所に住んでいる少女には、外と比較する術もないが、たまにそんなことを思う。

己の瞼で視界を遮ると、一瞬、何も見えなくなる。太陽の光の効果で橙色一色に包まれるが、やがてそれも薄れる。精神を統一し、意識を未来へ向けて眠りに落ちると、時折現在より先の出来事を見ることがある。先見の技と呼ばれるこの能力は、巫女の修行で覚えさせられる技の一つであり、彼女はこれがあまり得意ではなかった。

無言で目を閉じて、先見の技に力を注いでいるその時である。不意に彼女の第六感が何者かの気配を感じ取った。気感と呼ばれるこれも、巫女の技の一つである。目を閉じていても、ある程度の範囲で近くに誰かが来ると、それが誰であるかを言い当てることができる。少女は、これが得意であった。特に、この気配を間違えたことはない。

「……ゆたや？」

小声でその名を呼ぶと、「御意」と低い答えが返って来た。少女は目を開く。日光が瞳に突き刺さり、目眩を引き起こす。彼女は目を細めると、光から逃げるように寝返りを打った。ころころと二回転すると、端に当たる。此処??四阿の屋根の上は彼女の昼寝専用の寢床であり、昔は寝ていて危うく落下しそうになったこともあつ

だが、今となつては例え夢の中にあつても、感覚のみを頼りに寸前で踏みとどまれるまでになつた。少女はうつ伏せになるとそこから身を乗り出して、下を覗きこむ。すると、慄然とした面持ちの男と目が合った。

「毎度毎度、口を酸っぱくしておりますけれど……突然いなくならないで下さいますか？」

眉間に深く皺が寄つている。何か挟むことが出来るんじゃないかしら、と少女は思った。

「殿堂を出る時は、私かロマーナに一言くださらないと困ります、かぐわの君」

少女??カグワは、首を竦めた。

この広大な後宮の地に住まう十の聖女には、それぞれ一の君、二の君、と後宮入りした順番に番号が振られている。カグワというこの少女は、三番目に選定を受けたので、通例であれば三の君と呼ばれるはずであつたが、本人がそれを厭うために、本名であるカグワと呼ばれることも少なくなかつた。折角名前があるのだから、お互いにそれで呼び合った方が親しくなれるのではないかというのが彼女の主張である。しかしながら、最終的には巫女の座を競う相手にしかなり得ない聖女同士が親しくなる必要性などそもそもないというのが、他の聖女たちの解釈であつた。

「でも、ゆたやは、いつつも私を探し当ててるじゃない」

カグワは欠伸ばじりに言う。ユタヤという青年は眉をひそめ、四阿の屋根を片手で掴んでよじ登つた。片腕の力のみで軽々と屋根の上まで自分の体を持ち上げることの出来る彼は、超人のようにも見えるが、実のところ人間ではない。

「今日のところはこの四阿にいらつしやつたからすぐに探し当てられたもの……常々私が、貴女を探して後宮中を走り回っていることを知らぬわけではありませんまい」

青年は乱れた祖末な服の裾を直しながら、渋い顔をする。黄ばんだ白の布一枚で作られたその服は、装衣とも草衣とも呼ばれ、彼ら

仗身の平服であった。

「それに、今日くらい大人しくしたらどうです？ 国王陛下が亡くなったというのに……」

ユタヤの語尾が消えていく。国王トウアイド・ギル四世逝去。？  
今朝方、唐突に後宮を駆け抜けた知らせは、静かな波乱を起こしつつあった。

国王の死は、すなわち巫女の死も意味している。前の巫女がいなくなれば、次の巫女が選ばれるというのもまた慣例だ。聖女たちは突然の知らせに心構えもままならず、それぞれ慄いていた。ただ一人、三の君を除いては。

「そうね……亡くなられたのね」

三の君、カグワはゆっくりと起きあがると長い黒髪をかきあげる。巨木の影から空を見上げて、彼女は目を細めた。葉の合間から見えるのは、空気が澄んでいると肉眼でもわかるほどの晴天だ。

「……でも、こんなにいい天気なのよ。ひなたぼっこの一つでもしたいじゃない」

「ひなたぼっこの一つでも出来るでしょう……他の君々は、慌ただしくしておいでです」

「ま、何のために慌ただしくしてるの？」

「何って……選定の儀は、十日後に決定したそうですよ。それまでに巫力を高める修行の一つでもなさっているのでは？」

「巫力を高めるねえ……。私たち、後宮にきてから十二年、そのための修行ばかりやってきたわけじゃない？ それをこれからの十日に詰め込んだところでぐんと伸びるとは思えないけど？」

聖女たちが巫女の技を使いこなすために必要とする基礎能力のことを、巫力と呼ぶ。もともと彼女たちは、聖女に選ばれたからには人並み以上に巫力を持つていたということであり、これは修行によつてさらに高まると言われていた。そして、巫女を選ぶ際の基準も、これの高低が大いに関係していると言われている。とは言え、どれもこれも単なる流言でしかない。実際のところは誰も知らないのだ。



カグワは再び欠伸をこぼすと、眠い目を擦った。隣でユタヤはどこか不満気な顔をしている。

「それはそうでしょうけども、調整したりする必要はないのですか？」

「調整してどうにかなるようなものでもないでしょ。いくら練習したって、先見の夢なんかほとんど私、見たことないんだし」

「ですが、かぐわの君がたまに見る先見の夢は百発百中で当たります」

「まあ、そこそこね。出来るときは出来るし、出来ないときは出来ないものなのよ」

「だからこそ、調整が必要なのでは？」

「調整如何の問題じゃないと思うんだけど……だってほら、ネイディーンはきつと修行なんてしてないでしょう？」

「一の君は……そうですね、私がかぐわの君を探して走っていると毎度大変ねと声をかけて下さいました」

後半の厭味は聞こえなかったふりをして、「やっぱりね」とカグワは頷いた。

一の君、ネイディーンは、国から聖女として選ばれた中でも随一の才能の持ち主であった。巫女の基本技の中に不得手な物などなく、佇まいも美しく、聡明で利発な女性である。

「ネイディーンは、調整とか、修行なんてしても無意味だってわかっているのよ」

「一の君の場合は、もうこれ以上高める必要がないというだけでは？」

「もしそうだとしたら、今更他の聖女が頑張ったって追いつけないじゃない」

「それでは選定の儀の意味がありません」

「最初から結果は見えてるってことだものね」

「そうですよ」

「でももし、巫力の高低で測るんだとしたら、ネイディーン以上の

聖女はいないし……巫力が関係ないんだとしたら、今更修行してもやっぱり意味がないわ」

「意味がないことはないでしょう」

「そんなことよりも、巫女になるにしろならないにしろ、あと十日で後宮を追い出されることになるんだもの。今のうちにひなたぼっこしておかなくっちゃ」

カグワは大きく伸びをすると、ころりと屋根の上に転がった。木漏れ日がきらきらと輝いて、まるで宝石のようだ。十二年慕ったこの光景にも、あと十日で別れを告げなくてはならないのだと思うと、切ない。王が死んだと言われるよりも、この慣れ親しんだ居心地の良い場所に二度と来られなくなるのだと思う方が、事は重大に思えた。

カグワの隣に屈んでいたユタヤはしばらく苦い顔をしていたが、カグワに動く気がないことを知ると、諦めたようにその場にあぐらをかいた。ちらりとその仏頂面を見上げれば、彼は無言で腰の刀を抜いた。研磨する気なのだろう

「いいですよ。かぐわの君がその気なら、私もお付き合い致します。こうやってこの四阿の上で刀研ぎなんぞするのもこれが最後やもしれませんから」

「かもね。貴方いつつも此処にいる時、刀研いでるものね」

「かぐわ様が眠ってしまうので、他にやることはないんです」

「そうなの？ 暇だったら何処か他行つてもいいのに」

「いいえ。貴女の隣にいるのが私の役目ですから」

きっぱりと言い切って、ユタヤは背中に背負った太刀も屋根の上を下ろすと、刀を抜いて並べた。銀色の刃が二本、陽光を浴びてきらきらと輝いている。

ユタヤの役職は仗身と呼ばれ、カグワ直属の護衛であった。聖女たちにはそれぞれ一人につき一人の仗身が付いており、そして必ずそれは獣人であることが決まっている。彼らは、一見人間と変わらぬ姿形をしているが、自在に獣の姿に変化することができた。その

自由な変化を可能にしているのは、それぞれの聖女の巫力である。仗身である獣人は首から巨大な数珠玉を下げっており、これに聖女の巫力が込められていた。これの力によって、彼らは獣の性を封印しているのである。

カグワは、彼の首からぶらさがった質素な数珠玉に、なんとなく手を伸ばした。立ち上がった状態で彼の腰の高さまであるそれは、あぐらをかくと太ももの上に乗ってしまう。カグワは仰向けになつたまま、鶏卵よりは小さいそれを手の中どころと転がして、もてあそんだ。ユタヤは全く気にもせず、黙々と研磨材でまずは腰の直刀から磨き始める。無言のまま、風に木の葉のこすれ合う音だけが響きわたる。

このようなカグワとユタヤの関係性は、他の聖女たちのそれと比べると、異様であった。仗身は、聖女の従者の中で最も位が低い。と言つのも、聖女の身に危険が生じた場合、仗身は命を張って主を守らなくてはならない。いざという時には命を落とす、捨て駒のような存在なのである。本来獣人は、成長とともに人の心を無くして獣になってしまうので、幼いうちに処分されることが世間一般では慣例であった。そのため、捨て駒にするには最適な存在だったのだろう。また、いかに獣の心を封印出来るかは聖女の腕にかかっているということもあり、巫力の鍛錬にもなった。だが、その元が畜生類であるため、自分の仗身とはある程度の距離を取りたがる聖女がほとんどであった。毛嫌いこそしないものの、例えば同じ部屋には置かない、会話は最低限に済ませる、一緒に食事は取らないなどの制限をしている。ところが、カグワとユタヤの場合は、始終隣に寄り添っているばかりか、仗身の身分であるユタヤが主に苦言を呈する始末である。今のようにかグワが一方的にユタヤにちよっかいを出しても、ユタヤが反応を寄越さないような状況など、他の聖女と仗身には到底あり得なかった。

「……眠い」

「寝たら良いではないですか」

刀剣を研いでいる時のユタヤの返事は大抵素っ気ない。彼は、カグワの身を守るための剣なのだから丁寧に手入れするのが当然だと豪語するが、実際は細かい作業が好きただけなのだろう。と、カグワは思っている。

「枕が欲しいな」

「寝殿に戻ればありますよ」

「面倒くさい」

「なら我慢して下さい」

「ゆたや、変化してよ」

「……今ですか？」

ユタヤの、研磨材を握る手が止まった。

獣人の獣の姿は各々によって異なるが、ユタヤの場合、胴体が巨大なほ乳類に似ているために、寝具に丁度良いのである。そのため、カグワは度々彼に封印を解くことをせがんだが、殿堂の奥にいる時以外は大概渋られた。

「今は、困ります」

「どうして？」

「どうしてって……此処は三の宮ではありませんよ。誰が通るともわからないのに」

「いいじゃない、誰が通ったって」

「……別に私は構いませんけどね。また東の君は、と貴女が言われるんです」

獣人が変化を解いた姿は、凡人には正視し難いほど野蛮で恐ろしいらしく、見るのも嫌がる者も少なくなかった。実際、過去に何度もカグワは、危機的状況でもないのにユタヤを獣の姿にさせていたことで不平を言われている。「東の君」というのは、彼女のことを粗野だと非難した呼び名であった。

「別にいいわよ。東の君って呼び名、私は嫌いじゃないし」

「かくわ様がよろしくても、私が嫌です」

「私は構いませんけどね、って言ったくせに。嘘つき」

「ではもうそういうことでいいです。私の姿のことでかぐわの君の評判が落ちるのは、私個人の見解として、我慢ならないのです。これでもよろしいか？」

「よろしいか、ってなんなのよ。押し付けがましい……」

そう言つてカグワは口を尖らせたものの、それ以上はせがまなかつた。最初から、さほどの期待もしていなかつた。ユタヤが小言を言うのは、何よりカグワのためを思つてのことだとカグワ自身知っている。その彼が自らカグワの評判を落としたがらないのはいつものことであつた。??だが、カグワは彼の献身さをあまり好ましく思つてはいなかつた。もつと自分は彼と対等にいたいのに、と思つ。これも聖女の中では異様であつた。

再び、二人の間に沈黙が落ちた。秋の日差しがぼかぼかと体を暖めてくれる。眠気が再びカグワを襲い、全身から力が抜けて行く。瞼が重たくなり、ゆっくりと眠りの世界へと落ちようとしていると不意に、近付いてくる誰かの気配に気付いた。敵意のあるものではない。よく知つた気配だ。眠いので、無視することに決める。カグワが目を閉じて寝たふりを決め込むのと、ユタヤがその気配の主に気が付くのはほぼ同時であつた。

ユタヤの刀を研磨する音が止む。彼はカグワの方を伺つて、彼女が目を閉じているのを見ると眠っていると見なしたのか、あるいは寝ているふりをしてしていると気付きながらも放つておいてやるうと思つたのか、静かに首を横に振つた。四阿の下に近付いて来たその人は、彼のことを見上げて首を傾げる。

「カグワ様、そこにいるの？」

「寝ている」

ユタヤは小声で返事をした。四阿の屋根の下から彼を見上げる女性は、風になびく長い赤髪を手で押さえながら、戸惑うような表情を浮かべた。

「起こしてよ」

「今寝入つたところなんだ」

「どうせ私が来たから、面倒なことだと思って狸寝入りしてるんですよ。私、わかるんだから。カグワ様、起きて下さいな！ カグワ様！」

女性の、甲高い声が響く。脳の中まで共鳴しそうな大声に、カグワは顔をしかめた。このまま狸寝入りを続けていると、叩き起こされかねない。仕方が無いので、のそのそと亀のように這いつくばって移動して、屋根の下に顔を覗かせた。

「なによ、もう……」

「ほら、やっぱり起きてらした！」

腰に両手を当てて見上げた笑顔は、勝ち誇ったように明るい。ロマーナというカグワ付きの女官は、この後宮内でも一二を争うほど底抜けに明るく、そしてはつらつとしていた。そうでなければ、後宮―自由奔放な三の君の女官長など務まらないのかもしれない。

「ユタヤはカグワ様を甘やかし過ぎなのよ。狸寝入りだってわかってたくせに」

「本当に寝てたって、そんな声で叫ばれたら目が醒めるわよ」

主の辟易した様子にも、ロマーナは動じない。彼女は「そんなことよりも」と言って軽く手のひらを打った。

「さつき、全聖女様に対して招集がかけられましたわ。なんでも、十日後の選定の儀の前に一度全員で顔を合わせておこうということらしくて」

「なあに、それ。皆で顔合わせして何を話すって言うのよ」

「それは私にはわかりかねますけれど……とにかく、そんな軽装では他の聖女様方に示しがつきません。一度殿堂に戻ってお召し物を着替えましょう」

「いいわよ、別に……こんな時に全員で顔合わせしたって気まずいだけじゃない。発起人はどうせダイアンかアネットでしょう？ 周りがどう動いてるのか気になってしょうがないのよ」

カグワは自分の腕を枕にし、仰向けの体勢に戻った。

ダイアン、アネットはそれぞれ五の君、六の君の称号を持つ聖女

だ。気が合うのか、珍しく聖女同士で仲良くしているように見受けられるが、互いに互いのいないところで相手の陰口を叩いている姿も目撃されており、本当に親しいのかどうかは定かではない。

彼女たちの思惑は知らないが、一体誰がどのようにして巫女に選ばれるのか、聖女たち自身にも先が見えず、疑心暗鬼を生じている現段階で、聖女全員が顔合わせをすることは却って混乱を招くと思われる。例えカグワに先見の力がなくとも、面倒臭い座談会になることは目に見えている。わざわざ精神を削るため、そんな会合に参加する気はさらさら起きなかった。

カグワの思考を読み取ったのか、ロマーナは無理に連れて行くことはせず、だが当惑している。

「まあ、カグワ様の思案は尤もですけど……でも、この先どうなるのか、全くわかっておられないわけでしょう？ 皆様のご意向も伺っておいた方が、この先のためかと……」

「この先どうなるのかわかってないのは、みんな同じよ。勝手な憶測ばかりで会議したって仕方ないじゃない？」

「それはそうですが」

「前に一度選定の儀を見たことがあるっていう人がいるなら、その人に聞けばいいけれど、そもそも後宮内にはそんな人、一人もいないじゃない」

後宮の中は、新しい巫女が決まる度に、総入れ替えされる決まりとなっている。下働きの女官から、聖女まで、誰一人同じ人間は残らない。そのため、今の後宮での常識がかつて常識であった確証はなく、それを比較することの出来る人物もいなかった。もちろん、選定の儀についてもそうである。

すると、それまで二人の会話を黙って聞いていただけのユタヤが口を開いた。

「一人……おられるのではないですか？」

彼は刀を研ぐ手を止め、研磨材を懐にしまい込む。そして、抜き身の刀を鞘に納めてカグワを一瞥した。

「最西端の変わり者……彼は四十年以上、後宮の最西端に居座り続けているというではないですか。自称、ですけれども」

「ああ、ケニーの爺やのことね」

なるほどとカグワが顔の前で両手のひらを合わせると、ユタヤは静かに頷いた。

一から十までの聖女のそれぞれに宮殿が与えられている後宮の敷地は、とてつもなく広大である。端から端まで移動するためには馬車を使わなくてはならず、歩いて移動しようとするとも一日あっても足らなかつた。その敷地の外れ、最西端の場所に、一つの矮屋がある。同じ後宮内にある他のどの建物と比べてみても、尤も粗末な作りをしているその小屋の中には、一人の老爺が住んでいた。彼の名前をケニーと言うが、その名前を知っている者は少ない。どこことなく不気味な雰囲気を持つ彼の住居に、大抵の人は近付きたがらなかつたし、「最西端の変わり者」という異名の方が有名であつたためだ。

そして、この後宮内ではやはり変わり者であるカグワは、ケニーと親しくしていた。親しいとは言つても、気が向いた時になんとか彼の小屋を訪れて他愛も無い雑談をするくらいで、彼女にも彼の正体は見えていない。ただ、彼のことを不可思議な老爺だと思つことはあつても、不気味だと思つことはなかつた。それが、彼女が変わり者と呼ばれる所以なのだろう。

「そうか……爺やなら、何か知つてるかもしれないわ」

カグワは口の中で呟くと、起きあがつた。

「僕はここにもう四十年以上も住んでいる」というのは、何かとケニーの零す口癖であつたが、それが真実であるという証拠はない。偽りであるという証拠も、また然りである。確かなのは、彼がこの後宮の中では一際面妖であること、そして他の誰より物知りであるということだけであつた。

よしんば、彼が四十年以上此処にいるというのが嘘であつたとしても、何も知らない聖女たちが集つて憶測を働かせるよりは、彼に



話を聞いた方が良い。そう判断したカグワは、四阿を支える柱を伝つて、地面に降り立った。彼女を追つて、ユタヤも身軽に屋根より飛び降りる。彼は、二本の刀をそれぞれ腰と背に装い直すと、カグワの顔を覗いた。

「これから、最西端まで行かれるおつもりですか？」

「そのつもり。思い立った時に行かなきゃ」

「なら馬を用意しましょう」

「いいわ。歩いていく」

「これからですか？ 着く頃には夕方になってしまいますよ」

「平気。……だって、爺やのところには、ペグがいるでしょう？」

ペグというのは、ケニーの飼っている巨犬のことである。ケニー以外には懐かないというが、不思議なことにカグワには大人しい。だが、カグワの乗って来た馬には容赦なく襲いかかり、これまでも何度か彼女の馬が被害にあっていた。

「……ペグでもなんでも構いませんけども、結局、聖女様方の会合には欠席するおつもりですね？」

刺々しく口を挟んだのは、ロマーナだ。彼女の険しい表情に失笑しながら、カグワはおずおずと頷いた。それを受けて、ロマーナは深々と溜め息を吐く。

「……呆れた。正統なる聖女の会合を蹴つてまで、ならず者の老翁に会いに行くなんて……。まかり間違つてカグワ様が巫女にでもなられた暁には、国が傾くんじやないかしら」

「そうかもね」

「……認めないで否定して下さらないと困ります」

後宮に入ってから十二年、ロマーナとの付き合いも十二年だ。出会った頃はまだ、ロマーナが十四歳、カグワに至つては五歳にも満たなかったが、今では彼女の苦言にも慣れたものである。そしてロマーナはロマーナで、カグワに振り回されることにはすっかり慣れてしまったようで、

「仕方ありません。私が適当にはぐらかしておきますから、誰かに

見つかる前に早く行ってしまってくださいな」

「さすが。話が早いわね」

「どうせ、カグワ様は私の忠言なんぞ聞いて下さいませんもの。反抗するだけ無駄ですわ」

などと、身も蓋もないことを言う。カグワの後ろに控えたユタヤもまた、無言でその通りだと頷いていた。ロマーナは、背の高い彼をちらと見上げると、首を振って促す。

「馬が駄目ならユタヤ、貴方が足になりなさい」

それはつまり、獣の姿に変化しろということである。ユタヤは表情の薄い顔に戸惑いを浮かべて、口籠った。

「三の宮の外ではあまり獣として動かぬ方がいいのでは……」

「今はみんな、会合のためにそれぞれの宮で準備なさってるはずよ。誰もこんな外れの方なんて見てないわ」

ロマーナの言い分に、カグワも「そうよそうよ」と賛同する。ロマーナはそんな自らの主の姿を見て呆れた笑いを零すと、「とにかく」と念を押した。

「ささっとして行ってささっとして帰って来てくださいますね。カグワ様が奔放なのは昔からですし、まかり間違つてカグワ様付きの女官になった時からもう諦めておりますけれど」

「…… 本当に遠慮ないわね、ロマーナは」

「それでも貴女のことを案じておりますのよ。??ユタヤ、選定の儀を前にした聖女様に、くれぐれも危険のないように」

御意、と言つてユタヤが頭を下げた。

木漏れ日が地面にまだらの模様を描いている。もう少し時間が経てば、日が傾き始めるだろう。

## 2、最西端の変わり者

胴は巨大な熊のような形で全身を包む長い毛は黒く、四つ足に見える爪は人の顔ほどの長さもあり、人間の指と同じ役割をしている。頭は白骨に酷似しており、二本の雄牛のような角が生える。目は深く窪んだ穴のように見え、頭髪は白く長くなびいた。体は大きく、後ろ足で立ち上がると、大の男三人分ほどの高さがあった。二足歩行も出来るが、速さを重視する場合は四足で走る。??人形の変化を解いたユタヤは、その背に主を乗せて、馬より速く駆けていた。馬なら半日かかる道のりも、獣のユタヤの足ならば数刻かからない。そしてその速度で走りながらも、彼は抜群の安定感で決して主を背中から落とすような粗相はしなかった。

「久しぶりね、こつやつてゆたやの背中に乗るのも」  
全身で風を受けながら、カグワはのんびりと呟いた。すると、下の獣から洪い声が返ってくる。

「当然です。そうしょつちゅうあつては困ります」  
カグワは首を竦めた。獣人であるユタヤ自身ですらあまり好ましく思っていないらしいこの獣の姿が、カグワは別段嫌いではなかった。他の聖女達は、いや聖女だけではなく多くの人間たちは、獣の姿に怯え、醜いと忌み嫌う。しかしカグワにはその感覚を理解することができない。見慣れてしまったというわけではない。カグワは、初めて彼の獣の姿を見たその時から、何故か一種の懐かしさや、仲間意識のようなものを抱いていた。

(化け物というのなら……だってむしろ、私の方が)  
カグワはきゅっと、拳を握り締めた。

国王が崩御し、新国王が起つて新しい巫女が選ばれると、巫女の予備軍として十人の聖女が選ばれる。そしてその聖女に選ばれる基準とは、巫力の強さだと言われていた。すなわちこの国で、最も巫力の強い十人の少女が聖女として選ばれる。その十人の中に選ばれ

たからには、カグワにもそれだけの素質があつたというわけで、人々はそれを巫力と呼んで神聖なものと崇めるけれどもカグワには化け物の力のように思えてならなかった。巫力には様々な種類があり、例えば未来を予知する先見の技であつたり、例えば他人の考えを知る読心の技であつたり、他人を操る誘導の技であつたりする。それら全てを使いこなすことができるのなら、それは化け物と呼んで間違いあるまい。それなのに、ただ獣の姿に変化することのできるだけの獣人を、化け物などと呼んでもいいのだろうか。

力あるものは力ゆえに孤独だ、とカグワは思っていた。聖女とてそうだ。聖女の周りの世話役たちは、聖女の言うことなら何でも聞くが、それだけでしかない。それではただの道具と同じだ。たった一人でいつか巫女になれるかもしれない未来を夢見て、延々と修行を続ける日々は、孤高の戦いであつた。故に、聖女は孤独だ。

そして、それ以上に、獣人の孤独ははかりしれない。力を持つゆえに崇められて孤立する聖女と異なり、獣人は力ゆえにうとまれ、孤立する。それを聖女ごときの孤独と並べても良いのかどうかカグワには俄に判断し難いが、とにかく、初めてユタヤを見た時に、カグワは彼の孤独な眼差しに己を重ねて手を差し伸べずにはおれなかった。

「私はただ……傷を舐め合いたかつただけなのかもしれないわ」

ユタヤは己を救ってくれたカグワに恩義を感じ、一生の忠義を誓ったけれども、カグワは彼を救つたわけではなかった。カグワは、自分を救うために彼の命を利用したのだ。

「はい、なにか？」

カグワの言葉を聞き取れなかったユタヤが聞き返す。カグワは慌てて首を横に振った。

「なんでもないわ……あ、西の壁が見えてきた」

カグワは進む先、西の端を示してそう誤摩化した。

広大な聖女たちの住まう後宮は、広大でありながらしかし外の世界から遮断されていた。土地をぐるりと囲んでとても越えることの

できない巨大な壁が立ちはだかり、外に出ることはできない。それは、外の侵入から聖女たちを守るための物なのかもしれないし、聖女たちが外へ逃げ出すことのないように防ぐものなのかもしれないし、あるいはその両方かもしれない。そして変わり者と呼ばれ、聖女の規則など守らぬカグワでさえ、この壁を越えたことはなかった。

高くそびえ立つ灰色の壁の麓に、小さな小屋が見えた。最西端の変わり者、ケニーという老爺の住まう小屋だ。後宮の中は、新国王の即位に伴う後宮の総入れ替え制度により、皆が皆同じ時期に後宮に住み始めるため、後宮の中にいる者同士、互いに知らないことはない狭い世界だと言えよう。その中で、ケニーだけは謎の多い人物だった。誰も、彼の正体を知らない。もちろん、カグワとて知らぬ。

「……かぐわの君」

ユタヤが最西端の小屋をまっすぐ目指して走りながら、小さく呟いた。

「小屋の前に、ケニーの爺が立っております。……あやつ、かぐわ様が来られることを、予測しておりましたな」

「……まあ」

獣の姿になったユタヤは、人智を越える抜群の五感を持つ。故に人間の目では見えない遠い景色も、その絶対的な視力でもって捉えた。カグワにはぼつんと小屋の影が見えるだけでその先に立つ人の姿など見えないが、ユタヤが言うからにはそうなのだろう。

「本当に不思議な人ね……もしかしたら聖女たちよりも先見の技に優れているんじゃないかしら」

「まさか」

「もしそうなら、次期巫女はケニーの爺やになるわね」

「冗談を」

即座に返される真面目な答えに思わず笑ってしまってから、カグワはまっすぐ最西端の矮屋を見つめた。姿は見えぬものの、確かに

その方角から人の視線を感じた。カグワはあと十日で後宮を出なくてはならない。かの謎の老翁から話を聞けるのもこれが最後かもしれないわけで、なにひとつ聞き逃すことのないようにと、カグワは気を引き締めた。

ユタヤの言った通り、小屋の入り口に腕組みをして立っていたケニーは、二人が来るなり小屋の中へと招き入れた。小屋の外にはペグがうずくまっております、変化をといて装衣を纏ったユタヤを見上げるなり威嚇したが、その後ろからカグワが顔を覗かせると途端に大人しくなった。ユタヤが「犬までもそそのかすとは」と軽口を叩いたので、「一番最初にそそのかされたのは、ゆたやよね」と軽口で答えた。ユタヤは反論しなかった。自分でもそう認めているらしい。

一階建て、部屋の二つしかない小さな小屋の中、暖炉の前に通される、カグワはケニーに促されるまま火の付いていない暖炉脇の椅子に腰掛けた。ケニーは一人暮らしゆえに椅子がそうたくさんはない。老翁から椅子を奪うわけにはいかないとユタヤがカグワの座った椅子の脇にあぐらをかいて座り込むと、老翁は気にした素振りも見せずにカグワと向き合って揺り椅子に腰掛けた。窓の外からは少しだけ西に傾き始めた太陽の光が差し込んでくる。ケニーは来訪者を歓迎するでもなく、「喉が乾いたら戸棚にあるコップに、その冷めた紅茶を注いで飲んでくれ」と言った。誰もが聖女に尽くすこの後宮の中で、あまりにも不躰な態度であるが、カグワは気にしない。この老翁がそういう人間なのだとは知っているユタヤも言及しなかった。ただ、黙ってすくっと立ち上がると、コップにカグワの分と老翁の分の紅茶を注いで小さなテーブルに乗せた。「相変わらず、恐ろしく気の利く仗身じゃ」とケニーが笑った。

「……で、今日は何をしにこのような西の果てまでおいでになったのか」

ユタヤの注いだ冷めた紅茶をすすりながら、先に問うたのはケニー

「の方だった。カグワはユタヤが隣に腰を下ろしたのを確認してから、にこと口の端を持ち上げる。

「やあね、知ってるくせに」

「知るものか。今代一の変わり者の聖女の君の考えなど、儂には想像もつかぬ」

「最西端の変わり者に言われたらおしまいね。でも大体予測はつくでしょう？」

「儂には、とんと」

「予想していたから小屋の入り口に立って待っていたんじゃないの？」

「いんや、なんとも後宮の中央の方が騒がしいから何ごとかと眺めていただけのこと。すると三の君が己の仗身に跨がり現れるものだから、ますます騒がしい」

あくまでとぼけるケニーであるが、今このエウリアの国で何が起こっているのか知らぬわけでもあるまい。

「……国王陛下が崩御されたそうじゃない」

「ふむ」

「次期陛下の即位に合わせて、十日の後には新しい巫女が選定されるそうよ」

「そうらしいのう。風の噂には聞いておるが」

ケニーは澄ました顔で頷いた。やっぱり知っているじゃないかとカグワは小さくむくれる。

「だったら、後宮が騒がしい理由もわかるでしょう？ 私がここにきた理由も」

「はて……。儂はここに住み着いてもう数えきれぬほどの歳月を越えてきたが、国王の崩御だからという理由でここを訪れた聖女の君など他におらんなのでな」

儂に別れでも告げにきたか、と笑う老爺には前歯がない。ぼつかりと空いたその隙間から、暗い口の奥が覗いてかかかと軽快な笑い声を繰り出した。その間抜けな風体を前にして、カグワは脱力する。

まあ確かに考えてもみれば、国王が倒れたからと言ってケニーの元を訪れたところで何が変わるわけでもあるまい。他の聖女たちと顔合わせなどするよりずっと効果的だと思って飛び出してきたが、実際にはそう大差ないなと思ひ直した。

「まあ……そうね。そんなものかもね。ケニーの爺やと挨拶代わりに、くだらない雑談でもしようかと思つて来たのよ」

観念してカグワがそう告げると、ケニーは「そうか」と満足そうに微笑んだ。その暢気な笑顔に、ますます力が抜けていく。国王が崩御されたと後宮中が大騒ぎしていることを馬鹿馬鹿しいとさえ思つていたカグワであるが、ケニーと比べればまだまだ修行が足りない。人が必ずいつかは死ぬように、国王とていつかは崩御する。そんな当たり前のことに振り回される自分に嫌気が差した。

「……後宮は、巫女のためにあるものだから、仕方のないことなのかもしれないけど」

小さな声で言い訳して、カグワはコップを手を取った。なんとも飾り気のないその質素なベージュ色のコップを撫でながら、ちらと対面に座っている老爺を見やる。

「外界はどうなの？ やっぱり……後宮ほどは騒いでいないのかしら」

外界、すなわち後宮の外？？後宮の中の人間は下界とも呼ぶが、カグワはあまりこの呼称が好きではない？？に、ほとんど踏み出したことのないカグワには、外の世界に住まう人々の考え方など予想も付かなかつた。彼らは、己の国の王が倒れことを、どのように受け止めているのだろうか。

「ううん……確かに後宮ほどの騒ぎとはならなくとも、それなりに賑やかしようじゃ。新王の即位となれば、城下町は連日祭り続きだからのう」

「へえ……そういうものなんだ」

この外界から遮断された後宮という狭い世界の中で、何故かケニーはいつでも外の世界のことを朗々と語つた。その情報をどこから



仕入れているのかは決して教えてくれなかったし、ひよつとしたら全てケニートの虚言という可能性もあったが、カグワにはその真偽を調べる術がない。ゆえに残されたのは、二択だ。信じるか、信じないか？カグワはこの変わり者の言葉を信じていた。故に彼女自身も、変わり者と呼ばれる。

「しかし、最も騒いでおるのは、宮廷内じゃな……国王がお亡くなりになった未明より、政殿が喧しい」

「政殿……やっぱり、国王が変わるとなると、政治の現場もがらりと変容するものなのかしら」

「いや……と、いうよりも、この国王の代替わりを利用しようとする勢力があつてな……三の君は、現在このエウリア君主国の国務参謀を誰が務めているかは存じておられるか」

「ええ、名前だけは……ワイズ・レヴィン国務参謀よね」

後宮にはほぼ外界の情報が出てこない。が、しかし、皇室の仕組みや、政治の仕組みは別だ。将来巫女になるかもしれない聖女たちが、皇室や政治に昏いのでは困る。そのため、教養として誰が政権を握っているのか、誰がどの役職に就いているのか、名前だけは覚えさせられるのだ。

とは言え、ただ何十人もいる役職とその名前を暗記するのは辛い。カグワも全てを暗唱することはできない。それでもさらりと国務参謀の名前を吐き出すことができたのは、それだけ彼の名が知れているためだ。ワイズ・レヴィン国務参謀？参謀でありながら、ほとんどこの国の舵を握っているのはこの男であると、この外界から孤立した後宮の中でさえ、彼の名前は知れていた。

「そう、レヴィン国務参謀だ……あの冷徹な参謀は、頭が切れる。この国王崩御を好機と見た。国王の葬儀に、各国の要人を招待すると言いだしたのじゃ」

「各国……北国、東国、南国の全てから？」

「そう。全ての国の要人を、西国エウリアの国王の葬儀に参列させると言った」

「それは……なぜ？」

「一つは、他国の要人にエウリアの国王の死を悼ませることによってエウリアの国の地位を認識させるためだろう。そして、もう一つは……北国が要人として誰を寄越すのか、見ておきたいのじゃ」

「北国……ラウグリア帝国が？」

「そう。北ラウグリア帝国じゃ」

この世界には、東西南北四つの国が存在している。今、カグワたちが住まうのが、此处、西国エウリア君主国だ。そして、その北に位置する国が、北国ラウグリア帝国だった。エウリアと同じく皇室を持ち、王政を布く国であるが、ここ最近では東国と戦ばかりしていると聞いた。恐らく雪の降らない豊かな土地が欲しくて、東国を占領するのが目的なのだろうと語ってくれたのは??それもケニーであった。

「北ラウグリア帝国は形こそ王政を布いているが、その実態はほぼ軍政だと言っ」

「軍政……軍隊が政治を仕切っている？」

「うむ。北国が東国に豊かな土地を求めて戦を仕掛けていたことは知っておるな？」

「ええ、もう十年も戦をしていると」

「それが最近では、すっかり東の国の北側の領地は北ラウグリア帝国の領土となってしまうたらしい」

「えっ……？ 北国が勝利したの？」

「そういうことになるのう。東を手に入れた北国が、次に思うこと……それは、なんだと思う？」

問われてカグワは少しだけ考えて俯き、すぐに口を開いた。

「……西の国も、占領下にしたい」

「その通り」

頷いたケニーは、ゆらゆらと自分の座っている揺り椅子を揺らす。空になったコップを机の上に戻して目を細め、不気味に皺の寄った目尻にますます深い皺を作る。

「レヴィン國務参謀は、北の出方を見たいのじゃ。要人を招待されて、しらばくれて皇室を寄越すのか、軍人を寄越すのか、あるいは、誰も寄越さず真つ向から対抗してきよるのか……」

「……なるほどね」

「しかし、参謀がいくら要人を招待しようと言っても、なかなか内大臣どもが頷かんのが現状らしい」

「え、どうして？」

「各国の要人を呼ぶということは、東国の要人も呼ばなくてはならぬということじゃろう？ 内大臣らは、東の国を蔑んでおるからう。要人を招待などして東と西が同等であると見られるのが我慢ならんのだ」

「……なるほど」

カグワはしみじみと頷いた。

内大臣だけではない、この西国エウリアには、東国ヤンム帝国を後進国として貶める風潮があつた。実際に東国ヤンムは、東西南北四力国の中で最も文明が遅れている。故にそれを野蛮として、中には東国の住民を東蛮人と呼ぶ者もいるくらいだ。

「不思議ね……同じ人間なのに。隣に並ぶのも嫌だと言つのかしら」  
カグワがぼつりと呟くと、ケニーは灰色に淀んだ瞳を大きく見開く。

「そういえば……三の君も東の出自であつたか」

「ええ、そうよ。私は幼い頃に親に連れられて東西の国境を越えた、難民の一人だから」

ケニーの目には蔑みの色などない。カグワはにこりと笑つて頷いた。

カグワの生まれは東国ヤンムだ。しかし、親に連れられ国境を越えた西国の東の端、難民の村の中にて幼少期を過ごした。そして、そのまだ片手で数えられる年の頃に、突如現れた王宮からの使いに連れられ、この後宮へと来たのだ。カグワには未だに聖女に選ばれ

る者の基準を計ることができないのだが、少なくとも生まれは問われないらしい。どの国の生まれであろうとも、聖女を選定する時期にこの西国の領土の中にいれば、その対象となるということなのだろ  
う。

ほぼ全ての聖女たちが西の国の生まれである中で、東の出自であるカグワは一人異端であった。しかしそれは、決して出自によるものではなく、カグワの天性の気性ゆえであるはずなのに、後宮の者たちはこの異端な聖女のことを「東の君」と呼んだりする。この際の「東」には、「東蛮人」と同じく蔑みの意味が込められているとカグワとて知っていたが、それでもカグワはこの呼称が嫌いではなかった。カグワは己が東の出自であることに、何の後ろめたさも感じない。

「ゆたやも東の出自よ。ねえ？」

カグワが同意を求めると、それまで主の言葉に一切口を挟まんと貝のように黙っていた仗身が、こくりと頷いた。

「私もエウリアの東の果て、丁度東西の国境当たりの森に倒れていたところを、かぐわ様に拾われた身でありますゆえ」

??それは忘れもしない、今より十年以上も昔の話だ。

聖女として後宮入りをしてまだ間もないカグワには、仗身がいなかった。正確には、仗身がいなくなった。死んでしまったのだ。たった二年かそこらの付き合いだった。まだカグワと同じ年の頃、幼い仗身の見習いは、たった五つの年の頃に主をかばって死んだ。カグワは正直言うと、その時のことをよく覚えていない。何故自分がこの危険から隔離された後宮内で命の危機に晒されていたのか、そして何故たった二年そこらの付き合いでしかない仗身が、そしてまだ己の意思もはっきりしないたった五つの幼子が、主であるという理由だけでカグワのことを己の身を呈してまで守ったのか。ただ、その瞬間だけは泣きたくなるほど鮮明に、覚えていた。??自分を庇って死んでいくその仗身の姿を、忘れたくとも忘れられない。

そして仗身を亡くしたカグワは、新たな仗身を手に入れるために、

東国へ出かけることを許された。本来外界へ出ることを許されない聖女にこの異例な措置が下されたのは、それだけ事態が緊急であったためだと言えよう。仗身となりうる獣人の見分けは、普通の人間には付かない。何故なら幼い獣人は普通の人の子と全く同じ姿をしているためだ。聖女であれば、巫力でもって獣人と普通の人の子を見分けることが可能であった。故に、聖女自身が外に出て、獣人を探さなくてはならなかった。そして、四力国の中で最も獣人の多い東の国へとカグワは旅立つことになったのだ。

??その旅の途中で、彼と出会った。

何故、国境を越える前に馬車を下りたのか、理由は今でも定かではない。今にして思えば、己の中の巫力と呼ばれる第六感が働いて、自分を彼と引き合わせたのかもしれない。森の中に倒れていた彼は、とても孤独で、優しい目をしていて。その目に惹かれて、カグワは彼に手を差し伸べたのだ。??己の仗身になってくれ、と。

何とはなしにカグワが隣にあぐらをかいているユタヤを見つめると、すぐにその視線に気付いたユタヤが顔をあげた。そして、「なにか?」と言外に尋ねて首を傾げる。あれから十数年が経ち、二人の間には言葉などなくとも意思の疎通ができるほど、強力な絆が育まれた。「なにも」とカグワは首を横に振った。

そんな二人の無言のやりとりを興味深く見守っていたケニーが、老人特有の掠れた声色で呟く。

「ユタヤ、カグワと……東の発音は難しいのう。二人は上手に発音するが、儂にはなかなか真似できぬ」

「ゆたや、かぐわ、よ」

カグワはすらすらと東の発音をしてみせた。

「かぐわは、花や果物のように香りの良いこと、ゆたやは、作物の実りが良いこと。東の古語で、そういう意味よ」

言って、満足気に微笑む。そんなカグワとユタヤは、互いの名前を元の発音で呼び合っていた。これは、本来あるべきその音を忘れないようにというカグワのこだわりだ。しかし、東を好かぬ者にと

つてはこの東の発音自体も好ましくなくいらしく、二人が互いをそう呼び合うことを下品だと言った。??そもそも、仗身が主の名前を呼ぶこと自体、異常なのだという。

「珍しいことよのう。仗身が、主の名を呼ぶとは……中には仗身だけでなく、己の付き人共にさえ名前を呼ばれることを厭う聖女もあるというのに」

ケニーの言葉に、カグワはそうねと頷いた。聖女たちにとって名前とはとても高貴なものだ。同じ位である他の聖女に呼ばれるならまだしも、自分より下位の者に名前を呼ばれることなど言語道断という者も少なくない。故に、「一の君」「二の君」と、称号が存在するのだ。大抵の後宮仕えの官吏達は、この称号で聖女たちを呼び分ける。

「でも……折角私には名前があるんだから、呼んでほしいじゃない？」

親の付けてくれた名前だ。初めてこの世に生を受けた瞬間に自分を自分たらしめてくれた名前だ。幼い頃に親元から引き離されて、聖女様、三の君などと呼ばれて育ったカグワにとって、この名前が自分を自分たらしめてくれる唯一の存在だった。今でこそ後宮に住まう全ての人間と自分との関係を維持できるが、ただの称号だけを与えられて宮に入ったばかりの頃は、自分が自分ではなくなってしまうのではないかという恐怖があった。

そんなカグワの考えが通じたのかどうか、「ほう」と面白そうにこぼしたケニーは、肘置きに肘をたてて頬杖をつき、ゆらりゆらりとゆっくり揺り椅子を前後させた。

「三の君は実に趣深いことを言う」

「……そうかしら」

「名前とは呪縛である、という考え方があってな」

「え……？」

思いも寄らなかつた切り返しに、カグワはきよとんとする。ケニーはいよいよ楽しそうに目を細めた。

「まだ神々が地上におられた、昔のことじゃ。二人の神がおった。一人の神は己の名前を、下等な人間共にも気軽に唱えてよいとおっしゃった。一人の神は己の名前を下等な人間に教えることさえ渋らされた。すると、天変地異の起きたある夜のことじゃ。名前を唱えさせた神の元には、大勢の人間共が集い、名前を教えもしなかった神の元には誰一人として人間が訪れなかった。大勢の人間に囲まれた神は、人間共と身を寄せ合い天変地異から身を守ることができ、一人取り残された神は誰に助けられることもなく地の底へと落ちていったそうだ。……ゆえに、名前は人を縛る呪いである」と

「呪縛……」

「しかしその呪縛をどう利用するかはその者しだいだがね。??三の君の生国、東ヤンム帝国に伝わる神話じゃよ」

カグワは思わず己の胸元を押さえ、きゅっと拳を握った。

ケニーは博識だ。後宮の中だけでなく、西国エウリアのことだけでなく、世界中のことを知っている。それに対して、カグワは何も知らない。

隣を一瞥すると、無言で控えるユタヤが、何を言うでもなく外を見つめていた。窓の外にはそろそろ日が西へと傾き、空の赤が見え始めている。そろそろ帰らなくてはカグワを夕餉の時間に間に合わせられないとでも考えているのだろう。彼の世界の中心にはいつでもカグワがいる。

名前とは呪縛であると、ケニーは言った。だとするならば、カグワとユタヤを結ぶのは強い絆ではなく??呪縛だろうか。

国境を隔てた遠い北には戦をしかけてくるかもしれぬ敵がいて、東にはその貧しさゆえに難民の溢れる土地がある。広い世界の中で出会ったことそのものが、呪縛だったのかもしれないとカグワは思う。そして己が聖女として数奇な運命を辿ったことも、また、呪縛の一つだ、と。

### 3、不吉

国王が崩御し、新王の即位にあたって巫女の選定が十日後と聞いたその日から、めまぐるしく時は過ぎていった。今までのようにただ情性的に修行を続けていた日々の中で感じる十日とは、まるで違う。選定の儀式の練習や、後宮を引き払うための準備、そしていつもよりも増強された巫力の修行が一日の中に詰め込まれて、あつという間に十日が過ぎた。住み慣れたこの後宮に別れを惜しむ間もない。己が巫女になるのかそれともただ人になつてしまうのか、その二択の突きつけられるあまりにも重大な儀式は、あつというまに目前へと控えていた。

??そして、その日はすぐにやってきた。

ついに儀式当日とあつて、後宮の中は前例を見ぬ騒がしさである。朝から襖のために叩き起こされ、冷水を浴びた後に儀式の衣装を着せられて、聖女たちは一カ所へと集められ、選定の儀式に関する詳細を聞かされた。それはとても不思議な空間で、後宮の中に住んで長い聖女たちの誰もが訪れたことのない、円形の間である。詳細を聞かされたと言つても、その詳細を語る相手の姿は見え、頭の中へと直接語りかけてくる「感応の技」を利用してのものだった。ゆえに聖女たちには、誰がこの儀式を取り仕切っているのかわからない。が、総入れ替えの制度により現在この後宮の中にいるほとんどの者たちは儀式を経験すること自体が初めてなのだから、後宮内の人物ではないのだろうとカグワは予想した。

「一刻の後に、儀式が始まる」と締めくくられて、長い説教じみた儀式の説明はようやく終わった。円形の間から外に出ると、そこは見慣れた後宮の内殿の脇、渡り廊へと続いていた。嗚呼、ここに出るのか、と声に出さずに思う。この渡り廊は後宮の庭と繋がって



おり、カグワは何度もここを歩いたことがあるのだが、一体この廊下の先がどこへ続いているのかは、知らなかった。後宮を出なくてはならないというその日に、ようやく知った。これはあの不思議な円形の間へと続く道なのだ。

「あとたった一刻で運命を定められるなんて……心の準備が間に合わないわ」

ぼつりと呟いたのは、五の君、ダイアンだ。カグワの後ろを歩いて渡り廊を進んでいる。そしてその隣に並んでいるのが、六の君、アネットである。

「そうね……。むしろ、一刻なんて間に時間を置くくらいなら、あの場でそのまま儀式をしてくださったら良かったのに。この一刻の間に緊張してしまうわ」

アネットが言った。円形の間にて聞かされた感応による説明によれば、「一刻の後、再びこの円形の間を集うように。儀式はここに行う」という。その一刻の間に儀式の準備を行うためなのかどうか、聖女たちにはそれすら聞かされていないが、一刻という長くも短くもある時間を、外で悶々と過ごさなくてはならないのは確かに精神を削る作業であった。

「だってもし、これで、巫女に選ばれなかったら、選ばれた巫女の世話役として一生仕えなくてはならないのよ」

ダイアンが嘆くように言う。これも先ほど円形の間で聞かされたことだ。聖女たちの最も気になっていた、「巫女に選ばれなかった聖女はどうなるのか」という問いに対して、感応の声は淡々と告げた。「選ばれなかった他の聖女は、選ばれし巫女に一生を捧ぐ。この国を神の使いとして守る巫女を、一生支えていくことが役目となる」と。

「いやだわ、世話役なんて……！ どうして今更誰かに仕えなくてはならないの」

「本当に……。これでもし巫女がアネット以外だったらどうしましょう。アネット、貴女になら仕えてもいいけれど、他にはとてもと

ても」

「まあ、私もよ、ダイアン。もしも互いが巫女になったその時は、お互いを優遇しましょう」

どこまで本気かわからない、薄い契約を交わす二人の声が聞こえる。またいつものことか、とカグワは息を吐いた。アネットとダイアンはいつでももそうだ。本当は心の中では自分が一番でないと気が済まないくせに、言葉の上では互いを配慮して、そして裏では互いのことを貶めたりもする。互いが巫女になった場合は、相手を優遇しましょうなどという口約束も、果たして守られるのだろうか。?? いや、無理だろう。

カグワはふと足を止めて、後ろを振り返った。後ろを歩いていたアネットとダイアンが、突然歩みを止めたカグワにぶつかりそうになり、迷惑そうに顔をしかめる。「きちんと歩いて下さらない？」と厭味を飛ばす彼女たちに「ごめんなさい」と愛想笑いで答えてから、カグワは己の歩いて来た道を見つめた。

長い渡り廊である。その先は、やはり、見えなかった。

不思議なもので、確かにあの円形の間から退場してこの廊下に出て来たはずなのに、この道の先には円形の間が見えない。天上は高く、吹き抜けの窓のある巨大な建物だったのに、何故外から見るとはできないのだろうか。何かしら不思議な力が働いているのだろうとカグワはその方角を眺めて首を傾げた。

「??カグワの君、貴女も何か、感じるの?」

突然背後から声をかけられて、カグワは後ろを振り返った。そこに立っていたのは、浅黒い肌をした長い黒髪の美女である。いつもの見慣れた黒髪を下ろした姿ではなく、儀式のためにと高く結わえられたその姿がまたとても印象的だ。

「……ネイティーン」

ネイティーン??彼女は、一の君と呼ばれる。すなわち、ここにいる聖女たちの中では彼女の巫力が最も高い。もしも巫力のみにて巫女を選定するのであれば、間違いなく彼女が次期巫女だ。いや、

もしそれだけが基準ではないとしても、恐らく巫女になるのはネイディーンであろう。ネイディーンは美しくとも飾らず、聡明で柔和な人物だ。彼女をおいて他に国の頂点に立つ器の聖女はいないだろう、と、カグワは思っていた。

「あそこに控える円形の間……なんとも、不穏な空気を覚えるわ」  
ネイディーンが小さく呟いた。カグワは目を見開く。

「……え？」

カグワは何も見えない、おそらく円形の間のあるであろう方向を見つめた。ぽつかりと空いた何も無い空間の向こうに、雲一つない青空が広がっている。清々しいその蒼穹は確かに逆に不穏であると言われればそう感じ得ぬこともないが、カグワには気付けない。

「……さすがね、ネイディーン。私は、何も気付かなかった」

カグワが感心半分、己の力不足への嘆き半分に呟くと、今度はネイディーンが目を見開く。

「あら、なら、どうしてあちらを振り返ったの？ 何かを感じたのではなくて？」

「いいえ、なにも。ただ、この渡り廊からあの円形の間を眺めたいと思っただけよ。？？何も見えなかつたけど」

「……カグワの君、貴女はとても勘に優れているわ。それはそれで、間違いない貴女的能力よ」

ネイディーンは、黒真珠のような瞳を細めて微笑んだ。何故だかその顔に影が生じる。カグワは自分より少し背の高い一の君を見上げ、小首を傾げた。上品な化粧で覆い隠してはいるが、疲弊しているようだ。

「……ネイディーン、貴女も選定の儀式を前にして、とても緊張しているのかしら？」

「え？」

「なんだかとても……疲れているみたい」

思った通りを告げると、ネイディーンは黒真珠を大きく開いて何度も瞬き、それから目を伏せるとふっと笑った。言い当てられた、

と言わんばかりである。

「……貴女は、とても勘がいいわ」

ネイディーンはさつきと同じ言葉を紡ぐが、今回のこれは勘というわけではない。カグワには、彼女の顔色があからさまに悪く見えた。

「珍しいわね……。何事にも動じない、ネイディーンが緊張だなんて。……まあ、巫女選定の一大事だから、仕方ないかしら」

言って、彼女の気を和らげようと笑うと、ネイディーンは困ったように微笑んで、首を横に傾げた。

「いいえ、そういうわけじゃないの……。私のこれは、緊張ではないわ……。自分への戒め、とても言おうかしら」

「戒め？」

「ええ……。己の失態に、疲れてしまったの……。戒めなくてはならない、失態よ……。あら？」

途中まで言いかけて、ネイディーンの声色が変わった。カグワの方を見ていた彼女の視線が、渡り廊の外、後宮の庭先の方へと移る。遠くを眺めるその眼差しに、カグワもつられるように後ろを振り返った。

「あそこにいるのは、……。カグワの君の仗身ではなくて？」

「え？」

ネイディーンに言われ、彼女の示す先を眺めて、カグワは瞠目した。確かに、その庭の茂みには、よく見慣れた装衣姿の男が、隠れていたのである。

「……ゆたや！」

ネイディーンの話の遮ってしまったことも忘れ、カグワは己の仗身の名を呼んだ。がさがさと茂みが揺れる。その気配をカグワが見紛うことはない。なにしろ十年も付き添った、仗身だ。

見つかってしまつて隠れているわけにもいかず、ひよっこり茂みから姿を現したその背の高い男は、それはもう気まずそうな顔をしていた。確かに、本来巫女選定の儀式を間近に控えた主の元へ、仗

身の身分で現れる者などいないだろうから、並大抵ではない引け目を感じているのだろう。が、そんなことを気にするカグワではないわけ。

「どうしたの？ こっちへいらっしやいよ」

周囲の目も気にせず、彼のことを手招きすると、カグワを抜かして前を歩いてきたダイアンとアネットがこそそこそと互いに何かを耳打ちした。その内容までは聞こえないが、おそらくカグワに対する悪口雑言を吐き合っているに違いない。また東の君が、とか、仗身をこんな時にまで連れて、とか、まあ、予想はつく。

「このような時に、このような場所まで来てしまい……申し訳ございません」

渡り廊の下までやってきたユタヤは、廊下に入ることはせずに、地面の上に膝を付いて深々と頭を下げた。

「一の君とご歓談のところを、お邪魔してしまったのではないでしようか」

ユタヤはカグワの隣にいるネイディーンの方を伺う。そこでようやく、ネイディーンの話を遮ってしまったことを思い出し、「あ」とカグワは口を押さえた。一方のネイディーンは「いいのよ」と柔らかに微笑んでいる。

「儀式まではあと一刻……何をしているともどこにいても指示されてはいないわ。もちろん、仗身と会うとも言われていないわけだから、私のことは気にせず」

「ごめんねネイディーン」

今更の謝罪をしてから、カグワは渡り廊の石畳の上に屈み込んだ。石畳はそこそこの高さがあり、地面に直接膝をついているユタヤよりも、若干カグワの目線の方が高い。

「ゆたや、なにかあった？」

それでもなんとか頭を垂れている彼の顔を覗き込もうと首を傾げると、ユタヤはようやく顔をあげた。

「いえ……何があったというわけでもなくて……本当に恐縮なので

すが……」

ユタヤは一度顔をあげてまっすぐカグワのことを見つめて、それから迷ったように視線を泳がせる。

「なんとも……不吉な予感に駆られまして……いてもたってもいられず、つい……」

「不吉な予感……?」

カグワは思わず、隣に立っているネイディーンの方を見上げた。先刻、彼女からも「不穏な空気を感じる」と聞いたばかりである。それに何か関係があるのだろうかと視線で問いかけると、ネイディーンは首を竦めた。

「主が主なら、仗身も仗身で勤が良いのね。??不吉な予感とは、具体的に?」

まさか一の君に問われるとは思っていなかったのだろうユタヤはすっかり恐縮しきつたように身を縮こませる。

「いえ、聖女の君がお感じになるような、高尚なものではございません……私はただ、三の君に何かあつてはと、思っただけのことです」

ユタヤは他の聖女の前では体裁を気にしてカグワのことを名前では呼ばない。三の君、と呼ばれたカグワがきよとんとすると、代わりにネイディーンがくすと笑った。

「本当に、最後の最後まで献身的な仗身ね」

「最後……?」

「あら、そうよ、カグワの君。この後私たちは選定の儀式に入るのだから、これで仗身とは一生の別れとなるかもしれないのよ。巫女に選ばれれば引き続き仗身は仗身のまま付いてくるでしょうけれど……そうでなければ、巫女の世話役になる者の仗身がどうなるのかの説明はなかつたわ」

「……そういえば」

カグワは息を呑む。全く、気付いていなかった。まさか四六時中一緒にいた仗身と別れるかもしれないなんて、頭の片隅にもない

考えだったのである。

「貴女の仗身も、別れを惜しみにきたのではなくて？」

からかうようにネイディーンが言う。「滅相もない」と慌てて首を横に振ったユタヤにはしかし、少しはそういう気があったのだろうと、付き合いの長いカグワには読み取れた。かぐわは、そうか、もし自分が巫女になれなければ、この仗身とも別れなくてはならないのかもしれないのだと、初めて気が付いた。

「私は、結果がどうなるうとも、私の役目を果たすまでですが……」

そうはつきりと言つてのけたユタヤの顔に、思わずカグワは手を伸ばす。少しだけ自分より低い位置にいる彼の頬を撫でて、頭を撫でて、されるがままになっていくそれはもう献身的な自分の仗身に、どう言葉をかけていいのかわからない。それはそうだ。突然別離の道かもしれないと言われたところで、今までずっと傍にいたのだ。どうしてそんな未来を予想することができよう。

「……ネイディーン」

口をついて出て来た言葉は、

「もしも貴女が巫女になったら……私は貴女に世話役として一生尽くすし、なんでもするから……ゆたやのことも護衛として雇ってあげられないかしら」

先ほどダイアンとアネットが散々繰り返していた馬鹿馬鹿しい「もしも貴女が巫女だったら」の話よりも、遙かに上に行く虚言だ。何を言っているのだ、と己を諷める冷静な自分もどこかにいて、それが絵空事であることはわかつていのに、止められない。

「ほら、だって……やっぱり普通の人間よりは力もあるし、ネイディーンの仗身一人よりも二人いた方が……なにかと役に立つかもしれないし」

「そうねえ……でも、もしも私が巫女だったとしても、そういう役職のことは古くからのしきたりに従って決めなくてはならないだろうから、どうなることか」

ネイデーインの答えはとても落ち着いて沈着なものだ。カグワの絵空事を馬鹿にして笑うのでなく、現実的に答えてくれる。

「それに、もしも護衛にできたとして……彼は貴女以外の人間を、命を張ってまで守れるかしら？」

そう微笑するネイデーインの視線の先には、カグワの前に膝を付くユタヤの姿があった。姿勢一つ崩さずまっすぐカグワを見上げるそれは、絶対的な忠誠の証である。

「……そもそも、私が巫女になると決まったわけでもなし」

言っておどけてみせるネイデーインの優しさに心底感謝しながら、カグワは俯いた。

「ええ……そうね。おかしなこと言っておめんなさい」

こちらを見上げるユタヤが、悲しげな目でこちらを見上げてくるのは、きつとカグワがそんな表情をしているためであろう。彼は時折カグワの感情に同調する。特に、悲哀の情には敏感だ。

そんな主従の目線のみでのやり取りを見て、感心したように呟いたのは、ネイデーインである。

「カグワの君……貴女は本当に、変わった人ね……。己の仗身にも他の聖女にも同じように接する。同じように、一人の人間として接する」

「……それでよく、怒られるわ」

「そうかもしれないわね。だけど、私は……今だから言っわ。私は、とても嬉しかったわよ、カグワ」

私はとても嬉しかった、と再度繰り返したネイデーインのことを、カグワは見上げた。渡り廊の向こう側、きらきら差し込む日差しを背負い、彼女の長い髪を結わえた金色の簪が七色の光を帯びている。聖女の巫力を持つ、一の君の顔は美しくとも、儂い。

「誰も彼もが私のことを一の君と呼んで、妬み、羨望、畏怖、尊信の眼差しを向ける。一の君としての私を見ても、誰もネイデーインという一人の女としては、見てくれなかったわ。その中で、貴女だけが、私と同等に接してくれた」



「……ネイディーン？」

「私は、とても嬉しかったわ」

さらに繰り返したネイディーンのどこか悟ったような顔に引かれて、カグワは立ち上がる。先刻はユタヤが現れたことにより彼女の言葉を遮ってしまっただけでも、彼女は何やらとても思い詰めているようだった。彼女は「これは自分への戒めだ」と語った。だが、なにゆえ己を戒める必要があるのか、まだカグワはその理由を聞いていない。

「ネイディーン……なにか、あったの？」

彼女の顔を下から覗き込むようにして問いかけると、ネイディーンはゆるやかに首を横に振った。

「私は、……誘惑に勝てなかった。それだけのこと」

「……どういうこと？」

全く意味がわからない。首を傾げたカグワに、ネイディーンは淡々と無表情で説明する。

「聖女には、決して覗いてはいけないという禁忌があるわ。それはカグワの君も知っているでしょう？」

「禁忌……？」

「外界に出てはいけない、決して覗いてはいけない、決して見てはいけない」

それは、聖女に定められた禁忌の三大原則である。

確かに、聖女には覗いてはいけないと言われた間があり、見てはいけないと言われた書物がある、という話はカグワも聖女である以上は知っていた。しかしながら、その覗いてはいけない間がどこにあるのか、見ていけない書物がどこに置いてあるのか、カグワは知らない。ゆえに、その禁忌を犯す危険になど全く遭遇せずにごこまでやってきた。

「私は、その禁忌を破ってしまった……」

「一体それは……何？ どこにあるの？」

「言えないわ。禁忌だから」

ネイディーンはにこりと笑った。そして、渡り廊の続く道の向こう、円形の間の方を眺める。

「その所為かしら……とても不穏な空気を感じる」

「不穏な……空気？」

カグワも円形の間の方を見やったが、やはり何も感じられなかった。これが彼女と自分との巫力の差なのだろうか。

「私は自分を戒めなくてはならないわ。カグワの君……貴女は、自分の信じる道を行けばいい」

「……え？」

カグワは目をぱちくりさせた。不穏な空気の気配すら感じられないような自分に、ネイディーンは何故か助言を寄越す。それが一層不思議だ。

「巫女に選ばれようとも、選ばれなかつても……貴女がこの世界を左右するのかもしれない。そんな気がするわ」

含蓄のありそうな言葉を残して、ネイディーンは踵を返した。彼女の纏う、清々しい青い装束が宙を舞う。きらきらと太陽の光を反射させながら、ネイディーンは渡り廊を歩いて去って行った。まだ、選定の儀式まではしばしの時間がある。

取り残されたカグワは、依然として地面の上に膝をついている己の仗身を見下ろして、ぼつりと問うた。

「……ゆたやも、不吉な予感がしたと言ったわよね？」

「……私にとっての不吉は、かぐわ様の御身に何事かが生じることのみです」

「……そう」

ネイディーンの示す不穏な空気と、己の感じた不吉とは種類が違つとユタヤは言うのだろうか。しかし、カグワに至っては何も感じない。

とは言え、当然のように忠義を尽くしてくれるユタヤと離れなくてはならないのだと思えば、それこそが不吉の示すものなのかもしれないかとカグワは思った。選定の儀式まであと少し、今更ながら

惜別の時を過ごそうか。

そんなことを考えているカグワは、まだ未来を知らない。時は刻々と迫っていた。

#### 4、選定の儀

?? 貴方さえよければ、私の仗身になつてくれないかしら？

そう言つて舞い降りた天女に手を差し伸べられたのは、今からもう十年以上も前のことだ。だが、あの瞬間は色褪せることなく、今でも彼の頭の中に刻み込まれている。彼の心はあの頃から少しも変わらない。この天女を守るのだと誓つたあの日から、少し足りとも変化していなかった。

ついに巫女選定の儀式を間近に控えた己の主と、最後の別れを惜しんだユタヤはゆつくりと気の抜けた足取りで、三の君の内殿を指していた。住み慣れたこの三の宮も、選定の儀式が終われば去らなくてはならない。だが、今ではそれ以外に帰る場所のないユタヤはまっすぐそこを目指していた。もしこれでカグワの元を離れなくてはならなくなったなら??もう、帰る場所はない。

後宮の中には、中央にある祭殿を囲むようにして、一から十までの宮が広がっていた。三の宮は北西の側にある。日のあまり当たらぬ静かなその宮は、その主には似ても似つかない。三の宮の主である、いや、主であった三の君はこの後宮の中で誰よりも賑やかしく、そして輝いている。と、ユタヤは思っていた。

三の宮までくると、その入り口となる門扉の横に、一人の女が立っていた。何事かを屋敷の方へ向かつて叫んでいる。恐らく屋敷の中にある荷物の最後の整理を行っているのだろう??彼女を口マナーという。多々いる三の君付きの女官たちをまとめる女官長である。すなわち、最も三の君に近い女官であった。ゆえに、ユタヤと彼女との距離も、近い。

「おかえりなさい、ユタヤ」

ロマーナはそこに長身の男の姿を見つけると、他の女官たちに荷物の運び出しの指示をするのをやめて、彼を見上げた。ユタヤも彼女の隣にて足を止める。

「荷物の運び出しか……重い物は俺がやる」

「言われなくともそうしてもらおうよ。??カグワ様は? どんな感じだった?」

ロマーナは、荷物の整理の大詰めというこの多忙な時に、突然行方を眩ましたユタヤがどこに行ったのか、ぴたりと言い当てた。ユタヤは彼女に行き先を告げていないが、彼が突然消えたとなれば、行く先は一つしかないと知っているのだろう。

「……特にいつもと変わった様子はなく、緊張してるふうでもなかった。ただ??ひよつとしたらこれで仗身とは二度と会わなくなるのかもしれないと知って、私との別れを惜しんでくださった」

ユタヤが突然屋敷から消え、儀式を目前に控えた主の元をわざわざ訪れた主な理由は、それだ。カグワがその事実を知らなかったように、ユタヤもそれを知らなかった。だが、儀式のために正装をしたカグワが屋敷を去り、空っぽになった屋敷を片付けているときに、なんとも不吉な予感に駆られて、気付いた。ひよつとしたら、これが永遠の別れになってしまうのではないのかと。

「そう……」

小さく呟いたロマーナは、そんなユタヤの心情もいやというほどにわかってくれる。彼女はカグワが後宮入りした時からの専属の女官、すなわちユタヤがこの後宮に来たその幼い頃から、ずっと二人を見て来た。ユタヤにとっても、カグワにとっても、実の姉のような存在だった。

「もう気付けば早いもの……カグワ様も十五になって、貴方も十八ね。もしもこれで仗身をやめなくてはならなくなっても……十八の未来にはたくさん希望があるわ」

ふざけているのでもなく、真面目な顔をして言うロマーナに、ユタヤは「まさか」と失笑する。そして自分の首にかけられた数珠玉

を撫でた。この数珠玉にはカグワの巫力がこめられており、ユタヤの獣の性を封印している。ゆえに、体だけは獣に変化できても、その心まで獣に食われてしまうことはないのだ。

「俺は、これのおかげでようやく人の世界に生きていられる……かぐわ様に生かされているようなものだ。かぐわの君の元を去らねばならぬのなら……それは死を意味する」

この数珠玉がなくなれば、ユタヤの人間としての心は消滅する。すなわちそれは人間ユタヤの死と同義だ。ユタヤは十八の青年である前に、獣人だった。成長とともに獣に心を食われてしまうことが、獣人の悲しきさだめであった。

それに関してロマーナは何も言わず、否、言えず、黙って門扉に寄りかかると腕を組んでまっすぐ祭殿の方を見上げた。その見つめる先の華やかな祭殿の中では、彼らの主が何を思っているのだろうか。

「……そろそろ、儀式の始まる頃合いね」

ロマーナがぼつりと呟く。ユタヤは黙って頷き、同じく祭殿の方を見つめた。見慣れた後宮の景色のはずなのに、なぜか胸の奥がざわめく。まるでその祭殿の立ち姿が、異世界への入り口であるかのように見慣れぬ物に思えた。

「……不吉な、予感がする」

ユタヤは小さな声で囁いた。それは今朝方、今日が儀式なのだと朝日を見上げたその瞬間から続いている妙な知らせである。

「不吉……ね。それは、カグワ様が巫女に選ばれないとか、そういうこと？」

ロマーナの直裁な問いに、ユタヤは黙って首を横に振った。最初は、このままカグワと離ればなれになってしまうのではないかという不安からくる胸騒ぎだろうと思っていたのだが、別れを惜しんだ後も尚続くとなると、この妙な切迫感のような感覚の正体がわからない。

「なんだろう、わからない……ただ、かぐわ様の身に、なにかがあ

るのではないかと……」

「なにかって？」

「それが、わからない……」

要領を得ないユタヤの答えに、ロマーナは首を竦める。「ロマーナ、この荷物はどうしたらいいかしら？」と屋敷の方から助けを求める他の女官の声が入り、ロマーナはユタヤの相手をするのをやめて門扉をくぐり、屋敷の方へ戻ろうとした。ユタヤもいつまでも此処で祭殿を見つめているわけにはいくまいと、踵を返そうとした。

その、時である。

一瞬、祭殿の空が、歪んだ。

あれは一体なんだと目をこらした時にはすでに歪みは見えない。

だが、確かに何か祭殿で起こっているのだと確信した。そして？

??ゆたや！

ユタヤは目を見開いた。聞き違えるわけがない。確かに、カグワの声が聞こえた。この近くにいるはずのない、あの祭殿で儀式を行っているまさに最中であろう、カグワの声だ。悲鳴によく似た声だった。確かに、ユタヤの名を呼んでいた。

「ユタヤ？」

門扉をくぐり、荷物の手配をしていたロマーナが、ユタヤの異変に気付いてこちらに声をかける。

「……かぐわの君が、危ない」

「え？」

現状を飲み込めずに問いかけて来たロマーナに、詳細を説明してやる暇はない。暇があったところで、この感覚的な危機感をどのように伝えたらいいのかわからない。とにかく、主が危ない。なに

があつても、命に変えても守るのだと決意した主が、危機に晒されている。

いてもたつてもいられなくなつて、ユタヤは地面を蹴り飛ばした。祭殿までの道のりは複雑ではない。が、祭殿を取り囲んで広がる十の宮から最短距離で祭殿に辿り着くためには殿を囲む塀を乗り越えるのが最も簡単だ。

「ユタヤ！」と背後から自分の名を叫ぶローマーナのことなど無視をして、ユタヤは塀に手をかけ飛び乗った。そして飛び降りるなり、祭殿の渡り廊にかけあがる。本来ならば、仗身が気軽に乗ってはならない場所であつた。何故ならこの渡り廊は最も神聖なる、「円形の間」に続いている。

ユタヤは当然ながら、その円形の間への入り方など知らなかつた。強い巫力を持つ聖女たちですら、この儀式の時までその円形の間に入ったことはおろか、その円形の間が存在さえ知らなかつたのだ。だが、ユタヤの本能が、その場所を指せと叫んだ。主の悲鳴が聞こえる。その悲鳴が道しるべとなつて、ユタヤを走らせた。

長い渡り廊の上を、ユタヤは全力で疾走した。走るたびに、背中に背負つた大剣が、がしゃんがしゃんと重い金属音をたてた。そんな物いつでも背負つて重いでしょうに、とかつて労つてくれたのは他でもないカグワだ。かぐわの君を守るためにはならこんな物、重いうちに入りませんよとユタヤは答えた。が、今はこの重さが邪魔で仕方がない。これさえなければもっと早く走れるかもしれないのと歯痒く思っている間に、ユタヤは前方に二人の剣士が仁王立ちになつて見つけた。

それはとても、不自然な光景であつた。十年過ごしたために、顔見知りでない人間などこの後宮にはいない。それなのに、その後宮の中で、見たことのない顔をした剣士が二人、仁王立ちで立っていた。しかも、彼らの立つ奥には何も無い。これがとても不思議だ。渡り廊の先であるのに、渡り廊もなければ、他の建物に続く扉もない。そして、庭のあるわけでもない。その先には、目を凝らしても



見えない「なにか」があるようなのだ。

（あれが、円形の間入り口か）

ユタヤは直感で悟った。儀式は、祭殿の「円形の間」で行われるのだという。聖女すら知らないその空間は、きつと不思議な力で隠されているのだ。ゆえに、外にいるユタヤの目には映らない。

「何者か！」

剣士の一人が刀を構えてこちらに警戒の姿勢を見せた。彼らは儀式に余所者が入ることを防ぐ門番だ。

「私は、三の君付きの仗身だ！ 中で、何かが起こっている！ ……

…三の君が危ないんだ、通してくれ！」

ユタヤは切羽詰まって大した説明もできずに、剣士たちを押しつけてその場を通り抜けようとした。しかし、当然その程度の口上で門番がどうぞと彼を招き入れてくれるはずもなく、二人はユタヤに刀を向けた。

「仗身だと……？ 獣人ごときがこの神聖なる祭殿に足を踏み入れていいと思っているのか！」

獣人ごときが、と聞き慣れた侮蔑の言葉にも、今更腹など立たない。むしろ、その言葉の通り、この祭殿に仗身ごときが、獣人ごときが足を踏み入れていいなどは露程も思っていなかった。だが、今は非常事態である。それどころではないのだ。

「違う、今は、それどころではないんだ……！ 頼む、中に、三の君の元へ、行かせてくれ！」

向けられた刀など物ともせず、二人の間を押し通ろうとすると、押しのけられたのではない方の男も抜刀し、刀をユタヤの首にあてた。

「わけのわからぬことを……これ以上進ませるわけにいかない。戻るか、死ぬかだ」

ユタヤの首に当てられた刀は綺麗に研がれた新刀で、いかにも切れ味の良さそうな銀の色に輝いていた。喉元に当てられた刃の部分は冷たく、今にも彼の首を取らんとしている。何人たりとも中にい

れるなど命ぜられているのであろう二人の剣士を言葉で説得するのは困難に思えた。？？いかんせん、時間がない。

(……仕方がない！)

他に手段がないと判断し、ユタヤは首にかけられた数珠玉をきゅっと握った。この数珠玉は、ユタヤの獣の心を、そして獣の姿を封印している。数珠玉そのものが効力を失えば、ユタヤはただの獣と化してしまうが、数珠玉を緩めることによって彼は人の心を残したまま、姿のみを獣と変化させることができた。しかし、それは後宮内にて奨励されてはならず、滅多なことのない限り、普通ならば封印は解かない。カグワなどは変わり者故にたびたびユタヤに封印を解かせたが、本来ならば、緊急時以外は人の姿でいるものだ。？？そして、今こそ緊急時である。

人の姿に纏う装衣を脱ぎ捨て数珠玉を緩め、ユタヤは瞬時に獣の姿に変化した。途端、視界に映る剣士たちの体が縮んでいく。実際には、ユタヤの体が倍以上に拡張しているわけであるが。

ユタヤはまず、己の首に刀をあてていた剣士をなぎ倒した。渡廊の壁に叩き付けられた剣士は、ぐ、と声を詰まらせて、気を失う。もう一人の剣士は突如変化した獣人の姿に、目を丸くし凝固してしまっている。恐らく、獣人というものを初めて見たのだろう。化物と呼ばれるこの獣の姿は、それはそれは恐ろしいものだ。

「……退いてくれ」

低い声で告げ、くぼんだ黒い目で剣士を見下ろすと、剣士は途端に腰を抜かしてその場に刀を投げ捨てると、がくがくと震えた。とても勝てないと思ったのだろう。しかし逃げることもできずに、その場にてただおののいている。

剣士に闘う意志のないことを確認すると、ユタヤは息を呑んでから、何もない空間に身を投じた。そこには結界の張つてある可能性があった。何人たりとも儀式には足を踏み入れてはならないはずだ。剣士二人で、入り口を守っているはずがなかった。ひよつとしたら結界に引っかかって入れないどころか、はじきだされて死に至るか、

全く知らない亜空間へと飛ばされてしまうかもしれないと、頭の隅に不安は過つたが、どのみちこれでカグワを救えないのなら、同じことである。例えこの身が滅びようとも、彼女の元へ辿り着こう。ユタヤは、獣の巨体をその入り口へと投げた。

ぐわん、と、一瞬だけ空間が歪んだ。だが、それだけであつた。結界などなかつたのかもしいし、あるいはそれをはね除けてしまつくらいのがユタヤにあつたのか、とにかくその真実を知ることがは適わない。

目の前に、暗い世界と、一筋の光と、そして巻き起こる旋風が広がっていた。聖女たちの甲高い悲鳴が幾重にも折り重なつて響き渡る。ユタヤは、その中から確実に己の主人の物だけを聞き取つた。

「ゆたや！」

声は、頭上から。旋風の吐き出されている、不思議な一筋の光の彼方から。

「かぐわの君！」

ユタヤは彼女に少しでも近づくべく、冷たい石の床を蹴つた。

時はさかのぼり、それはまだ、ユタヤが三の宮にてローマーナと話し込んでいた頃である。カグワは、他の聖女たちと共に定刻通りに円形の間へと集められていた。

外からはその建物の存在すらわからない円形の間は、渡り廊の突き当たりの目に見えぬ扉をくぐると確かに存在していた。巨大な円錐の形をした建物は、カグワの長年居住してきた三の宮の敷地全てほどの広さがあり、三階分ほどの高さがあつた。吹き抜けの高い天井には、十の天窓が設けられており、それぞれその窓から差し込む光が、石床の上に備え付けられた黒い十の椅子を照らしている。十の椅子は、円形の中の中央に置かれた巨大な水鏡をぐるりと囲んで中央を向く円形に設置されており、扉から見て真正面の椅子から順に、一の君、二の君、三の君、と並んで腰掛けることが望まれた。

一刻前に説明された通りに従い、聖女たちは無言で己の椅子を指す。カグワも淀に倣って、二の君と四の君の間、三の君のために用意された黒い艶のある座椅子に腰掛けた。

全ての聖女が椅子に座り、中央の水鏡を見つめていると、ややあつて、何者かの力によって天窓が閉じられた。円形の間の中から、光源が消える。全てが漆黒の闇に包まれたかと思えば、今度は水鏡が自ら光を放ち始めた。きらきらと水面の揺れるたびに、天上にまだら模様が映る。

『選定の儀を始める??』

どこからともなく女の声が響いた。それは、この円形の間という空間自体に響き渡るのではなく、聖女たちの頭の中に直接語りかけてくる。カグワはちらと他の聖女たちを見やったが、他の聖女たちもはつとしたように目を泳がせたので、別段自分だけに聞こえているというわけではないのだろうと安堵した。

『聖女は瞑目し、先見の技を行使せよ??選定は、己らの見た未来の中から、行う』

先見の技??すなわちそれは、未来を予知する技である。どうやら巫女の選定は、聖女たちの見る予知夢の中で行われるらしい。

選定は、不思議な力の一存によって行われるのではないのか、とカグワは初めて知って吃驚した。聖女の見た未来の中から選定するというのは、未来の中に巫女として登場する聖女を探すということなのか、あるいは先見の技の最も鮮明に行えた聖女を巫女とするという意味なのか。

詳細はわからないまでも、やれと言われたからにはやるしかなくカグワはそつと目を閉じた。今までも巫力の修行として先見の技を試みたことは何度もあったが、正直カグワのその技の成功率は決して高くない。十のうちに一度成功すれば良い方で、大概は何も見えなかった。が、しかし、その一度の成功で、未来を外したことがないというのが唯一の誉れである。

未来を見据えようと、カグワは意識を遠くへと飛ばした。魂が体

を抜けて、どこか遠い時空の彼方へと浮遊していくような感覚に陥る。ふわふわと体が軽い。優しい大気の流れに、身を任せる。

??ふと、どこからか、赤子の嗚咽するような声が聞こえた。おぎゃあおぎゃあと、乳飲み子の泣く声である。母を求めて嗚咽する赤子はやがて成長し、天へと昇った。不思議な力に召されていった。

すると、今度は荒地を抜けようとする大勢の難民が見えた。荒れた旅路の途中で、女子供が力つきて死んで行く。思わず目を背けたくなるような凄惨な光景であった。

凄惨な光景が消え、森の奥に燃え盛る建物が見える。炎の中から命からがら逃げ出す人間が二人。一人は男、もう一人も男、泣き叫ぶ男たちの声が森の中にこだまする。

かと思えばそこは凍てつく氷の国だった。一人の若い娘が、凍った街の中で、歌を歌う。その歌は輝く光となつて、街の氷を溶かした。人々は春を迎えた街の中で、歓喜した。

次に見えたのは、巨大な神像だ。カグワもこれに酷似したものを、後宮の祭殿で目にすることがあった。しかし周囲の風景からして、此処は後宮ではない。どこか他の場所にある、神像である。かと思えば、その神像が突如爆風に巻かれ、粉塵と化した。炎があがる。神像は見るも無惨に、その場に崩れ落ちていった。

それから次に見えたのは、雪の降る景色だ。広い雪原の中に、矢が、石槍が、飛び交った。戦の光景である。人が倒れると、白銀の雪が黒に近い赤に染まった。たくさんの人間が命を失った。命を落とした人間は、雪の下へと埋もれていった。

そして最後に見たのは、巨大な獣の姿であった。胸は熊のように黒く巨大で、頭は獣の頭蓋骨のような形をしている。伸ばした手には長い爪がはえ揃い、睨む目は闇のように暗い。誰かが、化け物、と叫んだ。化け物は暗い闇の目を悲しそうに歪めた。その暗い闇の目を持つ化け物を、カグワはよく知っている。

??ゆたやつ!?

カグワは思わず目を開いてしまった。遠い時空の彼方を彷徨っていたはずの意識が、円形の間座る彼女の体の中へと舞い戻る。鮮明に、その場の景色が見えた。現実の目は例えどんなにその場が暗くとも、真実しか映さない。

円形の間中央に備え付けられた水鏡の中から、金色に光る不思議な球体の物が垂直に上へと飛び出した。他の聖女たちも皆、先見の技を終えたらしく、呆気に取られたようにその光る球体を眺めている。

光の玉は、ぷかぷかとしばらくその場に浮いた後、やがて少しだけ沈んだ。聖女たちの座る高さまで沈むと、ゆらゆら揺れる。かと思えば、なんとも頼りない足取りで、動き始めた。その向かう先は??なんと、カグワの座る三の君の御座だ。

どういうことだ、と驚いているカグワの前で光の玉は動きを止めた。他の聖女たちも皆、啞然とした顔でこちらを見ている。この光の玉が水鏡から現れたものならば、それは選定の儀式をとりしきる不思議な力の意思である。そしてその意思がまっすぐカグワの元を目指したというならば??それが、意思の下した決定ということだ。

(嘘でしょう……私が?)

他の聖女たちが、「そんな馬鹿な」と目を見開くのと同じくらいに、カグワも困惑していた。東の君と揶揄され、変わり者と笑われ、それでも厭わず自由気ままな振り舞いをしてきた。正直に言えば、巫女になりたいだなんて、思ったこともなかったのだ。最も、聖女らしからぬ聖女であったと思う。自分は最も、巫女の座からは遠かったと、そう思うのに。

しかし、間違いなく光の玉はカグワの前に頓挫した。これをどのように対処すればいいのかは、事前の説明で習っていない。カグワは戸惑いながらも、とりあえずその光の玉を両手のひらですくいあ

げるように包み込んだ。すると、その光の玉は、布が水にしみこんでいくように、カグワの体の中へと溶けて行った。

(これで……私が、巫女に……?)

果たして儀式はこれで終わりなのだろうか。この後一体自分はどうしたらいいのだろうか。不思議な声もしない。これ以降の説明も何も受けていない。ただ、光の玉をすくいあげた両手を、持て余すばかりである。

カグワの当惑が頂点に達した、その時である。??事件は起こった。

俄然、円形の間の上に、不思議な黒い固まりが降臨した。これも儀式の延長だろうかと上を見やって、しかしカグワは首を傾げる。暗褐色のその固まりからは、これまでの儀式に関係した全ての物とは異なり、神聖さのかけらも感じることができなかった。??むしろ、おどろおどろしい。

「……不穩の正体は、これが……」

一の君、ネイディーンがぼそりと呟いたのが聞こえた。カグワは再び天上を見上げる。確かにその暗褐色の固まりは、不穩であった。

と、次の瞬間、暗褐色の固まりの中から、一筋の強い光線が落ちた。光線は迷わず水鏡と衝突し、ぱりん、と音を立てて水鏡の入れ物ごと破壊する。そして、その次には光線を巻くようにして、竜巻のような強い風が拭き起こった。

途端、円形の間の中に、甲高い聖女たちの悲鳴が響き渡った。風は上へ上へ、暗褐色の固まりの中へと物を吸い上げて行く。割れた水鏡の破片が、暗褐色の中、暗闇の中へと吸い込まれて行った。

きゃあああ、と聖女たちの阿鼻叫喚。カグワも危うくその風の中へ吸い込まれていきそうになり、慌てて自分の座っていた御座にしがみついた。髪をまとめていた簪が解け落ち、暗闇の中へ消えて行

く。風の渦はまるでカグワを目指して舞い起こっているようにも感じられ、カグワは全身の力を込めて御座にしがみついても、今にも引き剥がされんとしていた。

なにがなんだかわからない。今は巫女選定の儀式の途中だ。なにどうしてそんな神聖な場に、こんなにもおぞましい物が現れるのか。とてもではないが、これが儀式の一貫とは思えない。誰か？？誰か、助けて！ と、叫ぶ。

心の中で悲鳴を上げると同時に、外と繋がる円形の間の扉が、叩き割られるような勢いで開いた。その開いた扉の向こうから現れたのは、よく見慣れた姿。誰もが恐ろしいと顔を歪めた化け物と言われる所以であるが、一度だってカグワはそれを恐ろしいだなんて思ったことがない。

「ゆたや！」

名前を呼ぶと同時に、ついに御座にしがみついているられなくなったカグワは、旋風に巻かれて暗闇の中へと吸い込まれていった。

「かぐわの君！」

すぐに、彼の声が追いつく。

なにがなんでも、と、がむしゃらに手を伸ばすと、ぎりぎりのところで彼の長い爪のような獣の手に届いた。カグワがその爪の一本を右手でしっかりと握り締めると、今度はユタヤが手を伸ばし、その巨大な腕の中にカグワの体を抱き込む。ユタヤの獣の体の中へと押し込まられて、ひとまずは安心した。が、二人同時に闇の中へと吸い込まれていることに代わりはない。

風に飛ばされるがまま、上下左右、体は何度も回転を繰り返した。何も見えない暗闇の中で、どこが正しい上でどこが正しい左なのかもわからない。ただ、崖の上から転がり落ちて行く石のように、闇の中を転がっていく。

ゆたや、ときゅつと固い毛皮を握り締めると、彼のカグワを抱く腕にも力が籠った。絶対に離さないようにと力強く、だがカグワを潰すことのないようにと優しく抱きしめてくれる。カグワは闇の中



でも、彼の腕に護られている。

そうしてどれくらい、闇の中を転がったのだろうか。三半規管が言うことを聞かなくなるくらいに振り回され続けて、ようやく闇の先に光が見えた。あれが、闇の出口だろうか、と思っただけには、二人の体は放り出される。

どん、と鈍い音がした。ユタヤが闇の中から光の中へと放り出されて、どこかに着地したのだ。ユタヤが着地時の衝撃を全て吸い取ってくれたために、カグワは少しの痛みも感じることなく光の中へと到着することができた。

風はもう吹き荒れてはいなかった。それどころか、二人を包んでいた闇もなくなり、先ほどまでの恐ろしい光景が嘘みたいに、静寂がその場を支配していた。

しかし、そこはどう見ても、彼女がそれまで選定を受けていた円形の間ではなかった。とてつもなく狭い空間で、獣の姿にと変化したユタヤに至っては、少しも身動きが取れない。?? 此処は一体、何処だ？

二人は、聖なる儀式の途中に突如不思議な闇の中へと吸い込まれて、全く知らない別世界へと、はじき飛ばされてしまったのである。

## 5、時空の狭間のその向こう

かつん、かつん、と遠くの方から人の足音が聞こえた。しかしそれは本当に遠い彼方から響き渡るもので、果たしてどこへ向かっているのかもわからない。静寂と暗さの支配する世界の中で、頼れるのは触覚ばかりだ。カグワは、最も身近にあるもの?? 共に闇の中をくぐりぬけてきた己の仗身の毛皮を掴んだ。

「……ゆたや」

おそろおそろその名を呼ぶと、すぐに応えた。

「はい、ここに」

即座に返されるその答えに、心底安堵する。此処がどこであるのか、一体何が起こったのか、自分の置かれている状況が何なのか、一切わからないことだらけであるが、確かにそこに慣れ親しんだ仗身がいるのだとわかればそれでいい。カグワは彼の毛皮から手を離して、わずかに暗い空間の中を進んだ。

「……ここは一体どこかしら」

言いながら二歩進むと、すぐに壁に当たった。どうやらとても狭い空間のようだ。

「さあ……あまり広い空間ではないようですが……私は身動き一つ取れません」

言いながらユタヤは獣の頭を僅かに持ち上げて、がしゃんと何かにぶつかつた。「照明器具が……」とユタヤが情けない声をあげる。音からして硝子製の照明器具がぶらさがっているのか、とカグワは天上を仰いだ。カグワの触れた壁も上質な壁紙のような触感が生じていたし、二歩のみ歩いた床も絨毯が敷かれているようで柔らかい。どうやら此処は狭いながらも、人の住まうことのできる部屋のようにだった。

「此処が普通の部屋なら……どこかに出口があるはずだけど」

カグワが小さく呟いて壁を伝うと、ユタヤがわずかに身動きした。

「私の前方に……それらしき取手がありますが」

「本当？」

カグワはユタヤの腕を掴むと、彼の誘導に従ってそれらしき取手へと辿り着いた。部屋の中には明かりがなく、窓さえないため暗くてよく見えないものの、確かにそこには扉の握り手のようなものが存在していた。が、金属製のそれを握って押してみても、あるいは引いてみても、全く扉は動こうとしない。

「……駄目だわ。開かない。ゆたや、開けられる？」

力尽くで開けられるものなのかどうかは不明であったが、自分よりも数倍力のある仗身に託すと、彼は無言で扉を押した。が、やはり、びくともせず、長い爪をひっかけ扉を引こうにも、開こうとはしなかった。

「……どうやら何かしらの呪がかけられているようです」

「ゆたやの力でも開かないとなると……そうかもね」

どのような頑丈な錠がしてあったとしても、ユタヤが力尽くで臨んでびくともしないということは考えづらい。ということは、物理的ではない何かしらの力が働いているということになる。

カグワは扉を開くことを諦め、ふうと一息吐いた。とりあえず、此処が何処なのか、一体全体どうしてこういうことになったのか、わかるだけのことを推理してみなくてはならない。そのためにはまず、この暗闇から脱したいのであるが、照明器具に明かりは点くだろうか。

「ゆたや、天井の照明に火を灯したいんだけど……できそう？」

「火種、は……難しいかもしれませんが。なにしろ私の頭が当たってしまうので」

ユタヤの獣姿の長い白髪に炎が移ってしまうかもしれない、という懸念だろう。カグワは腰に手をあてて、考えた。そもそも、彼がこの部屋の大部分の空間を占拠してしまっているために、この部屋の全貌が見えない。

「人型に戻ってよ、ゆたや」

「いえ……円形の間の前を渡り廊に、装衣を置いてきてしまったゆえ……」

仗身の纏う装衣は、獣型にも人型にも自在になれるよう、着脱の便利な衣となっている。ゆえに獣型になった時には必ず装衣を持って移動しなくては人型に戻りたくとも戻れない。しかし、この非常事態の中では、それすら忘れてしまったようだった。

「も……装衣なくなっちゃっていいわよ別に」

「さすがにそういうわけには……」

人型に戻って全裸に数珠玉を巻いたのみの格好というのは、さすがに気の知れた仲とは言えど、躊躇するらしい。その気持ちのわからないわけでもないの、カグワもそれ以上は言わなかった。

代わりに、閉じきった扉に寄りかかって、うーんと唸りをあげる。

「でも、どうしよう……一つの扉が呪で封じられているとなると、他にどうやって外に出たらいいのかしら……」

「そうですね、他に道を探して……ん、お待ち下さい、なにか、物音が……」

「え……?」

「……何者か、人間の足音が、こちらへと近付いております」

ユタヤはぴたりと動きを止めて、声を潜めた。つられてカグワもぴたりと身動きを止める。すると、確かに扉の向こう側から、かつかつと近付いてくる人の足音が聞こえた。

この部屋の外がどのような作りになっているのかなんて、皆目見当も付かないが、足音は上の方からだんだんとこの部屋の前へと近付いてくる。故に、階段か何かがあつて、上階からこの部屋を目標して何者かが下りて来ているのではないかと予測できた。

「……かぐわ様、私の後ろへ」

小声でユタヤが囁いた。カグワは暗闇の中、鮮明には見えない彼の顔を不安げに見上げる。確かに仗身とは護衛のこと、カグワを護

ることこそ彼の仕事ではあるが、今まで平穏な後宮で過ごしてきた彼女たちに、このような不測の事態が起こったことは一度もなかった。ゆえに、不安だ。ただ一方的に護られる立場は、不安だ。

かつかつと、足音が近付いてくる。もう間もなくだ。階段を下りるような足音ではなくなつた。今度は、固い床をまっすぐ歩くような足音に変わる。??カグワは目をつむり、巫女の技の一つ、「気感」の技を使った。これは唯一カグワが得意とする技で、近くに居る人間ならば、その気配から大体のその特徴を言い当てることができる。

「男が……二人よ。顔はよくわからないけど……若い男が二人。帯刀しているみたいだから、兵士か何かかしら……」

「気感」の技を使ってできうる限り相手の特徴を探ると、彼女の力を絶対的に信じている仗身は二人の兵士が来るのだと身構えた。

「相手は敵かもわかりません……向こうが武器を持っているのなら、尚更私の後ろへ隠れてください」

かぐわの君、と再び囁かれて、致し方なくカグワは壁を這うようにしてユタヤの後ろへと隠れた。不安ではあるが、自分が前にいたとて何もできない。戦いの術ならば、ユタヤの方がずっと心得ている。

かつかつかつ、と近付いてくる二人分の足音が、ついに部屋の前で止まった。部屋の、扉の前で止まった。来るか、とユタヤが身構える。その後ろに控えたカグワは、彼の背の毛皮を無意識のうちに握り締めた。

そして、ついに、扉が外側から開けられる。あんなに固く閉じられていた扉は、やはり呪がかけられていたのであるう、外側からはいとも簡単に開いた。それはもう、腐った木戸を開けるがごとく容易に開いた。

きい、と音をたてて扉が開くと、途端、外からの光が部屋の中へと差し込んだ。そのあまりの眩しさに、一瞬にして目が眩む。本能的に瞑ろうとする目を必死に開くと、自ずと涙が溢れた。涙で霞む

視界の中に、二人分の男の影が映る。

「……うわああああ、なんだ、こいつはっ!!」

「ば、化け物……っ!!」

背中に光を背負って、影にしか見えない二人の男が、口々に悲鳴をあげた。そして、彼らが悲鳴をあげたその対象がなんであるかは、瞭然だ。部屋をその巨体で占拠する、獣の姿をしたユタヤのことであろう。

「ば、ばかな……!! 部屋には、娘が一人、いるはずだ、と……!!」

それなのに、何故、化け物が……!!」

「わからん……!! とにかく、殺せ!!」

金属のこすれるような音がして、男たちが抜刀したことを知る。カグワははっと息を呑んだ。確かにユタヤは生身の人間よりも遥かに強いけれども、抜き身の刀二本を相手に勝つことなどできるのか。

そう思っただけ緊張したカグワとは異なり、ユタヤは少しの怯えも見せなかった。強い警戒の意思を見せて、相手を睨みつけているのであろう。後ろからでも伺える。その覇気に押されて、「殺せ」と叫んだはずの男たちがひるんだ。刀を握り締めたまま、一歩踏み出すこともできない。

「は……はやく、殺せ!!」

「でも、……でも!!」

二人分、裏返った悲鳴のような喚きが聞こえる。と、思ったその時だ。

「??? 殺すだど? それは誰の許可を得てのことだ」

この場にそぐわぬほどに冷静な、男の声がした。

かつ、かつ、とその男の物であろう足音が近付いてくる。部屋の前にいる男共よりか幾分重みのある足音で、両者の間に地位の差があるのだとその足音だけで判別できた。

「あ……しかし、中に、化け物が……!!」

刀を構えた男の一人が裏返った声で抗議する。すると、現れた男

は再び冷静な声で答えた。

「それは獣人だ。古来より、西の国の巫女は、獣人を護衛として侍らせるのだ。??これだから、何も知らない下級兵を寄越すことには反対したのに」

台詞の後半は独白であろう。何も知らない下級兵たちは、現れた男に「戻れ」と言われて、まだ怯えの消えないまま、抜き身の刀を鞘に戻すことさえ忘れて足早に去って行った。足のもつれそうな勢いで走り去って行くその足音は、いつそ哀れであった。

一方の残された男は、一人部屋の中を見つめていた。その部屋いっぱい警戒を解かぬ獣の姿を見て、ほう、と感心したように呟く。

「……しかし、立派な獣人だ……。まさか、あの時空の狭間に自ら飛び込んでくるとは」

男はユタヤを見上げてわずかに唸ると、それからその場に膝をついた。彼は深々と叩頭し、声を張り上げる。

「西の国の巫女??お迎えに参上致しました。危害は加えぬゆえ、そのお姿を拝見させて頂きたく存じます」

その慇懃な口調からは、生来の上品さが感じられた。恐らく、生まれながらにして貴い位を持っているのだろう。

カグワは決意した。逃げてでも隠れても仕方がない。西の国の巫女とは、間違いなく自分のことだ。まだ、選定の儀式を抜けて間もなく、その実感はないけれども、他に該当する者はいない。

「……私が西の国の巫女よ」

ゆえに、ユタヤの横をすり抜けて、彼の前に出た。「三の君!」とユタヤが咎めるように声をあげる。あえてここで名前を呼ばなかったのは、見知らぬ男にカグワの名前が知れてはいけないと配慮したためだろう。つくづく用心深い仗身だ。

部屋の前の広い廊下に膝をついた男は、癖のある茶色い毛を首の後ろで軽くくくっていた。暗色の絹の布でできた品の良い服を纏っているが、後宮育ちのカグワにはその格好から彼の位を予想するこ

とは難しい。

「西の国の巫女……手荒な方法で此処までお連れしてしまったことをまずはお詫び申し上げます」

「手荒……なんてものじゃなかったけど……此処は何処なの？」

「此処は西国エウリアの隣国、北国ラウグリアの宮殿でございます」

「北国……っ!？」

思わずカグワは声を荒げた。

聖女として後宮で大切に育てられたカグワは、西国エウリアはおろか、後宮の敷地の外にさえ、足を踏み出したことがほとんどない。当然、北国ラウグリアになど一度も足を踏み入れたことがなかった。故に、自分のいた西国の後宮から、この北国の宮殿までどの程度の距離があるのかわかる由もないが、少なくともこの短時間で移動できる距離ではあるまい。先刻この男は、「時空の狭間」とぼやいたが、それはきつと円形の間天井に現れた暗闇の固まりのことであろう。そしてそれを通り抜けることによって、カグワは一瞬にして西国の後宮からこの北国の宮殿まで飛ばされてしまったということだ。

「西国はこの頃、北国に要人を寄越すよう強く求めてきますので……ならばまずは、西国の要人をこちらへお招きして、話を聞こうではないかと」

男は深く頭を垂れているため、その顔を見ることはできない。しかし、その声色からは、なんとなく含みを感じられた。

??あの冷徹な参謀は、頭が切れる。この国王崩御を好機と見た。国王の葬儀に、各国の要人を招待すると言い出した。

??レヴィン國務参謀は、北の出兵を見たいのじゃ。要人を招待されて、しらばくれて皇室を寄越すのか、軍人を寄越すのか、あるいは、誰も寄越さず真っ向から対抗してきよるのか。



そう教えてくれたのは、後宮の最西端の変わり者、ケニー老翁である。そして彼は言った。北国ラウグリアは今やほぼ軍国になりつつあるのだと。そしてそのうち、隣国であるこの西国エウリアにも戦を仕掛けてくるであろう、と。

「しかし、なかなか西国の御仁が話し合いには応じてくださらぬゆえ、手荒ではありますが、こうして西の巫女を時空の狭間よりお招き致しました次第」

「時空の狭間……」

カグワは眉をひそめた。

それはすなわち、時間もなければ空間もない、不思議な扉を開くことによつて遠い物を近くへと引き寄せる技である。巫力の修行をするにあたって、時や空間を操る技があることも、聞いてはいた。しかしながら、それはとてつもなく高尚で、他の技と比べても圧倒的に難易度が高い。今代一の巫力の持ち主であると言われた一の君ネイディーンでさえも、その技に挑戦することすらできなかった。??だが、北国にはその技を扱えるほどの強い巫力の持ち主がいるのだ。

「……北国には相当な、実力者がいるのね」

呟くと、長い癖つ毛の茶髪が「御意」と言つて、揺れた。

「西国では、巫力と呼ぶらしき不思議な『力』。我が国には、随一の『力』を持つ御仁がおります。その御仁が、折角お招きしたのだから巫女に会いたいと仰せです」

「……誰？」

「北ラウグリア帝国の皇太子……シルディア殿下でございます」

「皇太子殿下……」

カグワは瞬きをした。「御仁」と呼ぶからにはそこそこの地位のある人間だとは思っていたが、まさか国を統べる皇室の人間であるとは思わなかった。「力」があるから皇太子になったのか、あるいは皇太子がたまたま「力」を持って生まれたのか。カグワは北の国の皇室の制度など知らなかったが、どちらにせよ国の頂点に立つ人

物がそれほどの強大な『力』を持っているのだという事実が、恐ろしく思えた。

「殿下は、巫女の到着を今か今かとお待ちです。どうぞ御足労下さい」

言つて、男は初めて顔をあげた。伶俐な顔立ちをした若い男であった。二十かそこらだろうか。

「さあ」と男に促され、カグワは俄に迷つたが、いつまでもこの狭い部屋に閉じ込められていても仕方がないと判断して彼に従うことにした。彼の言葉がどこまで真実なのか、カグワには判別する術もないのだ。とりあえず動かないことには進めない。

そう決断したカグワが一步前へ踏み出すと、「三の君」と後ろの仗身が低い声をあげた。この見知らぬ場所でカグワを一人にすることを、案じているらしい。振り返つて「私は大丈夫よ」と彼を安心させようとして、ふと気が付いた。確かに、カグワに身の危険の生ずることはないかもしれない。手荒い方法ではあつたが、カグワのことを西の巫女と知っている以上、迂闊に手出しはしないだろう。??だが、ユタヤはどうだろう。

カグワの頭に、先ほどやってきた二人の下級兵士の姿が過つた。ユタヤを見るなり「化け物だ」「殺せ」と彼らが喚いたように、北の国にとつて巫女であるカグワは要人であろうとも、ユタヤはただの化け物でしかない。このまま彼を置いて行つたら、何をされるかわからない。

「待つて」

気付いたカグワは、カグワをどこぞへ連れて行こうと踵を返した男の背に向かつて声をかけた。

「ゆたやも……彼も一緒に連れていくわ」

「何……?」

前を歩く男が足を止めてこちらを振り返る。そしてカグワの後ろに控える獣の姿を見上げて、険しい顔をした。それが肯定なのか否定なのか、聞かなくともわかるほどに、険しい。カグワはそれでも

畳み掛けるように続けた。

「西の国の掟では、巫女の傍には必ず仗身が控えることになっているの。もしもその掟に従えないのなら……私は行けない」

きっぱりと言い放つと、男は眉根を寄せる。

「此処は西の国ではありません。北の国では北の国の掟に従うのが得策では？」

「勝手に招いておいて、従えと？ 折角此処まで来てあげたのだから、それくらいは譲歩するべきではなくて？」

実際には招かれたというよりも攫われたといった方が正しいほどの狼藉であったが、毅然と振る舞った。男は灰色の目を細め、口調を強める。

「北の国には獣人がおりません。宮殿の中を歩かせるわけにはいかぬのです」

負けじと、言い返した。

「なら、強制的に私を連れていきなさい」

背後の仗身が、獣の唸るような低い声で付け足す。

「巫女に手を出すようならば、その者を私が排除する」

主従の強い視線を受けて、男の目が揺らいだ。彼は眉間に皺を寄せたまま、「しかし」と困惑したように言いよどむ。

「再度申しますが、北国には獣人がおりません。宮殿の中に獣が現れたとなると、混乱を避けられぬ」

確かに、とカグワは下級兵士たちの反応を思い浮かべた。この姿のままのユタヤが歩くと、後宮の中でさえ嫌悪されるのだ。獣人を見たことのない場所では、どうなることが。彼の言葉には一理ある。

「なら……服を持って来て頂戴。彼は、人の形にもなれるから」

男は獣姿のユタヤを見上げて一驚したような顔をする。巫女には獣人が護衛として付くことを知りながら、彼が人にも獣にも変化できることは知らなかったらしい。

「それで問題はないでしょう？ よもや嫌とは言わないでしょうね

？」

強い口調で問うと、男はユタヤとカグワを見比べた後に、首を竦めて頷いた。

「しばし部屋の中でお待ちください。衣服を用意させましょう」  
カグワはほっと胸を撫で下ろした。これでユタヤと離ればなれにはならずすみそうだ。

部屋の中で、と言った男はカグワを再び部屋へ戻すと扉を閉めようとした。恐らく彼女たちが逃げることはないよう、再びこの扉に呪を施すつもりなのだろう。

閉じられていく扉を眺めながら、ふと、カグワは男の顔を見て問うた。

「ところで、そうだ……貴方は誰？ 軍人さん？」

最初にこの部屋を訪れたのは、二人の下級兵士であった。ほとんど軍に食われてしまっているという北の国で、権力を持っているのは軍人なのだろう。現状をよく把握している彼も、その一人なのだろうかと思つて問うた。すると、彼は「いえ」と笑つて首を振る。

「私は、皇太子殿下の世話役しております。位で言えば、侯爵と同位の権限を持ちますが……巫女君よりは下位でございますゆえ、何でもお申し付けくださいませ」

「そう……名前は？」

北国の貴族の階級制度など知らぬカグワには、彼の位などどうでも良かった。ただ、彼を呼ぶための名前が知りたい。

名前を問われた男は、茶色の癖毛を垂れ、軽く会釈した。

「オレーク・ナイザーと申します。オレークともナイザーとも、なんでもお呼びください」

## 6、封印

それから間もなくしてオレークがユタヤのために下級兵士の纏う物と同じ軍服を持って現れ、ユタヤは人の姿へと変化し、二人は狭い部屋を出ることを許された。

それまで二人の閉じ込められていた部屋は宮殿の地下に位置していたらしく、オレークに連れられて長い石の階段を上り続けて、ようやく地上階に出ることができた。

北国ラウグリアの宮殿は内側からでもわかるほど、恐ろしく頑丈な作りをしていた。何重にも重ねられた石造りの壁は分厚く、外の空気を頑なに遮断する。カグワは最初、それは敵襲に備えたものなのだろうと思っただが、ややあつてそれだけが目的ではないことに気付いた。此処ラウグリアは、カグワの住む西国よりも遙かに北に位置している。冬はカグワの経験したことのないほどの極寒に見舞われるに違いない。この頑丈な壁は、冷たい外気を遮断するためのものなのだ。その証拠に、壁だけでなく窓も頑丈だ。二重に張られた硝子の窓は外気との温度差で結露していた。季節はまだ冬には遠いけれども、ここでは西の国のように気軽にひなたぼっこもできないのかもしれない。

宮殿の地上階へと出てから、オレークは王宮の敷地内の他の塔へと移動した。それまでいた塔には所々に警備を行う軍人がいたのに、何故か移動した先の塔の中には軍人の姿がない。時折すれ違ふのは、小間使い風の男女のみだ。

「此処は、王宮内でも特に守られた場所…… 皇家の住まう、皇宮です」

前を歩くオレークがそう説明してくれた。おそらく皇宮内は、軍人は立ち入ってはならないことになっているのである。

皇宮に入ってから上へ上へと冷たい石段を上らされ、辿り着いたフロアはとても静かだった。荘厳であった。その階全体に、重い空

気が立ちこめていた。この階には皇家の中でも相当の権力者が住んでいるのだと、その空気からのみでもわかるほどである。赤い絨毯の布かれた道の途中に、金色の柱時計が置かれていた。一人の女中がその柱時計のゼンマイを巻いていたが、オレークとオレークに連れられたカグワたちの姿を見て、慌てて壁際に寄るなり頭を下げた。カグワには侯爵の位がどの程度のものなのかわかる術もないが、皇太子殿下の付き人である、オレークの地位もなかなか高いのであるう。

「こちらに??」

言つてオレークの示したのは宮殿の最奥、今まで通り過ぎて来たどの部屋の入り口よりも絢爛な姿をした扉であつた。扉だけで、大した迫力である。カグワは思わずその扉を上から下まで眺めた。

縦に長いその扉の天辺は、遙か彼方二階分くらいの高さはある。

落ち着いた黒に近い緑を基礎に、金の装飾が幾重にも施されていた。オレークの握つたドアノブは、錆びない真鍮の色をしている。

「殿下、オレークです。西の国の巫女君をお連れしました」

オレークはその豪華絢爛な扉に頬を寄せて、部屋の中へと声をかけた。すると、間もなく、「入れ」と弱々しい少年の声が返ってくる。オレークは小さく「失礼致します」と礼をして、巨大な扉を押して開いた。

きい、と扉の軋む音がして、開いたその先は、見たこともない輝かしい空間であつた。

カグワとて、聖女として後宮の中でそれはそれは大切に育てられて来たという自覚がある。聖女の住む宮も、豪華ではあつた。だが、しかし、この部屋は遙かその上をいく。だだっ広く上品な空間に、白磁の風呂が置かれていたり、巨大な暖炉が控えていたり。そしてその部屋の中央に、紗幕のかけられた巨大なベッドが置かれていた。そのベッドの上に、一人の線の細い少年が、膝を立てて座っていた。

「オレーク」

紗幕の向こう側、ベッドの方から少年の声はするが、姿は見えない。暖炉の炎に照らされて線の細い体の影は見えども、その顔までは見えない。

「湯が湧いたと思うんだ。生姜の粉を溶かしてカップに注いでくれ」

少年の声に、「御意」と小さく頷いたオレークは、暖炉の方へと足早に駆けて行って火にかけられたポットを取り出す。そして小さなテーブルに乗せられたカップを乾拭きすると、言われた通りになにやら白い粉を取り出し調査しはじめた。

オレークに続いて部屋に入ったものの、居場所のないカグワはきよるきよる部屋の中を観察する。天井が高いなどどうでもいいことを思っていると、紗幕の向こう側から声をかけられた。

「君が西の巫女だね。こつち来て、座りなよ」

当然、西の巫女とはカグワのことだ。「座りなよ」と指示を受けたカグワは、しかしながら彼の言う「こつち」がどこなのかわからずに、戸惑いながら後ろを向いた。後ろには、カグワから一步離れたところにユタヤが立っている。彼は部屋の中をひとしきり眺めて特に危険のないことを確認すると、豪華絢爛な扉の脇にひっそりと控えた。仗身である自分あまりでしゃばってはいけないと思ったのだろう。

「ほら、何をきよるきよるしてるんだ。こつちだよ、こつち」

紗幕の向こう側の声にせつつかれて、カグワは当惑しつつもベッドの傍へと近付いた。

大の大人が五人くらいは横になって眠られそうなほどの巨大な寝台の横にぐるりと回ると、なるほど、そこには緑色のクッションの敷かれた長椅子が置かれていた。他に座れるような場所もないので、きつと彼の言う「こつち」とはこの椅子のことなのだろうと結論づけて、カグワはゆっくりとそれに腰を下ろす。と、同時に、カップに生姜湯を注ぎ終わったオレークが、カグワの座った長椅子の脇の机にカップを置いた。

「殿下、こちらに??」

「ああ、うん。ありがとう」

簡単な礼を述べた後に、声の主が紗幕を内側から開く。初めて、その少年が姿を見せた。カグワは長椅子に座ったまま、まじまじとその素顔を見つめた。

とても線が細く、色素の薄い少年であった。年の頃は若く、カグワと同じ年かあるいは年下であろうか。流れるような白に近い金髪には癖がなく、肌も透き通るように白い。瞳は水晶のように青く、睫毛が弱々しく震えていた。

少年はゆっくりと置かれたカップを手に取ると、上品な仕草で口へと運ぶ。一口飲んで彼はわずかに眉をひそめると、寝間着らしき白い服の袖で口を押さえた。

「……甘い」

オレークは、彼の小さな呟きも聞き逃さない。

「砂糖を投じましたゆえ……」

「今日はそんな気分じゃない」

「では作り直します」

「……いいよ。めんどくさい」

彼は、付き人だというオレークのことを放って、ベッドの端へと座り直した。開かれた紗幕の間から覗くその青い瞳が、まっすぐカグワのことを捕えて離さない。

「……名前は?」

とてつもなく単純で、短い問いかけであった。カグワは彼の作り出すなんとも妖艶な空気に飲み込まれないようにと気を張りながら、答える。

「かぐわ、よ」

「カグワ……姓はないの?」

「巫女には、必要ないから……あつたのかもしれないけど、忘れてしまったわ」

「へえ、羨ましいな……俺も姓なんて必要ないと思うんだけど、恐



ろしいくらい長い姓があつて」

にこ、と微笑んだその笑みに、息を呑んだ。綺麗な花には刺がある。彼の笑みには毒がある。

「長い、姓……？」

「覚えられないだろうから教えない。人は皆、シルディア皇太子殿下と呼ぶから、それだけ覚えておいて」

「シルディア……」

言われた通りにその名を繰り返すと、ぴくと青年の表情が反応した。彼の顔から毒気が消える。

「……俺、よくわからないんだけど……西の国では皇室と、巫女と。どちらの方が上位なの？」

その詰め寄るような強い口調に、カグワは困惑した。どちら、と問われても、まだ本当に自分が巫女になったのかどうかも怪しい、儀式の途中で抜け出して来たような身で、定かなことは答えられない。なので、通説により今まで教えられて来た通りに答えた。

「西国エウリアでは、皇室と巫女が連立しているの。国政の頂点が皇室なら、信仰の頂点が巫女よ。どちらもが国の象徴で、上下関係はないとされてるわ」

「ふうん……じゃあ、俺とも同等なのかな」

「さあ……それはわからないけど」

「そう……いいね、悪くない」

皇太子シルディアは楽しそうに笑った。再び彼の顔に毒気が戻る。

「シルディア、なんて、久しぶりに呼ばれたよ……いつぶりだろう。もう覚えてないや。……うん、でも、悪くない」

北国ラウグリアは、今やほぼ軍に食われてしまっている。と、教えてくれたのはやはり、最西端の変わり者、ケニー老翁であった。彼いわく、今や政治の権限はほぼ軍が持っているというが、それでもまだかつての帝政を崩してはいないのだという。ゆえに、長年に渡って国を治めてきた皇室よりも地位の高い人間は、このラウグリ

アにはいないのだろう。皇太子である彼のことを、シルディアなどと呼ぶ無作法者などいないに違いない。

「シルディア、じゃあ、今度は私から質問させてもらうけど」

カグワは青年の持つ毒にあてられないよう毅然として、彼の名を呼んだ。カグワにとっては、相手が上位であるとか下位であるとか、そんなことはどうでもいいのだ。そんなことより、現状の説明が欲しい。

「私を、西の国から此処まで呼び寄せたのは、貴方の力なの？」

長椅子から身を乗り出すようにして問うと、シルディアは顔を傾けて、微笑んだ。金色の髪がさらりと揺れる。

「そうだよ。巫女は、西の国で最も『力』の強い存在だと聞いていたけど……大したことはなかったね」

カグワは大きくその目を見開いた。

カグワが思うに、もしもカグワが巫女であるなら、巫女は西の国で最も力の強い存在ではない。例えば一の君ネイティーンの方が巫力は強いはずだし、ひよつとしたら國中搜索すればもっと強い力を持つ人間がいるのかもしれない。しかしながら、今目の前にいるこの青年よりも強い力を持つ人間がいるとは思えなかった。時と空間を同時に操り、遠い他国にいる人間を呼び寄せるほどの『力』など、想像も付かない。??人間業とは思えない。

「……一体、何が目的なの？」

カグワのことを巫女であると知りながら、巫女が西の国では最も強い力を持っていると判断して、その巫女をわざわざ呼び寄せる。宮殿の地下にて、オレークは、「西国がなかなか話し合いにに応じてくれないから、強引に呼び寄せた」と言った。しかし本当に話し合いをしたいのなら、政治のことなどこれっぽっちもわからない巫女なんぞより、国務参謀や内大臣を呼び寄せればいい。なのに、わざわざ巫女を選んで呼び寄せた意図は??何だ?

「さあね……俺にはわからないよ」

シルディアはあっけらかんと答えた。彼は「甘い」と切り捨てた

生姜湯を、すでに飲み干してしまっている。

「そういう難しいことは軍に聞いてくれ」

「私を呼んだのは、貴方でしょう？」

「軍に呼べと言われたからね。??今や皇室はね、木偶なんだよ。自分の意思でなんか動かない。全部軍の言いなりさ」

言って彼が空になったコップを差し出すと、無言でオレークがそれを取りにきた。オレークはなんとも複雑な表情を浮かべながら、コップを片付けた。どうやら、北国ラウグリアが軍に飲み込まれてしまっているというのは、事実らしい。

「だから、その軍の意思に沿って、俺、あんたの力を封じ込めなきゃいけないんだ」

「私の、『力』を……？」

そう、と頷く彼の微笑みは不気味だ。毒気がある。??この毒気は、恐らく彼の持つ『力』だ。相手を自分のペースに巻き込まんとする。

「俺にとっては君の『力』なんてどうってことない。でも、ほとんどの人間は『力』を持たないから、君に勝てない。『力』を利用して君に逃げられては困るらしいんだ」

だから、と言って彼はベッドの上を這うように移動した。そして床の上に降り立って、カグワの前に立つ。線は細いが、すらりと背の高い少年であった。彼はカグワの顔を撫でて、その顎を掴むとくいと上を向けさせた。カグワは自然と彼を見上げる格好となる。

「君の力を封印する。今までできたことができなくなるかもしれないけど、恐れる必要はない。封印を解けば元通りになるし、何より、『力』なんてなくなつて人は生きて行けるんだから」

力、すなわち巫力が使えなくなるということだ。カグワは思わず装束の襟元をきゅつと握り締めた。今までできたこと??先見の技であったり、読心の技であったり、そういった巫力の修行により身につけた技が使えなくなる。とは言え、彼の言うようにそんな力などなくとも、カグワは満足に生きて行けるだろう。だが、しかし。

ふとカグワは目線を逸らして、扉の脇に立つ己の仗身を見つめた。もしも、巫力を封印されたら、彼はどうなるのだろう。彼の獣の心は、カグワの『力』によって封じられている。

「待って！」

今にもカグワの『力』を封印せんと片手を持ち上げたシルディアを、カグワは慌てて制止した。首を横に振って、カグワは「ゆたやが！」と叫ぶ。

「ゆたやが……私の仗身は、私の『力』で獣の性を封じているわ」「獣……？」

「彼は、獣人なの。だから、私の『力』を封印してしまったら、ゆたやが……」

「ふうん……？」

完全ではないカグワの言葉を聞いただけで、その意味を理解したらしいシルディアは、カグワから手を離すとゆっくりと今度は扉脇のユタヤの方へと向かって行った。ユタヤは己に近付いてくるシルディアを見て僅かな驚きを見せたが、それだけだった。微動だにせず、置物のようにその場に立ち尽くす。

何の感情も反映しないその形相を見上げて面白そうに笑ったシルディアは、彼の首に下げられている数珠玉を強く握った。これが彼の獣を封じていると気付いたらしい。ぐいぐいと数珠玉を引くと、ユタヤは怪訝そうな顔をしたが、何も言わなかった。シルディアは「なるほどね」と呟く。

「こつやって封じているわけか……なら、大丈夫。彼の獣も俺の力で封じる」

「え？」

どういうこと、とカグワがその言葉の真意を問うより先に、シルディアの体が動いた。彼は両手のひらでユタヤの数珠玉を握り締めると、くつと何やら力を込める。端から見れば、ただシルディアがユタヤの数珠を軽く引っ張ったとしか思えなかったろう。??しかし、かつてその数珠玉に巫力を込めたカグワにはわかった。数

珠玉が揺れる。そこに込められた己の巫力が解放されていく。そして代わりに、シルディアの『力』で満たされて行くのが、鮮明なほどにわかった。

「うん……これで、問題はない」

ユタヤの数珠玉から手を離れたシルディアはそう呟いて、こちらを振り返った。背筋が粟立つ。彼の絶大な『力』を前に、戦慄が走った。

にっこり微笑んだ彼はゆらゆらとカグワの元へ戻って来て、今度こそとばかりに、彼女の顎を持ち上げ額に手のひらを当てる。もう、抗う術はなかった。抗おうにも抗えない。彼の『力』は、強すぎる。

ぐ、と一瞬額からの圧力を感じた後、それはすぐに終わった。シルディアがふうと息を吐いて、すぐに自分のベッドへと戻る。彼はクッションの上に片手を付くと大きく深呼吸した。たったこれだけの動作で、カグワの『力』は封印されてしまったらしい。

恐る恐る、彼の手のひらの当てられた額を撫でてみたが、体の外側からではよくわからなかった。ただ、なんとなく全身が重い。倦怠感のようなものに覆われていた。

「……これで、もう、君は『力』を使えない」

ベッドの上から、掠れた声がある。彼の方を見やると、それまでも線の細い少年だとは思っていたものの、さらに弱々しく、まるで病人のような顔色をしていた。強大な力の持ち主ではあるが、さすがに二人分の『力』を封じるのは楽ではないらしい。

「その獣人……ユタヤと言ったか。お前もだ。……自由に獣にはなれない」

言われて初めて気付いたように、ユタヤは目を丸くした。彼は己を縛る数珠を握り締めて、それから悲哀に満ちた目でカグワの方を見る。これではカグワのことを護れない、と、彼の考えていることはその目を見ただけで読み取れた。カグワはすでに巫力の技は使えないが、そんなものなくとも、彼の心の内は読み取れた。大丈夫よ、

と彼を安心させるために首を横に振って伝えると、ユタヤは目を伏せる。彼も技など使えないが、カグワの心を面白いくらいに読み取ってくれる。

二人のその無言のやり取りを眺めていたシルディアは小首を傾げ、覇気のない目でちらりとユタヤの方を睥睨した。

「あの男は…… 仗身だと言っていたね。つまり、何、護衛なのか？」

ユタヤを睨んだ瞳で今度はまっすぐとカグワを見つめる。全く覇気のない瞳なのに、不思議な威圧感を感じた。

「そうよ…… 巫女には必ず護衛として仗身が付くの。そしてそれは獣人と決まっている」

「それで、巫女は獣の性を封じるのか……」

なるほど、と呟いた彼は首の裏をかいて、ころりとベッドの上に横になった。どうやら体は疲弊しきっているようだ。

「俺にとつてのオレークみたいなものかと思っただけど、違うみたいだね。オレークは付き人だからなんでもやってくれるけど……ただの付き人だから縛られることもない」

縛られる、というその言葉の響きが気になった。カグワは彼の獣を封じているだけで縛っているつもりなど毛頭なかったが、結果的には束縛しているようなものなのかもしれない。

「……殿下、今日は、もう」

今までユタヤ同様貝のように押し黙っていたオレークが、此処で初めて口を開いた。彼は疲弊しきったシルディアを案ずるように「これ以上は」という。するとシルディアもそれに反発することなくベッドの上に転がったまま頷いた。

「そうだな…… さすがに疲れた。??二人を部屋へ案内して」

「はい」

オレークはシルディアのいる寝台に向かって軽く頭を下げて、それから出口の扉へと向かった。巨大な扉を引いて、今度はカグワの方へと頭を下げる。もう部屋を出なくてはならないのだと悟って、

カグワは立ち上がった。ベッドを囲む紗幕が閉じられ、もうシルディアの姿は見えない。

「ああ、そうだ、それと、一つ」

部屋から出ようと出口に向かうカグワの背に、紗幕の向こう側から声がする。弱々しいが、はっきりと響く声だった。

「本当は巫女一人を呼ぶ予定だったから、部屋は一つしか用意していない。欲しいようならもう一部屋用意させるけど、皇室と連立するほど高位な巫女と、その護衛を並べて部屋を用意させることはできない。必然的に距離が離れてしまうけど、どうだろうか？」

カグワは眉間に皺を寄せる。何故か、試されているような気がした。

「???部屋は一つでいいわ。西の国では同じ屋根の下にいたから」  
西の国、エウリアの後宮では、確かに二人は同じ三の宮の屋根の下にいた。しかし、当然ながらカグワには聖女の部屋があり、ユタヤには仗身の部屋があったわけで、同じ部屋に共存していたわけではない。だが、この見知らぬ北の地で離ればなれになるには不安が多すぎた。故に、部屋は一つでいいと言い切った。

そんなカグワの決断を知ってか知らずか、「そう」とシルディアは端的に答えた。それきり、何も言わなかった。

こちらへ、とオレークがカグワを外へと誘導する。カグワは去り際にちらりと皇太子殿下の寝ているであろう寝台を一瞥した。が、紗幕に遮られ、何も見えない。カグワはそれきり彼のことを振り返らなかつた。生まれて初めて巫力を封じられ、倦怠感のみが残った。

## 7、北国の朝食

空を見上げる。雲行きが怪しい。今にも崩れ落ちそうな曇天の下、歩く人間は寒そうに肩を震わせる。

暦でいうと、今はまだ秋である。西国エウリアの後宮では、秋とは涼しく心地の良い季節であった。作物が実り、新鮮な食物に溢れる。甘い果実を口に運びながらひなたぼっこのできる、そんな季節であった。

しかしながら、此処、北国ラウグリアにはそのような心地の良い秋が来ない。王宮の二重に仕切られた窓ガラスは、外から流れ込む寒気を防ぐためのものだという。今はまだ秋だから良いが、これから訪れる長い冬は、分厚い外套を纏ったとて凍え死ぬ。守られた王宮の中は良いが、毎年貧しい民の中からは雪に埋もれて凍死する被害が続出するのだそうだ。

「……だから、北の民は軍人になるのかしら」

冷えきった硝子製の窓に手のひらを乗せて、カグワはぽつりと呟いた。暖炉脇に座っていた仗身が顔をあげて、「はい？」と聞き返してくる。カグワは「大したことじゃないから」と首を振って窓を離れた。自分の触れていたところにくつきりと手形が残った。

カグワとユタヤが時空の狭間を抜けてこの北国に来てから、今日で五日が経とうとしていた。

二人に与えられた部屋は皇太子シルディアの物ほどではないが、恐ろしく絢爛であり広く、女中や小間使いが度々現れ身の回りの世話は全て行ってくれた。「逃げられては困る」という理由で巫力を封じられたにも関わらず、皇家のために造られたというこの皇宮の中であれば自由に動くことを許されており、初めて北国に来た時のように扉に呪いがかけられていることもなかった。

暖炉の火で暖を取り、美味な北の料理をもてなされ、何をしてもいいと許容される。何一つ不自由のない生活であったが、未だに力



グワは最初にシルディアと出会って少し話をした以外に、一人の北の要人とも話をしていない。「西の国と話し合いをするためにお呼びした」と言ったのはオレークだ。だが、ならばどうして、此処に来て五日も経った今でも、軍人の一人も現れないのだろう。

「こんこん、と扉を叩く音がして、続いて「失礼します」と若い少年の声が出た。「どうぞ」とカグワの告げた後に部屋に入ってきたのは、小間使いの少年だ。どうやら彼はカグワの世話全般を担当しているらしく、何かとカグワたちの部屋に来ては食事の用意や掃除、その他何でも行ってくれた。

「朝食の用意ができましたので」

少年はそう告げて、銀色のワゴンに積んで来た食事を机に並べ始めた。空は一面曇天であるが、そろそろ朝日も高く昇って行く頃だ。

カグワは小間使いに「ありがとう」と短い謝礼を述べると、彼の作業の邪魔にならないようにと部屋の端に避ける。同じく部屋の端、暖炉の傍にどっかり腰掛けていたユタヤの隣にちょこんと座ると、膝を抱え、慣れた仕草で彼の肩に寄りかかった。ユタヤもユタヤで慣れたもので、今更カグワが全体重をかけてきたとて何も言わない。どっしりとあぐらをかいたまま、小間使いが忙しく働くのを見つめていた。

「……もう、此処にきて、五日になるわね」

体重をユタヤに預けたままの体勢で呟くと、彼は「はい」と小さく頷く。

「エウリアは……西の国は、今頃どうなっているのかしら」

続けて呟いたカグワの言葉に、ユタヤは何も答えなかった。答えられなかったのだらう。なにしろこの皇宮から出られない閉鎖的な状況で、今の二人には情報源がない。

エウリアからこの北の国まで飛ばされたあの日、カグワは巫女選定の儀式の中にいた。儀式は最中であった。まだ終わってはいない。カグワのいなくなった儀式の間は、あの後どうなったのだらうか。

カグワが儀式の中で最後に見たのは、水鏡の中から浮かび上がった謎の光の玉であった。それがカグワの手の中へと落ちて、その次の瞬間にはこの北の国まで飛ばされてしまった。ゆえに、カグワが巫女であるという確証はまだない。本当はあの後まだ別の選定の儀式があつて、今頃カグワのいない西の国では別の聖女が巫女として選ばれているのかもしれない。だとしたら、北の国は西の巫女を呼び出したつもりで何の変哲もないただの少女を呼び出したということになる。西の国では今頃新しい王が起ち、新しい巫女も決まり、祝祭が催されているのかもしれない。誰も、カグワのことなど気にも留めていないのかもしれない。

??それならそれでもいい、とカグワは思った。

カグワがいなくなつたことで西の国が混乱に陥っているよりは、ずっといい。変わり者の聖女だとずつと言われて育つたが、他人に迷惑をかけたかと思ひそうしていたわけではなかつた。変わり者は自分だけでいい。誰にも迷惑などかけずに自由に生きるのだと。

「??準備が整いましたので、冷めないうちに」

机上に料理を並べ終えた小間使いが言った。物思いにふけていたカグワは我に返つてユタヤに預けていた体重を起こして立ち上がる。一人で使うには大きすぎる広い机の上に、やはり一人で食べるには多すぎる量の料理が並べられていた。

「ありがとう」

謝礼を言つと、言われた小間使いは照れたように笑つた。??彼は普段、皇室の世話をしているのだという。しかし、北ラウグリアの皇室の人間は、小間使いに礼など言わない。ゆえに初めてカグワに謝礼を言われた時にはぼかんとしていた。「ありがとうなんてお礼を頂けたのは初めてです」と。

小間使いの引いてくれた椅子に座つてユタヤの方を見やると、彼も無言で暖炉の脇から立ち上がった。それは、一緒に食べようという合図だ。ユタヤは無言のまま、カグワと対面する椅子に座つた。

初めて小間使いがこの部屋に来た時、彼は大層驚いていたもので

あつた。なんでも、上からは「部屋には西の巫女が一人いらつしやる」としか伝えられていなかったらしい。そのため彼は、巫女らしき少女の傍に、謎の数珠玉をかけた男が控えていたことに愕然としていた。そして恐らくそれは、皇太子シルディアの配慮だろう。

シルディアは、カグワをこの部屋に案内するに当たって、言った。「本当は巫女一人を呼ぶ予定だったから、部屋は一つしか用意していない」。もしもユタヤに部屋を用意するとなると、位の低い仗身ゆえに巫女や皇室の住まう皇宮には置けないがそれでも良いか、としかしカグワはこの見知らぬ場所で彼と離ればなれになることを不安に感じ、部屋は一つでいいと答えた。シルディアはそれを承諾した。??シルディアは、ユタヤのことを他に伝えなかったのだろう。もし伝えてしまったら、皇室のしきたりに倣ってユタヤは部屋から追い出されてしまうから。

なので、今のところカグワの部屋にユタヤがいることは、カグワとシルディアと付き人のオレーク、そしてこの小間使いしか知らない。それでもきちんと二人分以上の料理を持って来てくれるのは、この小間使いの心配りだ。

「お食事が終わりましたら、また食器を片付けに参りますので」  
小間使いは言つて、頭を下げた。そして慣例通り去つていこうとする彼に、カグワは「待つて」と言つて声をかける。「はい？」と振り返つたその顔はとても純朴だ。??カグワはまだ出会つて五日しか経つていないこの若い小間使いをととも気に入っていた。彼は屈託なくいろいろなことを話してくれる。だが、皇室のしきたりを遵守して、仕事が終わるとすぐに帰つてしまふのでとても残念に思つていたので。

ゆえに、

「せつかくなら、一緒に朝食をとつていかない？」

少しでも話をしようではないかと思ひ、誘つてみた。すると、小間使いの目がみるみるうちに見開かれていく。彼は慌てて首を横に振つた。

「……め、滅相もございません！ わたくしごとき小間使いが、巫女様と同座するなど……！」

これも、北ラウグリア国の皇室での慣習なのだろう。皇室の人間と小間使いの間には確かな位の差があつて、それは同席すら許されないほど過大なものなのである。

とは言え、考えてもみれば西エウリア国でも、聖女たちとその女中たちは決して同じ席で食事などしなかった。しないことが慣例とされていた。それは女中だけでなく当然仗身にも言えることで、カグワの他に、気軽に自分の仗身や女中と食事をしたり会話をしたり、身分を越えた接し方をする聖女はいなかった。なので、カグワが異端なのだと言つてしまえばそれだけのことである。此処がエウリアであれば無理を通して同席させるのであるが、生憎此処は他国だ。あまり無理強いはよくないなと思ひ直して、カグワは俯いた。

「そう……残念だわ」

身分など気にせずに、多勢で囲む食卓の方が幾分にも楽しいと、カグワはそう思っているのだが。カグワが楽しくとも、気を遣いながらとる食事は彼らにとつては美味しくないのかもしれない。ならば、やはり無理強いしても仕方がない。

「わたくしどもは、朝早くから仕事がありますから、その前に朝食を取っておりますし」

カグワの残念そうな顔を見て、小間使いは困つたように付け足した。カグワは「そっか」と言つて笑う。あまり困らせてしまつたらそれはそれで可哀想だ。

まあしょうがないなと考え直して「おかしなことを言つてごめんなさい」とカグワは小間使いに謝ろうとすると、彼女が口を開くより先に、その言葉を遮つたのは対角に座る仗身であった。

「??? 食事は取らずとも、一緒に茶くらい飲んで行けばいいだろう」

その低い声色に、小間使いは驚いたように身を震わせる。そういえば、小間使いのいる前でユタヤがこうもしっかり口を開いたのは

初めてであった。ユタヤはカグワと二人きりの時こそ積極的に声を発するが、そうでない時は発言を控えて、必要な時以外は口を出さない。

「身分がどうか言うのなら、私がこうして巫女君と同席していることも妙だ。??折角、巫女君が会食をご所望なのだ。仕事がたてこんでいるならまだしも、我々が食べ終わるのを待つだけなら座っていけ」

「はあ……」

小間使いは目をぱちくりさせた。謎の「仗身」と名乗る男が突然口を開いたかと思えば随分と強引な誘いをしてくるのだから、驚いて当然だろう。

そしてそこまで言われたら断るわけにもいかない小間使いは、空いていた椅子をひいてちよこんと座ると、「では、お言葉に甘えて」と戸惑うように笑った。その様子を見て、カグワは思わず噴き出す。

「そんな無理矢理付き合わせたら可哀想よ、ゆたやあ。彼もひよつとしたら休みたいかもしれないし」

もとはと言えば自分が誘ったわけであるが、ユタヤの強引さ思わず同情した。「ねえ？」と声をかけると小間使いは「いえ、大丈夫です」と首を振る。向かいに座るユタヤは「しかし……」と言いよどんでしゅんとした。彼としてはカグワを思っていたことだったのだろう。昔からカグワが出会った全ての人々と親しくしたがることは彼もよく知っている。

そんなユタヤと笑っているカグワを見比べて、小間使いは両者を気遣うように「まあ」と口を開いた。

「私のお仕事は、巫女君をおもてなしすることですから、私などが同座してご気分を害されることがないのであれば、むしろ本望です??どうぞ、料理の冷めぬうちに召し上がってくださいまし」

少年は、とても大人びた配慮をする。カグワは「そうね」と笑った。せつかく彼の用意してくれた料理が冷たくなってしまっ

つたいない。

カグワは銀のフォークを握り締めて皇室の物と同じだという豪華な料理を食べ始めた。それを見て、ユタヤもほっとしたようにフォークを手に取る。にこと笑った小間使いの少年は、二人の邪魔にならないようにとユタヤに言われた通り自分の分のお茶を入れた。そういった細やかな気遣いから、さすがに皇室の小間使いだなと思う。

「ところで、貴方の名前を聞いてなかったわね。お名前は？」

今まで彼とは本当に最低限の世間話しかしなかったために、まだ名前すら聞いていなかった。聞かれた少年は、嬉しそうに微笑んだ。

「ユーリ・マルコフと申します。よろしくおねがいします」

ユーリはカグワやユタヤの食事の速さに合わせてゆっくりとカッパを傾けながら、カグワの話に付き合ってくれた。西の国の後宮の中で囲われて育ったカグワにはわからないこと、聞きたいことが山のようにあった。恐らく外の世界で育ったユーリにとってはあまりにも当たり前すぎて、答えるのも面倒な質問ばかりであったに違いない。しかしユーリは嫌な顔一つせずに、カグワの会話に付き合ってくれた。

「ユーリはいつからこの宮殿で働いているの？」

「生まれた時から……生まれた時より働いていたわけではありませんが、私は生まれた時から皇家のお世話をするために育てられました。ラウグリアでは、皇室付きの小間使いは代々世襲と決まっています。ですので、私の父もそのまた父も、ずっと小間使いをしておりました」

「ふうん……じゃあ宮殿の中にはユーリみたいな小間使いがたくさんいるのね」

「そうですね……ですが、皇家の小間使いと一口に言っても、

その役割は様々です。例えば私は、カグワ様のような皇家の賓客をもてなすことが役割です。他にも食事をつくるために厨房にいる者もおりますし、宮殿の掃除を専門にする者もおります。そして出世すれば、皇家の付き人になることも」

「付き人……？　じゃあ、オレークは出世したってということ？」

カグワは皇太子シルディアの付き人をしているという青年を思い浮かべた。まだ若いように見えたが、皇太子の付き人をしているということとはかなりの出世頭なのではないだろうか。

「はい。オレーク・ナイザーはまさに一番の出世頭ですね。もともとは私と同じ賓客のおもてなしをしていたんです」

「へえ。なら、オレークとは知り合い？」

「知り合いも何も、私にとっては兄貴分でした。突然の出世に驚愕していたことを、今でもよく覚えております」

ふうん、と呟いてカグワは白いロールパンを口に含んだ。だから、ユーリが自分の小間使いとして選ばれたのかもしれないと、カグワはぼんやり思った。皇太子の付き人であるオレークの弟分ということとは、それだけ皇太子からの信任も厚いということだ。例えばカグワが部屋に自分の仗身を隠して置いておいたとしても、目を瞑ってくれるわけである。

「皇太子殿下の付き人だものね……皇太子殿下は、皇家の中でもやつぱり、地位の高い方なのでしょう？」

「それはもちろん。……本来は皇帝陛下が君主としてこの国を統治するわけですが、現在ラウグリアの皇帝陛下は病に臥せっておりますから……実際、統治しておられるのはその第一子であるシルディア殿下です」

「まあ、そうなの？　じゃあ、私はシルディアと話し合いをすればいいのかしら？」

「話し合い？」

「ええ、そう。突然私がラウグリアに呼ばれたのは、西国の要人と話し合いがしたいからだって、聞いたから……今、実権を握ってい

るのはシルディアなんでしょう?」

「ああ、なるほど……。では恐らくそれは、殿下ではなく、将軍ではないかと」

「将軍?」

「はい。確かに国土を統治するのは皇室の役目ですが、今ラウグリアの国政の実権を握っているのは軍です。その長となるのが、将軍ですから」

ふわふわに焼かれた卵を食べながら、カグワは西国でケニー老翁に聞いた話を思い出した。??ラウグリアは今や、軍隊に食われてしまっている。

「聞いたことがあるわ……。昔、ラウグリアは貴族の支配する国だったんだって。今は軍人の支配下だけれど」

「そうですね。今から二十年近く昔のことです。軍が力を持ち出し、ラウグリアはずっと戦を続けております。東の国を占拠せんとして」

「戦……」

カグワは一度も戦というものを実際に目で見たことがない。ただ、それはたくさん罪のない人々の命を奪うそれはそれは凄惨な行為なのだ、知識のみで知っていた。もしも聖女に選ばれることなく、もしも今尚東の国にいたならば、カグワもまた、その戦の業火に焼かれていたのかもしれない。カグワは遠い東の地を想った。??それから、今やカグワにとって紛いなき故郷である西の国を想う。

「やっぱり……。北ラウグリアは、西エウリア国とも戦をするつもりなのかしら」

とても不吉な予感が走った。

カグワが突然時空の狭間を突き抜けてこの北の国へ呼ばれた真意は、一体何なのだろう。本当に巫女と話し合いをしたかったというだけならば、その旨を西国に伝えればいい。わざわざこのような強引な手段を取る必要などなかったのではないか。それに、話し合い



をしたいと言いながら、カグワはこの五日間この部屋から出ることを  
さえないではないか。??北国の意図がわからない。

そんなカグワの心を読み取ったのか、ユーリは困り果てたように  
目線を伏せた。

「軍の考えることは……私にはわかって術もありません。ただ……」

少年は一度言葉を切って、やがて強い眼差しで窓の外を睨みつけ  
た。その目の先には外の景色ではない、何か別のものが映っている。

「軍は軍のみの力ではなにも成し遂げることができません。やつら  
は、皇太子殿下の『力』を利用しているのです。??やつらは、殿  
下がいなければ、何もできない」

『力』、とカグワは小さく繰り返した。

確かに、シルディアの『力』は絶大であった。カグワを西の地か  
ら此処まで召還したこともそうだ。カグワの巫力や、ユタヤの獣の  
心を同時に封印していることもそうだ。ここまで圧倒的な『力』の  
強さを見せつけられると、今まで自分が何年も行って来た巫力の修  
行とは一体何だったのだろうかと思ってしまう。きつとこれから一  
生巫力の修行を続けたとて、彼には到底追いつけまい。

そんなことを思いながらカグワがフルーツにフォークを伸ばした  
のと、金の装飾の施された立派な扉が外側からこんこんとノックさ  
れたのは、ほぼ同時であった。

「??オレークです。巫女君、失礼してもよろしいでしょうか」

噂をすればなんとやら、である。シルディアと会ったのも五日前  
のあの一度きりならば、彼の付き人であるオレークとも五日ぶりだ  
であった。

さほど昔のことではないけれども、久しぶりだなと思いつながらカ  
グワは「どうぞ」と軽く声をかけた。隣に座っていたユーリが何故  
だかとても焦っている。オレークは兄貴分だとその親しさを告白し  
たわりに、どうして彼に怯えるような素振りを見せるのだろうか

カグワが不思議に思った時にはすでに、「失礼します」という声とともにオレークが扉を開いて中に入って来ていた。

相変わらぬ茶色の癖毛を持つ彼は、「巫女君」とまずカグワに声をかけてから、そこにいるユーリに気付いたように目を丸くした。

「ユーリ、お前……何をしている？」

「え、あ、の、これは、その……」

オレークを見上げたまま言葉に困窮しているユーリと、そんなユーリを険しい顔で睨みつけるオレークを見て、カグワはようやく理解した。??ここ北ラウグリアでは、皇家の人間と小間使いが同じ机に付くことなど有り得ないのだ。そして巫女は皇家と同位なのである。

「違うのよ、オレーク。私が一緒にお茶でもどう？　って誘ったの」

こんなことでユーリが叱られてはあまりにも可哀想だと、カグワは彼のことを庇った。それでも「しかし」と険しい顔をするオレークは、生粋の皇室に使える小間使いなのだろう。小間使いは世襲だと言うからには、オレークも生まれた時から身分をわきまえると叩き込まれて育ったに違いない。カグワは重い空気を払拭するために肩を竦めた。

「ユーリは断ったのよ。でもゆたやがね、巫女と食べる朝食はまずいだけでもいいのか無礼者って脅すから、仕方なく座ってるの。許してあげて？」

「……私はそこまで申しておりません」

人前では滅多にカグワの言葉に口を挟まないユタヤが、ぶすつとした顔でぼやいた。堪らず、ユーリが嘔き出す。オレークはますます険しい顔で「ユーリ」と諷めた。カグワはこの場を和ませようと思っただが、逆効果だったようである。

「オレーク、ごめんなさいってば」

ここは素直に謝っておこうとユーリの兄貴分だというその青年に

向かって手のひらを組んでみせると、オレークはたちまち困惑した表情を浮かべた。おそらく北国の皇家には、目下の人間に対してこつもぎつくばらんに話す者などいないのだろう。

「……まあ、西には西の文化がありましよう。少々北のしきたりにこだわらずぎていたようです。私の方こそ取り乱してしまい申し訳ございません」

オレークはカグワのぎつくばらんさを西の文化と理解したらしく、軽く頭を下げた。これで食事の席に同座したユーリも叱られることはあるまい。実のところは西の国でもカグワ以外の聖女であれば小間使いが同座など考えられないのであるが、まあそれは黙っておこう。

「話が逸れてしまった……。巫女君、本題でございますが」

オレークは思い出したようにきりと姿勢をただすと、食卓に座っているカグワの傍に膝をついて頭を下げた。徹底して礼儀を尽くす男である。

「シルディア殿下が巫女君とお話したいと申しております。今すぐにといいわけではございませんが、今日中にお時間を頂ければと思います」

「そんなの、いつでも構わないけど……」

と、言うよりも、他にやることもない。毎日部屋の中でぼんやりと西の国を想っているだけなのだから、時間などいくらでも有り余っているというものだ。

「では、お食事が終わりました、準備が整いましたら、そのユーリを使って私めにご連絡ください」

お食事中に失礼致しました、と深々頭を下げて、オレークは要件だけ告げると早々に部屋を出て行った。カグワはその後ろ姿を目で追う。彼はこれから主である皇太子シルディアの元へ戻るのだろうか。その行き先はわからない。

なににせよ、これでようやく「話し合い」とやらができるかと少々安堵した。ユーリは「話し合いを求めているのは皇太子殿下ではな

く將軍だ」と言っただけでも、カグワは今のところ將軍はおるか軍人の一人にも会っていない。会うのは皇室の人間とその小間使いばかりだ。

早く用事を済ませて西の国に帰ることができれば良い。西の国がどうなっているのか、途中で抜け出してしまった巫女選定の儀式がどうなったのか、気になることは山ほどあった。

少女は依然、自分の置かれた状況が緊迫していることに、気付いていない。

## 8、人質の巫女

食事が終わると、ユーリが机の上を綺麗に片付け銀のトレーを使って食器類を全て持ち帰ってくれた。

「お話できて楽しかったです」と社交辞令かもしれない感想を述べてにこりと笑った彼が部屋を去り、オレークに連絡をしてくれたかなと思う頃になって、数人の女中が部屋へやってきた。なんでも皇太子殿下に謁見するからということ、正装のドレスを用意してくれたらしい。北国の正装服は、西国のそれと比べて分厚く暖かったが、とても重かった。

その後再びユーリが戻って来て、きちんとカグワの準備が整ったことを確認すると、ようやくオレークが現れた。そして、シルディア殿下に会いに行くという。皇太子殿下に謁見するには、本来なかなか面倒な準備が必要らしい。

オレークに連れられ、カグワとユタヤはひたすら階段を下った。もともと二人にあてがわれた部屋は最上階にあつたため、どこに行くにしても下らなくてはならない。

冷たい石塔の階段をひたすら下った後、二人は中庭を通り抜ける外の通路へと案内された。

「一瞬ですが外へ出ますゆえ……寒気にお気をつけて」

静かなオレークの忠告通り、外の空気は本当に冷たかった。西国で味わう真冬と同等の寒さではないかと思う。思わずカグワが身を震わせると、ユタヤが気遣うように己の羽織っていたマントを差し出した。「一瞬だから大丈夫」と断るが、彼は無言でカグワにそのマントを被せた。

そんな二人のやり取りを見て、くすと笑ったのは前を歩くオレークである。彼は霜柱の立った地面をしゃりしゃりと踏みしめながら、前を向いた。

「今はまだ秋ですから、さほど大した寒さではありません。……こ

れから訪れる冬は、こんなものではないですよ」

そう言っただけを歩くオレークは、大した装備もしていないのに毅然として、寒さを感じさせない。この程度の寒さなどどうということもないと言わんばかりに、堂々としている。カグワはユタヤのくれたマントの前をたぐりよせてしっかりと防寒しながら、冷たく灰色に染まった空を見上げた。

「……北国ならではの苦勞があるわね」

「……いかにも」

「だから、気候の暖かい東国と戦をしたの？」

直裁すぎる問いかけをすると、オレークは俄には何も答えなかった。カグワも返答を期待して投げかけたわけではない。ただ、この冷たい空気の中に晒されて、戦火にも晒される民を哀れに思っただけのことである。

オレークはそんなカグワの内情を知ってか知らずか、しばらくその問いかけについて考え込んだ後、小さく呟いた。

「私どもには……軍の考えることはわかりかねます」

それは先ほど朝食の席でユーリと話をしていた際にも聞いた言葉だ。彼らは揃って言葉を濁す。皇室の中には軍の意図など本当に読めないのかもしれないし、読めても本望ではないのかもしれない。あるいは、単に言葉を濁しているのか、カグワには判断し難いところであるが。

「今、この国は軍が仕切っているのだものね。……私、てつきり謁見するなら将軍が相手なのだと思っていたわ」

「将軍が？」

「さつきユーリに聞いたの。西国に話し合いを求めたのは皇室ではなくて軍だろう、って。だから謁見するならシルディアじゃなくて将軍が相手だった」

「……ユーリはそんなことまで話したのですか」

言っただけオレークが渋い顔をする。それを見て、しまった、とカグワは口を押さえた。ひょっとしてこれは聞いてはいけないことだっ

たのだろうか。少女は「私が聞いたのよ」と慌てて付け足そうと口を開いたが、それより先にオレークが口を開いたために言葉を飲み込む。

「恐らく……ユーリの言う通りでしょう」

「え？」

飲み込んだ言葉の代わりに、間の抜けた声が出た。前を歩く男は振り返らないため、その表情が見えない。ただ淡々と寒空の下を進み、中庭を通り抜けた先にある石造りの建物の扉を開いた。きい、と錆びた金属の音がする。

「シルディア殿下とのご面会という口実で、巫女君をお呼びしましたが……謁見の場には、將軍も列席するものと思われます」

「……そうなの？」

どうぞ、と開いた扉を押さえてオレークが建物の中へと誘導してくれるので、石段を上がって中へと足を踏み入れた。途端、温かな空気に包まれる。室内外の温度差が激しい。

「巫女君をこうして北国までお呼びしたこと自体そもそも殿下のお考えではない。軍からの要望ですから……巫女君にお話があるのも殿下ではなく、軍の方でしょう」

「なら、最初から將軍の謁見だと言えばいいのに。どうしてシルディアを挟むのよ」

「それは、巫女君の御力を恐れてのことではないかと」

「私の、力……？」

「西国では巫力と呼ぶのでしたか……將軍も微力ながら『力』の持ち主ではあります。が、巫女君には及ぶべくもない。そこで、巫女様の『力』の干渉を防ぐために、間に殿下を置いて面会するつもりではないかと」

「將軍も『力』を持っているの？」

「ええ……。ここ北ラウグリアでは、軍の司令部のほとんどは多かれ少なかれ『力』を保持しています」

「へえ……。だったら軍の司令部だけで面会すればいいのにね。だ

つて私は今、巫力を封じられているんだもの。どう考えたって、司令部全員で来られたら勝てっこないわよ」

「それは……どうでしょう。巫女君は今、『力』を封じられているとは言え、それはすなわち『力』を発揮して使えない状態にしているだけのこと。保持していることに変わりはありません。強大な『力』を持つ人間は、『力』ゆえに周囲に影響を及ぼす。……周りの凡人どもは、『力』にあてられてしまうのです」

「あてられる？ 毒みたいな言い方をするのね」

「あながち間違いではないでしょう。……かくいう私も、殿下の力にあてられっぱなしだ」

言つて、オレークはふんと自嘲するように笑う。シルディアの顔を思い浮かべて、カグワもなんとなく「『力』にあてられる」という意味がわかったような気がした。

シルディアと出会って話をした時、カグワは何度も背筋がぞつとするような、妙な「毒気」を覚えた。彼が喋るたび、彼が表情を変えるたび、ぞつとする。なのに目が離せず、言葉に聞き入ってしまったのだ。カグワは毅然と姿勢を正してその毒気に太刀打ちせんと気張ったが、これで全く巫力を持たない凡人であつたなら、気張ることもできずに飲み込まれていたのかもしれない。とは言え、シルディアと同じく『力』を持つカグワにも、あんな「毒気」があるとはとても思えないのだが。

カグワは前を歩くすらりと背の高いその長身を見上げた。まっすぐと上品なその姿勢にも現れているように、この男は礼儀正しく律儀だ。シルディア殿下の付き人に任命されてから、ずっと彼に尽くしてきたのだろう。『力』にあてられても致し方ないというやつだ。

「オレークは……」

「はい」

「何年くらい、シルディアの付き人をしているの？」

「……は」



「最初からずっとシルディアの付き人をしていたわけじゃないんでしょう？ 殿下の付き人に任命された時はそれはそれは驚愕していたって、ユーリが……」

「ユーリが？」

あ、とカグワは口を嚙む。また余計なことを言ってしまっただろうか。

「私が根掘り葉掘り聞いたから。ユーリも無視するわけにはいかなことから教えてくれただけで……！」

カグワが慌てて補足し彼のことを庇うと、オレークはわずかにこちらを振り向いて、柔らかい微笑みを浮かべた。くす、とまるで子供を慈しむような笑いである。

「別段……ユーリを怒っているわけではありませんよ。どうぞご安心を」

「そうなの……？」

「ええ……ただ、巫女君は変わっておられるなと」

「……よく言われるわ」

変わり者の聖女、とは後宮でのカグワの呼び名であった。自身では変わっているつもりはなくとも、周囲はそう言う。西国でもそうなら、北国でも同じだ。

「私はかれこれ三年ほど、殿下の付き人、すなわち世話役をしております。短くとも長い月日を殿下とともに過ごしてまいりました。

西国一の『力』の使い手、巫女がくると聞いて……私は、てっきり殿下のような御仁が来られるのだと思っておりました。ですが……」

言いながら、オレークは白磁の階段をのぼる。きらびやかな内装の先に、巨大な扉が見えた。扉の脇には兵士が二人、その中を警備するように立っている。??恐らくは、あの先が謁見の間だ。

「ですが、巫女君の『力』は、毒というよりも……まるで日光のようだ。眩しさに目がくらみ、その暖かさに油断して服もなにもかも脱ぎ捨てて裸になってしまおうような……実のところは、毒よりも恐

ろしいかもしれない、不思議な『力』であります」

「……」

ありがとうと喜ばいいのか、心外だと怒ればいいのか、どうしているのかわからず、カグワは口を閉ざした。

そうこうしている間に、謁見の間の入り口と思われる扉の前へと辿り着き、オレークがくるりとこちらを振り返って深々と頭を下げた。

「こちらに?? 殿下がお待ちです」

言われて足を止め、カグワはその高い扉を見上げた。重々しい風体のその先に、シルディアと将軍がいる。自分が今、西の国を背負っているのだと思うと、緊張よりも寒気がした。それがこの北国の冷気が原因でないことは、明確である。

「巫女以外は中に入る事は許可されておりません」とオレークに言われ、入り口の扉の前でユタヤとは分かれた。この知らぬ土地で彼を一人にすることをカグワは恐れていたが、オレークと一緒に待機するなら大丈夫だろうと根拠もなく安心した。最初にユタヤがカグワの仗身であると、獣人であると気付いたのはオレークだ。彼なら、ユタヤを獣人であるという理由で差別し害することもないだろうと思った。ユタヤはユタヤでカグワを一人にすることを案じているようであったが、「私は大丈夫よ」と微笑んで、彼に借りたマントを返すと、さすがに謁見の間に来ていくことは憚られたのか、頷いた。彼と分かれて開いたその扉の先は、外観からの期待を裏切らず、豪勢なものであった。

広く縦に長いこの部屋は、普段はダンスホールにでも使われているのだろうかというほどに天井が高く、音が反響する。天窓からきらりと冬の日差しが差し込み、白い床を照らした。その白い床の続く先に、一段高い場所がある。??玉座だ。金色に光る巨大な玉座に、一人の少年が腰掛けていた。

「エウリア君主国の巫女君……どうぞ玉座の前へ」

そう言ったのは、少年の横、玉座の横に控えた中年の男である。玉座の隣にいるためであろう、帯刀はしていないが、そのがっしりとした体格から軍人であることが予想できた。恐らくきつとこの中年の男が、將軍だ。

カグワは將軍と思われる男の言葉に従って、長く玉座へと続く白の床の上を、まっすぐ歩いて行った。一歩歩くたびに、履いている靴が床とぶつかりコツコツ音を立てる。音は高い天井へと反響し、謁見の間の中に響き渡った。

しかし言われた通りに玉座の前までやってきて、そこに座る少年と、控える將軍らしき男の顔を見て、カグワは次に何をすればいいのかわからなかった。巫女の予備軍として育てられた聖女たちには、他国の君主に対する礼儀作法など教えられなかったのである。巫女はエウリアの中では最も神に近い存在だ。誰かに謁見されることはあっても、誰かに謁見することなどない。

そんなカグワの動揺を見抜いて、「作法などよい」と言ったのは、玉座に座った少年であった。

「余と巫女は同位じゃ。本来、玉座から見下ろすものでもない。が、今回はこれしか用意できなかった。非礼を許してほしい」

カグワは大きく目を見開いて、その少年を見つめた。

これが、あのベッドの上に寝転がっていた色素の薄いシルディアだろうか。あの時は寝間着を着ていて、今は正装をしているから、風体からして雰囲気が違うのかもしれない。だが、それにしてもあまりにも違う。別人のようだ。

「余は、ラウグリア帝国の君主である、セベプ・ラウグリア・オグロミニイ・エルヴァ・ダル・ラプソディアの第一子、シルディアという」

その長過ぎる名前にカグワは目をぱちくりさせる。そういえば初めて会った時、シルディアは「長過ぎて覚えられないだろうから名乗らない」と言った。確かに名乗られたところで、到底覚えられそ

うにはなかった。

「そして、そこに控えるのが我が国の兵卒をまとめる、スターリン  
將軍じゃ」

脇に控えていた中年の男は、やはり將軍であつた。彼は膝をついたままカグワの方を向いて、深々と叩頭した。

「今回の要件は、全てスターリンの方から説明する。??スターリン」

叩頭したまま、「は」と短く答えて顔をあげたその男は、いかにも武將らしい屈強な体と、屈強な体に見合った厳つい顔をしていた。しかし、それでもシルディアほどの覇気が感じられないのは、保有する『力』の差なのだろう。シルディアはまだ二十にも満たない若い少年でありながら、武將になど負けない強い覇気を放っていた。

「??まずは、巫女君においては、このような極寒の北の地まではるばる御足労頂いたことに御礼申し上げます」

スターリン將軍は渋い声で言い放ち、再び頭を下げた。カグワはそれを見下ろして首を竦める。

「御足労っていうか……ほとんど強制連行だつたけれどもね」

カグワには北国行きを引き受けた覚えなどない。天災かなにかと混乱の生じる中で旋風に乗って飛ばされてきただけだ。

「手荒な手段を取ったことは誠に申し訳なく存じております。ですが、こうでもしなくては、エウリアの国とは対等に話もできそうになかつたのです」

「それは一体……どういうこと?」

西の国と話し合いがたくてカグワを呼んだ、と、カグワは此処に来てから何度も聞かされた。しかし、では一体何を話し合えばいいのか、具体的な内容については何も聞かされていない。それどころか、カグワはどうして北の国が西エウリアと話し合いをしたがつているのかさえ知らないのだ。自国、西エウリア君主国で何が起きているのか、カグワは自国の国情さえ知らない。それなのに何を話し合えばいいのだろう。

「巫女君は、西エウリアから北ラウグリアへ、一通の文書が届けられたことはご存知ですか？」

將軍に尋ねられ、カグワは首を傾げた。カグワの知っている後宮の外の情報は、最西端の変わり者、ケニー老翁から仕入れたものみだ。その中に、文書の話はなかった。

「先月末のことです。西エウリア国の君主が身まかったと、その文書には書いてありました」

「ええ、そうね……先月末、確かに国王がお亡くなりになったわ」カグワは日にちを数えて遡り、まだ後宮の中にいた平和だった頃のことを思い起こした。

その知らせは突然であった。国王が崩御したという知らせとともに、後宮に走り巡ったのは、「次期王の即位に合わせて、次期巫女が選定される」という知らせである。聖女たちにとっては、己の国がどうなっているのかわからないでもよかったのだ。彼女たちにとっては己の国事など二の次であり、己こそが巫女に選ばれんとして奔走するばかりの日々であった。

「さらに文書には、こうありました。エウリアの国主の葬儀を大々的に行うから、各国から国の要人を参列させるようにと。この各国とは、北国、東国、南国のそれぞれ三つのことを指すようです」

「ええ……そうね」

「しかしながら、東国はすでに我がラウグリア国の支配下にありません。そこで我らは文書を西へ返しました。東国はすでに我が国の領土である。ゆえに国の要人を参列させるなら、北と東は一つの国としてまとめ、要人も一人で良いのではないのかと」

「支配下……」

カグワはそう呟いて、眉根を寄せた。

北ラウグリア国が、東国の領土を占領するために十年もの戦を続けているという話は、後宮の中にいるカグワでも知っていた。そして最近、北国が戦に勝利し、その領土を手に入れたのだと、ケニー老翁から聞いたばかりだ。

「だが、西国はそれに対して、まだ西国としては東国を北ラウグリア帝国の一部とは認めていないと返事をされた」

「だって……領土は支配下に置いたとしても、まだ東国には国家があるでしょう。それとも東国の国家は滅亡してしまったの？」

「確かに、国家は滅亡してはおりません。しかし、それは北ラウグリア国の君主の温情によつて生かされているようなものです。すなわち、国家権力機能としては死んだも同然。従つて、今現在東の領土を統治しているのは北ラウグリア国であるといえます」

カグワはますます眉根を寄せた。カグワは戦を経験したことがないためよくわからないが、戦において勝利国は、領土を食らうのみでなくその国の権力も何もかも奪つてしまつらしい。もとより難民に溢れていた東国を思うと、ますます哀れであつた。

「文書のやり取りのみでは、この事実を上手く西国へ伝えることができない。そこで、西国の要人にお越し頂こうと我々は考えました」

「……それで、私が北国に呼び出されたわけね」

「その通りでございます」

「じゃあ、私はそのことを事実として受け止めて、西国に戻つて新王と政府に伝えればいいのかしら？ それで私のお役目は終わり？」

「そう事を急ぎなさいますな……まだ巫女君にお帰り頂くわけにはまいりません」

「……どうして？」

「今、西の国に新しい文書を届けている最中でありませぬ。??西国の新しい巫女君は今、北国にいる。西国から良い返事があれば、お返しすると」

「……なんですつて？」

カグワは瞠目した。

良い返事があれば、お返しする。それはすなわち、西の国が「承知」と言わなければ、巫女がどうなつてもしらないぞという脅し文

句である。カグワはようやく、自分がこの場所に巫力さえ奪われ拘束されている意味を知った。

「???私は、人質なのね」

「滅相もない。西国の要人として大切にお預かりしております」

「この北の地まで招いたのではなくて、誘拐したのでしょう? わざわざ巫女選定の儀が終わるのを待つて? 巫女が選定されたその瞬間、最も警備の薄いその瞬間を狙って、さらったのよ。西国において巫女がどれだけ重要視されているのか知りながら」

西国は君主国でありながら、宗教国家であった。政治の頂点に立つのが国王なら、宗教の頂点に立つのが巫女だ。巫女は神の代弁者であった。政治の力では解決できない心の救いを、西の民は巫女に求めている。

カグワは納得した。何故、国政もなにもわからない巫女になったばかりの自分なぞを談合にと招待したのか。国政などわからない方が都合良いのだ。余計な知恵を働かせない、だが国家の重要人物である人間が必要だった。

「そう、息を巻かれますな」

巫力も持たぬ、仗身も傍にいないカグワには、何の力もない。スターリン將軍は少しの恐れも見せずに、堂々としていた。

「巫女君には何の不自由もないよう計らいますゆえ……なにかあれば、皇室付きの小間使いどもにお声をおかけください。彼らはよく訓練されておりますから、巫女君の要望をなんでも叶えてさしあげるでしょう」

「そんなの……いらないわ。宮殿の敷地からは一步も出さなくせずに、なにが不自由もないように計らいます、よ」

「宮殿の外は危険です。中におられることが最も御身のためかと存じ上げます」

「危険かどうかは私が自分で判断するわ」

カグワは憤慨した。今ここで、スターリン將軍に怒りをぶつけたとて何の解決策にもならないことは理解している。しかしそんな冷

静な自分がどこかにいる一方で、押さえきれない怒りを抱える自分  
がいることも事実である。

息巻くカグワと、強気な將軍の両者を見比べて、静かに声を発し  
たのは、玉座に座る皇太子殿下であった。

「??スターリン、話はそれで終わりか？」

皇太子シルディアの声は明瞭としていてよく通る。広い謁見の間  
中に響き渡った。

「はい、以上であります」

將軍が頭を下げると、うん、とシルディアは頷く。そして、まっ  
すぐカグワを見つめた。

「ならば、もうこれで終わりにしよう。??余は少々疲れた」

まだ話は終わっていない、と彼に反論しようとして、カグワは開  
いた口を中途半端に止めた。??突然、頭の中に、シルディアの声  
が反響したのである。

??あとで、俺の部屋に来てくれ。

え、とカグワは一瞬呆気に取られた。

空気を伝わって声が耳に届くのではない。直接頭の中へと語りか  
けるこの技を、カグワもよく知っている。感応の技、と言うのだ。  
他の誰にも聞かれぬように、特定の誰かにも言葉を伝えたい時に  
使う。巫力の修行の中で、カグワも何度か挑戦したことがあった。

しかし、何故今自分は巫力を封印されているのに、彼の声を聞き  
取ることができたのだろうかと考えて、すぐに釈然とする。カグワ  
の巫力を封じているのは他でもないシルディアだ。シルディアの声  
なら聞き取れるだろう。

わざわざ感応の技を使って声を伝えて来たシルディアは、なにこ  
ともなかったかのようになんとしていた。きつと、將軍に聞かれて  
はまずいことなのだろうと判断し、カグワも平然を装う。

「精々見てらっしゃい……貴方たちのやったことは、ただの人さら



いなんだから！」

負け惜しみとも取れる非難の声を浴びせて、カグワは踵を返した。

謁見というから身構えて来たものの、話はあっというまに終わってしまった。要は、カグワは人質だから西から返事があるまで大人しくしている、というそれだけの話である。改まってするような話でもないように思えた。

縦に長い謁見の間をまっすぐ歩いて来た時とは逆に出口を目指して進み、振り返らない。玉座の方を振り返ることは決してしなかったが、扉を開いて謁見の間を去ろうとする間に、再び感応の技による声が頭の中に響いた。

?? 一度君もきたことがあったと思う。俺の寝室だ。あそこなら、軍の警備はいないから、ユーリかオレークに言って、来てくれ。

巫力を封印された状態で、彼へ言葉を送ることは難しく思えたので、カグワは大きな音をたてて扉をしめることで、彼に了承の意を伝えた。

## 9、北国の皇太子シルディア

結局、カグワが皇太子シルディアの部屋を訪れたのは、その日の夕方頃になってからのことであった。

謁見の間を出た後、再びオレークに連れられてもといいた皇宮の入り口までは案内してもらったのであるが、そこに至るまでは軍人がそこら中を徘徊していたため、迂闊に「シルディアの部屋に連れて行って」とは言えなかった。シルディアは、「軍の目のない場所でカグワと会うことを望んでいた。

そんなわけで、自分に与えられた部屋へと戻ったカグワは、しばしベッドの上で膝を抱えてぼんやりと虚空を見つめていた。謁見を通じて、ようやく己の置かれている立場がわかったものの、わかっただけで何一つ解決策は見つけられなかった。

まず、カグワは間違いなく、西エウリア国の巫女であること。選定の儀式の途中でこちらへ飛ばされてきてしまったから、ひよっとしたら自分が巫女に選ばれたなんて単なる勘違いなのではないかと思っていた。しかし、北国は、カグワを誘拐したわけではない。「西の国の巫女」を誘拐したのだ。確信犯であった。わざわざ選定の儀が行われるのを待って、選ばれた巫女をその瞬間に時空の狭間へと吸い上げたのである。カグワは、十人の聖女の中から選ばれた、新しき巫女であった。

そして、北国がそうまでして巫女を誘拐した動機である。北国は、西国が「東は北の一部である」と認めることを条件に、巫女を誘拐した。認めれば巫女は返す、という脅し文句を送ったのだという。しかし、もしも西がそれを認めなかった場合は、どうするつもりなのだろう。北国は、人質である巫女を殺してしまうかもしれない。殺さないまでも、このまま緩い監禁を続けることはなくなるだろう。そして、もしも巫女が殺されたら、その次はどうなる。西国にとっ

て、巫女は神の代弁者だ。神の遣いである。自分たちの神が虐げられたと知ったら、西国とて黙ってはおるまい。？？戦が起きる。

（どうしよう……私の所為で、たくさんの人が死ぬ）

カグワは、ぎゅっと膝を抱える力を強めた。

別にカグワは、巫女になることを熱望していたわけではなかった。巫女には一の君ネイティーンがなるのだと思っていたし、別に巫女になんてならなくても良かった。だが、それでも巫女に選ばれたのが自分なのだとしたら、自分は巫女として民に救いの手を差し伸べなくてはならない。希望を、幸福を与えなくてはならない。だといふのに、実際はどうだろう。人質として囚われ、多大な迷惑をけている。そしてひょっとしたら、戦争の引き金をひいてしまつかもしれない。

どうしよう、と、抱えた膝に顔を埋めると、不意に隣に気配を感じた。顔をあげれば、心配そうな表情をした仗身がこちらを見下ろしている。

彼は謁見の間にはいなかったから、当然、事の仔細など知らないだが、カグワが悩んでいることは一目瞭然であったし、その悩みの深さがどの程度のものか、説明されずとも感じ取ったのだろう。

彼は大丈夫か、とも、何があったのか、とも何も問わない。ただ黙って、カグワのうずくまるベッドの脇に膝をつく。

「ゆたや……」

カグワが弱々しい声で告げると、「はい」と穏やかすぎる声で返事をした。

「私……巫女に選ばれてしまったらしいの」

「ええ……」

「だから、ここに囚われているんだわ」

「……ええ」

「どうして、私なんか……巫女に選ばれてしまったのかしら」

「……」

ユタヤは顔をあげ、カグワの表情を見上げた後、首を傾げた。巫

女に選ばれたカグワにもその選定の理由がわからないのだ。仗身にわかるわけもない。

彼は静かに瞑目し、「私は存じませんが」と応えた。

「何故カグワ様が巫女なのか、何故巫女がここに囚われるのか、私には明確な答えを出すことができません……。私は、巫女であろうと聖女であろうと只人であろうと、貴女を護るだけです」

カグワは彼を見下ろして、その真摯な瞳に言葉を失った。

ユタヤは他の聖女たちの仗身と比べてみても、恐ろしいほどに献身的であった。あの時空の狭間に吸い込まれそうになった時にも、いの一歩に駆けつけたのは彼だ。聖女以外は立ち入ってはならぬと言われたあの場所に、少しの戸惑いも見せずに飛び込んだ。

何が彼をそこに至らせるのか、カグワは知らない。ただ、この従順さが今は恐ろしく思えた。？？もしも、西国が色好い返事をせず、北国が怒り、西の巫女を虐げることになった場合。彼は、どうするのだろうか……？

それから長時間、カグワはずっとベッドの上でうずくまり続けた。ユタヤは黙ってベッドの下に寄り添った。

そうこうしているうちに時間が経って、夕刻頃。「夕食の準備をいたします」とカグワの部屋付きの小間使いであるユーリが現れた。

カグワは「そんなことよりも」とユーリに食事の準備をやめさせて、皇太子シルディアの部屋に呼ばれているからオレークに繋いでくれと頼んだ。ユーリはそれは大変と快諾し、すぐにオレークを呼んでカグワを皇太子の部屋へと案内してくれた。

今回、呼ばれたのはカグワだけである。カグワが人質であるならば、当面の間はカグワにも、その従者にも危害の加えられることはないだろうと判断し、ユタヤは部屋に置いて行くことにした。ユタヤもそろそろ皇室ばかり集うこの宮殿には危険がなさそうだとわか

つてきたらしく、皇太子の部屋にまで同伴することは遠慮した。

「夕食は、殿下の部屋に二人分用意させておきました。どうぞごゆるりと」

カグワを皇太子の部屋の前まで連れてきたオレークは、そうとだけ告げて頭を下げた。今回は部屋の中までは着いてこないらしい。シルディアが内々にカグワを呼んだためである。

一人皇太子の部屋の豪勢すぎる入り口の前に取り残されたカグワは、ふう、と一度息を吐いた。皇太子に会うのはこれが初めてではないし、彼の部屋を訪れるのだって初めてではない。しかし、また、あの得体の知れない「毒気」を味わわなくてはならないのだと思うと、自然と体が力んだ。ともかくにもいつまでも此処に立ち尽くしているわけにはいかない??。カグワは扉をノックして、「かくわです。入ります」と端的に告げるなり、扉を開いた。

開いた扉の先には、数日前此処を訪れた時と何ら変わらぬ風景が広がっていた。ただっ広い空間の中に、遊戯場や食卓、風呂場もある。そして部屋の中央には大人五人は眠れるであろう巨大なベッドが置かれていた。ベッドには天蓋、薄い紗幕がかけられている。

「あつ」

ベッドの方から若い娘の声がした。なんだろうと思って中央に置かれたそのベッドの方を見やると、紗幕を揺らして中から一人の若い娘が飛び出してきた。愛らしい容貌をしているが、その資格好からみるに、女中のようだ。皇太子の部屋を掃除したり片付けたりすることが役目なのだろう。

「待ってたよ、カグワ」

紗幕の内側から、今度は若い男の声がする。こちらには聞き覚えがあった。皇太子シルディアのものだ。

「君はもういいよ。行って」

シルディアの声は冷たい。行って、と言われた女中はそれでも少しも気分を害した様子はなく、何故か少しだけ着崩れた服を直しながら、「失礼いたしました」と頭を下げて部屋を出て行った。すれ

違い様にちらりと見やった彼女の頬は、ほんのり赤く染まっている。カグワはきよとんと首を傾げた。

「??? 謁見は午前中だったのに、遅いじゃないか」

言いながら紗幕を持ち上げ、ベッドの端に座ったシルディアは、謁見の間で会った時とはやはり違う。重そうな正装服も纏っていないし、皇室の人間らしい重圧感のある喋り方もしなかった。

「一人で考えたいことがたくさんあったから」

そう答えると、「まあそうだろうね」と言っただけで彼はベッドの横に置かれた長椅子を示した。座れ、ということらしい。

「シルディアは、あの後すぐに部屋に戻ったの？」

「君を待つ以外にやることもなかったからね。暇つぶしにメイドと遊んでた」

さつき追い出された女中のことだろう。カグワは、「ああ」と頷いて、長椅子に座った。すると、シルディアはくすと笑う。前にベッドの上に寝転んでいた時は顔色も悪く病人のような風体をしていたが、今日はすこぶる気分が良いようだ。

「君、全然意味わかってないだろ」

「なにを？」

「あ、もしかして巫女は純潔じゃなくちゃいけないの？」

「は？」

カグワがぼかんと口を開くと、「まあいいよ」とシルディアは足を組んで机の上に置かれたマグカップを手に取った。おそらく今しがた出て行った女中が淹れたのであろう紅茶はまだ湯気をたてていた。

まあいいや、とカグワも思い直し、長椅子の上に深々と座る。今日のシルディアからは以前訪れた時のような毒気が感じられなかった。今回は前と違って彼が『力』を発揮しようとしていないためだろう。

「で、今日は一体何の用？」

軍に聞かれることを恐れてわざわざ感応の技を使ってまで呼び出

したのだ。それなりの用事があるのだろう。そう思ってカグワは身構えて来たのだが。

「別に？ これと言って用事はないけど？」

シルディアはあっけらかんと言う。ますます呆気にとられるカグワの顔を見て、シルディアは自分の白金の髪をいじりながら続けた。

「用事がないや呼び出せないほど君はお高いのか」

仮にも巫女だから安くはなかるうが、と思いながらも、そんなことを言うわけにもいかず、「そういうわけじゃないけど」と首を横に振る。

「じゃあいいだろ。??初めてなんだよ。俺と同位の相手っていうのに会うのがさ。シルディア、なんて呼び捨てにされたことも今までなかったし……」

「これからも誰かに許可なんて取らなくていいから好きな時に俺の部屋来てよ」などと言うシルディアが、子供のように笑うものだから、今度は首を縦に振ることしかできなかった。それに、自分の前にへりくだらない相手と話がしたいというその気持ちは、カグワにもわからないわけではない。

本当に他に用事があったわけではないらしく、それからシルディアは紅茶を飲みながら他愛もない話を始めた。カグワもそれならばと幾分気を楽しみして、彼の話に付き合った。

「カグワは今いくつ？」

「今年十五になったところよ」

「へえ。俺よりは年下か」

「そうなの？」

「うん。あいつは？ えーっと……ユタヤだっけ？」

「ゆたやは……十八よ」

「へっ、俺と一つしか違わないの。もつと年上かと思った」

「獣人だから……普通の人間よりも体の作りが大きいしね」

「へえ。そういうものなんだ。俺、獣人って見たことないからなあ」

「北国にはいないらしいものね。……シルディアはいくつなの？」

「俺？ 十七。もっと若く見えるでしょ」

「……同い年か年下かと思ってた」

「俺痩せ形だからなあ……」

一国の皇太子とは思えない、あまりにも凡庸な会話に安堵する。「力」を使わなければ、彼も普通の少年なのだ、今更ながら悟った。カグワ自身も巫女という肩書きさえなければ、何の変哲もない少女でしかない。？？彼と自分の立場は至極似ていると、思った。

「カグワは最近巫女になったばかりなんだろう？ 巫女になる前は何してたんだ？」

「巫女に選ばれるのは、巫女予備軍の聖女という集団からのみなのよ。だから私も、聖女の一人だったわ」

「それは、世襲なの？ 君は生まれた時から聖女なのか？」

「いいえ。聖女はその時代の巫女が国の全ての少女の中から選ぶの。私の場合は、三つの時に選ばれて聖女となったわ」

「ふうん……なら、俺とは違うんだな」

「シルディアは現皇帝の第一子だって……さつき謁見の間で言っていたものね」

皇位は、世襲だ。西エウリア国でも王は世襲と決まっている。シルディアもまた、生まれながらにして王位を継ぐ皇太子だったのだらう。

「カグワには家族はいるの？ 家族がいる場合は、聖女と一緒に家族も巫女予備軍になるのか？」

「まさか。家族とは離されて、大抵一生そのまま会うこともないんじゃないかな。私にもお母さんが一人いたけど……聖女になるために後宮に入ってそれきり、一度も会っていないわ」

「そっか……今でも母親のことは思い出す？」

「いいえ。残念ながら、忘れちゃった！ だって私は後宮に入ったのは三歳の頃よ。思い出そうと思えば思い出せないこともないけど



……もうほとんど想像の産物」

「ふうん。そんなものか……」

素っ気ない、その相槌に何やら含みを感じて、カグワは問いかける。

「シルディアは？ お父上の皇帝陛下は病に臥せっておられると聞いたけど……お母上はお元気？」

「死んだよ。俺を産んですぐに」

一瞬言葉を飲み込む。が、シルディアが特に気にした風でもないのでカグワも平然を装い会話を紡いだ。

「……。……難産、だったのかしら？」

「いや、そういうんじゃない……毒殺されたんだよ。実の姉にさ」

姉、とカグワは目を丸くする。後宮で困われ、大切に育てられたカグワには無縁の話であった。

「俺を産んだ母親は、正妃じゃなかったからね。正妃は姉の方だ。」

俺も産まれたばかりの頃の事なんて、誰にも教えてもらってないけど。??まあ、皇室の中でいざこざがあったってことだ」

さらりと言い放って、シルディアは微笑む。その微笑みに、毒気が浮かぶ。しかし不思議と、初めて彼と話した時に感じたような怖気は覚えなかった。ただ、これ以上は深く掘り下げないほうがいいと、本能が訴える。

カグワは慌てて話題の転換を試みた。

「シルディアはいつから巫力……えーと、『力』を使うようになったの？ 貴方はすごい『力』の持ち主だから、きっと小さな頃から訓練してきたのでしょうかね」

「訓練？ 訓練なんかしてないよ」

きよとん、とするシルディアの顔から、毒気が消える。彼の顔が、普通の少年の顔に戻った。

「俺もよくわかんないんだけどさ、『力』を持ってる奴っていうのには、二種類いるんだって。生まれつき『力』を持ってる奴と、『力』の素質を持っている奴。『力』の素質を持ってる奴は訓練する

ことで『力』を開花させて増強できるけど、『力』そのものを持って生まれた奴は訓練する必要もない。訓練したところで増えることもないし、何もしなくたって減ることもない」

そう軍の奴に教えてもらった、と言った皇太子は、生まれつき『力』そのものを持っていたということなのだろう。カグワは瞬きをする。初めて聞く話であった。

「『力』そのものを持って生まれた人なんてというのが、いるのね……初めて聞いたわ」

「西国にはいないの？」

「わからないけど……少なくとも、聖女の中にはいなかったわ。だって後宮に入ってからというもの、皆で十年以上もかけてずっと巫力を鍛える修行をし続けてきたんだもの」

カグワは今はずいぶん、西の地を想った。十数年、あの狭い後宮の世界のただで生きて来た。やることといえば一つだけ、巫力を高める修行のみである。まさか、生まれながらにこんなにも強大な『力』を持っている人間がいるなんて、知る由もなかった。十数年の年月をかけて磨いたカグワの巫力では、今日の前に座っているか細い皇太子に適うべくもない。

「修行かあ……具体的には何するの？」

訓練の一つも必要なかったという皇太子は、興味津々の状態で身を乗り出してくる。カグワは苦笑した。

「ひたすら実践あるのみよ。……例えば、さつき貴方がやったみたいに、感応の技を試してみたり」

「感応の技？」

「ほら、さつき、謁見の間で……私の頭の中に直接語りかけてきたじゃない」

「ああ、あれか。あれ、感応の技っていつのか」

「私たちはそう呼んでるけど」

「他には？ 他にはどんな技があるんだ？」

「たくさんあるけど……未来の出来事を予知する先見の技とか。人

の心を読む読心の技とか……」

「カグワが一番得意なのは？」

「得意っていうほどじゃないけど……気感の技かしら。近付いて来た相手の気配を察知して相手を予測するっていう」

「へえー。そんな名前がついてんのか」

「逆に聞くけど、技に名前もなくて、どうやって使い分けてるの？」

「別に？ 使い分けるっていう感覚もないし……その時々、必要なことを必要なようにやるだけだよ」

至極当然のことのように彼は言う。生まれながらに『力』を持っていた彼にとつては、それは歩いたり走ったり、息をしたり笑ったりするのと同じように、自然にできることなのだろう。訓練することでは『力』を扱えないカグワには全く理解できない感覚だ。

「私は修行をして、ようやくできる技もいくつか会得したくらいのもんだけど……貴方には、なんでもできてしまうのね。そのための能力が生まれつき備わっているんだもの」

感心したように思わず呟くと、「いや」と彼は俯いた。その顔に影が、毒気とはまた異なる暗い影が落ちる。

「確かに俺は、訓練なんかしなくても『力』を發揮できる。けど、自分の『力』を制御することはできない」

「制御……？」

うん、と頷いた彼は前髪をゆっくりかきあげた。細い金髪がさらさらと指の間からこぼれおちていく。

「見たくないのに見てしまう。聞きたくないのに聞いてしまう。やりたくないことをやってしまっただけ、それを止めることができない。……『力』が暴発するんだ」

そんな経験ある？ と尋ねられてカグワは激しく首を横に振る。やれと言われた技ができずに落胆することはあっても、力が勝手に働いて己でそれを止められなくなるなんて、一度も経験したことがなかった。ゆえに、想像もつかない。

「そういう時は……どうするの？」

「どうすることもできない。俺自身に止められないのに、誰かに止められるわけもない。だから、時が経って収まるのを、待つ」

発作みたいなもんだよ、と言つて、彼はいつのまに飲み干したのやら空っぽになったマグカップを片手に立ち上がった。広すぎる部屋を歩いて、暖炉脇に置かれたポットを取りに行く。その足取りは、やけに軽快だ。

「??君が、此処まで連れ去られてしまったことは巫女である君にとって、あるいは西国にとつてとても不幸なことかもしれないけど……俺にとつては幸運だったな」

「どうして？」

「こんな話を聞いてくれる奴、この国の中にはいないからさ」

「『力』を持つている人が、周りにいないから？」

「いるさ。軍の中にはごまんという。奴らは『力』を戦に利用するからな。でも、奴らは『力』の持つ得体の知れない恐怖を知っている。だから、誰も俺に近付こうとしないんだ」

ポットから紅茶をカップに注ぐその背中はやけに小さく見えた。

振り返ると、何故だか満面に笑みを浮かべている。

「でもカグワは、いいね。服従して仕方なく答えるんじゃない、興味を持って尋ねてくれる。俺を怖がることもない」

「……。……全く怖くないと言つたら嘘になるわ。最初に貴方に会つた時、やっぱり得体の知れない怖気を感じたもの」

「そうだったの？　ぐいぐいいるんなことを尋ねてくるから、初めて俺を怖がらない人に会つたと思つたのに」

「それは……。……突然知らない所に飛ばされて、わけもわからず貴方に会つたんだもの。尋ねたいことは山ほどあったわよ」

「そうかあ……。じゃあ、今も、俺が怖い？」

マグカップに紅茶をなみなみ注いだまま、悄然とうなだれる彼を見上げ、カグワは口をへの字に結んだ。彼はカグワよりも二つ年上だと言つたけれども、そんなことも疑わしいくらい、幼く見える。

背丈は断然カグワよりも高いし、顔つきもよく見れば大人っぽいのであるが、醸し出す雰囲気の所為だろうか。

「今は……怖くないわ。シルディアがどうという人なのか、わかったからかな」

そう答えると、シルディアの顔がみるみるうちに喜色一色に染まった。彼はマグカップを机の上に置いて、軽やかにベッドに腰掛け、カグワと向き合う。

「シルディアって、俺のことをそう呼ぶのもカグワだけだ。みんな皇太子様とか、殿下とか、シルディア様とか、そんなふうにしかならないのに。対等な感じがして、いいな」

嬉しそうな彼の言葉を受けて、カグワはふと記憶を思い起こしていた。西の国にて、巫女選定の儀の執り行われたあの日に、似たようなことを言われたことがある。

??-一の君としての私を見ても、誰もネイティーンという一人の女としては、見てくれなかったわ。その中で、貴女だけが、私と同等に接してくれた。私は、とても嬉しかった。

そう語ったあの玲瓏とした美女は今、西の国で何をしているだろう。本当なら、カグワなどよりも彼女が巫女になるべきだった。彼女が巫女ならば、と思う。巫力も強く、頭も良く、何でも出来る彼女なら、こんな風に北の国に囚われることもなく、よしんば囚われたとしても、なす術もなく戸惑うこともなかったらうに。

「なあ、カグワ……。お前、ずっと北の国にいるよ。難しい国の政治のことなんか放っておいてさ。この皇宮にいれば、何も不自由しないよ」

「……そういうわけにいかないわ。私は、西の国に帰らなくちゃ」「どうして? 君が巫女だから?」

「そうね……。それに、西の国に帰って、話をしたい人がたくさんいるから」

カグワはそう答えて、静かに瞑目した。目を瞑れば脳裏に浮かぶ、西の国の人の顔。巫力を封じられた身で遠くの地を察知したり、あるいは遠くの声を聞き取ることこそできないが、思いを馳せることならできる。

最西端の変わり者と呼ばれたケニー老翁に会って、話が見たい。巫女となった今、カグワはどうするべきなのか。

一の君、ネイディーンにも会いたい。貴女ならこういう時どうする、と問うて、助言を乞いたい。

他の聖女たちにも会って、話が見たい。聖女として今まで培ったこの力を封じられた時、私たちには何ができるのかしら。巫力の修行のみを課された彼女たちに、提起をしたい。

幼い頃からずっと身の回りの世話をしてくれたロマーナにも会いたい。会って話をするでもなんでもなく、あの後宮の中の日常を過ごしたい。彼女はカグワにとって母代わりであり姉代わりであった。

そして、ユタヤに??。

カグワは、西の国にはいない、共に北の地へと飛ばされてきた従順な仗身のことを思った。部屋に帰ったら、ユタヤと話をしよう。文脈がまとまってなくとも、何が言いたいのかわからない支離滅裂なことでも、ユタヤは真摯に耳を傾けてくれる。ただ黙って耳を傾けて、時折相槌も打って、カグワの心の中の不安を落ち着けてくれるに違いない。

黙って瞑想し、西の地を想うカグワを見て、シルディアは特に声をかけるでもなく静かに温かな紅茶を啜っていた。孤独な少年には、目を瞑ったところで瞑想する相手もないのだ。少年の目には、カグワが眩しく映っている。

カゲワはまだ、彼の持つ底知れぬ心の闇には気付いていなかった。

## 10、無償の愛

仗身の心得???いかなる時にも主の傍を離れず、主の危機を逸早く察知し、己の身を捨てても主を護るべし。

その心得を胸に刻んでもう幾年の月日が過ぎたことだろう。まだ一桁の年の頃から、主を護ることを心に誓って今まで生きて来たが???青年は今、誰もいないがらんどうの部屋の中に一人取り残されている。

ユタヤは、主のために用意された広くて落ち着かない部屋の隅、窓際にあぐらをかいて座ったまま、ぼんやりと外の景色を見つめていた。

カグワを追って時空の狭間に飛び込み、共にこの北の地へ投げ出されてから、そろそろ十五日が経とうとしていた。

カグワが皇太子や將軍と謁見をしたあの日から数日過ぎて、カグワは人質としてここに囚われていることを逆手に取り始めていた。少女は、人質であるからには危害を加えられることはないだろう、と踏んで、自由気ままに皇宮の中を徘徊する。それでも初めのうちは、何かあるかわからないから、と彼女の勝手な行動を案じていたユタヤであるが、あまりにも彼女が奔放なものだから、最近では案ずることすら馬鹿らしく思えるようになった。

まるで、あの後宮にいた頃と何も変わらない。カグワの君は自由だ。

そして今日も取り残されたユタヤは一人、部屋の窓辺に佇んでいた。日は高いが、窓ガラスを一枚隔てた向こう側は恐ろしく寒い。秋も深まり、この北の地では昼間でも気温はそこまで上がらないという。夕方になってもまだ戻らぬようなら、彼女を探しに行こうと



決めて、しばらくは窓辺で休むことにしていた。彼女には彼女の思惑があるのだから、あまり無闇にそれを邪魔してもいけない、と思う。

なにがなんでも主を護ろうと、時空の狭間に飛び込みここまでやってきたが、獣を封印された自分は今とても、無力であった。武器となる刀たちも、西の国で変化した際に全て置いて来てしまった。

北の地はなにもかもが『力』によって統一されていた。実際にはどうかわからないが、ユタヤはそういう印象を受けていた。故に、ユタヤにとってはこの皇宮の廊下を歩くことでさえ恐ろしい。『力』とは見えない圧倒的な何かである。見えない何かを恐れるのは、生き物としての本能だ。

そんな中で、カグワは強かった。カグワ自身も巫力を封印されてしまっているはずなのに、カグワは見えない何かを恐れない。そんな状況下で、カグワのことを自分が護ってやるのだと思うこと自体がおこがましくも思えるくらいに、彼女は強かった。

カグワを護るのだと、それだけを目的に生きて来たユタヤはその任務から解放されてしまうと他にやることもなかった。仕方なく、ぼんやりと外を眺めている。寒さから逃れるために二重に張られた窓の外、それまで高く昇っていた太陽が、雲によって覆われた。天気がくずれそうだ。ひよっとしたら雪が降るのではないか。

ユタヤに近い部分だけ、窓が結露していた。ユタヤの体温で暖まっている所為だろう。その白く曇った硝子をなんとはなしに服の袖で拭おうとした、その時、不意にトントんと扉がノックされた。

こんな時間に誰だろう、と思う。カグワの面倒を見てくれている小間使いのユーリなら、今カグワが部屋にいないことは知っているはずだ。他の誰が来たにしろ、当然用事はユタヤではなくカグワにあるはずで、今此処にカグワはいないのに、と困惑していると、扉は無遠慮に開かれた。

「あれっ？ カグワ、いないの？」

大雑把な仕草で開かれた扉の向こうから現れたのは、なんと、この国の皇太子であった。

何故こんなところまで、とユタヤは面食らう。今までも何度かカグワが彼の部屋へと呼び出されたことはあつたけれども、彼が自らわざわざ此処まで足を運んで来たことは、一度もなかった。

「申し訳ございません、殿下……今、かぐわの君は皇宮内を散策中でして」

ユタヤは慌てて窓際から彼の方角を向いて膝をつく。皇太子シルディアは今しがた自室から出て来たのか、皇太子とは思えないような軽装をしていたが、それでも放つ気迫は皇太子以外の何者でもない。

「散策中？ 一人で？」

「はい」

「護衛も連れず？」

「ええ」

「不用心だな……人質だから滅多なことがない限り害されることもないだろうとも思っているのかな」

「いかにも……」

「まあ、事実、そうだろうけど……特にこの皇宮内には軍人もいないし、安全だ」

そう呟いたシルディアは、カグワのいないことを知って諦めて部屋を出て行くかと思えば、ずかずかと部屋の中央までやってくと、食卓の椅子を引いてどかりと座った。彼は堂々と足を組んで、頬杖をつく。

「カグワが出て行ってからどれくらい経つの？」

「……朝食を取ってすぐ後ですから……そろそろ二刻は過ぎるか」と

「へえ。じゃあそろそろ帰ってくるかな」

「さあ……それは私にも存せぬところではありますが」

「まあいいや。ちょっと此処で待つよ。何か暖かい飲み物はない？」

「……今すぐに」

まさか皇太子ともあるう身分の人間が、こつも安易に居座ろうとするとは思ひもしなかつたため、内心動揺しながらもひた隠し、ユタヤは立ち上がった。今朝ユーリが置いて行つた茶の葉と、暖炉にかけられた湯がまだ残っている。主の身を護るのが仗身の本業とは言え、茶をいれることくらいなら満足にできた。

食卓に座つたまま興味深そうにきよろきよろと部屋を見回しているシルディアは、この部屋の内装を見るのは初めてのようだった。

皇太子とは言え、さすがに皇宮に無数にある部屋一つ一つの内装までは知らないのだろう。

「……思つたほどは、広くないんだな」

ぼつりと皇太子は呟くが、とんでもないことであつた。もともとカグワの住んでいた後宮の三の宮にさえ、此処まで広い部屋はなかつた。

「此処に二人でいるのは狭くない？」

「……西国ではこれほど広い部屋はいくら巫女の君と言えどお持ちではありませんでしたゆえ……狭いと感じたことなどございません」

「そう？ でもベッド一つしかないじゃない。二人で寝てんの？」

「まさか。私には床の上で十分でございます」

「ふうん」

どこことなくつまらなさそうに答えた彼の前に、注いだ紅茶を差し出す。これでユタヤの役目は終わりだ。カグワを待つという皇太子の邪魔にならないようにと部屋の端に控えようと身を引くと、「待てよ」と皇太子本人に止められた。

「ちよつと、お前とも話してみたかつたんだよね」

「私と、ですか……？」

「おう。だつて俺、獣人つて見たことなかつたからさ」

北国には、全く獣人がいないのだという。ユタヤも知識としては

知っていた。

「ちょこつと話をしようよ。向い側、そこ、座れよ」

言ってシルディアの差した先は、彼の座っている食卓の向い側だ。皇太子と対面することになる。ユタヤは慌てて首を横に振った。

「滅相もございません……私は後ろに控えておりますゆえ、気になることがあれば何でもお申し付けください」

「まあ、玉座に座っているならそれでもいいんだけどさ……此処、ただの食卓だろ。後ろに控えられると茶が飲み難くて仕方ない。誰も見てないんだし、いいじゃないか。そっち座れよ」

まるでかぐわ様のようなことをおっしゃる、と思いつながら、ユタヤは仕方なくその言葉に従った。とは言え、ユタヤの主はあの奔放なカグワである。このような高貴な身分からの異例な指図にはすっかり慣れていた。

「名前は確か、ユタヤ、だったよな」

「私なその名前までも覚えておいでですか……恐縮であります」

「覚えてるよ。カグワの口からしょっちゅう聞くからね」

「……勿体ない」

「随分とへりくだるじゃないか。俺、よくわからないんだけど、仗身っていうのはそんなに下役なのか？」

「仗身が、というよりも、我々巫女の仗身は獣人と決まっておりますから。獣人は、本来高貴な御仁と話せるような身分ではございません」

「へえ、不思議だ。獣人は差別されるわけだ」

「……我々は、人でありながら、畜生類の性根も持っておりますゆえ」

「あー、聞いたことがある。西国では獣人を蔑んで人畜と呼ぶこともあるとか」

「……」

ユタヤはシルディアの対面に座ったまま、表情の一つも変えずにそっと目を伏せた。初めて獣人の獣の姿を見た人間は大概それを「

化け物」と呼ぶ。ゆえにだろうか、獣人そのものを人畜と呼ぶ人間もいるらしい。が、幸か不幸か、まだユタヤは直接それを言われたことはない。

「俺からすれば、『力』を持つ人間も獣人も等しく化け物だと思っ  
けれどね。人智を越えたなにかを『力』と呼ぶのなら、獣人のそれ  
だって同じ『力』だろうと」

しれつと言うシルディアは、確かに化け物並みの『力』を所持し  
ていた。だが、だからと言って彼の『力』と獣人を並列にしても良  
いものか。

「我々の『獣』は、いわゆる『力』とは異なり、自意識で操れるも  
のではありません。今でこそ殿下や巫女君の術によつて「獣」を制  
御しておりますが、術さえ解けてしまえばただの獣と同じ」

「あはは。それこそ俺と一緒にじゃないか。俺もたまに自分の『力』  
が制御できなくなつて困ることがあるよ。そのたびに犠牲者がでる」

「……私には殿下のお持ちのような『力』のことはよくわかりませ  
んが……それでも殿下が人であられることには変わりありませんまい」

「なるほど。確かに俺の『力』は暴発しても、俺が俺であることに  
変わりはないな」

シルディアは頬杖をついたまま、面白そうに笑った。その『力』  
を含んだ強い眼差しにはまっすぐとユタヤの姿が捕えられている。

「一つ疑問なんだけど、獣人っていうのは結局人なの？ 獣なの？」

「……そのどちらとも言い難い存在です。どちらにもなり得ると」

「まあ、そうだよなあ……今でこそ姿は完璧に人だけど、獣にもな  
れるわけだし。人にしては力が強すぎるってカグワも言つてたし、  
でも考える脳は人のものだろう」

「……はい」

「でも、基本的には、人の姿をしている時は機能は人と同じってい

うことだよな？」

「はあ、基本的には……」

シルディアの質問の意図が読めず、ユタヤはひとまず頷いた。確かに人型の時には、二足歩行であり、人と同じ物を食べ、同じように喋る。基本的には人間と同じ機能をしていると思う。

そして、次のシルディアの質問に、瞠目した。

「つてことは、生殖機能はどうなるんだ？ 人型だと、人間の男と同じなのか？」

「……は？」

全く予想していなかった問いかけに、口が縦に開く。獣人に関して興味を持って尋ねてくる人間は、主であるカグワを筆頭に、山といたが、それを尋ねられたのは初めてだった。

「お前、人で言えば十八なんだろう？ 人間の男なら、悶々とすることもあるじゃないか」

「な、にを……」

「それともそこは獣の性なのか？ 繁殖期に同種の雌を見ないことには特に反応することもない、と」

「……」

言葉を失う。そんなわけないじゃないかと言いつ返したい気持ちもあるが、獣人を知らない相手に怒っても仕方がない。ユタヤは一つ溜め息を落としてから、冷静に答えた。

「……恐らく、人間の男と同じではないかと。少なくとも獣の性ではありません」

「ああ、そうなの。じゃあカグワと同じ部屋は辛くない？ それとも一人の時にこっそりなんとかしてるとか」

「……」

再び言葉を失った。何と答えて良いやら全くわからない。というよりも、どうしてそんなことを聞かれているのだろうと思う。よりによって皇太子殿下が、何故そのようなことを問うてくるのか。

その訝るような表情から、ユタヤの心を読み取ったように、シル

ディアは笑った。彼はカップの紅茶を飲みながら顔を傾けて、さらにその金髪をなびかせる。

「皇太子ともあるう者が、下世話な話を、とでも言いたげだね。そうか、聖女の園だったという後宮では、こんな話をすることもなかったんだろっな」

「……御意」

「でもね、皇太子だからこそ詳しいのさ。俺は幼い頃から性交について下世話なものではなく、神聖なものとして教わった。皇室の人間として、次期王として、俺の最も重要な役割は遜色のない跡継ぎを作ることだからね」

言われてみれば、至極当然のことであつた。世襲でない巫女の世界では縁のない話であるが、皇室のように世襲の制度が布かれているならば、それは時代を創るための一大行事でもあるう。

「軍は、俺に『力』を発揮しろという。この国のためだ、『力』を使えという。皇室は皇室で、俺に子宝を作れという。この国のために立派な世継ぎを作れという。??そのどちらも、シルディアという一人の人間としての俺は見えていないだろう」

同情を誘うようなその口ぶりに、些か困惑する。皇太子はそんなユタヤの様子など少しも配慮せず、「でも」と笑った。

「でも、カグワは俺のことで見てくれる。面白いことにね。誰も彼もが皇太子である俺を恐れるのに、カグワは少しも恐れない。普通の人間に戻ったみたいないな感覚がする。いや、俺も普通の人間なんだなって気付かされる??な? お前もそう思うんだろう?」

同意を求められて、今度は迷うことなくしつかりと頷いた。

カグワは、獣人であるユタヤにも普通の人間と同じように接した彼女を護らなくてはならない、自分は彼女の仗身だと強く自分に言い聞かせる一方で、彼女と一緒にいると自分が獣人であることなど忘れてしまいそうになることがある。自分は普通の人間なのではないかと??だがしかし、ユタヤの場合は、錯覚だ。

「しかし、私の場合は、普通の人間ではありませんから」

「だからこそ、感動も一入だろう。そういうところに惚れ込んで、彼女の仗身なんぞやってるんだろ？」

「確かに彼女の人柄には惚れ込んでおりますが、仗身である理由ではありません。むしろ、仗身であるからこそ人柄に惚れ込んでいるというだけのことです」

「人柄に、とかそういうことを言ってるんじゃない。不思議に思ってたんだよ。どうして、お前はあんなちっぽけな女に対してそんなにも献身的になれるのかなど。でもよくわかったよ。彼女は確かに魅力的だと思う。??そういうことなんだろう？」

ユタヤは大きく目を見開く。どういふことだ、としらばっくれることも出来たのに、それをしなかったのは生来の生真面目な性格ゆえであろう。というよりも、彼は何を言っているんだ、と思う。

「私がかぐわ様の仗身となったのは、まだ年端もいかぬ幼子の頃です。その頃より、私はかぐわ様をお護りするために生きるのだと誓ってきたのです」

「それは、彼女が巫力でお前の『獣』を封印していたからだろう？  
一種の呪縛みたいなものじゃないか。その呪縛から解放された今、何故お前は彼女に尽くす？」

「何故、つて……」

「今お前の『獣』を封印しているのは俺だ。正確に言うならば、お前の主は今、俺じゃないか」

「それは……」

ユタヤは言葉に詰まった。考えたこともなかった。

確かに、巫女と仗身との誓約は、その『獣』の性を封じる事によって成立している。しかし、この北の国に来てカグワの『力』が封じられ、自分の『獣』までもこの皇太子によって封じられた時、一番最初に思ったことは、「このような状態で、どうやって巫女をお護りしたらいいのだろう」という不安でしかなかった。よもや、これで主が変わったのだなんて、思うはずもなかったのである。

ユタヤはしばし逡巡し、やがて静かに首を横に振った。『力』如



何の問題ではないのだ。この胸に刻まれた誓約は、そうそう簡単に書き換えられるものではない。

「……それでも、私の主はかくわの君です」

「それが妙だと言っている。あの女に惚れてる以外に、何の理由があつてそうまで尽くす？」

「幼心に誓つた、忠義です。ある意味では、それを愛と言い換えることもできましょう。ですが、それは殿下のおっしゃるような、男女間に芽生える愛ではありません。この方のためなら命を差し出してもいいと思える、忠義に基づいた無償の愛です」

「無償の愛……？」

シルディアの顔が、険しく歪められた。彼は肩肘をついたまま、己の頭髮をもてあそぶ。

「愛だとか、忠義だとか……そんなものが本当にこの世に存在することは、ないよ」

突如、彼の口調が静まり返る。その静かすぎる口調に、本能的な恐怖を覚えた。目の前に座っている少年は、どこを見ているともわからない虚ろな眼差しで、何かを捕えている。

「そういつた飾り立てられた美麗句はね、必ず何かを覆い隠すための言い逃れでしかないんだ。忠義は、利己の益を隠し……愛は、性の欲求を隠す……。それはただの言い訳だ」

背筋がぞくと震えた。そして、気付く。皇太子は今、ユタヤを直接見ているわけではない。ユタヤを通して別の誰かを見ているのだ。ユタヤには彼の置かれている状況はわからない。だが、恐らく、彼は幾度も忠義を利己の益のために裏切られ、愛を性の欲求でしか味わったことがないのだ。故に、ユタヤの忠義を信じない。

「それでも私は、忠義と愛を巫女の君に尽くします」

負けるものかと強い口調できっぱり答えると、俯いていたシルディアがゆっくりと顔をあげた。彼は薄く笑って、「しつこいな」と言う。

「それが利己の益でないと、それが性の欲求でないと、どうして言

える？」

「私が獣人であり、かぐわの君が巫女であるからです。獣人に利己の益などありません。何故なら我々の性根は利益など考えぬ獣と同じだから。そして巫女の君に対して性の欲求を覚えることもありません。彼女は最も神に近い、神の代弁者だ。俗世とは切り離された存在なのです」

「ほう。なるほどね」

答えて、シルディアは口元を歪ませた。よかったこれで納得してくれたか、とユタヤが安堵したのも束の間、シルディアの笑みが蔑むような表情へとみるみるうちに変化していった。その変化に、慄く。

「だけどね、ユタヤ。それは差別と言うんだよ。さつき俺は、西国では獣人は人畜と呼ばれて差別されているんだねと言ったけれども、最も己らを蔑視しているのは、お前ら自身じゃないか。自分を獣と言う奴が、獣以上になれるはずもない。その上、お前は主だと言ったカグワのことまで差別するのか。巫女だから神の代弁者だからと言って、彼女を普通の女と捉えないのは獣人を普通の人と捉えないのに匹敵する差別だよ。彼女とてただの人間だと、どうしてお前は言わない？」

「……そういうつもりでは」

「では、どういいうつもりなんだ」

責めるような口調で問いかけられて、答えに窮す。口をばくばくと開閉させているユタヤを前に、シルディアはにっこりと笑った。

「不愉快だよ、ユタヤ。実に、不愉快だ」

その笑みに、他人を拒絶するような覇気を感じる。この場から逃げ出したいくなるくらいの、威圧感を覚えた。

「出てけよ」

ゆっくりと発されるその言葉に、目を丸くする。皇太子は再びゆっくりと、続けた。

「この部屋から、出て行け」

この部屋はそもそもカグワのために与えられたものであり、そこにいていいとユタヤに言ってくれたのはカグワであるはずで、そこにやってきた皇太子は部屋の主を待っていた身で、何故ユタヤを追い出すのか。などと様々な疑問の繰り広げられる理性と、しかしながらもとは言えばこの皇宮自体が皇太子の物だと諭す心もあり、思考が複雑に絡み合う。

だが、頭の中こそ混乱すれど、目の前の男に「出て行け」と恐ろしいほどの覇気を含んで言われると、本能的にそれに従わざるを得なかった。逃げ出したくなるような思いで??いや、ユタヤは部屋から逃げ出した。

失礼いたします、と最低限の礼儀作法だけは徹底し、頭を下げて部屋の外へと飛び出す。当然、行く宛などない。

心臓が壊れるのではないかと不安になるほど、激しい音をたてていた。

??殺されるかと思った。

そんなわけがない。そんなわけがないとはわかっている。だが、あの皇太子の目で睨みつけられた時、そんなわけがないのに、命の危機を感じた。

武器など何も持たずとも、あの男はその視線だけで、人を殺めることができるのではないだろうか。

ユタヤはひとまず部屋から離れようと、夢中で足を動かした。彼の他には誰もいないだっぴろい赤絨毯の敷かれた廊下に、彼一人分の足音が響いた。心臓の音は、鳴り止まない。

## 11、獣人の心

??の君は、お前よりも三つ年下、御年五つにおなりだ。生涯何があっても三の君に忠誠を尽くし、その命尽きるまでお護りすることを誓え。

東と西の国境の森の中で、初めてその少女と出会った。命を救われ、受けたことのないような手厚い看護を越えて目覚めた時に、少年が教わったのはその一つであった。命尽きるまで、主を護れ、と。

巫女に付く仗身とは、元来そういうものなのだという。仗身となる獣人は生まれて間もないうちに後宮へと引き取られ、物心も付かぬような幼い頃から「巫女を護るために生きる」という意識を潜在的に植え付けられる。ゆえに、仗身たちは巫女を護ることを目的に生きるよう教育されるわけだが、その中でもユタヤは特殊であった。

ユタヤは他の仗身たちとは異なり、八歳というすでに自我の芽生えた頃に後宮へと引き取られた。「巫女を護れ」という信念は、その後に植え付けられた。そのため他の仗身と比べて忠義の薄い仗身に育つことが懸念され、当初は方々から反対の声が上がったという。??だが、蓋を開けてみればどうだろう。ユタヤより忠義の厚い仗身など他にいない。

ユタヤ以外の仗身は皆、シルディアの言うように、巫女に「獣」の性を封印してもらおうという呪縛でのみ成り立つ主従関係を結んでいた。おそらく、彼らは今日からシルディアが主だと言われればそれに黙って従うのだろう。その程度の忠義だ。

??では何故、自分はそうでないのか。

こめかみが締め付けられるように、痛む。ユタヤは片手でこめかみを押さえて、唸った。

カグワは自分の命を救ってくれた。これはその恩義である。だが、それだけが理由なのか。

カグワは他の聖女たちと違って仗身である自分と、獣人である自分と対等に接してくれた。その感謝もある。だが、それだけか。

何故だ。何故だろう。わからない。

悩むユタヤは歩き続ける。あてもなく歩き続ける。この異国の地で、彼の居場所など主の傍以外にない。主がいなければ彼の居場所はない。主を待つという名目で部屋に残っていたが、そこを追い出されてしまったのは、行く宛もない。彼は、あてもなく歩き続ける。??と、ふと、声がした。

「……ゆたや？」

シルディアに部屋を追い出され、皇宮の中を闇雲に歩き続けていたユタヤは、その声ではっと我に返った。

ここはどこだろう。

辺りを見渡すが、カグワの後に付いて歩く以外に部屋を出なかつたユタヤには、この皇宮内の地理的感覚がない。気付けば、どこもかしこも豪華絢爛な皇宮内にしては珍しく、わりと質素な石造りの廊下を闊歩していた。そして、突然、彼を呼び止めたのは、聞き違えるわけのない、かの声である。それは彼にとっての、唯一の居場所だ。

「ゆたや」

「かぐわの君？」

一瞬だけ、空耳だろうか、彼女のことをずっと考えていたから幻聴でも聞いたのだろうかと思っただが、再び呼ばれてそれが幻聴でないことを知る。

一体どこから彼女が自分を呼んでいるのだろうかと慌てて周囲を見回すと、くすくすと笑う声がした。

「こつちよ、こつち！」

明るい声とともに、ぎいいと音をたてて石造りの重たそうな扉が開いた。扉が開くと、同時に食欲をそそるような暖かい食べ物の臭いが流れてくる。そうか、とようやくそこでユタヤは気がついた。彼がずっと闇雲に歩き続けたこの石造りの廊下は、厨房に続く道だ。この石の扉の向こう側は、厨房なのだろう。

突如現れた主、カグワが開いた石造りの扉には、小さな窓があった。どうやら彼女はこの窓から覗いて、廊下を闊歩しているユタヤの姿に気付いたらしい。

「ゆたやがこんな所にいると思わなかったから、びっくりしたわ！」

彼女は極めて明るい声で言つてのけるが、その言葉をそのままそっくり返してやりたいものである。

「そんなところ突っ立ってないで、こつちに来なさいよ」

啞然としているユタヤの心情など露知らず、少女は笑顔で手招きをした。

主にいつまでもその重そうな扉を持たせているわけにもいかず、ユタヤは啞然としながらも、厨房の中にと滑り込む。大勢の料理人たちが火を使う厨房は、北国のこの肌寒い気候など嘘のように、熱気に溢れていた。料理人たちは衛生状態を保つため、最低限の前掛けや帽子などは身につけているものの、皆半袖だ。そしてカグワもまた例に漏れず、涼しそうな格好をしている。よく見れば、服のあちらこちらが料理に使うのであろう酒やソースで汚れていた。

「……かぐわの君、一体何をしておいでか」

先刻まで彼がこめかみを痛めてまで悩んでいた原因は彼女である。しかし、そんなことも忘れて、ユタヤは呆れ果てた。

「何って、料理よ」

カグワは楽しそうに答えるが、その姿を見ればわかるというもの

だ。そうではなくて、ユタヤが問うたのは、「何故こんなところで料理などをしているのか」ということである。

苦りきるユタヤの質問の真意にはもちろん気付いているのだろう、カグワはユタヤの呆れ顔を見て尚笑うと、自分の頬を手の甲で拭いた。頬に付着していた煤が広がって、少女の白い肌を黒く染める。

「……実はね、皇宮の中を歩いていたら、たまたまオレークと出会ったの」

「はあ」

皇太子シルディアの世話役であるオレークは、当然皇宮の人間だ。皇宮の中を歩いていれば、出会うこともあるだろう。それが何故彼女が此処で料理をしている理由になるのか、ユタヤには話が読めない。

カグワは呆気にとられているユタヤを見上げて、それはもう楽しそうに、語った。

「それでね、オレークに、何をしてるの？ って聞いたら、今日はシルディアの食べる料理を作る料理人たちの仕事を視察に行くんだって言うから、着いてきてみたの。そしたらこんなにくさんの料理人たちが働いているんだもの！ もうわくわくしちゃって、私にも何か手伝わせてくれないかしら？ って料理長に頼んで」

「……見たところ、手伝いをしているようには到底思えません」  
少女の服は、至るところが料理のソースやら煤で汚れている。ユタヤとて、偉そうなことを言える立場ではないが、それにしても一度も厨房になど立ったことのないカグワが、本職の料理人たちの手伝いをして役立つとは思えなかった。カグワ自身もそれは自覚しているようで「まあね」と言っただけ首をすくめた。

「だから……今日この料理を出すときに、私も一緒にシルディアの所に行くつもり」

「殿下のところへ行って……どうするのです？」

「もしも味が変わったら全部私のせいだもの。料理長が怒られないように、私がきちんと謝ろうと思って」

少女は言つて、屈託なく笑う。ユタヤはますます呆然とした。昔から自由奔放な娘であるが、放つておくと、本当に何をしでかすかわかったものではない。

すると、そんなユタヤの心を読み取つたかのように、「まったく苦笑混じりの声でした。声の主はカグワの後ろに立つと、料理で汚れた少女を見下ろして苦笑いを浮かべた。この暑苦しい厨房の中でも軽装などせず、重く暑苦しそうな宮廷服を纏っているその男は、シルディアの世話役のオレークという。

「おかげでただの視察に訪れたはずがてんでこまいですよ」

彼の言葉にも、少女はめげない。

「あら、ただの視察をするよりも、より一層、普段料理人たちがどんな仕事をしているのかわかつたでしょう？」

「普段の料理人たちならば、これほどまでにてんでこまいになることもないとは思いますが」

オレークはますます失笑した。全身にソーヌやら煤やらを付着させたカグワの格好を見れば、料理人たちをてんでこまいにさせながらも楽しそうに料理に興じるカグワの姿が容易に想像できるというものだ。

カグワはあははと軽快に笑つてオレークの失笑を流すと、今度はユタヤの前に立つて、まっすぐ彼を見上げた。彼女は澄み切った瞳で、問うてくる。

「??で、ゆたやはどうしてこんなところにな？」

貴方が部屋を出る事なんて滅多にないのに、と付け加えて、カグワは目を幾度も瞬きさせた。

ユタヤははつと息を呑み、そこでようやく自分の置かれている現状を思い出した。

??それが妙だと言っている。あの女に惚れてる以外に、何の理由があつてそうまで尽くす？

自分の、カグワに対するこの執拗なまでの忠誠心は一体どこからくるのか。ユタヤ自身にもその答えはわからない。それでも自分な



りに考えて答えを捻り出したのに、その答えが気に食わなかったらしく、皇太子シルディアをえらく怒らせてしまった。が、「皇太子に部屋を追い出された」とは言えない。言葉を迷った挙げ句、こう説明した。

「……部屋に、皇太子殿下がお見えです。かぐわ様をお待ちになっております」

「シルディアが？」

「殿下が？」

声をあげたのはカグワとオレークとでほぼ同時だ。が、その反応は異なる。

「まあ、どうしよう。まだ私が窯に入れたオードブルが出来上がっていないのに……」

カグワは料理の出来映えを案じて当惑したが、隣に並んでいるオレークは、カグワとは比べ物にならないほどに、驚愕していた。皇太子が誰かの部屋を訪れることは、それほどまでに珍しいことなのだろうか。??だが、料理の出来を気にして困ったように首を竦めるカグワを見るなり気を取り直し、オレークは冷静に対処した。

「……殿下には、私の方から巫女君の状況をお伝えしておきますので。巫女君は、思う存分に料理をなさってください」

「本当？　じゃあお願いしようかな」

オレークを見上げて悪戯っぽく微笑んだカグワの顔は、輝いている。きらきらとその笑顔は、目映いばかりだ。ユタヤは、思わず目を逸らした。

いつも見慣れたはずの彼女のその笑顔に、何故かどうしようもなく胸騒ぎがした。何と言えはいいのだろう。見てはいけないものを見てしまったような、そんな緊張感が走った。??シルディアが妙なことを言うからだ。ユタヤは決して声には出せない言葉を、心の中で毒づく。お前は彼女に惚れ込んでいるから彼女に従うのだろうと、本当に妙なことを言う。

「ゆたやは、どうする??」

ユタヤの気の悪いなど知らない少女は、楽しそうに笑った。

どうする、とは、このままこの場所に残ってカグワとともにいるか、あるいはオレークとともに部屋に戻るか、という二択を問うているのだろう。だがしかし、皇太子に出て行けと追い出された以上、彼がいる限りユタヤはあの部屋へは戻れない。だからと言って、まだ心の整理の付かないこの状態でカグワと共に行動するのも気が引ける。??一人になりたい。しかし、一体何と説明すれば一人になりたいという思惑を上手く伝えられるのだろうか。

答えに躊躇するユタヤを見上げ、カグワが不思議そうな顔をしている。何か言わなくてはと、ユタヤが必死に言葉を選んでいると、なんとも丁度良い時機に、「巫女君、オードブルをそろそろ引き上げなくては」と料理人の一人が声をあげた。呼ばれたカグワは「行かなきゃ」と嬉しそうに言って跳ねあがり、急いで窯の方へと走っていく。その後ろ姿を見送りながら、ユタヤは心底胸をほっと撫で下ろした。

「巫女君、オープンは大変熱くなっておりますので、素手で触ってはなりません！」

「そうなの？ 本当だ、近付くだけで熱気がすごい……！」  
初めて経験する北国の厨房に一喜一憂するその姿は、本当にただの十五歳の少女でしかなかった。巫女だ聖女だと持ち上げたところで、カグワは、ただの少女なのである。ただの、人間だ。

??彼女とてただの人間だと、どうしてお前は言わない？

そう責めるような口調で問いかけてきたシルディアの言葉が、ユタヤの耳の中で何度も繰り返された。

ユタヤとて、当然、彼女がただの十五歳の少女であることを承知しているつもりであった。しかしその一方で、彼女のことを聖女だから巫女だからと割れ物を扱うように大切にしてきたという自覚もある。けれども、仕方がないではないか。それが仗身の仕事だ。そ

れが、巫女仕えの護衛の仕事だ。それともその考え方そのものが、根本的に間違っていたのだろうか？ 仗身だからと言って、護衛だからと言って、彼女を巫女だ聖女だと崇拜することこそが、間違っていたのだろうか？？？

遠いカグワの後ろ姿を見つめ、ユタヤは悩ましく溜め息を落とす。そんな獣人の横顔を見て、何を思ったのだろうか。低く声をかけてきたのは、彼の向かい側に立っているオレークであった。

「?? 殿下に、何か言われたか？」

何の前触れもなく突如言い当てられて、ユタヤは黙って瞠目する。表情の変化の乏しいユタヤであるが、その反応だけで凶星だと気付いたらしいオレークは、暑苦しい宮廷服を纏っているにも関わらず汗一つかかない。涼しい顔で、皇太子の世話役は言った。

「何を言われたかは知らんが、気にするな。というのも、妙な話だが……最近とても殿下は気が立っておられるからな」

とても情緒不安定な状態なのだ、と言って彼は腕組みをした。彼の結わえられた茶色い癖っ毛が、暑さにうだつて頂垂れる。ユタヤは黙って彼の言葉に聞き入った。

「?? 近頃、皇宮の横、政殿のある王宮の一部で、国賊と見なされた軍人の一斉処刑が行われている」

処刑、と後宮にて育ったユタヤにはあまり実感の湧かない言葉を、心の中で繰り返した。聞く話によれば、北国は軍人の治める軍国だ。戦に躊躇しない軍国は、当然国内における処刑にも、躊躇などしないのだろうか。

「殿下は人の死に敏感でな……近い場所で人が死ぬと、それに同調して『力』が揺らぐ。そしてそれを自分では制御できないそうだ」

俺もたまに『力』の制御ができなくなることがある、と笑った皇太子の顔が脳裏に浮かんだ。皇太子自身がそう語り、そして彼の世話役もがそれを認めるのだから、それは事実なのだろう。皇太子は絶大な『力』を持つが、それ故に、『力』に振り回される。

「『力』の揺らぐ時、精神もまた不安定になり、感情が高ぶる。？」

「だから、何を言われても気にするな。殿下自身にも止められんだ」

「……」

「そしてそれがあの一線を越えると、暴発する。三年付き人をやっているが、未だに俺にもその止め方がわからん。殿下自身に止められないのだから、当然かもしれないがな。だが、しかし??」

腕組みをしたオレークは首をくると回して、窠の中から鉄板を取り出し料理人たちと談笑するカグワの姿を遠目に眺めた。彼女はこの短時間で料理人たちともすっかり打ち解け、あの輝かしい笑顔を振りまいている。それを見ると、ユタヤの胸の内がざわついた。そんな彼の胸の内は、彼自身にしかわからない。隣にいる男は切れ長の目を細めて、呟いた。

「巫女君なら、あるいは??止められるかもしれない」

「……なにを?」

「殿下の、『力』の暴発を、だ」

はつきりと吐き出されたオレークの言葉に、ユタヤは目をみはった。

「かぐわの君が……?」

それに対してオレークはしっかりと頷く。

「ああ。同じ『力』を持つ国の最高権威という立場上、『力』のおさめ方がわかるのかもしれないが……:にもかくにも、巫女君と話をした後の殿下は、大抵穏やかでおられる」

常であればそろそろ『力』が暴発してもおかしくない頃なのに、と彼は言った。なるほどだから彼はわざわざカグワの部屋に足を運んでまで彼女を訪れたのか、とユタヤも納得した。

わざわざ部屋を訪れなくともいつものようにオレークを通して彼女を呼び出せばよかったものを、それをせずに自らの足で彼女の元へ出向いたのは、それだけ切羽詰まっていたということなのかもしれない。そしてたまたまその場に居合わせたユタヤを相手に、感情を高ぶらせたということなのだろう。

ユタヤはあの人をも殺しそうな恐ろしい目つきを思い出して、思わず震えおののいた。あの恐ろしい、息さえ詰まりそうな威圧感、揺らぐ『力』の成せる技だ。

「まあ……今はとりあえず、殿下と会わん方がいいだろうな。殿下には自室へ戻って頂くよう俺から言っておくから、お前はしばらく此処にいろ、獣人」

オレークは恐らくユタヤの名前を覚えていないのだろう。「獣人」と、肩書きでさえない呼称を使う。ユタヤとて、別段その呼称が嫌いなわけでもないのに、黙って頷いた。此処にいれば必然的にカグワの傍に控えることとなるが、皇太子と鉢合わせするよりは幾分いい。

オレークはユタヤが頷いたのを確認して、踵を返した。ひらりと彼の纏う宮廷服のマントが翻る。彼は重々しい石の扉を開くと、厨房から外へと出て行った。ばたん、と大きな音をたてて扉が閉まる。扉の開いた一瞬だけ流れ込んで来た北国の冷たい空気は、しかしすぐに石の扉で遮断された。

残されたユタヤは扉の脇に立ってまっすぐと姿勢を正すと、ぼんやりと厨房の中を見つめた。下働き程度の地位でしかない多勢の料理人たちに混ざってころころ動き回るカグワは、一人浮いている。しかし、浮いているにも関わらず、その集団から排除されることもない。いつのまにやら、その集団を自分の色にと染めていくのだ。汚らしい下働きの料理人たちが彼女を中心に、みるみるうちに輝いていく。情性的に行われていたはずの業務を、心から楽しそうにこなす。??彼女がいるだけで、薄暗い厨房にまるで光が差したみたいだ。

彼女は紛れもなく、巫女であった。だが、同時に普通の人間の少女でもある。そして、ユタヤにとっては仕える主であり、巫女であり、普通の少女であり??特別な存在だ。

この「特別」をどのように表現すればいいのか、ユタヤには判断

が付かなかった。シルディアはこれを男が女に抱く恋慕の欲だという。下世話に言えば、性の欲求だとか？？だが、ユタヤにはそんなつもりはない。というより、考えたこともなかった。

鉄板の上から上品な陶器の皿の上に料理を移し替えて盛りつけて、満足そうに笑ったカグワが目線をこちらへちらりと寄越した。少女と目が合う。ほんの一瞬のことであるが、ユタヤはその一瞬を見逃さない。にこりと微笑んだ彼女が、その満足感を他の誰より先に自分に伝えてくれているのだと悟って、とても複雑な心境に陥った。

常であれば、ユタヤもそれに小さく笑って彼女の満足感を讃えてやるのであるが、今の彼にはそれができなかった。困ったように目線を泳がせて、俯いてしまう。そのさりげない変化に、カグワが気付いたかどうかは定かではない。

皇太子の世話役であるオレークは「殿下は気が立っておられるだけだから気にするな」と言った。しかし、ユタヤにとっては皇太子の言ったことは精神の不安定な状態で吐き出された戯れ言と流すには重すぎて？？忘れることなどできない。

彼女のことを命に変えても護るのだと己に誓って生きてきた青年の心に、生まれて初めて迷いが生じた。

果たして自分が彼女に尽くす忠誠心とは、正しく清らかなものなのだろうか、と。

## 12、巫女の心

自分の主に対する忠誠心とは清らかなものなのか。

獣人である自分に引け目のある彼が悩む一方で、その主である少女は、その横顔を遠くより見つめて、思う。

???どうも、己の仗身の様子がおかしい。

獣人の主である少女は、即座に気付いていた。

気付かずにおれるわけもない。なにしろ、彼とは十年來の付き合いなのだ。実のところ、彼が厨房の前の廊下を虚ろな眼差しで徘徊しているのを見たその時から、少女はその様子のおかしいことに気がついていった。

だが、カグワのことを何よりも最優先にする彼が、自分の抱えている悩みをそう容易には主に打ち明けないであろうことは彼女も承知していた。??昔からそうなのだ。彼は余計なことを言っ主に心配をかけまいとする。例えば七つの年の頃から仗身としての修行を始めた彼が他の誰よりも苦勞を強いられていたことはカグワとて重々承知だ。二つや三つの年の頃より様々な身体能力の訓練をさせられてきた他の仗身たちと比べ、彼の能力が当初は劣っていたことなど考えてもみれば当然のことだった。それでも彼は泣き言の一つも漏らさなかつた。そして今では、他の仗身と比べてもなんら遜色ない。

そんな彼だから、何を悩んでいたとしても、自分に相談してくることはないだろう。カグワはそう知っていた。西国から遠く離れたこの北の地で、仗身の彼にとって悩みは多くあるに違いない。その内容まではわからずとも、少しでも彼の支えになれるようにいつもの通りに彼に笑顔で振る舞おう。??よもや彼の悩みの種が自分の中

にあるなどは夢にも思わぬ少女は、そう心に決めていた。

料理を終え、一通り厨房を楽しんだカグワは、一度ユタヤを引き連れ自室へと戻った。その時にはすでに、自室で待っていると聞いた皇太子シルディアの姿はそこになかった。恐らくオレークに言われて自分の寝室に戻ったのであろう。待たせてしまったて悪いことをしたなとカグワはあの色素の薄い少年のことを思う。だが、今はそれよりも、目の前にいる長く連れ添った仗身のことを心配だった。

部屋に戻ってから、ユタヤはカグワと距離を取った。カグワが寝台の上に腰掛ければ、彼は離れた窓際に立ち尽くす。恐らく何か一人で考えたいことでもあるのだろう。カグワもあえてそのことには突っ込まずに、ひとまず厨房で汚れた服から着替えることにした。

いつもカグワの服は、服飾を専門とする下働きが用意してくれていた。今も服が汚れたから新しいのを頂戴とカグワが一言言えば、彼女たちが飛んでくることだろう。だが、自ら厨房に飛び込んで自ら服を汚してしまったのに、忙しい彼女たちをわざわざ呼び出すのも気が引けた。ので、ひとまず今日のうちは適当にそこにあるものを着てしまおうと、カグワは部屋に備え付けられた衣装箆笥の戸を開いた。小間使いたちの用意してくれる服は此处ではなくまた別の巨大な倉庫の中にしまわれているのだが、この箆笥の中にも一通りの衣服が揃えられている。カグワはその中から薄手のドレスを一枚取り出して、扉を閉めた。薄手の生地は夜寒いが、布団を被ってしまえば問題あるまい。短絡的にそう考えて、カグワは今纏っている汚れた服をその場にばさりと脱ぎ捨てた。

暑い厨房の中で働く料理人たちは、軽装だ。それに倣ってカグワも上着や羽織ものを脱いでしまっていたために、その汚れた最後の一枚を脱げば下着姿も同然だった。とは言え、この部屋には今自分と仗身しかいないのだし、いいだろうと安易に考えて、カグワは脱



衣した。すると、その脱ぎ捨てられた衣服の音を聞いて顔をあげたユタヤが、大きく目を見開いた。

「???かぐわの君!」

その切羽詰まったような声色に、カグワも驚き振り返る。窓際に立っていた彼と目が合うと、青年は慌てたように目線を逸らして下を向いた。そのぎこちない仕草に、ますます拍子抜けする。

「早く衣服を纏ってください……そのようなところでお召しかえなさいますな!」

「え? ええ……」

カグワは瞬きながらも、とりあえず言われた通りに箆笥から取り出したドレスを被る。頭を出して腕を出して、衣服の皺を伸ばして整えながら、下を向いているユタヤの方をこそっと伺った。ユタヤは困惑しきった様子で目を泳がせている。

「……急にどうしたのよ」

「……どうしたもこうしたもありますまい。着替えるのであれば、いつものように服飾の小間使いを呼んで他の部屋へ行くか、あるいは最低限そうおっしゃって下されば私の方が部屋を出ます」

「そんな今更気を使うような仲でもないじゃない。別に真っ裸になつてるわけでもあるまいし……」

カグワは小さく呟いて、ぱぱっとドレスをはたくとベッドの上に腰掛けた。さすがに真っ裸になるのであれば最低限の礼儀作法として互いに気も使うが、下着姿ぐらいではなんのそののである。カグワは脱ぎ捨てて床においた汚れた服を拾い上げると、それを膝の上で畳んだ。ユタヤは依然として苦い顔をしている。

「少しは羞恥を持って頂かないと困ります」

「なにを今更……後宮にいた頃は、一緒に川で褌もしたじゃない。それこそ真っ裸で」

「何年昔の話だと……しかもあの後、私は多方面からこつてり叱られたんです」

「そうなの? 私はロマーナに怒られただけだったわ」

懐かしいなあと過去を思い起こしてカグワは笑う。

あれはいつの頃のことだろう。ユタヤが後宮にきたばかりの頃のこと、ただひたすら川の冷水に浸って巫力を蓄えるという修行が辛く、少しは気が紛れないだろうかと思つてユタヤを誘つたのだ。まだ後宮の常識に疎かつたユタヤは主である聖女に誘われて断れるわけもなく、己には何の意味もなさない修行に付き合つたわけである。

「あれはまだ男も女もなかつた幼き頃のことです。けれど今は違います」

「違わないわよ。あの頃から私たちの関係性は何も変わつてないわ」  
「違います。あの頃私は八つ、貴女には僅か五つだった。あれから十年の月日が流れました」

ユタヤが渋い顔をして言うので、相変わらず真面目なんだから、といつもの小言と同じように笑つて流した。カグワは畳んだ服をベツドの上に置いて立ち上がる。少女は窓際に立っている青年の隣に並んで、小高い窓枠に腰掛けた。

「それだけ長い付き合いってことじゃない。私は気にしないわ」  
「かぐわの君が気になさらなくとも、私が気にします」

またそんなことを、と笑つてカグワは窓枠に腰掛けたまま足をばたばた泳がせた。が、隣に立つユタヤの目を見て、思わずその足が止まる。彼はまるで追いつめられたみたいに、必死で、縋るような目をしていた。それはいつものような苦言を呈する眼差しではない。???どうにもこうにも、本当に様子がおかしい。

「???どうかしたの?」

カグワは、そう問うたところでユタヤが何も答えてはくれないであろうことを知りながら、問いかけた。案の定、ユタヤは「別にどうもいませんが」と口ごもる。しかし、その眼差しは明らかに妙だ。まるで何かを恐れるかのような、怯えた目をしている。

「ずっと他国に囚われたまま……疲れてしまったのかしら」

適当に言い繕って、カグワは隣に立つ青年の顔に手を伸ばした。いつもの通りに彼の顔を撫でる程度の接触を試みると、何故だろう、ぴくりとわずかにユタヤが身を引かせた。まるで躊躇するようなその動きに、カグワは面食らう。今まで一度だって、彼に接触を拒絶されることなんて、なかったのに。

「……ゆたや？」

ユタヤは何も言わなかった。ただ拒絶するような所作をしまったことを後悔するように悲しい顔をして、下を向く。そして申し訳なさそうに首を横に振った。「なんでもない」という意味なのだろう。

(なんでもないわけが、ないのに)

彼に触れるはずだった手のひらを引っ込めて、カグワは自分の胸の前を押さえた。なんとも妙な空気だ。気まずい雰囲気はその場を支配していく。

と、それをまるで見計らったかのように、突如扉をノックする音が響いた。

「??？失礼します、ユーリです。夕食の用意をしに参りました」

その音と声が、いい具合に気まずい雰囲気をかき乱す。カグワは「はい」と不自然なほどに明るく答えて、窓枠から飛び降りた。

ユタヤもどこかほっとしたように外を向く。

丁寧にお辞儀をしてから入室してきたユーリは、二人の間に流れた気まずい雰囲気には全く気付いていないようだった。取り繕えたことに安堵しながら、カグワは「あ」と思い出したように声をあげる。

「そつだ、きつと今頃シルディアも夕飯を食べ始める頃よね！」

その台詞が少し芝居じみていることに、恐らくユタヤは気付いているだろう。カグワがこの気まずい空気を流そうとしているのだと、彼もきつとわかっている。

「ええ、そろそろ殿下のお部屋の方にも夕食の当番をしている小間使いが向かっている頃ではないかと」

そんな主従の動きに気付かぬユーリは、妙にはしゃぐカグワを見て笑って答えた。彼も、料理人づてに聞いたのかあるいは他の小間使いから聞いたのか、カグワがシルディアの夕飯を作る厨房に籠っていたことを知っているに違いない。

「じゃあ、ちよつと私、シルディアの所へ行つてくるわ！ もしも味が悪くて料理長が怒られてしまったら可哀想なもの。帰ってきたら、夕飯を食べるから！」

カグワがそう言うと、ユーリは「わかりました」と了承した。

「ではそれまでに夕飯の支度は整えておきますね。どうぞ行つてらっしゃいませ」

軽く会釈したユーリのその後ろに、窓から外を眺めているユタヤの後ろ姿が覗く。カグワはなんとはなしにちらりと彼の後ろ姿を見やっつて、それから外へと飛び出した。ユタヤは一度も、彼女の方を振り返るうとはしなかった。

自室を飛び出したカグワは、そのまままっすぐシルディアの部屋を目指した。この皇宮に囚われ、もう大分日も経って、この道にも慣れたものである。それにしても、暖房器具のない廊下は、寒い。カグワは薄手のドレス一枚で部屋を出てきてしまったことを後悔しながら、肌寒い廊下を早歩きで抜け、まっすぐ皇太子の部屋のある階へと向かった。

部屋に残してきたユタヤの様子が気にならないわけではないのだが、だからと言って引き返すわけにはいかない。引き返したところで彼にかける言葉も見つからない。それに、シルディアの料理について説明をしなくてはいけないことは事実なので、まずは彼に会いに行かなくてはならなかった。ユタヤについては、それから考えよう。

皇太子の部屋の階にある十数個の部屋は、ほとんど皇太子シルディアの私室であった。寝室の他にも遊戯室や、食堂、ホールや公務室などもある。しかし、寝食を含めた大概の生活が広い寝室一つで賄えてしまったため、シルディアは他に用のない場合ほぼ一日の全てをその寝室で過ごしていた。と、いうことも、すでにカグワは知っている。

夕日が空を赤く染める頃、そろそろシルディアも夕飯を食べる頃合いであろう。それはそれは立派な食堂を持っている彼であるが、恐らく今日の夕食もいつも通り寝室の中で取るはずだ。カグワは食堂の横を素通りして、まっすぐ廊下の突き当たりにあたるその寝室の扉の前へと歩を進めた。そして辿り着くと、とんとん、とその巨大な扉を叩く。

「シルディア？ カグワです。入ってもいいかしら？」

扉に顔を近付けて中に聞こえるようにと声を張り上げると、すぐ

さま内側から返事があつた。

「いいよ。勝手に入ってきて」

はつらつとした声だ。機嫌がいいのだろうか。

了解を得たカグワはゆっくりと巨大な扉を開くと、部屋の中へと足を踏み入れた。

「お食事中だったらごめんなさい。どうやら昼間、私の部屋に来てくれたみたいだけど、丁度その時いなくて。というのも、実はね……」

貴方が今食べてるご飯を作っていたのよ、と続けようとして、カグワは口を噤んだ。確かに部屋の中から声はしたのに、彼の姿がどこにもない。それどころか、寝室に置かれた食卓の上には途中まで夕食の用意をした痕跡があつたが、それだけであり、夕食の用意をしてくれるはずの小間使いの姿さえ見つけられない。

「……シルディア？」

一体部屋の主はどこにいるのだろうかと部屋の中を見渡していると、「ちよつと待っていてくれ」という彼の声が響いた。その声は、どうやら部屋の中央に置かれた寝台の上から響いている。その方向へちらりと視線を向けると、寝台には天蓋から紗幕が完璧に下りており、その中が見えないようになっていた。彼はあの中にいるに違いない。

夕食の準備すら途中にして、小間使いは一体どこに行ってしまったのだろうかと思議に思いながらも、カグワはその寝台へと近付いた。とりあえず彼がそこにいるのなら、事情は彼から聞けばいい。

そう思って彼女は寝台へと近付いて、しかしふと、足を止めた。部屋に入ってきた時は気付かなかつたが、寝台の方へ近付くと、徐々に聞こえてくる音がある。??ぎしぎしと寝台の軋むような音と、そして若い女の吐息のような溜め息のような妙な声だ。

なんだろう、とカグワは首を傾げた。「なにしてるの」と言つて寝台の方を覗いてもよいものか、いやしかしシルディアは「ちよつ

と待つてて」と言ったのだからそれに従い待つべきなのか。迷いながらも、一步一步カグワは寝台の方へと近付いて行く。近付くにつれ、女の声が鮮明に聞こえるようになった。吐息混じりに「殿下」とシルディアを呼んだり、「もうやめて」と否定を述べたりするが、あまり嫌がっているようには聞こえない。まるで若い女が媚を売るような声である。

が、カグワが寝台のすぐ傍までくると、その声が止まった。代わりに、喚いていた女が走り回った後のように息を切らしている。一体何が起こっているのだろうか、カグワがついに紗幕を開こうかと手を伸ばすと同時に、内側から紗幕が開かれた。

しゃつという軽快な音とともに、中から現れたのはこの部屋の主である、シルディアだ。彼はどことなく乱れた金の髪をかきあげた。どことなく艶っぽいその仕草に、嫌な予感が走る。

「お待たせ。悪いね、女中が本気になるものだから」  
「本気？」

彼の言葉の意味がわからずに問い返すと、シルディアは不適に笑んだ。そして、紗幕をさらに大きく開くなり、自分の後ろ、寝台の上に乗がっている女に向かって声をかける。

「ほら、立て。西国の巫女君の前で失礼だと思わないのか」

カグワはその女の姿を見て、動転した。

以前、シルディアの部屋を訪れた時にも寝台の方から出て来た女中であつた。シルディアが「暇つぶしに遊んでいた」と言ったあの女中である。

女の纏っていた衣服はあられもなく乱れ、あちらこちら肌が露出している。特に下半身の乱れがひどく、大きく開脚された下肢の間まで見えていて、当然他人のそんな箇所を見たことなどなかったのがカグワは慌てて視線を逸らした。

女はゆっくりと起きあがると、乱れた服を必死で整えながら、寝台から下りる。よろよるとその足取りはおぼつかない。

「夕飯の支度は後でいい。今は席をはずせ」

皇太子にそう命じられ、「はい」と女は弱々しく頷くと、はあと大きく深呼吸してから、やはりおぼつかない足取りで部屋を出て行った。その後ろ姿を見送りながら、ときどきとカグワの鼓動は波打って止まらない。

一方のシルディアは涼しい顔をしていて、誰もいなくなった寝台の上に腰掛けるとすらりと足を組んだ。彼は乱れた薄色の金髪を撫でながら、こちらを見上げてくる。

「話を途中で遮ってしまったね。俺が君の部屋を訪れた時、いなかっただのは、何をしていたからだって？」

「え、と……貴方の夕飯になる料理を作っていたからだけ……」

だから少々味が悪くても許してね、と茶化しに来たつもりが、そんな文句は全てどこかへ吹き飛んでしまっていた。そもそも夕飯の準備がまだ整ってもないのに、そんな話しても仕方がない。

すっかり動転しきったカグワの様子を見て、シルディアはくすくす笑った。彼は澱んだ青い瞳を細めて、少女を見上げる。

「さっきの女が気になる？　大丈夫さ。快樂が行き過ぎて腰砕けになっただけだ」

「え……」

「さすがに今回は意味がわかるだろう？　それとも巫女を育てる後宮では全く教わらないのか？」

そんなことはないけど、とカグワは口籠った。

実際、さすがのカグワにも、今回は彼が一体何をしてたのか予想がついた。女ばかりの後宮ではあるが、教養として命の生まれる過程は教わる。だが、だからと言って当然その現場を見たことなどなく、ましてや経験などないわけで、動転していた。

そんなカグワの心を読んだように、シルディアが呟く。

「知識としては知っているが、実際にどのようなものかは知らない、といったところか。??そうだ俺が教えてあげようか」

「え?」

どうということ、と尋ねるが早いか、シルディアに腕を引っ張られ



てカグワはバランスを崩した。そのまま転がるように寝台の上に押し付けられて、思わず目を瞑る。が、思ったほどの衝撃はなく、いかに彼の寝ている寝台が柔らかな物であるかを知った。

目を開くと、自分の上に覆いかぶさるようにして、シルディアが寝台の上に四つん這いになっていた。さらりと金髪が流れて彼の顔に影を作る。

「カグワは十五だったけど……まだ幼いが、できない体の作りではない」

「なに……」

「まあ、色香はないが、顔立ちが悪くないし、なにより巫女であるという事実がそそるじゃないか」

彼の言う言葉の意味のほとんどを理解できずに、カグワは目を白黒させた。ただ、彼によって体の自由を奪われて今は逃げることは愚か動くことすらままならないという事実だけは、理解できる。シルディアはそんな少女を見下ろしてくと笑った。

「怖がることはないよ……俺は幼少期から、この行為の精緻なやり方ばかりを教わった。だからさつきみたいに女を腰砕けにするなんて造作もないことだ。それは例え純潔の少女が相手でも変わらない」

いい思いをさせてやる、と彼は尚笑うが、ふと、その笑顔の中にカグワは影を見た。なんだろう、まるで彼自身が闇に飲み込まれてしまっているみたいだ。その闇に気付いた瞬間、カグワは抵抗することをやめた。少年は、影の中で囁くように、言う。

「皇宮の外では連日人が死んで行く。奴らは望まずして命を落とすて行くんだ。それなのに、皇宮の中に生まれた俺は、命を作れと言われる。連日連日、女をやりたい放題だ。女どもも喜んで俺に組み布かれる。おかげでどんどん行為ばかり上達していくよ。だからカグワも安心していい。君は初めての行為にして快樂に溺れられる」

言って、シルディアはカグワの纏っている薄手のドレスに手をかけた。着衣の楽な衣服だった故に、簡単に脱げてしまう。その下か

ら肌着が覗いた。カグワはその慣れた手付きでなされる一連の動作を、どこか俯瞰した心地で見ている。??彼は一体何をしている? 「巫女は純潔でなくてはいけないとか、そういう決まりはある?」 「決まりは……特にないわ。純潔を奪われることもないけれど」 「なら、今夜初めて奪われる。いいじゃないか。その相手が隣国の皇太子だなんて、派手な醜聞だ。国際問題になるかな?」

「さあ……私にはわからない」

「国際問題にはならなくとも、君の仗身は怒るだろうな」

「……ゆたやが?」

「そうだ。俺が君の肌に触れて穢したと知れば、激怒するに違いない」

「ゆたやは……」

言つて、カグワは別れ際、こちらの方を振り返ろうともしなかった彼の顔を思い描いた。今、彼が何を悩んでいるかカグワは知らないが、彼の忠義はとてつもなく厚い。確かにカグワが泣き叫んでシルディアに無理矢理組み敷かれたのだとしたら、彼は激怒するだろう。だが、カグワは自分の上に覆い被さつて次々に衣服を剥いでいくこの男に対して、何故か全く抵抗する気が起きなかつた。

「ゆたやは……怒りはしないわ。私が貴方を受け入れたのだとすれば」

そう呟くと、シルディアの動きがぴたりと止まった。彼は表情を失い、まっすぐとカグワを見下ろした。そして、手元からドレスを取り落とす。ぱさりとそれが寝台の毛布の上に重なった。

「……受け入れるのか?」

「拒絶する理由が見つからないもの」

「……だとしたら、仗身はますます怒るだろう。いや、怒るのではなくやりきれない気持ちに苛まれるかな」

「どうして」

「どうして、と聞くか。仗身が仗身なら、主も主だな。君たちは立派な男と女でありながら、傍に寄り添つて、何も感じないのか」

「だって、それが私たちにとっての日常だもの。男だとか女だとか、巫女だとか仗身だとか、そんなもの、何一つ関係ないわ」

「君がそう思っていて、向こうはそうじゃないかもしれないよ」  
吐き捨てるように言って、彼は少女の体を撫でる。カグワはそれにすら反応せずに、ただ茫然と目の前の男を見つめていた。彼の瞳の奥で時折揺らく「闇」の存在が気になって仕方ない。彼は一体どうして、こんなことをしているのだろう。これは命を育むための艶かしい交わりなどではない。??まるで何かから逃れるために必死に縋るような、そんな行為だ。

体に触れても何の反応もしないカグワを見て、シルディアはふと動きを止めた。そして、首を傾げる。

「君は……本当に不思議だね。拒絶もしなければ受け入れもしないのか」

「……どうしていいかわからないから」

「突然男に押し倒されたりなんかしたら、大抵の女は恐怖から拒絶するか、あるいは望む所と喜ぶ場合もあるけど……そのどちらでもないんだね」

「だって私にはこの行為の理由がわからないんだもの。……貴方が命を宿すために連日女を組み敷いているのだとしても、その相手が私では意味がないわ。私は西国の巫女だから」

皇太子には跡継ぎを作る義務がある。それならそのための女が必要だ。それは少なくとも、カグワではない。西国の巫女との間に子供が生まれたとて、それは北国の世継ぎにはならない。故に、この行為は無意味だ。それはシルディアとてよくわかっているはずなのに。

「喜びはしないわ。この行為では何も生まれえないから。恐怖もしないわ。怯えているのはシルディア、貴方の方だから」

「なに……?」

カグワはゆっくり腕を持ち上げて、自分の上に被さっている彼の顔を、そっと撫でた。その瞳は、何かに怯えている。何か??己の

中に潜む「闇」の存在に怯えているのだろうか。

「貴方は……救いを求めているんだわ。闇に飲まれるのが怖くて、誰かに縋りたい。でも、その縋り方がわからないのよ」

シルディアは驚いたように目を見開いた。彼は触れていたカグワから手を放し、起きあがる。そして目を丸くしたまま、カグワを見つめた。

「だから、夜な夜な女を組み敷くのね。跡継ぎが必要だからと理由付けして。本当は、別に跡継ぎなんてどうでもいいのよ。ただ、人肌が恋しいの。誰かに抱きしめて欲しいのよ」

シルディアが退いて体の自由がきくようになり、カグワもゆつくりと起きあがる。脱がされたドレスは寝台の横に落ちてしまっているが、気にしない。下着姿のまま、前へと身を乗り出して、彼の顔を覗いた。

「シルディア、貴方は愛が欲しいのね」

「愛？ 愛なんて、俺は……」

「このまま貴方に組み敷かれて純潔を捧げるのは簡単よ。別に私はそんなものに固執していないもの。まかり間違って貴方の子を宿したっていいわ。私は巫女だから、新しい命を厭う理由もない。だけど、それは貴方のためにならない」

「俺のため、だと……？」

「お可哀想な皇太子殿下、一人で夜を越えて、たくさんの不安を抱えて。何も知らない数多の女たちにそうやって同情されて、体を捧げられて、それで満たされる？ いいえ、そんなはずがない。だって、同情は愛ではないから」

シルディアは首を横に振った。聞きたくない、と耳を手で押さえる。シルディアの細い体が、怯えるように震えた。カグワはそんな彼の背中を撫でる。

「貴方は本当は、誰かに愛してほしいのね。皇太子だからともてはやされて、誰も自分のことなんて考えてくれない。ただ『力』があるからと軍からは武器のように扱われ、何でも思うがままに、とこ

の皇宮に幽閉される。女たちは喜んで体を明け渡すけれど、それは貴方を理解して心から愛しているからではないわ。貴方が皇太子だからよ」

「……やめろ」

「誰も貴方のことをわかつてくれない。だからどうやって縋っているのかもわからない」

「やめろ！ お前にだって、わかるものか！」

シルディアは金切り声で叫んだ。きつ、とカグワのことを睨みつけて、頭を抱える。まるで何かに追いつめられた小動物みたいに、体を丸めた。かと思えば、今にも泣きそうな顔で、まくしたてていく。

「お前にだって、わかるもんか……！ 俺には聞こえるんだ、民の声が……。死んで行く、人間たちの声が……！」

カグワはかつて、シルディアの語った言葉を思い出した。

??見たくないのに見てしまう。聞きたくないのに聞いてしまう。やりたくないことをやってしまつて、それを止めることができない。

彼はそれを、『力』の暴発と呼んだ。確かに『力』の成せる技の中には、他人の心を読むものや、未来や過去を見るものがある。彼は自分の『力』を制御できずに、死人の心を読んでしまう。

「誰も彼もが、皇太子に、俺に救いを求めてくる……！ 死んだ人間の魂が、夜な夜な俺に襲いかかってくるんだ！ 助けてくれ、救ってくれ皇太子様と！ 御慈悲を、と！ まだ生きていたい、死にたくない、やり残したことはたくさんある……！ 命を超越せ、命を超越せと……！」

「ただ俺にはどうすることもできない、と彼は言った。聞こえるだけで、どうすることもできないと。」

「俺は皇太子だ……人並み外れた『力』も持っている……だけど、

何もできやしないんだ！ 人の命を救うことも、戦争を止めることも……！ なのに誰も彼もが俺に救いを求めて、死んだ後にも彷徨って俺のところへやってくる。誰一人、俺を救ってはくれないのに……！」

嗚呼、そうか、とカグワは彼を見下ろして氷解した。

この可哀想な少年は、愛を知らないのだ。親の愛を知らない。兄弟の愛も知らない。無償の愛を知らない。皇太子、ともてはやされることは、愛ではない。

「シルディア……」

今にも泣き出しそうな彼の背中を撫でて、次には綺麗な金髪を撫でて、カグワは優しく囁いた。彼の抱える闇を溶かすことができるのは、無償の愛でしかない、思ったから。

「キスを、しようか」

え、と拍子抜けした声がして、彼は顔をあげた。実年齢よりもいくつも幼く見えるあどけない眼差しで、カグワのことを見上げる。カグワはにこりと笑って、彼の髪を撫でた。そして、その綺麗な前髪をかきわけて額を出す。

「寝る前に、嫌な夢を見ないように。見たくもないものを見てしまわないように。聞きたくないものを聞かないように。おまじないのキスよ」

そう呟いて、カグワは彼の額にそつと唇を押し付けた。まだ記憶も定かではないほど昔、幼少の頃に、母が自分にそうしてくれたみたいに。また、後宮にきた後も、母代わり姉代わりとなったロマーナが毎晩そうしてくれたみたいに。

不思議なもので、子供はこれだけで安心して夜を過ごせるのだ。そして隣に母が寄り添って寝てくれるだけで、嫌な夢の一つも見ない。それは巫力の修行にはならないが、幼子にとっては重要だった。そしてこの少年は、幼い頃から無償の愛を経験せずには育つたために、夜な夜な生まれ持った強大な『力』の働きで、未来の夢や過去の夢、そして見知らぬ人間の夢にまで同調してしまうのだろう。やがて、

人の苦しみばかりを吸収してしまう。

「ね？ これでもう大丈夫。一緒に寝ましょう？」

シルディアはまるで憑き物が落ちたかのように邪気のない顔をして、目をぱちくりさせている。カグワはもう一度丁寧に彼の額に口付けて、にこりと微笑んだ。寝るにはまだ早い、ようやく日の落ちた頃だけれども、いいだろう。夕飯も食べていないわけだが、きつと朝には空腹で健康的に目が醒めるはずだ。

カグワがころりとベッドの上に横になって手招きすると、それに誘われるようにシルディアもころりと横になった。先刻カグワを組み敷いて衣服を脱がして行った時の彼が嘘のように、大人しい。カグワの言葉に逆いもせず、寝台の上に転がった。

それでもまだ不安な顔をする彼を、カグワは転がったままぎゅつと抱きしめた。母親が子供を抱くように、彼を胸に抱いて、落ち着けるように背を撫でる。すると、途端に彼の顔から不安の全てが溶け出して行くのがわかった。瞳の奥に潜んでいた『闇』も、今はもう、見えない。

安心しきった子供のように、彼はやがて穏やかな眠りの中へと落ちて行った。さすがに彼が何の夢を見ているのかは、カグワにもわからない。だが、その穏やかな寝息から、悪夢にうなされているわけではないことは明らかだった。

気付けばいつのまにやらシルディアはカグワの肌着の裾を掴んで離さず、そのまま寝入ってしまったようだった。これではそつと彼を置いて帰ることもできない。

(……まあ、いいか)

その大人しい寝顔を見下ろして、カグワはそう思った。夕飯を用意して置いておいてくれているはずのユーリには申し訳ないが、今日はこのままここで寝てしまおう。そして彼と一緒に朝を迎えよう。そうすればきつと、彼の中の闇も完璧に浄化されるはずだ。

そう結論つけて、カグワもまた、瞑目した。やがて緩やかな時の流れの中で、睡魔がゆっくりと押し寄せてくる。

カグワは穏やかな眠りの中へと埋没していった。

少女はその頃、この北の大地でどのような動きがあったのか、何も知らない。

北の軍国が、どのように駒を進めているのか、何も知らない。

どれだけの人間が北の国で殺されているのか、何故殺されるのか、何も知らない。

そして、今頃自室の中で、仗身である青年がどのような想いを抱いて彼女を待っているのかということさえも、何も知らずじまいであった。



## 14、世話役の仕事

この世界を支配する全四力国の中で、極寒の国と呼ばれる北国ラウグリア帝国。その歴史は古い。しかし、千年以上もかけて守り続けて来たという皇室主権の歴史は、今、打ち崩されようとしていた。

現皇帝であるラプソディアは長年病に臥せっており、とても人前に立てるような状況でさえなく、当然国政の指揮など取れるはずもない。代わりに玉座に座るのはその第一子であるシルディア皇太子殿下だ。しかし、彼も自身で政権を握ることはなく、国家の象徴として君臨するのみであった。??実際に政権を握っているのは軍隊だ。

北軍は、東国ヤンムの国土をその占領下とし、次に西国エウリアの国土をも手に入れようと企んでいた。目指すは世界制覇だ。エウリアさえ手に入れれば次は南下し、南国アズニーにも戦をしかけるであろう。

ゆえに、西国の巫女を攫い、「東国を北国ラウグリアの一部と認める」という交渉を持ちかけたのも、その口実でしかなかった。最初から西国からの許可をもらおうだなんて思っていない。西国が巫女を攫われたことに反発し、北国へと戦を仕掛けてくればそれでよかった。それを引き金にして、北と西の戦争が勃発する。

??西国へ文書を届けた北国の軍が、皆殺しに遭った。喜べ、これで西への攻撃の動機が立つぞ。

軍の最高権威であるスターリン將軍はそう語った。彼は己の軍が全滅したことさえ、戦の引き金になるのなら「喜ばしい」という。すなわち、最初から西国へ届けられた北軍は捨て駒だったのだ。また、軍人が命を落とした。しかしそれが丁重に弔われることはない。

彼らの命は捨てられる??。

皇太子シルディアの世話役であるオレーク・ナイザーは、仰々しいほどの溜め息を吐いて、狭い休憩所に置かれた椅子に深く腰掛けた。知らず知らずのうちに疲労を溜めていたのであるうか、体が重い。北国の冷気から皇宮を守る二重の窓が、彼の吐きだした息で曇る。青年は無言のまま、窓辺に寄りかかった。

西国の巫女がこの北国へと誘拐されてきてから、一月が経とうとしていた。しかし、この一月の間、巫女は皇宮内での自由を許されており、奔放に暮らしている。他国へ誘拐されたのだという事実さえ、忘れてしまいそうなほどに、彼女は自由奔放だ。だが、しかし??そろそろ軍が動き始める頃であろうとは思っていた。オレークは窓から見下ろした先に見える処刑場を眺め、そこに並んだ国賊たちを見下ろす。軍は、確実に、動き始めていた。

実際に、国内の反対勢力の公開処刑が始められたのは今から十日ほど前のことだ。「国賊」と呼ばれ処刑されるのは、軍に従わぬ軍人や貴族の人間だった。これ以上の戦を望まない保守派の者共は、次々に王宮内に作られた処刑台の上で、首を落とされた。そしてこれは他の軍人や貴族たちへの見せしめでもある。それは、北軍の絶対的な権力に逆らうべからずという圧力であった。

そしてその北軍にとって、「鍵」とも呼べるのが皇太子シルディアの存在である。軍事力では適わぬ不思議な『力』を持ったこの少年を、軍は恐れ、だが武器として大いに利用し、活用していた。そのために重要となってくるのが、皇太子の世話役として始終彼に付きつきりになる、オレーク・ナイザーの存在だ。軍は何かとオレークを呼び出し、彼に指示を下した。そもそも、オレークがシルディアの世話役となったのも、軍からの上意である。

オレークは寒空を見上げ、回想した。??あれは、丁度今から三

年前のこのような寒い日のことだった。

皇室の小間使いとして生まれ育ったオレークは、他国からの迎賓客をもてなす小間使いとして平和な日々を送っていた。そんな彼の平穩に突如変化が訪れたのは、今日のような冬の始まりのことであった。

??オレーク・ナイザー。皇太子シルディア殿下の世話役に任じる。

突然彼を呼び足したのは、軍の最高権威、スターリン將軍である。当然軍の最高権威になど逆らうことのできない一端の小間使いに下された命令は、破格の昇進であった。

オレークは、素直に、仰天した。

皇家の人間の世話役と言えば小間使いの中では最も位が高い。貴族の位と照らし合わせてみれば、その権力は侯爵ほどにも値する。今までしがたい下吏の一人でしかなかったオレークにとっては、有り得ないほどの出世であった。

しかし、実際のところ、その昇進は手放しに喜べるようなものでもなかった。

今や王宮の隠し玉とも、北国ラウグリアの兵器とも呼べるシルディア殿下の世話役は、只人には務まらぬ。彼の存在自体が兵器と呼ばれるには、それだけの理由があるのだ。実際にオレークも、皇太子の世話役となってから精神や体を病んだ小間使い仲間を幾人も知っていた。恐らくオレークの前任の世話役も、気の病が原因で辞任したのであろう。

??何故私のような下位の人間に、そのような大役を。

命令は上意である。決して逆らうことなどできない。そうわかっ

ていながらも、問わずにはおれなかった。まさか自分にその白羽の矢が立つとは思ってもいなかったから。

??オレーク・ナイザー、お前は下位の人間でありながら、その学識は高く、特に他国の迎賓客をもてなすためにいくつもの言語を扱えると聞いた。それは努力の賜物でありながら、天性の聡明さも手伝ってのことであろう。我々は、必ずしも上位の人間を皇太子殿下の世話役にしたとは思っていないのだ。それよりも能力の高い人間を、殿下の傍に侍らせた。

お前の他にはおらんだ、と將軍直々に言われては、拒否することなど当然できようはずもなかった。「ありがたいばかりです」と頭を下げて、オレークはその日からシルディアの世話役となった。

??あれから、三年もの月日が流れた。

これは、皇太子殿下の世話役を務めた年月としては最長記録なのだという。それまでの最長記録がたったの一年だったことを思えばその三倍もの年月を超過したこととなり、華々しい記録であったが、とは言え、たった三年だ。それはお世辞にも長いとは言えない、僅かな時間の経過だ。

そして、西国の巫女を誘拐してから一月。動き始めた軍は、事の詳細を教えるために、世話役のオレークを呼んだ。

「そろそろ西国への進軍の準備を始めようと思っている。故に、反対勢力をあと三日で全て始末するつもりだ。その数ざっと百には満たぬ程度だが……時に、皇太子殿下の具合はどうだ」

將軍は、オレークにそう問いかけた。その質問の意図は、オレー

クもよくわかっている。皇宮の傍で人の処刑などをして人命を奪う場合、皇太子シルディアへの影響が懸念された。

皇太子シルディアは、人の負の感情、恨みや怒り、悲しみ、そして特に人の死に過敏だった。というのも、死んだ人間の魂や心を、彼の『力』は吸収してしまいうらしい。かつて皇太子は「人が死ぬと、その死んだ魂が自分の元へ集まってくるんだ」と語った。オレークは『力』を持たぬためにその感覚を理解するのは難しい。だが、確かに皇宮周辺で人が死ぬと、皇太子はたびたび情緒不安定になった。そしてその不安定さが極限にまで至ると？爆発する。『力』が暴発するのだ。自分では『力』を押しとどめられなくなり、『力』によるたくさんの障害が勃発した。

「今の所、まだ『力』の暴発の兆しは見えませんが、情緒不安定であることには間違いありません。一度に百近くの命が死ぬとなると……暴発は免れないかと」

「やはりそうか……ならばなるべく分けて殺すでしょう。その都度女でも抱かせて精神を落ち着かせる。見目麗しい皇太子に身を捧げたいという女はいくらでもいるはずだ」

オレークは「御意」と言っ下を向いた。

実際、女を抱けばシルディアの不安定が少しだけ改善されるのは事実であった。だが、そんなものは気休めにしかならない。結局のところ、そうして気を紛らわせているだけのことであり、そんなものでは気が紛れなくなつた時が最後、堰を切つたように暴発する。

「しかし、今回はよく保っているな……。処刑はすでに十日以上続いている。常であれば、とつくに暴発が起こってもおかしくない頃なのに」

將軍の呟きに、オレークは頷いた。

その通りであった。確かに最近の皇太子は不安定であり、度々周囲に当たり散らしてはいるものの、それだけだ。実害はない。

「……おそらく、西国の巫女君の影響ではないかと」

オレークはぼつりと呟いた。脳裏に浮かぶ、黒髪の少女はいつで

も笑顔だ。シルディアと同じ『力』の持ち主であり、国の象徴的存在であるというが、まるで彼とは正反対の少女であった。

「巫女君がお越しになってからのこの一月、殿下は比較的落ち着いておられます。時折不安定になることもありますが、巫女と過ごすことによつてしばし解消されます。それはもう、女を抱くような気休めの何倍もの効果があり……」

「ならばいっそ、巫女を抱かせる」

將軍の言葉に、一瞬オレークは言葉を見失った。

「抱かせる」などと將軍は軽々しく言うが、相手は隣国の宗教的最高権威、巫女の君である。そこらの侍女を抱かせるのとはわけが違う。??数日前のことであるが、実際に、シルディアの寝台から巫女とシルディアが二人で出てきたことがあった。オレークはシルディアが間違いを起こしたのではないかと、巫女の君に暴行を加えたのではないかとそれはもう顔色を青くしたが、シルディアに聞いたところ、「交わつてはいない」と言う。では一体どうして二人で褥を共にしたのか。問うと彼は、「性交なんてするよりもっと、心地良い経験をした」と笑った。具体的に何をしたのか、オレークは知らない。だが情緒不安定だった彼がすつきりとした顔色をしていたことと、隣国の巫女を蹂躪するような事態は避けられたのだという事実を知つて、安堵した。??だが、それをまさか將軍が望むとは。

「將軍ともあるう方が、とんでもないことをおっしゃいますな。…

…そのようなことを皇太子殿下が行えば、国際問題となります」

オレークが優等な答えを示すと、くくと將軍は喉の奥で笑った。

「お前こそ馬鹿げたことを言うものじゃない。とうに国際問題などという枠組みは越えているだろう。これから我々は戦をするのだぞ」

そう言われてしまつては、納得せざるを得ない。確かに巫女を誘拐し、戦を仕掛けようという今、もはや巫女の貞操など、どうでもいいことなのかもしれない。

「もとより巫女を返そうなどとは思っておらん」

將軍は言う。神の代弁者である巫女も、彼にとっては国策の道具ではない。

「西の奴らの縋る神の遣い、巫女の首を我らはいずれ打ち落とす。??それがこの戦の幕開けだ」

さらりと言い放つ彼の目に迷いはなかった。巫女の命の奪われる日はそう遠くはなさそうだ。

そういうことか、とようやくオレークは軍の策略を理解した。

軍が皇太子に命じて巫女を誘拐させたのは、宗教国家である西国の心よりどこを奪うためだ。そのために、国家権力を握る西国の「王」を誘拐するのでは意味がなかった。神に最も近い存在である「巫女」を、そして西国一の「力」を持つ「巫女」を、北軍が奪って殺すことに意味があった。北軍は神さえ殺せるのだと、その圧倒的な「力」を西へと見せつけて戦意を喪失させるためだ。

しかし、もしもここにきて巫女カグワが殺されてしまったら??

シルディアはどうなってしまうのだろうか。

オレークの心の中に、不安がよぎった。

將軍の元を離れ、皇宮へと戻り、小間使いたちの使う休憩室へとなだれこんだオレークは、その窓辺の椅子に腰掛けてぼんやりと外を眺めていた。

シルディアの世話役となり三年、たかが三年であるが、王宮内で自分は彼との付き合いが最も長い。だからこそ、わかるのだ。今のシルディアにとって、あのちっぽけな少女がどれほどの支えになっているのか??オレークにはとても代替できない、輝かしいほどの支えだ。

「??オレーク!」

きいと音をたてて、休憩室の扉が開いた。飛び込んできたのは、

彼の弟分である、ユーリという小間使いだ。

オレークはゆっくりと顔をあげて、彼の方を向いた。昔、まだオレークが迎賓客の小間使いをしていた頃は、毎日のように傍にいて一緒に仕事をしたものだった。オレークよりも五つ年の若いユーリは、オレークにとっては本当の弟も同然だった。

「うわあ、此処でオレークに会うなんて久しぶりだなあ……！ 大丈夫か？ 疲れてるみたいだけど」

ユーリもユーリで、オレークのことを本当の兄のように慕ってくれている。世襲で代々賄われる皇室の小間使いたちは、皆親戚のよくなものだ。オレークはこの少年のことを、まだ二足歩行もできないほど幼い頃から知っていた。

久しぶりに会った弟分を前に、思わず笑みが漏れる。オレークは彼の肩を労うように、はたいた。

「そういうお前も疲れているんじゃないのか？ あのお転婆巫女君の相手は大変だろう」

「まあね。でも俺が困るようなことはしないし、毎日毎日なんだかんだ楽しいよ。今日は皇宮の中庭で、雪のオブジェを作るんだって張り切ってた」

まださして積もってもないのにね、とユーリは楽しそうに笑った。そういえば、ラウグリアの首都では、先日大雪が降ったところであった。とは言え、その後は晴れの日が続いているのでそれほど積もり残っているわけでもない。ラウグリアの冬の本番は、まだまだこれからだ。

「西国では北の方しか雪は降らんからな。巫女君のおられた後宮のある首都は、西国の最西端だ。南寄りでもなく北寄りでもない、丁度中間地点に位置している。四季の豊かな環境であるというが、雪は滅多に降らないだろう」

「へえ。他国のことまでよく知ってるなあ、オレークは」

「お前は少しは勉強しろ」

「いいんだよ。後宮では雪が滅多に降らない、ってカグワ様が直接



教えてくれたし」

「自分で仕入れた知識以外は、ガセかもしれんぞ」

「そんなことないでしょ」

「なら、西国の主食はなんだ？」

「えーと……鶏肉じゃないの？」

「馬鹿。小麦だ小麦。肉を主食にするわけがないだろうが」

「えええ、俺ずっとそうだと思ってた……！　そもそも、オレークが教えてくれたんじゃないか！」

「そんなの嘘に決まってるだろう。お前が何も自分では勉強しないから、いつ気付くだろうと思って嘘を教えただ」

「嘘っ？　俺、カグワ様に西国は鶏肉が主食なんですよね、って言うっちゃったよ！」

「ほう、それでなんと？」

「後宮はそんなことはなかったけれど、市民はそうなのかもしれないわね、勉強になったわ、って！　嘘教えちゃったよ！」

「なら巫女君が気付くまで黙っておこう」

「駄目だろ！　ちゃんと訂正しておくよ」

ひどいや、と嘆くユーリを見て、この弟分もまた、よく巫女に懐いていると思った。

彼も、そしてシルディアも、まさか軍があの子を殺す算段を立てているとは夢にも思わまい。そしてそれを知った時、彼らの嘆きやいかほどのものだろうか。オレークが決して軍に逆らえないのと同じように、彼らも軍に逆らうことはない。殺される少女を、彼らは救うことができないだろう。

「あ……処刑だ」

窓辺に立っていたユーリが、ふと気がついたように窓の外を眺めて呟いた。

窓に寄りかかって物思いに耽っていたオレークもまた、自分の熱で曇った窓越しにその光景を見やる。

小間使いの休憩所は、丁度王宮の処刑場の見えてしまう位置にあ

った。皇室をそのような位置に置くわけにはいかないから、彼らの部屋が処刑場向きに作られたのは自然の成り行きと言える。ゆえに小間使いたちはたびたびその光景を目にしてしまうが、当然好んで見ることはなかった。

「……嫌な物を見てしまった」

ぼつりとユーリは呟いて、視線を逸らした。人が人の命を奪う、処刑？軍国になってからというものの日常的に行われる光景であるとは言え、気持ち良いものではない。そうだな、と呟いて、オレークは目をそらさずにその光景を見つめた。目を逸らしたユーリは薄汚れた床を睨みつけて、呟く。

「軍人の神経はわからないな……戦で他国の人間を殺し、処刑で自国の人間まで殺す」

「だがこの国では、軍人が最も強いし、位も高い」

「そんな強さはいらぬ。どんなに位が低くとも、俺は人の世話をする仕事がいい」

窓に背を向けたまま、ユーリはそう言った。その通りであるとオレークも思う。軍人になる利点とはなんだろう。地位か、金か、権力か。オレークも、そんなものは何一つ欲しくない。だが、世話役である自分が果たして今、誰かの役に立っているのかといえば、それも定かではない。結局、軍の言いなりになっている自分もまた、軍と同罪なのかもしれない。

オレークはなんととはなしに処刑を見つめていた。巨大な斧で首を落とされるその光景は、何度見ても惨たらしい。一度では人の首は切れず、少なくとも二度は斧が落とされる。一度で死ねればまだいいが、それで死ぬことのできなかつた人間のもがき苦しむ様は目も当てられない。残酷な首のない死骸が、いくつもいくつもその場に積み重ねられて行く。

(??多すぎやしないか)

ふと、オレークは気が付いた。処刑を終えて積み重ねられて行く死骸の数が、多い。処刑の成された日のうちにその死骸は葬られるから、

積みかたれている死骸が昨日おとといのものである可能性はないだろう。あれは全て、今日のうちに殺された残骸だ。

(……ざっと見て、五十はありそうだ)

オレークは目を細めて、その数を概算した。將軍はあと百近くの人間を始末しなくてはならないと言った。そしてそれを急いでいるとも言った。しかし將軍は、なるべく細かく分けて行つと言ったはずではないか。なのに、もうすでに半分以上の人間を一日で始末したことになる。

「……オレーク？」

窓の外、処刑場を見つめて難しい顔をしているオレークに気づき、ユーリもまた眉をひそめた。なにがあつたんだ、と問うてくる。オレークはゆっくりと立ち上がった。その間にも、次々に国賊たちが斧で首と落とされてゴミのように捨てられて行く。

?? 皇太子殿下は、人の死に敏感だ。

?? 死んだ人間の魂や心を、『力』が吸収してしまつたため、敏感だ。

?? 皇太子殿下は近辺で大量に人が死ぬと、情緒不安定に陥る。

?? そしてその不安定が極限に達した時、『力』が暴発する。

?? 『力』の暴発は、只人には止められぬ、まるで天変地異のようなものだ。

?? それは周囲の人間さえ巻き込み、最悪、その命さえ奪つ。

(厭な予感がする……)

次々に過る予感を振り払い、オレークはひとまず処刑場の方へ向かい、事の子細を尋ねようと歩き出した。が、オレークが歩き出すとした、その時である。?? 予感は的中した。

ぐらり、と突如皇宮自体が大きく揺れた。

「うわっ……なんだ？」

地震か、とユーリが辺りを見回している。それも致し方ないことだ。皇宮の中でさえ、この時折起こる天変地異の正体を知る者は少ない。

「……だから、多数殺せば免れぬと言ったのに」

オレークは小さく呟いて、休憩所を飛び出した。天変地異の正体の傍に、小間使いや女中がいるとまずい。巻き込まれる可能性がある。

「オレーク！」

驚いた顔をして、慌てて彼に続いて休憩所の外へ飛び出した弟分は、そのただごとではないという様相に気付いたようだった。そして何事かはわからないまでも、兄貴分の後に続こうとする。

「お前は此処にいる！」

「どうして！」

「付いてきたところで役に立たんからだ！」

オレークはそう叫んだ。弟分は目を丸くする。未だかつて、オレークにこうも拒絶されたことがなかったためだろう。

そんな、と衝撃を受けた彼を見て、小さな罪悪感が芽生える。別に彼を役立たずだと貶したつもりはなかった。ただ、この天変地異を前にしては、役に立つ人間などいない。当然、オレークも含めてそうだ。だが、オレークには周囲の人間を隔離するという義務がある。否、待てよ。ふと、オレークは思いついた。大抵の人間はこの天変地異を前に、役に立たない。??だが、彼女ならば。

「ユーリ！ 巫女君は今、中庭にいるのだと言ったな？」

「え？ あ、ああ！ 行くと言っていたから……！」

オレークは上階??皇太子の部屋のある階へと向かって走りながら、叫んだ。

「すぐに、巫女君を殿下の部屋へ呼んでくれ……！ 殿下を助けてくれ、と！」

ユーリはさらにいつそう目を丸くして、だが、即座に頷いた。「わかった！」という声とともに、彼の走り去って行く足音が響く。

いちかばちかできしかなかったが、あるいは彼女ならなんとかできるかもしれないという、一抹の期待を抱いた。

オレークは冷たい石段を駆け上り、皇太子の元をまっすぐ目指した。オレークはすでに何が起きているのか、そしてその原因が何であるかを知っている。そしてそれが起こった時の対処法も、皇太子から授かった。故に、天変地異を止めることはできなくとも、巻き込まれて害を受けることはない。だがしかし、何も知らない人間は、害を受ける。??最悪、死に至る。

そしてその死が再びこの天変地異を膨張させてしまうので、なんとしてでもオレークは被害者を出さぬよう、人々を隔離しなくてはならなかった。故に、走る。

これがオレークの仕事であり、役目であった。そしてそれ以外の何でもなかった。

## 15、距離感

その頃、己を待ち受けている運命も、そして天変地異の前触れにも気付かなかつた西国の巫女は、肌を刺すように冷たい北の大地の上、皇宮の中庭にて巨大な雪像作りに励んでいた。

少女は慣れない手付きで冷たい雪をかきあつめ、手先がかじかんで感覚さえなくなっても気にすることなく、せつせと雪の山を作り上げた。

「あーもう……何回やつても丸くならないわ！」

その少女の隣に立って、彼女の動きを見つめているのはその仗身である。

「……そもそも、一体何をお作りになられているのか」

そのただの白い塊でしかない雪の山を眺めて、青年は呟いた。彼女とともに後宮で育った青年もまた、雪とは無縁の生活をしており雪像など見たこともなかったが、少なくとも像というからにはそれが何かの形を模しているのではあるうことはわかる。だが、彼女の手の中で作られるそれは、ただの白い塊だ。

「スノーマンよ……昔、絵本で読んだことがあるの。雪で巨大な球体を二つ付くつて、それを縦に重ねて、下を胴体、上を頭にして、木の枝とか木の実とかで飾り付けするのよ。でも、どうしてもその球体が作れないのよ！」

もどかしいとばかりに地団駄する彼女は、だがとても楽しそうだ。その手先は真っ赤に染まり、冷たくかじかんでいることが一目でわかる。以前であれば、ユタヤは「こんなに冷やして」と彼女の手を取って自分の体温で温めてやるところであったが、今の彼にはそれができなかつた。それどころか、今の彼には必要以上に彼女に近づくことさえできない。あのシルディアに「出て行け」と言われた一件以来、ユタヤは巫女と仗身との距離の取り方が全くわからなくなっていた。???どのように接するのが、最も自然な巫女と仗身の距

離感なのだろう。

近づきたくとも近づけない。そんなユタヤの様子がおかしいとは、主のカグワも気付いてはいるようだった。「どうかしたの？」と自分に触れてこようとしたり彼女の手を、反射的に避けてしまったあの時の、彼女の面食らった顔が忘れられない。カグワからの接触を拒んだことなど、始めての経験だった。おかげで罪悪感で胸がいつばいだ。少女には何の他意もない。ユタヤが勝手に意識し、恐れているだけのことである。

「どうしたらいいのかしら……あ、そうだ！ 転がしてみようかな」

名案、と手のひらを打った少女は、きらきらと頭上からの太陽光そしてそれを反射する雪からの照り返しを受けて、輝かしい。その眩しさにユタヤが目を細めると、「ね？」と同意を求めてこつちを向いて、笑った。もうすっかり見慣れたはずのその笑顔に、何故か胸の締め付けられるような思いがする。

不思議なもので、「妙なことを考えるのではない」と自分に言い聞かせれば聞かせるほど、妙に意識しどつぼにはまっていく。自分にとって「特別」な存在であるこの少女に、自分は一体何を求めているのだろうか。皇太子シルディアは、「忠義」の裏には利己の益があると言った。少女に忠義を尽くして、自分は何を得ようとしているのか。そして彼は「愛」の裏には性の欲求があるとも言った。幼い頃から彼女にある意味では恋いこがれてきたという自覚はある。だがしかし、自分は果たして、そのようなやましい感情を彼女に抱いているのか。

「外套が重くて邪魔ね……」

そう呟いたカグワは、纏っていた外套を脱ぎ捨てると、近くの木の枝にかけた。外套と触れ合ってその内側に着ていた綺麗なドレスの裾がひらりとめくりあがる。ユタヤは慌てて目をそらした。?? 彼女はとても危なっかしい。

以前、部屋の中でユタヤしかないからとさっさと着替えを始め

てしまったように、少女にはあまりにも分別がない。と、思っていたが、それは相手がユタヤであるからであり、絶対の信頼を抱いているからであり、だとすれば、それを「危なっかしい」などと言って意識してしまう自分の方がむしろ危険な存在なのではないかとも思う。

雪の塊を渾身の力でもって転がして行く少女は「あ、丸くなった！」とはしゃいだ。はしゃいだものの、すぐにくしゅんとくしゃみを落とした。晴れた日でも雪の溶けない北国の空気は、冷たい。重いほどに外套が分厚いのは、その寒さから身を守るためだ。

「……外套を。その格好では風邪をひいてしまいます」

ユタヤはそう言っ、彼女が木の枝にかけた外套を取り戻そうとした。が、カグワは首を振る。

「大丈夫よ。動いているから体は熱いもの」

「だからこそ体の冷めた時がよくありません。風邪をひきます。外套を」

「……だって、北国の外套、重いんだもの」

エウリアの上着ならもつと軽かったわ、と少女は言うが、そもそも西国の後宮には肌を刺すようなこれほどの寒さは訪れない。ユタヤはしばし考えた後、ふうと諦めの息を吐き出して、代わりに自分のかぶっていたマントを彼女に差し出した。

「……ならば、これを。これならばさほど重くはありませんまい」

ばさりとカグワの体にそれを乗せると、彼女はこちらを向いた。少女はぱちぱちと瞬きを繰り返す。

「でも……これ、ゆたやの防寒具でしょう？」

「私は元が獣ですから、さほど寒くはありません。いざとなれば私が貴女の外套を纏います」

瞬きをするカグワはちらりと木の枝にかけられた女物の上品な外套を見やっ、ぷつと噴き出した。それを着ているユタヤの姿を想像したのだろう。

「大きさも装飾も、何一つ似合わないわね。着られる外套の方が可



哀想」

酷な事を言うカグワは、あははと軽快に笑った。以前なら、憮然とした面持ちで主を睨みつけるところであるが、今はそれさえできない。彼女の笑顔が何故だかとても遠く思えて、切ない。

どうしてこんなに傍にいるのに、と思う。自分と彼女の距離は何も変わっていないはずなのに。

そう考えてから、否、と青年は思い直した。よくよく考えてもみれば今までが異常だっただけのこと、本来であれば自分と彼女は獣人と巫女という近づいてはならない厚い壁を間に挟んだ関係である。それは「差別」と言うのだと皇太子なら嘲笑うだろうが、それが真実だ。これ以上、彼女に近づいてはいけない??。

そんなことをユタヤが悶々と考えていたその時である。

完全に気を抜いていた青年は、巫女を守る仗身という立場でありながら、皇宮内の異変に気付いていなかった。そして巫女もまた、然りである。二人は二人とも己の『力』を封じられていた。ゆえに、第六感で何かを感じ取ることが今はできない。

突如、広い皇宮の中庭に、悲鳴に似た叫び声が響いた。

「……カグワ様???!」

二人は、ようやくその声で異変に気づき、同時に顔を上げたのであった。

皇宮の窓から、中庭に身を乗り出すようにして叫びをあげているのは、この北国に来てからというものずつとカグワの世話をしている小間使いのユーリである。人なつこい性格の少年で、たった一月の付き合いであるが、今ではユタヤよりもカグワと話すのではないかというほどに親しい。その少年が、普段の小間使いの仕事では見せないような切羽詰まった表情で、カグワの名を叫んでいた。

驚いてはじかれたように飛び上がったカグワは、ユタヤのくれたマントが風を受けて飛んで行くことにも気付かずに、ユーリのいる窓の方へと走って行く。ユタヤはそのマントの飛んで行く様をしばし見守ってから、急いで自分もカグワの後を追った。

カグワはユーリの前に辿り着くと、彼の覗く少し小高い窓を見上げて、声をあげた。

「どうしたのっ？ 何があったの？」

今にも泣き出しそうなほどに切羽詰まったその少年の様子から、何かただごとではないことが起きているのは確かである。彼はどこからかずっと走ってきたのだらう。せえせえと息が荒い。

「殿下が……殿下が！」

息を切らしながら、彼が呼ぶのは皇太子シルディア殿下の名前である。カグワの表情が変わる。少女はぐいと身を前へ乗り出した。

「シルディアが……どうしかしたの？」

「私にも詳細は、わかりません……！ ですが、殿下を助けてくれと、カグワ様に伝えてくれと言ってオレークが……！」

全く要領を得ないその説明を聞いて、しかしカグワは何かしらぴんときたようだった。少女は皇宮の上の方を見上げて、ぽつりと呟く。

「……『力』の、暴発……」

その呟きを拾って、ユタヤは目を見開いた。

ユタヤも以前、皇太子本人からその話を聞いたことがあった。？俺もたまに自分の『力』が制御できなくなって困ることがあるよ。そのたびに犠牲者がでる。

具体的に『力』の暴発とやらで何が起こるのかなんて、想像もつかない。だが、そのたびに犠牲者が出るのだと彼が自分で言うからには、生易しい事態ではないのだらう。それは、今目の前にいるユーリの混乱具合からも見て取れる。

「カグワ様っ……！ とにかく……！」

「シルディアが危ないのね。わかったわ。すぐにシルディアの所へ行く。彼は部屋にいるの？」

物わがりの良いカグワは、具体的な説明の一つもされないままに、だが、しっかりと頷いた。ユーリはそれを受けてほっとしたように、「恐らく」と答える。

「……わかつたわ」

カグワは再び呟くと、皇宮の中へと向かって走り出した。向かうは、皇太子シルディアの部屋だろう。彼女は中庭の雪を蹴り飛ばして、皇宮の中へと飛び込んだ。

その後ろ姿を見送ったユタヤは、刹那の間、迷った。シルディアの『力』の暴発とやらがどのようなものかはわからないが、『力』など持たないユタヤが行ったところでどうすることもできない事態なのだろう。だからこそ、オレークはカグワを呼んだのだ。？ 巫女君なら、あるいは、止められるかもしれない。そう彼が言ったのを、ユタヤは覚えている。彼は巫女であるカグワに、期待をしている。

（だけれど……巫力のない今、かぐわ様に巫女としての力はあるのだろうか）

カグワとてただの女だ、と言ったのは皇太子シルディアであったか。とにかく、『力』の暴発という得体の知れない事態を前に、カグワを一人で向かわせることはとてつもなく危険なことだに思えた。

「……かぐわの君！」

次の瞬間には、本能的に、体が動いていた。皇宮の中へと戻ったカグワの後を追って、走り出す。人の形をしていても、カグワよりは足の早い自分なら、すぐに追いつけるはずだ。獣の形になれないまでも、せめて傍にいれば、盾になるくらいの働きはできるはずである。

走り去る、平和な中庭には、冷たい空気が立ちこめていた。作りかけの雪像が、むなしく空を見上げている。そしてその澄んだ空の下を、ひらりと一枚マントが飛んだ。仗身の届けたマントは主へは届かず、虚空を舞う。そして仗身の抱く想いは依然、空回りを続けるのみだ。

## 16、浄化

主の後を追って、冷たい石塔の階段を延々と昇り続ける。

迷うことなく皇宮の中を走り抜けて行くカグワは、この一月でこの皇宮内の道筋をしつかりと頭の中へと叩き込んだようであった。特に、たびたび訪れていた皇太子シルディアの部屋のある場所は、忘れられない。それに対して、カグワの付き添いなど何か理由のない限り部屋から出ることもなかったユタヤには、まだこの広い皇宮内の地理感覚がない。ゆえに、彼女の後を追って走りながらも、自分か今どの辺りにいて、どこを目指して走っているのかは定かでないかった。

そしてただ機械的に主の後を追って飛び出したのは、皇宮の中でも上の方にある広いフロアだ。他の階と異なり、より一層優然とした雰囲気立ちこめている。いかにも高貴な人間が住んでいるのであろうと予想させられるこの場所に、ユタヤは一度だけ足を運んだことがあった。??北国に飛ばされてきて、初めて訪れた皇太子の部屋のある階だ。ベッドの上に転がっている皇太子と出会い、カグワの巫力が封じられるのと同時にユタヤの獣の性もまた、その時に封じられたのであった。

(……皇太子殿下の部屋か)

カグワがまっすぐ目指して駆け抜けて行くその廊下の先には、どんと控える豪華絢爛な巨扉が控えている。そしてその中にはあの少年がいるのであろうとユタヤにも安易に予想がついた。

??不愉快だよ、ユタヤ。実に、不愉快だ。

強い覇気を持つ眼差しでもって、彼にそう言われたあの日から、

ユタヤはどうにもこうにも調子が好ましくない。カグワを護るのだと誓った己の忠誠心に自信が持てなくなり、そしてシルディアの持つ強大な『力』の片鱗を見せつけられて、彼のことを恐ろしくなった。彼は眼差し一つで人を殺してしまえるほどの強い覇気を持つ。その彼の『力』が今、暴発しているという。

思わず怖じ気づくユタヤとは異なり少しの恐れも見せないカグワはすぐに廊下を走り抜けて、シルディアのいるであろう最奥の部屋の前へと辿り着いていた。その後ろ姿を見て、ユタヤも唾を飲み込み決意する。シルディアの『力』は恐ろしくとも、それに臆してカグワを一人で行かせるわけにはいかない。青年は怖じ気づく己の足に鞭打って、彼女の後を追った。

部屋に近付くと近付くだけ、何故だか少し寒気がした。それは、暴発しているという『力』による物だろうか。今のユタヤは「獣」の性を封じられているために、とても感覚が鈍ってしまったているが、もしも今「獣」の性を持っていたなら、それはそれはおぞましい気配にこの部屋に近付くことさえできなかったかもしれない。それほどもまでに、恐ろしい何かが、この扉の向こうには待ち構えている。

「……シルディア！」

いくら巫力を封印されているとは言え、カグワとてそれに気付かぬほど鈍感ではなからう。しかし、カグワはそれでも欠片の迷いも見せずに、その扉を開いた。ユタヤは中に待っているであろう何かを恐れて、ぐつと歯を食いしばって身構えた。

扉が開かれた瞬間、己を取り囲む空気が、ぐわんと揺らいだような気がした。どう説明すれば良いのだろう。一瞬だけ現実世界から離れた夢幻の世界に落とされて、また現実へと引き戻されるような精神の揺らく感覚である。??時空間が、不安定なのだ。ユタヤはそう気付いた。シルディアは、遠い西の地からカグワを引き寄せたように、その『力』でもって、時空間さえ操る。そしてその『力』

が暴発してしている彼の元では、時空間が平常ではなかった。

「シルディア！」

再びカグワが彼の名を呼んで、部屋の中へと飛び込んだ。慌てて彼女の後を追ったユタヤは、飛び込んだその先、シルディアの寝室の中を見て唾然とする。一度だけ、獣の性を封印された時にこの部屋を訪れたことはあったが、その時とはまるで異なる地獄のような有様であった。

部屋の窓辺に飾られた美しかったのであろう花々が全て枯れて下を俯き、窓そのものが古ぼけたボロとなる。不安定な時間の中で、様々な物が劣化していくのが見えた。通常の何倍もの速度で時が流れて行き、物が古びていく。そして最後にそれは劣化し壊れ、その場に転がった。ゆえに、部屋の中は何年も人の住んでいなかった廃屋のように、荒れた様になっている。

「……巫女君！」

部屋の片隅から、凜と少女を呼ぶ声がした。その声の方向を向くと、カグワを呼べと言ったという張本人、オレークが屈み込んでこちらを見上げていた。屈み込んだオレークの足下には、一人の女が転がっている。恐らく女中なのであろうその女は、この時間と空間の錯綜する場所の中で変化に絶えられなくなったらしく、気を失っていた。

「……よくシルディアの寝室にいた娘だわ」

カグワが女を見て小さく呟いた。ユタヤはこの女中のことを知らないが、カグワは知っているのだろう。少女はちらりとユタヤを見上げると、告げた。

「ゆたや、貴方はあの娘を」

言われたユタヤは目をみはる。自分は他でもないカグワを護ろうと思っただけでここまで付いて来たのだ。

「しかし……！」

慌てて反論しようとする、カグワは首を振った。少女は「私は大丈夫よ」などとほざく。引き止めようとするユタヤの手を振り切

つて、彼女の向いた先は、部屋の中央に置かれた巨大な寝台であった。以前ここを訪れた際にも、その紗幕のかけられた巨大な寝台に、シルディアが眠っていた。そして恐らく今も、彼がいるのはその紗幕の内側だろう。何故なら、巨大な紗幕の外側をさらに包むように、暗黒色の空気がその場に立ちこめていたからである。

「……………なんだ、あれは？」

思わずユタヤはその吐き気さえ誘われるそのどす黒い空気の流れを見て、口元を押さえた。怒りや悲しみなど、負の感情がその空気の中に渦巻いている。そして時空間を不安定にしているのもやはり、その暗黒の空気の影響だと思われた。だとすればあれは、シルディアの『力』の暴発したもののか。

そうユタヤが勝手に予測したのも束の間、隣に立つ少女がぼつりと呟いた。

「……………あれは……………死人の、『魂』だわ」

え、とユタヤは目を見開く。ユタヤには想像も付かない答えであった。

?? 殿下は人の死に敏感でな……………近い場所で人が死ぬと、それに同調して『力』が揺らぐ。そしてそれを自分では制御できないからだ。

かつてそう教えてくれた男は今、部屋の片隅で倒れた女中を前に、屈み込んでいる。世話役であるという彼でさえ主に近付けないのは、あの暗黒の空気の所為だ。あまりにも禍々しくて、ユタヤは此処から一步も動けない。その正体は、人の死んだその『魂』だということか。ユタヤにはその真偽を計ることなど到底できるはずもなかったが、とにもかくにも足がすくむ。これ以上暗黒の空気の方へと近付くことはできなかった。

?? だというのに。

「……シルディア！」

その暗黒の空気の中央にいるであろう少年の名を呼んで、駆け出して行くカグワは無敵だった。あの暗黒が見えていないはずもないのに、全く恐れる素振りも見せない。具体的にどうなるのかなんてわかるわけもなかったが、あの暗黒に近付いては危険だと本能が語りかける中、ユタヤは必死に叫ぶことしかできなかった。

「かぐわ様……！」

身を呈して彼女を護るのだと誓ったくせに、足がすくんで動けない。ただ、彼女の名を呼び、危険だから近付くなと叫ぶと、少女はちらりとこちらを振り向いた。その顔には少しの恐れもない。眩いほどの笑顔に満ちあふれている。

「……私は、大丈夫だから」

「だからその娘を」と付け足したカグワに対して、ユタヤはもはや何も言い返すことができなかった。だってその「大丈夫」は、真実だ。はったりやなんかではない。彼女は、死人の『魂』を、暗黒の色に渦巻く人の負の感情を、少しも恐れてなんていない。

「シルディア」

少女は暗黒の渦の中に手を突っ込んで、閉じられた紗幕を開いた。開くと同時に、中から瘴気のような黒い空気が溢れだす。ユタヤは絶えきれず、うっと呻いて口元を覆った。あれらも全て死人の『魂』なのだろうか。見ているだけで気分が悪い。吐きそうだ。

しかし、その空気を真正面から浴びたカグワは、ほんの少しだけ眉をひそめたが、それだけだった。そしてそのどす黒い瘴気の中央にいる、少年に手を差し伸べる。少年はゆっくりと上を向いて、少女を見つめた。その眼差しは焦点があっておらず、虚ろだ。まるで心此処にあらず??その少年は、いつもの少年ではない。他の何かに取り憑かれたような顔をしている。

「……子供が、いるんだ……」

ぼつりと、皇太子は呟いた。壊れたねじ巻き人形のように、機械



的に口を動かす。おそらく彼自身の意思ではない。皇太子の体を使つて、何者かが喋っているかのような、そんな動きである。

「田舎に帰れば、子供がいる……養つために、入ったのさ、軍に。戦をしたいわけではない。なのに何故誰も話を聞かぬ。何故仲間を命を奪われる。子供がいるのさ。そいつに、会わなきゃいけない。まだ死ねない」

ぼそぼそと呟くその言葉は、きつとあの瘴気のような死人の『魂』だ。死人の『魂』が皇太子に乗り移り、何事かを喋らせている。？かと思えば、次の瞬間皇太子は獣のような雄叫びをあげた。悲鳴のような声で、叫ぶ。

「やめろやめろやめろおおっ！死ぬのは怖い、死ぬのは怖い死ぬのは怖い……！痛い、痛い痛い！せめて一発で殺してくれ、こんなに辛いのであれば、殺してくれええっ！」

別の死人の『魂』だ。取り憑かれたみたいに、皇太子は次々に『魂』を自分の中に吸収していた。

「殺すんなら殺せばいいさ！見ていろよ、死んでも尚、必ずやこの国にまとわりついてやる！こんな小さな国、怨念の一つで捻り潰してやるうとも！この恨みは深く、浄化できるものか！国家を、皇帝を、軍を、呪い殺してやる！」

「うわっ、あ、あ、ああ、そんな、つもり、じゃ、なかったんだ……！いや、だあああ、あははは、あははあ、わ、うわあ、ぎひい……！」

「はっ、はあ、正気の沙汰とは思えん……！まるで虫けらのように人を殺すのか！死など怖くない。だが、正気の沙汰ではない。この国は、腐っている……！」

次々に死者の『魂』を取り込んで、そのたびに、皇太子は寝台の上を転がり回る。その姿はまるで、哀れな人形であった。ユタヤは寝台から離れた所からその瘴気を見ているだけで、吐きそうなほどに具合が悪くなるというのに、それら死者の『魂』を次々に体に取り込むその苦しさいかほどのものであるうか。寝台の上を転がり

回るのは、その苦しさ故であろう。そして、彼が暴れるたびに、暴発した『力』の影響で、部屋中の物が割れたり砕けたりと、劣化していった。

だが、その瘴気の中にあっても顔色一つ変えないカグワは、哀れな皇太子の転がる寝台の上にとると、彼の顔を撫でた。一瞬だけ、彼が我に返る。瘴気が揺らいだ。皇太子に乗り移ろうとしていた多くの死者の『魂』が、行き場を失いわずかに彷徨う。

「カ、グワ……」

ぜえぜえと息を切らしながら、少年はカグワの名を呼んだ。カグワはそつと彼の綺麗な金髪を撫でて、そしてまだまとわりつく瘴気を片手で払いのけた。

「シルディア……大丈夫よ、こつちへいらつしやい」

カグワがにこりと笑ってそう告げると、途端に、少年の青い瞳に雫が溜まった。それは涙となつて溢れ出し、止まることを知らない波のように押し寄せて来た涙がぼたぼたと寝台の上に染みを作った。彼はわあああ、と大きな泣き声をあげて、カグワに正面からぎゅうと抱きついた。

「助け、助けてくれえ……！ 押し寄せてくるんだ、たくさんの死者の心が……！ 俺は救えない、救えないよ！ 彼らを救えない……！ それなのに、奴らは集まってくるんだ……！」

「シルディア、落ち着いて……」  
「いやだ、いやだ……！ なんて俺だつたんだ、いやだ……！ 欲しくて手に入れた『力』じゃない……！ こんな『力』、ちつとも欲しくなかつたんだよ！ 別に皇太子になんか生まれたくもなかつた……！ どんなに『力』を持ったって、いくら皇太子だって、俺には何もできないのに……！ やめてくれっ！ 俺に救いを求めないでくれ……！」

シルディアは狂つたように泣き叫んで、少女に縋った。少女は彼を抱きしめながら、「落ち着いて」と言葉を繰り返す。しかし、弱り切った少年の耳にはまるで届いていなかった。

行き場を失い彷徨う瘴気が、今だとばかりに弱ったシルディアに取り憑かんと押し寄せてくる。少年が悲鳴をあげた。再び彼の中に死者の『魂』が吸収されようとしていた。それを止める術はないと、そう、思われた。??すると次の瞬間である。

ぱーん、と甲高い何かを叩き付けるような音が部屋中に響きわたった。

何事か、と一瞬、ユタヤにもよくわからなかった。だが、すぐに気付いた。??カグワが、シルディアの頬を手のひらで力一杯叩いたのである。

少年の頬が赤く腫れ上がっていた。少年に取り憑こうとした瘴気が、ゆらゆらと揺らいで彼から離れて行った。死者の『魂』が彷徨う。少年の目は涙に濡れて、虚ろだ。カグワは強い眼差しで彼を睨みつけると、その頬を手のひらで包みこみ、自分の方を見るように仕向けた。

「貴方は、皇太子である前に、一人の人間よ」

カグワは彼の顔を覗き込んで、はつきりと告げた。ぼろりと少年の瞳から涙が溢れて行く。叩かれた痛みからではない。死人の『魂』を吸収してしまう苦しみからだ。少女は溢れるその雫を手の甲で拭き取ると、優しく腕の中に抱きしめた。

「『力』があるから、なんなの。皇太子の権力がどうしたっていうの。貴方は、貴方にできるだけのことをやればいい……。それは、死者の『魂』を吸収して自分の一部にすることではないでしょう？

それは彼らのためにならない」

「カグ、ワ……」

「貴方にできることは一つしかないわ。この国のために死んで行った彼らを、悼むことだけ。そうでしょう？」

少年に取り憑こうとする死者の『魂』を、カグワは片手で次々にはじきとばした。なにゆえ『力』を封印されて巫力さえ持たない今

のカグワにそのようなことができるのか、恐らくカグワ自身にもわかるまい。だが少女は自分の赴くままに死者の『魂』から皇太子を守り、皇太子である少年は、己を護ってくれる少女に縋り付いた。

「カグワあ……」

「貴方が皇太子として君臨するから、『力』を行使するから、行き場を失った死者の魂が、貴方の元へとやってくるのよ。彼らは貴方が実は無力であることを知らないの。だから押し寄せてくるのよ」  
「でも、それは、事実、だ……俺は、それでも皇太子だ……『力』だって、持っている……」

そう呟いた彼の顔は疲弊しきっていた。多くの『魂』を吸い上げて、負の感情までも吸い上げて、疲弊している。少女はそんな痛々しい少年の顔を撫でて、きっぱりと言い放った。

「彼らを、笑顔で見送りなさい」

にこ、と微笑む。その笑顔は何よりも強い、力だ。

「皇太子として、民の魂が無事昇天できるように、見送りなさい」  
「見送、る……」

「そう……そのために必要なのは『力』ではないわ。貴方が一人の人間として、彼らを悼む、『心』でしょう？」

そう囁いて、カグワはシルディアを自分の腕の中から解放した。そして涙の跡の残るその頬を拭いてやり、微笑む。つられたようにシルディアもわずかではあるが、口元を緩ませた。カグワはその笑顔を見て満足したように頷くと、彼の周りにどよめく瘴気を見回す。それは皇太子をめがけて集まったものの、行き場を失った死者の『魂』だ。

「……貴方たちは、帰るべきところへ、帰りなさい」

そう言って向けられた輝かしいほどの少女の笑顔に、瘴気が揺らいだ。死者の『魂』が、揺らぐ。

「帰りなさい?? 貴方たちの『魂』を、狂おしいほど、悲しいほどに、待っている人たちがいるはずだから」

すると、緩やかに、風が拭いて木の葉が揺れるほどの緩やかさで、

瘴気が徐々に消えて行くのがわかった。暗黒の塊が、浄化されていく。それに伴い、足がすくんで一步も動けなかったユタヤも、ようやく身動きが取れるようになった。死者の『魂』が、彼女の誘いに従って、帰るべきところへと向かったのであるうか。とにもかくにも暗黒が、消えて行く。

「すごいな」と一連の流れを見ていたオレークが、呟いたのが聞こえた。ユタヤも黙ってその感想に頷くことしかできない。後宮にいた頃、常に寄り添っていた自分でさえ、彼女が死者を成仏させる姿など見たこともなかった。その機会がなかったのだと言うこともできる。だが、巫力の訓練と銘打って巫女修行をしていたあの頃は、「変わり者の三の君」と呼ばれる少女にこれほどまでの力があるだなんて誰が思っていたことであろう。ユタヤは、まるで彼女が別世界に住まう人間ではない何かのように思えて、そんな自分に戸惑いを覚えた。

「……すまないが、獣人よ。この娘を運ぶのを、手伝ってくれないか？」

遠い紗幕の中にいる主を見つめていたユタヤに、ふと声がかかる。振り返れば、オレークが床に倒れている女中を顎で示しているのが見えた。

さほど重量のありそうな娘でもなく、どちらかと言えば軽そうだ。成人した男であれば彼女を運ぶことなど造作もないだろうに何故この男は自分で運ばないのか、とユタヤが不思議に思うと、その疑問を読み取ったかのようにオレークは自分の右腕を示す。すると、上品な宮廷服が破れ、そこが赤黒く染まっているのが見えた。それは血の色だ。どうやら、右腕に怪我を負っているらしい。

「割れた窓の破片を浴びてしまっただけ……俺はどちらかというとなかなかというとなかなか運べんのだ」

獣人であるユタヤは片手でも娘一人なら軽々運べる自信があるが、だからと言ってそれができない男を非力だとも思わない。片手が塞

がっているのなら仕方がないなとユタヤは黙って頷いて、転がっている娘を抱きかかえた。それに、この娘を救え、とは主からの命令でもある。

こっちだ、と立ち上がったオレークが、使える左手の方で扉を開き、ユタヤを誘導した。ユタヤもそれに従う。

部屋に取り残される主のことが心配ではないと言ったら嘘になるが、ユタヤが残ったところで何もできないこともわかっていた。彼女は今、落ち着いた皇太子殿下を優しく包み込んでいるはずだ。己の手の届かない場所に彼女がいることがどうしようもなく歯痒いが、どうすることもできない。

「カグワ……カグワ……！」

「大丈夫よ、此処にいるわ」

「もつと……もつと近くにきてくれよ……ねえ、俺を抱きしめて……」

……また、この前みたいにキスをしてよ」

「……ええ、そうね」

当たり前のように彼女に甘えることのできる皇太子を、何故か羨ましく思う自分に、驚いた。今しがた皇太子がどれだけ苦しんでいたのか知らないわけではないのに、羨ましいだなんて、戯けが過ぎている。

所詮、自分のような獣人と、彼のような『力』を持つ皇太子、そして彼女のような巫女は、住まう場所が違うのだ。彼女彼らのいる場所に、自分がどんなに手を伸ばしても届こうはずもない。

そう自分に言い聞かせて、ユタヤは女中を抱えたまま皇太子の寝室を後にした。先導して歩くオレークの後ろを追って、主の元から離れて行く。否、もともとそこには覆せない距離があったのかもしれないが。

自分こそが最もカグワの君にとって近しい存在なのだと思うてい

た今までの自惚れに、嫌気が差した。

獣人は獣人らしく、高尚な巫女からは、離れて仕えることが望ましい。

## 17、不毛な恋心

皇宮の中は広い。全ての部屋が皇太子の物であるフロアもあると思えば、カグワのような他国の賓客をもてなすためのフロアもある。そして、この皇宮に仕える小間使たちの生活するスペースも当然あった。百人単位の小間使たちが働いている皇宮であるが、その百人の住まう広さと、皇太子一人が住まう広さはさして変わらない。華やかな皇宮の中で、最も質素なそのフロアに辿り着くと、オレークがユタヤを案内したのは薄暗い倉庫のような場所であった。

窓が一つもなく、外界と繋がっているのは天井にぽっかりと空いた通気孔一つのみである。そこは扉が閉まると何も見えなくなってしまうようなほどの暗闇で、オレークは扉の閉まる前に燭台の上に火を灯した。

「娘は、そこに」

言つて、オレークの示した先には古びた木製の長椅子がある。ユタヤは抱えて来た女中をゆっくりとその長椅子の上に横たわらせた。ぎいと長椅子の足が軋んだ音をたてる。だが、気を失っている娘は一向に目を覚ます気配を見せなかった。

「殿下の『力』の暴発に巻き込まれる人間が、たまに一人二人いてな……命を落とすことすらあるが、その娘は多分平気だろう」

オレークは言いながら、倉庫の中に置かれた棚を物色している。そしてその棚の三段目の最も端に置かれた瓶を手に取ると、片手でグラスにその瓶の中身を注ぎ始めた。注がれる液体は無色透明で水のようにも見えるが、薄暗い倉庫の棚に置かれている時点で何やら怪しげだ。

「殿下にご執心だった娘でな、たびたび仕事と称して殿下の寝室に忍び込んでいたのは知っていたが、まさか彼女もこんなことになるとは思っていなかっただろう」

瓶に蓋をして棚に戻しているオレークの後ろ姿を見上げてから、



ユタヤは長椅子に寝転がる少女を眺めた。真つ青な顔色をしているが、特に怪我のようなものは見当たらない。

「……外傷はないようだ」

ぼつりとユタヤが呟くと、「そうだな」とオレークも頷いた。傷ならば、オレークの方が深いものを負っているはずだ。

「外傷はないが、殿下の『力』の暴発を真正面から食らった。俺はまだそれを経験したことはないからうまく説明できんが、耐えきれないほどの負の感情に心を支配されるらしい。そしてその娘のように気を失うか、あるいは負の感情に耐えきれなくなつて自ら死ぬ場合もある。身投げなどしてな」

ユタヤは先刻皇太子の部屋で見た、紗幕を覆うどす黒い瘴気の塊を思い起こした。あれは皇太子の『力』そのものというよりも、カグワが言うには死者の『魂』だそうだが、それを引き寄せているのが皇太子の『力』なのだから、総じて『力』の暴発と呼んで然るべきなのだろう。

「……あの、暗黒色をした瘴気のようなものを、真正面から食らったということか……」

ユタヤは足が竦んでしまって、その方向へ近付くことさえできなかった。それでも吐き気を覚えたほどである。確かにあれを真正面から食らったら、気を失うか、あるいはもがき苦しんで身投げしてしまうかもしれない。

「暗黒色？ ……なるほど、獣人にはあれが見えるのか」

独り言のように小さく呟いたのはオレークである。「え？」とユタヤが見上げると、彼は透明な液体を注いだグラスを持って女中の横たわる長椅子の前に膝をついて、「俺には見えん」と言った。

「俺は『力』を持たない凡人だからな。この娘もそうだ。だから、殿下の『力』が不安定であることにも気付かず不用心に近付いて、巻き込まれてしまったんだろう」

オレークはそう説明して、眠っている女中を片手で抱き起こすと、自分の体にもたれかからせる。そして、片手でグラスに注いだ液体

を女中に飲ませた。腕に傷を負っているため、動きが不自由である。ユタヤは彼に手を貸して女中の体を支えながら、首を傾げた。オレークが『力』を持たず、この娘も『力』を持っていないため、皇子が纏っていた暗黒の瘴気が見えなかったというのはわかる。だが、どうして獣の性を封印された自分には、あれが見えたのだろうか。

「……俺は今、獣の性を封印されているはずなんだが……」

つまり今のユタヤは、『力』を持たない凡人と同じはずである。そう思って首を傾げるユタヤに娘を任せて、オレークは立ち上がった。空になったグラスを持って、乾布巾でそれを拭う。

「お前や巫女君の『力』であつたり獣の性であつたりは、使えぬようにと封印されているだけだ。お前たちがそれを持っていることに代わりはない。だからお前は獣に変化できないし、巫女君は様々な技を使うことができないが、凡人には見えない物を見るようなことはできるんだろう」

「見えないものを見るのにも、『力』を使うのではないのか？」

「そんなことは知らん。凡人の俺より、獣人の方がわかるだろう」  
そう言われても、ユタヤにだつて何もわからない。後宮に入つてからというもの、獣としての力を磨くことはあつても、その『力』がなんであるのか、その『力』がどういう仕組みで作用しているのかわかんなくて、教わつたことなど当然なく、考えたことすらなかった。ただ、自分はこの『力』を主であるカグワのために捧ぐのだと思つていた、それだけである。

「しかし、やはり獣人であつても、『力』の暴発する殿下には近付けないようであつたな……」

オレークは言いながら乾拭きしたグラスを棚に戻して、自分の破れた宮廷服を引っぱり、完全に裂いた。その下から白い腕が露出する。丁度肘の関節の辺りにぱっくりと皮膚を裂いた傷が見え、茶色に近い赤い血が腕を沿って滴り落ちていた。

「凡人が近付けば、その娘のように『力』にあてられて終わりなんだが、獣人でもあれ以上は近付けないものか？」

「獣人だからかどうかはわからんが……少なくとも俺は、近付けなかつた」

ユタヤはあの瘴気の放つ禍々しい雰囲気を思い出して、身震いした。あれ以上は無理だ。本能がそう語りかけるから、ユタヤは前に進むことができなかつた。

だが、そこでふと気付く。今日の前にいるこの男はどうだろう。自分のことを「凡人」と呼びながら、凡人が近付けないあの瘴気に近付いて、女中を助けたのではないのか。それなのに、受けた傷は割れた窓の破片で腕を切つたくらいなもので、少しも瘴気にあてられた様子はない。

「……何故、オレーク殿はあの部屋にいたことができたのだ？」

素朴な疑問である。小間使いとは言え北国では侯爵の地位にも値するというオレークを呼び捨てには出来ず、敬称を付けて呼びかけると、オレークは特に気にした様子も見せずに、「ああ」と思い出したように頷いた。

「俺は殿下の世話役だからな……殿下の『力』にあてられて仕事が遂行できないようでは困るのだ。故に、これを、持たされている」  
そう言つてオレークは傷のない方の腕で宮廷服の胸ポケットを探り、中から手のひらに乗るほどの大きさの黒い球体を取り出した。漆黒色をしたその球体に、思わず目を奪われる。何も映し出さないそれは、沈黙の存在で、周囲の物を吸収してしまいそうなほどの黒さを持つ。なんだこれは、とユタヤは目をぱちくりさせた。

「玉音石と言つてな……これを持つことによつて、ある程度の『力』の干渉を防ぐことができるのだそうだ。初めて世話役として殿下にお会いした際に、直々に頂いた。これを持っていても、尚、『力』に負けて逃げ出す世話役も大勢いたらしいが」

説明をして、オレークは黒い球体を再び胸ポケットにしまった。玉音石、とユタヤは口の中で繰り返す。初めて見るものであった。つまりその石でもつて『力』の作用から身を護ることができるといふことなのだろうが、皇太子と同じく『力』の持ち主である聖女た

ちの集う後宮でさえ、石など使って身を護ろうとする下働きはいなかった。それが必要とされるほど、皇太子の『力』は強すぎるということなのだろう。

「……今回のように、『力』が暴発して、それに耐えきれなくなつた世話役が、逃げ出すということか」

自分なりに理解してユタヤがそうまとめると、「いや」とオレークは首を振った。どうやらそういうわけでもないらしい。

「暴発を受けて逃げるならまだいい。中には、ただ日常的な世話をしているだけで、耐えられなくなつた世話役もいるという」

「……何故？」

「世話役は常に殿下の傍に寄り添う。すると、じわじわと殿下の『力』に精神を浸食されてしまうのだ。どう説明すればいいものか……端的に言つと、「孤独」だ」

「孤独？」

「殿下の『力』を構成しているのは、ほぼ孤独だと俺は思っている。殿下の傍にいと、その孤独が自分の精神の中にまで充満してきて、逃げ出したくなるんだ。俺はまだ逃げ出したことはないか??俺で、殿下の世話役は五十人目だからな。その効果がどれほどのものか、わかるというものだろう」

五十人、とユタヤは愕然とする。シルディア皇太子殿下は御年十七にお成りだという。十七年という短い歳月の中で五十人も世話役が代わつたのだ。代わらざるを得なかつたのだ。皇太子の持つ『力』の強さを語っている。

圧倒的に多い数字を述べたオレークは慣れた様子であつげらんとしていた。彼は裂いた宮廷服の袖の部分で自分の傷ついた腕を強く縛り上げた。止血のためであろう。

「俺は、殿下の世話役を務めた中で最長記録を持っているんだぞ。とは言つても、たつたの三年だがな」

「三年……」

「最短記録が一日だったことを思えば大したものだろう」

「……………オレーク殿は、何故逃げ出したくならない？」

「逃げ出したくなることは何度もあったさ。だが、これが仕事だからな。俺は役目に忠実なんだ。これが上意であり、国から俺へ与えられた任務なのだからと思えば逃げ出すわけにはいかない。??要は、冷めているんだろう。必要以上に殿下には近付かない。仕事だと思つて割り切つて接している」

なるほどそうか、とユタヤは納得した。それは、ユタヤ以外の仗身たちと同じである。ユタヤ以外の聖女に仕える仗身たちは皆、己が仗身であることを役職として捉えていた。故に、聖女との距離もユタヤとカグワほどに近くはない。ユタヤとカグワの関係性は、異端であつた。が??。

カグワのことを思つて陰鬱になるユタヤに気付いているのかいな  
いのか、「ところで」とオレークは止血した腕をぶらさげて問うてくる。

「お前は生まれた時より仗身として巫女君に仕えているのか？」

この男は、自分と同じく『力』ある主に仕える仗身に、興味があ  
るらしい。ユタヤは上階で今頃皇太子を抱きしめているのであろう  
主を思つて憂鬱になりながら、首を横に振つた。

「否……俺がかぐわ様に仕えたのは、八つの年の頃になつてからだ。  
死にかけているところをかぐわの君に助けられて、それで」

「八つの頃ということは、人間から獣に変化するぎりぎりのところ  
ではないか。よく間に合つたな」

「いや、もうその時には俺は、獣に変化していた。獣に変化して村  
人に殺されそうになっているところを、かぐわの君に救われたんだ」

「ほう？ 面白いな。西国の巫女の仗身は、生まれた時から仗身と  
して育てられるのだと思つていた。巫女に救われて仗身となるのか」

「そうじゃない。大概の仗身は仰せの通り、生まれて間もない頃か  
ら仗身として育てられる。だが、俺の場合は特殊だつた。……俺は、

かぐわの君にとって二人目の仗身なんだ。一人目の仗身は死んでしまったというから」

それはまだユタヤがカグワのことを知らない頃、まだユタヤが普通の人間の子供として村で生活していた頃のことだ。後宮に住まう聖女であった幼きカグワは、同じく幼き仗身に身を庇われたのだという。カグワを庇った幼い仗身は、そのまま命を落としたそうだが、その詳細は聞かされていない。カグワは「よく覚えていないのと笑ったが、本当に覚えていないのか、あるいは覚えていてもユタヤに話すようなことではないと気を遣っているのか、判断し難いところであった。

ほう、と声をあげたオレークは、ますます興味深そうに目を細める。茶色い癖っ毛がわずかに揺れた。

「では、お前のその忠誠心は、まだ自立心のない頃から先天的に植え付けられたものではないんだな。後天的に、芽生えたものなのかだとすると、ますます興味深い。お前が、命を張ってまで巫女君を護る利益はなんだ？ その忠誠心の動機付けはどのようにしている？」

ユタヤは完璧に言葉に詰まった。

つい先日、シルディア皇太子殿下にも全く同じ事を聞かれたばかりであった。お前は何故、彼女のために命を張るのか、と。ユタヤは未だに答えを見つけ出せずにいる。

黙り込んで俯いてしまったユタヤを見て、オレークは何を思ったのだろう。わずかに口元を歪ませて、呟いた。

「……不毛な恋心だな」

ユタヤはかっと目を見開く。シルディアと同じように、彼もまたユタヤのこの忠誠心を恋慕の心だというのか。そんなものではない。以前のユタヤなら、即座に否定をしたはずであった。??だが、今は、自分の忠誠心に自信がない。

自分の前だと安心しきって服でもなんでも脱ぎ捨ててしまうカグワの危うさに鼓動を早くさせたり、彼女の眩いほどの笑顔に目が眩

んだり、あるいは迷うこともなく彼女に救いを求めて抱きしめられる皇太子を心のどこかで羨んだり、もはや、わけがわからない。そんなつもりではなかった。そんなつもりで、彼女の仗身になったわけではなかったのだ。

唇を噛み締めて苦渋の表情を浮かべる彼を見て、オレークは瞬くよもや彼がそんな風に思い詰めているとは思いつまなかったのだろう。オレークは傷を負った腕を撫でながら、困惑したように告げた。

「……別に慕情による動機付けでもいいじゃないか。主に尽くすのだという忠誠心に変わりはあるまい」

「……忠誠は、忠誠だ。誰かに忠誠を誓うのに、何故動機が必要なんだ。俺はそんなつもりで、巫女に仕えているのではない。忠心に動機はいらない」

「いないことはない。全ての世の中の事象には、原因や動機が付随する。それは世の理だ。そして、その原因や動機に良いも悪いもない」

オレークはきっぱりと言い放った。彼の目は、どこか遠くを睨みつけているようにも見える。強大すぎる『力』を持つ皇太子の世話役を三年も続けたという傑物は、その意思もはつきりとしていた。

「俺が殿下に仕える動機は、それが上意であるからだ。それを冷淡すぎると、思いやりがないと言う輩もいるが、結果的にはそのおかげで俺は三年間も世話役を続けていられる。もしも殿下のことを慕い、近付きすぎてしまったら、殿下の抱える孤独に飲まれて半日も保たなかったかもしれない。動機は何でもいいんだ。結果が重要となる」

「結果……」

「例えば巫女君は、我がラウグリア国に誘拐されたような立場でありながら、それでも我が皇太子殿下に良くしてくださる。己を誘拐した敵国かもしれない国の皇太子であろうとも、良くしてくださる。その動機を我々は知らないが、結果的にはそのおかげで皇太子殿下

は救われている。それは、我が北国を助けているようなものだ」

なにかしらの理由があつてカグワは北国の皇太子を救つた。しかし北国にとつてはその理由などどうでもよくて、彼女が皇太子を救つてくれたという事実の方が重要となる。オレークはそう言いたいのだろう。世の中には原因と結果が幾重にも螺旋状に繋がつて渦巻いており、重要なのは結果の方である、と。

しかし、ユタヤはそうは思わない。本当に重要になるは、動機の方ではないのか。動機があるから結果が付いてくる。だからこそ、己の中にある巫女に対する特別な想いが憎らしい。こんな動機付けでは、結果的に自分は巫女を護れないのではないか。

そんな自分に比べて、カグワの抱く動機は単純明快だ。それは常に、人を救つてきた。まるで、天女そのものの動機である。

「……かぐわの君は、いつでもそうなのだ。相手が例えば敵国の皇太子であろうと、例えば忌まわしき獣人であろうと、変わらない。自分の前に現れたからには、それが運命だと彼女は思つんだ。だから手を差し伸べる。自分の前に立つ者を皆平等に判断する」

だから、彼女は、森の奥に倒れていた穢らわしい獣人を拾つて、己の仗身とした。だから、東の君と呼ばれることにも少しの嫌悪も見せなかつた。獣人であろうと、東国の生まれであろうと、同じ命であることに変わりはないと知っているからである。さしあたって、皇太子に関してもそうだ。どれだけ高貴な存在であろうと、どれだけ強大な『力』を持つていようと、貴方は貴方だと言い切れる彼女の強さはそこにある。

「だが……なかなか、出来ることではない。俺は、獣人である自分と、巫女であるかぐわの君を平等になんて思えない。同じ世界に生きていることこそが奇跡だと思う。本来なら、巡り会うはずがなかった」

カグワの存在を遠く感じる昨今、ユタヤは本気で、彼女と自分は異なる世界の生き物なのだと思うようになった。そんな自分がどうして彼女に恋慕の気持ちなど抱けよう。



そうして俯いたユタヤを見て、面白そうに笑ったのはオレークである。

「だが、巡り会った。結果的にお前は此処にいる。やはり俺は、結果の方が重要だと思うがな」

そう答えて、オレークは柵から離れた。そして倉庫の扉の方へと向かう。どうやら此処から出て行くつもりのようなだった。

「……なるほどな、それが巫女君の持つ不思議な能力の所以か……。殿下の『力』でさえ鎮めてしまう強さは、相手を枠組みではなく真で見極める勘の良さからくるのか」

オレークは「面白い」と呟いて、こちらを振り返った。そして依然として女中の寝転がる長椅子の前に膝をついているユタヤを見下ろして、言う。

「俺も少し見習おうか……。まずは、獣人として呼んだことがなかったが、お前の名を聞こう」

獣人、と呼ばれることにも慣れたものである。それはユタヤの生まれ持ったさだめであり、厭う気もなかった。が、当然名前を名乗ることを拒絶する気もない。

「ゆたや、と申す」

「ゆたやか……。ふむ、さすがに獣人であるからには東国の生まれか」

ユタヤは驚いて顔をあげた。確かに獣人の出生率が最も高いのは東国であり、それは事実だ。だが、それを知っていてさらに「ゆたや」という名前が東国の物であると判断でき、きちんと東国の訛りで発音できる人間に久しぶりに会った。久しぶりどころか、カグワ以来、初めてかもしれない。

「東国の言葉が……。わかるのか？」

「最近では東国の人間も標準語を話すだろう。東国人との会話に困ったことはないぞ」

「そういうことを聞いているのではない。ゆたや、と俺の名前がわかるのか」

「ゆたや、か。作物などの実りの良いことを指す言葉であったか」  
「東国の古語だぞ?」

「俺は昔から古文書を読むのが好きなんだ。特に東国の神話は面白い」

そう言つて笑つた彼ははったりを言っているわけではなさそうだった。元より知識の豊富な切れ者だとは思っていたが、まさか他国の古語にまで精通しているとは思わなかった。オレーク・ナイザー。正真正銘の傑物である。

「では、俺はそろそろ戻るとする。殿下の『力』が暴発し、世話役としてやらねばならんことが山と残っているのだな」

そう言つて踵を返したオレークに対して、ユタヤは焦りを隠せない。この娘はどうすればいいのか。

「待て、この娘は……」

慌てて聞くと、青年は「放つておいて良い」と答えた。ユタヤは目を丸くする。確かに外傷はないものの、『力』の暴発を真正面から受けて精神に大きな損傷を食らつたと言つたではないか。

「忘却の水を飲ませたのだな」

目を丸くしているユタヤに、オレークは端的に答えた。忘却の水と繰り返すと頷く。彼の先示す先には、棚の上に置かれている瓶があつた。あの中に入っている無色透明な液体のことを示しているの  
であらう。

「あれを飲むと、今より一日ほど前までの記憶がなくなる。従つて、殿下の『力』の暴発のことも、精神に受けた傷も忘れる」

「そんなことができるのか……」

「『力』の使い道は様々だ。その忘却の水をお作りになつたのも、皇太子殿下だぞ。皮肉なことにな」

自分の『力』によつて犠牲になつた者を、自分の『力』によつて癒す。確かにそれは、皮肉なことかもしれない。

「俺は殿下の世話役だからな。殿下の『力』が暴発するたびに、こうして周りの始末を行う。三年経つた今ではお手の物だ」

今回は多少傷を負ってしまったがな、と自分の片腕を示して笑う彼は、倉庫の出口を開いた。開かれた出口から、日差しが暗い倉庫の中へと差し込んでくる。外はまだ昼間だ。

「ゆたや、お前ももしも、己の慕情を後ろめたく思うのであれば、忘却の水を飲んでみればいい。グラス一杯で一日分だ。後ろめたい想いも何も忘れられる。ただし、忘れたくないことまで忘れてしまふかもしれないがな」

オレークは冷めた笑いを残して倉庫を出て行った。ばん、と重い扉の閉まる音が響き渡る。

取り残されたユタヤはのろのろと立ち上がり、なんとはなしにその瓶の中身を覗いた。その中身はすでに半分も残っておらず、グラス五杯あるかどうかである。ここ五日間の記憶を失ったところで、ユタヤの中にある後ろめたい想いの消えるわけもない。

いつからこんなことになってしまったのだろうか、と思わずにはおれなかった。あの森で天女のような少女に救われた幼い日、自分はただ純粹に、彼女に命を捧ぐのだと誓ったではないか。それがいつのまにねじ曲がってしまったのか。

その答えは見つからない。恐らく永遠に、見つからない。彼に出来ることは、上階で皇太子を抱きしめているであろう少女のことを、ただ悶々と待ち続けることだけなのだ。

## 18、天女

季節が巡って行く。太陽の滞在時間が少なくなつて、朝も夕方も暗い。そろそろ西国エウリアにも冬の匂いが漂い始めた頃ではないだろうか。此処、北国には、冬が来た。

皇太子シルディアの『カ』の暴発したその夜、北国の首都は大雪に見舞われた。

皇宮の窓に叩き付けられる雪の塊はとても新鮮だ。何故なら、西国の首都にある後宮では雪など滅多に降らない。もしもここにカグワがいたならば、「雪よ、ねえ、見てゆたや！」と言つてはしゃいだに違いない。それに相槌を打つて、「今夜は寒くなるでしょうから暖かくして寝ましよう」と落ち着き払つたまま答えてやるのが己の仕事のはずだった。??だが、まだ、カグワは帰つて来ない。シルディアの部屋に行つたまま、帰つて来ないのだ。

夕刻になつて、夕食の時間も過ぎて、夜が来て、降りしきる豪雪を見つめ、寒さをしのぐために暖炉の横に腰を下ろして、長い夜が過ぎていき、やがて朝が到来した。朝になつても依然として雪は北国ラウグリアの国土に降り注ぎ、そしてそんな豪雪を見上げるのはユタヤ一人である。カグワは朝になつても帰つて来なかった。

暖炉の脇に蹲つたまま朝を迎えたユタヤは、ぱちぱちと音をたてて薪を燃やすその炎の暖かさに包まれて、転寝をしていた。

??とても幸せな夢を見た。

ユタヤは、とある田舎の村に生まれた普通の少年だった。母と二人暮らしで、とても質素な、だがとても幸せな生活を送っていた。

ある日、村に、天女と見紛う少女が現れた。綺麗な黒髪を持つ少

女で、太陽のような微笑みを振りまいた。少年ユタヤは、すぐに少女に心惹かれた。村一番の美女にも、村一番気だての良い女にも、他の少女になど目もくれず、その天女のような少女に心酔した。

歳月が過ぎると、ユタヤは少年から立派な青年へと成長した。村人とともに農作業をしたり、時には狩りに出かけたり、村の若衆として活躍していた。少女もまた成長し、大人びた。まだ無邪気な少女らしさも抜けきらず、だがより一層天女のように美しくなって、その不釣り合いな愛らしさにどうしようもなく胸の内がざわめく。

少女は、ユタヤの名を呼んで笑った。ユタヤの手を引いて走った。村組織という狭い世界の中を自由奔放に、駆け回った。二人ですつと駆け回っていた。

ふと足を止めて、少女が呟いた。??キスをしようか、と。驚いたユタヤは、危うく転びそうになり、だがなんとか踏みとどまった。

少女は冗談を行っている風でもなく、だが悪戯っぽく微笑んで、ユタヤの袖を引いた。ユタヤは彼女に逆らえない。天女の唇を奪うなど、とてつもなく罪悪感に駆られることだが、その罪悪感がまた心地良く、どうしようもない。

綺麗な少女に、触れたいと思った。触れて口付けをして、この小さな村でこっそりと結ばれて、やがては親になって、自分が育ったのと同じような質素な家庭を築いて、そんななんでもない幸せを構築していきたいと、思った。

そんな淡い夢を抱いてユタヤは少女に手を伸ばした。  
あと少しで唇と唇が触れ合うという、その時である。

がたん、と音がして、ユタヤは夢から醒めた。突然の現実からの呼びかけに、驚いて心臓が跳ね上がる。慌てて飛び起きたユタヤが辺りを見回すと、そこは北国ラウグリアの皇宮の一室、主力グワのために与えられた一室であった。

ユタヤは暖炉脇の壁に預けていた体をゆっくりと起こす。おかし

な姿勢で転寝してしまつたせいで、体の関節があちらこちら痛む。首を押さえてはきばきと鳴らしながら、ユタヤは夢か、と小さく呟いた。??とてつもなく、幸せで、虚しい夢を見ていたような気がする。

「……寝ていたのか」

寝ぼけていた彼に直接声をかけてくる相手が出て、ユタヤは再び驚き飛び上がりそうになった。獣の性を封印されているためか、あるいは相手が気配を隠すのに相当優れているのか、全く気付かなかった。がたん、というユタヤを覚醒させた音はどうかやら、この部屋の扉の開閉する音だったらしい。扉の脇に、金髪の少年、この国の皇太子が立っていた。

「……皇太子殿下」

「ごめんね、起こしちゃつたみたいだ」

そう軽く謝罪する少年の顔は、今までになく清々しい表情をしていた。初めてこの国に降り立ち出会つた時の病気のような疲弊の色も、「出て行け」とこの部屋で一喝された時のような苛立の色もない。まるで憑き物が落ちたかのように、すっきりと清々しい表情をしていた。

「別に起こすつもりはなかつただけ」

「……いえ、転寝していただけですから、良いのです。どうぞお気になさらず」

ユタヤは寝起きでまだ判然としない頭を押さえながら立ち上がり、皇太子を暖炉前に置かれた座椅子の方へと招き入れた。大雪の降る寒い中、この部屋で最も暖かいのはこの暖炉前の座椅子である。

「まだカグワは俺の部屋で寝ているから、心配していると良くないなと思つて来たんだ。それに君とちよつと話もしたかつたしね」

「……はあ」

言いながら座椅子に座る皇太子を前に、ユタヤは複雑な心境を隠せない。彼に依然一喝された時の、殺されるのではないかという恐怖もまだ忘れられてはいないし、彼に言われた「お前は彼女に惚れ

「ているんだろう」というその台詞も頭から離れない。そして、彼を抱きしめて癒した主の様子が何度でも脳裏に蘇り、そしてまだ彼の部屋で寝ているのだという彼女を思うと居たたまれない気持ちでいっぱいになった。そんなユタヤを前に、彼は今更何を話したいことがあるというのだろう。

そんなユタヤに対して、シルディアは言う。

「この前は悪かったね。実はあまりよく覚えていないんだけど……ものすごく気分が悪くて、君にひどいことを言ったような気がする。まずはそれを謝りたいと思って」

突然繰り出された謝罪に、ユタヤは目を丸くする。この前とは、「出て行け」と一喝されたあの件のことであろう。ユタヤは慌てて「滅相もない」と首を振る。実際、あれ以来ユタヤが気を病んでいるのは事実であるが、それは必ずしもシルディアの所為ではない。何故なら、彼の言ったことはほぼ真実であると、今では認めざるを得ないから。

「俺は、皇太子として生まれ、皇太子として育ち、どうせお前らなんか俺の気持ちかわかるわけもない、なんて苛立つことがよくある。でもそれを言ったら、お前だって同じことで、俺には獣人であり仗身であるお前の気持ちなんて理解できない。それなのに、わかつたような面をして、お前にひどいことを言った。ユタヤにはユタヤの、悩みがあるはずなのになあ」

「いいえ……私なぞの悩みなど、取るに足らないものでございます」「だからそんなに自分を卑下するなよ……」って言ってもまあ、仕方ないか。十何年かけて植え付けられた感覚だもんな」

くす、と笑ってシルディアは首を竦めた。ユタヤは何と言いつ返すこともできずに、無言でシルディアの前に膝をつく。見上げた皇太子の顔には屈託のない笑みが浮かんでおり、「力」は暴発するだけ暴発し、今はすっかり落ち着いているのだなと伺えた。

「……殿下は、今朝は御気分がよろしいようで」

その顔色から思った通りのことを告げると、「うん」とシルディアは軽快に頷いた。本当に気分が良いのだろう。

「昨夜はひどい姿を見せてしまったけど……おかげで、すっきりしたよ。カグワと一緒に寝てくれたからね。彼女を抱いて寝ると、不思議なことに驚くほど安眠できるんだ。??あ、変な意味じゃないよ。物理的に、抱きしめてという意味だ」

補足される説明に、どうやって反応すれば良いのかわからない。それがどういう意味であっても、巫女であるカグワが彼を許容したのであれば、従者でしかないユタヤにあれこれ言う権利はない。

沈んだ面持ちで俯くユタヤに、シルディアはそつと手を差し伸べる。彼は膝をついた青年の顎に手をあてて、くいと上を向かせた。そして自分と目が合うと、微笑む。

「ねえ？ 君はいつから、彼女を愛していたのさ？」

ユタヤの瞳が揺らぐ。顔を伏せ、目を逸らしたいのであるが、皇太子が顎を掴んで固定している以上、動くこともできない。

「そのようなこと……」

「まだしらばくれるのか。今更違うなんて言わせないよ。俺が彼女を抱いて寝たというだけでそんなに動揺しておきながら」

返す言葉もない。今ではこれが男女の間に生まれるような俗な愛情ではないと言い切れる自信もない。いや、今までだって、相手は巫女だからと己は獣人だからと、その事実を土台にして己の心を伏せていただけだ。自分がどれだけ主の傍に寄り添いたいと思えば、そしてどれだけ彼女に恋いこがれてきたのかなんて、隠し通せるほど小さな想いではなかったことは明白だ。

ユタヤが罪悪感たつぷりに唇を噛み締めると、シルディアはそれを見て首をすくめる。

「……別にいいじゃないか。お前が彼女を愛したって、別に彼女はお前を厭わないだろう」

「……それが問題なわけではありません」

「じゃあなんだ？ 彼女が巫女だから？ お前が獣人だから？」



「それもありますが……それだけではなくて」

シルディアの手が顎から離される。ユタヤはすぐさま俯いて敷かれた赤い絨毯を見つめると、ぐつと歯を噛み締めた。

いつから彼女を愛していたのかわんて、皆目見当もつかないことであつた。それはこの瞬間から、と呼べるようなものではなくて、日々寄り添う後宮の緩やかな時の中で、ゆつくりと育まれた今となつては引き返せないほど大きな想いだ。いや、あるいは、初めて獣へと変化して、森の中で倒れていたのを救われたあの瞬間から、ずっと彼女に焦がれていたのかもしれない。

とにかく、それは無意識の結果であり、そんなつもりではなかったのだ。そんなつもりではなかった。自分はただ彼女を護るのだからに誓つただけだ。それ以上は何も望んでいないはずなのに。

「??？彼女は、私の前に降り立った天女なのです」

ユタヤはぼつりと呟いた。「え？」とシルディアが目を丸くする。思いも寄らない返答だつたのだろう。ユタヤはぼつりぼつりと吐き出すように、続けた。

「巫女であるとか、獣人であるとか……もちろんそれが無関係であるとは思いません。ですが、そういうことではないのです……。彼女は天女だ。巫女も『力』も関係ない。私の前に降り立った、天女なんだ」

初めて彼女を森で見上げた、あの死を間近に控えた絶望の淵で、「天女だ」と思った瞬間から、ユタヤの心は変わらない。彼女は天女のように美しく優しく、慈悲深い。ユタヤに生きる意味を与えてくれた。そして今も、自分は彼女のために生きている。

それなのに、いつから自分は彼女に俗な愛情を注ぐようになってしまったのだろう。

苦りきるユタヤを見下ろして、シルディアは「天女ねえ」と小さく呟いた。まるで呆れているようにも聞こえるその声色の意味は、

本気で悩んでいるユタヤには届かない。

「まあ、それも愛情なのかな。俺は誰かを天女みたいだなんて思ったことはないけれど」

思っても言わないけどね、と付け足して、シルディアはすらりと足を組んだ。彼は今度は己の顎を撫でて、ちらりと窓の外を見る。

降りしきる雪で景色も見えない窓の外を見てから、少年は「そうだね」と言葉を続けた。

「天女かどうかはともかくとして……お前の言いたいことがわからないわけでもない。俺はカグワに抱きしめられて初めて、『愛』の意味を知った気がする」

言われて、ユタヤは顔をあげた。すつきりとした笑顔を浮かべ、遠い窓の外を見やる皇太子は、以前、「無償の愛」を真っ向から否定した。人を愛するからには必ず何かしらの見返りを求めているのだと、彼は語った。だが、今の彼は、何かを悟ったかのように改めて「愛」についてこう語る。

「不思議だね。別に何をするわけでもない、男女として交わるわけでもなんでもないのに、ただ寄り添うだけで、とんでもなく安心するんだ。そして、俺自身も、優しい気持ちになれる。愛は伝染するのかな？ 誰かから愛を受け取れば、その愛を他の誰かに注ぎたいようになる？？そんな感覚だ」

皇太子は言って微笑んだ。色白で華奢な少年は、毒のない笑みを浮かべればそれはそれは美しい様相をしている。ユタヤは初めて、この少年の本来の姿を見たような気がした。

「だからきつと、そんな風に俺に愛を注いでくれたカグワも、今までたくさんの愛情を注がれて生きてきたんだと思うんだ。だから、迷わず俺を抱きしめられる。？？彼女に愛を注いできたのは、お前か？」

どうやら、彼の質問の真意はそこにあっただらしい。故に、「君はいつから、彼女を愛していたの」と問うてきたのかとようやく氷解する。

しかし、ユタヤが彼女に慕情を抱いていることは今や認めざるを得ないものの、ユタヤが彼女に注いだ愛情が、それほどまでに大きく彼女に影響しているとは思えなかった。カグワはカグワだ。ユタヤが彼女にどれだけ恋い焦がれようと、変わらない。

「かぐわの君は……そういうお方なのです。私が彼女を愛していたからとか、そんな理由ではありませんまい」

「ふうん？ そうなの？」

まあ俺にはよくわからないけどさ、と軽い口調で言っただけで、シルディアは座椅子から立ち上がった。ユタヤは膝をついた姿勢のまま、彼を見上げる。くるりとこちらに背を向けた彼は、どうやらもう帰るつもりらしい。

「カグワがずっと此処にいられたらいいのにつて、俺は思うよ」

背中越しに吐き出された言葉に、啞然とする。カグワは西国の巫女だ。「そういうわけには」と慌てて口を挟むと、シルディアはくすくすと笑った。彼は「わかつてるよ」と言う。

「カグワがずっと此処にいられないことは、わかつてる……。そして、西国と北国の間に何が起きようとしているのか、そのために西国の巫女が何をしなくてはいけないのか……」

ぼそぼそと紡がれる言葉に耳を傾けながらも、ユタヤには深意が解せず、眉をひそめる。

シルディアにはしかしそれを説明する気はないようで、部屋の扉に手をかけると、それを開いた。そして今までになく寂しげな笑みを浮かべると、こちらの方を振り返った。

「生まれついた定めというのは、悲しいものだね……。君が獣人であることをどうあがいたって変えられないのと同じように、俺はどうあがいたってやっぱり北国ラウグリアの皇太子なんだ。そして、カグワは西国エウリアの巫女だ」

それはそうだろう、と釈然としないままユタヤが頷くと、「うん」とシルディアも頷いた。

「定めは変えられない。それは、君も俺も、同じことだね」

少年はその一言だけを残して、部屋を去って行った。取り残されたユタヤの中には、妙なわだかまりだけが残される。

誰もいなくなった部屋の中で立ち上がり、ユタヤは暖炉の脇に再び移動すると、シルディアが来る前まで転寝していたその場所に再び腰を下ろした。腕組みをして目をつむれば、再び睡魔が襲いかかってくる。

??定めは変えられない。

それはその通りであると、ユタヤもよく承知していた。だがしかし、皇太子の述べた「定め」というのが何なのか、判然とはしないカグワがずっと此処にはいられないことが、自分が北国の皇太子であることが、あるいはカグワが西国の巫女であることが、それとも何か全く別の事を示唆しているのか。

強大な「力」の持ち主であるというシルディアならば、巫女の技の一つでもある先見の技、すなわち未来予知をするのも、朝飯前である。おそらく彼の言う定めは、彼の見た未来の一つだ。彼は未来の光景の中に、何を見たのだろうか。

何やら、あまり良くない予感がした。そもそもいつまで北国の軍は、西国の巫女カグワを此処に幽閉するのだろうか。西国は、北からの文書を受け取ってどのように返事をしたのだろうか。北国では、西国では??今、世界では何が起こっている？

皇室の中に閉じ込められたユタヤには、果たして外の事情が全く聞こえてこない。だが、北国に攫われもう一月以上が過ぎるといふ頃、何かが動き始めているであろうことは想像に難くなかった。

(とにかくにも、何があるうとも、俺はかぐわの君を護ろう)

例えその動機が純粹ではなくとも。例えそれが彼女へ注ぐ不純な愛であつても。

ユタヤの心は、やはり変わらない。己の決意の動機さえわからない今でも、変わらない。

## 19、愛を知らない

少年が生まれた今より十七年も前のこと、北国ラウグリア帝国は、帝政と軍政の間で揺れ動いていた。

北国の中で軍隊が力を持ち始めたのは、前帝が倒れたすぐ後のことである。まだ若き新帝ラプソディアには、勢いづく軍を鎮める力がなかった。政権を握る能力もない新帝ラプソディアに助言するような形で軍は実権を握り、やがて政治を操作するようになった。

いつのまにやら、皇帝ラプソディアには、何の権限も与えられなくなった。あるのは形ばかりの権力で、実際には何一つ己の意思で決定することができない。何をするにも、必ず軍の許可が必要だった。彼が成人するのとともに迎えた妻、すなわち皇后でさえも軍の一存で選ばれたものだった。

皇帝ラプソディアの妻、皇后は、軍のとある指揮官の娘であった。指揮官の娘を皇后にすることで、軍はますますその権力を揺るぎないものにしようと企んだ。政略結婚であった。

皇后となった女は気が強く、己の父である軍の指揮官を崇拜し、軍の力を絶対だと思っていた。夫である皇帝ラプソディアには少しの敬愛も施さなかった。彼を己の僕のように思い、いつでも冷たくあしらった。

皇后に冷たくあしらわれ、軍のおもちやとされる日々疲れきった皇帝ラプソディアはある日、軍人の跋扈する宮殿の中で、可憐な少女と出会う。それは皮肉にも妻である皇后の妹であり、すなわち軍の指揮官の二女であった。そうとは知らない皇帝ラプソディアは、必死に軍人たちの世話をする少女の姿に一目で惚れ込んでしま

い、悲劇はそこから始まった。

皇帝ラプソディアは皇后の目を盗み、来る日も来る日も少女の元へ通った。少女は相手が皇帝と知り、姉の夫なのだと知り、とても邪険にはできなかった。そして皇帝ラプソディアが己に並々ならぬ愛情を抱いていることを知ると、「それはなりません」ときっぱりと拒絶した。少女には分別があつた。どれほど皇帝陛下が己に愛を注ぐと、それが世間的には許されぬ愛であることを知っていた。故に邪険にはせずとも、強い気持ちで拒絶した。

だが、障害のある愛とは時に普通の愛以上に盛り上がるものであり、拒絶されればされるほど、皇帝ラプソディアの恋心は燃え上がった。日に日にあの少女を己の物にしたいという欲望が膨れ上がった。仕舞には、少女の拒絶も聞かず、無理矢理にも己の下へと組敷いた。少女の泣き叫ぶ声に、応える声はなかった。何一つ国政の権限を持たないというのに、悲しいことに彼は皇帝であつた。誰も皇帝の情事を邪魔しようとはしなかった。

やがて少女は皇帝の子を腹の中に宿した。それは、望まれぬ命であつた。父となる皇帝ラプソディアでさえ、彼女が子を孕んだことに絶望した。あれほどまでに己の物にしたいと願つた少女であるが、彼には妻皇后がおり、しかもそれは少女の姉である。皇帝ラプソディアは、取り返しの付かない現実を前にして、ようやく我に返つた。そして己のやらかした事態に責任を取ることのできるほど、精神の強い男ではなかった。

少女が皇帝の子を宿したことを皇后が知るのは、少女が子を産んだすぐ後のことであつた。皇帝ラプソディアはその事実を、誰にも漏らさなかつた。少女もまた、口をつぐんだ。だがしかし、己の娘が子を産んだと聞いて、父である軍の指揮官はその親を聞かぬわけにはいかない。少女は子を産んだ後、涙ながらに吐露した。??そ

れが皇帝ラプソディアの子供である、と。

怒り狂ったのは、皇后であった。もとより気の強い、気位の高い女であり、己の妹が夫の子を産んだとなれば、我慢できるはずもなかった。そのどうしようもない屈辱に耐えきれず、皇后は実の妹を毒殺した。もとより、仲の良い姉妹ではなかった。皇后は妹を殺しても、平然としていた。

一方の皇帝ラプソディアは、少女が己の妻に殺されたという事実を知り、正気を失った。生来気の弱い男である。少女が己の子を宿したという時点で気が動転し、病の床に臥せていたのだが、妻による少女の暗殺がとどめとなった。ラプソディアは精神を病み、正気ではいられなくなった。

そしてこのような皇室の事情を嫌ったのは政権を握る軍である。これを機に皇室を撤廃することも考えたが、長年続いた帝政を打ち破るには、まだ動機が足りなかった。なにしろ宮殿の中には依然として巨大な皇宮がそびえ立ち、その中には何百という皇室の持つ小間使いを含めた部下が生活していたのである。

そこで軍は、少女の産んだ皇帝ラプソディアの第一子を皇太子として育てあげることにした。相手はまだ年端もいかぬ幼子である。それを軍の一部として育てて、彼自身の手で皇室を撤廃させようと企んだ。軍による圧政では皇宮の人間は言うことを聞かなくとも、皇太子の言うことならば聞こう。そう考えたのである。

それに反対したのは、これまたやはり、皇后であった。皇后は己の産んだ子供でもない、その憎らしき男児を疎んだ。すると、それからまもなくして皇后は謎の死を遂げた。未だにその死因は明らかにされていない。が、軍の誰かが彼女を暗殺したのであることは安易に予想が付く。



そこから、軍による皇太子の教育が始められた。皇太子はシルディアと名付けられ、軍の下で教育された。今や皇室が軍なしでは生きられないこと、そして軍がこの北国を支配しているのだということ、北国の軍はこの世で最強なのだということ、様々なことを幼いうちから植え付けられた。

しかし、シルディアが成長するにつれて、軍の予期せぬ妙なことが起こるようになった。

皇太子シルディアが具合を悪くしたり機嫌を悪くしたりすると、周囲の人間が怪我を負ったり、あるいは重い病から起き上がれなくなったり、最悪の場合は死に至る。また、皇太子シルディアは、彼を知るはずのないことを知っていたり、未来のことを予知したり、見た事もないものを記憶していた。最初は偶然だと思われていたが、あまりにもこのようなことが続いたため、これは妙だと軍は気付いた。??皇太子シルディアは、不思議な「力」を持っている。

シルディアの成長とともに「力」は徐々に強まり、やがて周囲に人を近づけなくなつた。その恐ろしい「力」に飲まれ、凡人では長く傍にいられない。そこで、軍は、この「力」を独自に研究するようになった。そしてシルディアの持つ「力」の強さを知ると、今度これを軍事力の一部として使うことを決めた。こうしてシルディアは、本来皇室の撤廃とともに弑される予定だった命を、永らえることとなつたのである。

シルディアは、己の命が望まれずして産まれたことを知っている。産まれたその瞬間から、誰からも愛を与えられずに育つた。故に愛を知らない。

シルディアは、己の『カ』が闇を呼び、周囲を害し、人を死に至らせることさえあると知っている。故に孤独であり、愛を知らない。

シルディアは、全ての物事には裏があり、複雑に絡み合って世界を成していると知っている。故に己の意思で動くことを諦め、愛を知らない。

その夜から明け方にかけてラウグリアの国土を覆い尽くした雪嵐は、朝日が昇る頃には静まり、落ち着いた。

それはまるで、シルディアの中で暴発した『力』のように、朝日の昇る頃には清々しい晴れ模様を示していた。

朝日の昇る前に目のさめてしまったシルディアは、隣にカグワが寝ていることを確認してから、ゆっくりと寢床を抜け出してカグワの部屋に待つであろう仗身の元へと向かった。彼と軽い会話を交わした後部屋に戻ると、丁度朝日の昇る頃合いであった。『力』の暴発の所為でぼろぼろになったカーテンの合間から差し込む朝日を受けて、寢台の上に横になっていたカグワが目を覚ます。「ん」と彼女が小さくうめき声をあげたので、シルディアは寢台の上に腰掛けて、彼女の目覚めを見守った。

少女の黒髪がもそもそと動き、寝返りを打つ。そして、ゆっくりと黒い瞳が開かれて、寝ぼけた眼でこちらを向いた。シルディアは寢台の上に腰掛けたまま少女を見下ろして、にこりと微笑む。

「おはよう」

寝起きでも聞きやすいようにと低く柔らかい声で告げると、カグワの黒い瞳がぱちぱちと瞬きを繰り返した。

「……シルディア」

少女は寝起きのか細い声で彼の名を呼んで、それからゆっくりと起きあがる。しばし周囲を見回して自分が皇太子の部屋にいるのだということを出すと、寢台に座っている彼の顔を覗き込んだ。

「……シルディア、具合は？」

迷うことなく、何より最初にシルディアのことを慮ってくれる。

少女のそんな態度にくすぐったさを覚えながら、シルディアは「大丈夫」と頷いた。

「おかげで、すっかりしてるよ……ここ何ヶ月かの間で、一番快適な朝かもしれない」

そう素直に告げると、みるみるうちに少女の顔に笑みが広がった。彼女は心からシルディアの無事を喜んでくれる。

「そう……よかった」

呟いて、カグワはゆっくりと寝台から下りた。乱れた髪と服の裾を正し、ぼろぼろになった窓枠の外から差し込む朝日を眺める。それを見て、時間の経過を知ったようだった。

「……シルディア、私、帰らなきゃ……ユタヤが心配しているかもしれないわ」

カグワは朝日が昇っていることを知り、シルディアの方を振り返る。シルディアもそれに対しては「そうだね」と肯定した。

「きつと心配しているだろうから、帰ってあげた方がいい」

「ええ……また、来るから」

相手が他国の皇太子であろうと、獣人であろうと、誰であっても平等に愛を注ぐカグワは、シルディアに対しても屈託のない笑みを見せた。その笑顔の去ってしまうことが少しだけ名残惜しくて、だが、他人への甘え方の知らないシルディアは「カグワ」と彼女の名を呼んでただ片手を伸ばす。伸ばされた片手を見つめ、カグワは一瞬きよとんとしたが、すぐに元の微笑みを取り戻すとその片手を握り締め、シルディアに近付いた。

そして、寝台に腰掛けている彼の白金の髪をかきわけ、優しく額にキスをする。母親にも父親にも、キスはおるか抱きしめてもらったことさえない皇太子は、そのキスをもらうたびに嬉しいような切ないような、心の臓をぎゅっと掴まれるような苦しみを味わった。苦しみとは言え、それは不快なものではない。

「じゃあ……またね」

皇太子の額に軽いキスを落としたカグワは彼の髪を撫でて、微笑みとともに去って行った。

シルディアは彼女の去って行った方を眺めて、軽く片手を振った。

そして彼女がずっと此処にいればいいのに、ともう何度目かわからない願望を胸の内に抱く。??しかし、それがどうしたって叶わない願いであることも、彼は重々理解していた。

??北軍はそろそろ、西国への出陣の準備を整えつつある。

シルディアは直接軍の司令部とそういつた国事の会議をすることはないが、当然のようにその事実を知っていた。何しろ、シルディアには『力』があるのだ。『力』を持つ者の中には例えば遠方の会話を聞き取ったり、遠方の光景を見たり、あるいは過去や未来を見聞きすることもできる者もいるが、シルディアにはそれら全てのことが可能であった。つまり彼は望めば過去も未来も、そして当然今現在どこかで行われている軍の国事会議を聞き取ることだって可能なのである。

聞きたくもないことが聞こえ、見たくもないものが見える己の能力を、何度呪ったか知れない。あまりにも強大な『力』は己には制御し難く、なるべく耳を塞いで目を閉じているものの、それでも聞こえてくるもの、見えてくるものは多々あった。故に彼は、北国が西国と和解する気など最初からないことを知っていたのである。

(あーあ……せつかく初めて、俺のことをシルディアって呼んでくれる奴に出会えたのになあ……)

シルディアは心の中で嘆いて、ころりとそのまま寝台の上に転がった。カグワと別れるのは辛い、これは定めであり、運命なのである。いくらどんなに強い『力』を持っていても、運命を変えることはできない。シルディアがどんなにあがいても、皇太子である自分をやめることなどできないように。

ベッドに敷かれた毛布に顔を埋め、しばしぬくぬくと暖まっていると、不意に扉がノックされた。

「??オレークです。殿下、入室してもよろしいでしょうか」

シルディアは顔をあげ、扉の方を見やった。彼はシルディアの世話役を務め、三年になる。そろそろ入室許可などもらわずとも我が者顔で入ってきてくれればいいのになんてシルディアは思うが、オレークは決して己の身分以上のことはしなかった。そして恐らく、オレークがシルディアの世話役を続けていられることも、それに起因している。

「いいよ」

シルディアが雑に許可を出すと、すぐに扉が開いた。入ってきたのはオレークと、その他何人かの小間使いの男達である。男達は扉を開いたまま固定し、机やカーテンなど、昨晚『力』の暴発でぼろぼろにってしまった家具の替えを運び入れた。

がさごそと、途端に部屋の中が騒がしくなる。寝台の上で仰向けに寝転がっていたシルディアはゆっくりと起きあがると、新しい家具の運び入れられる様を、見つめた。

「……窓枠や壁紙などは、そう即座に交換できないのですが、ひとまず交換できるものだけでも」

他の小間使い達がせつせと働くのを見ながら、そう説明してくれたのは寝台の脇に立ってオレークである。シルディアの世話役である彼は、昨晚破壊されたこの部屋の中身を確認し、一晩で用意できるだけの家具を用意してくれたのだらう。仕事の早い男だ。

「……昨夜俺の部屋にきた娘は？」

シルディアは小さな声で世話役に問いかける。昨夜、『力』の暴発するその直前まで、最近よくシルディアの世話に来てくれる侍女とちちくりあっていた。だが、その行為の最中に突如死人の魂に襲われ、『力』が制御できなくなり、そこから先はあまり記憶がない。当然、娘がどうなったかなんて、覚えているわけもない。

「無事です。昨日あったことはまるまる一日忘れております」

さすがにオレークは仕事が早い。

「……そっか」

シルディアはほっとしたような、だが少し寂しい心地で頷いた。

己の『力』の所為でさらなる命の犠牲が出なかった事は喜ばしいが、記憶を丸一日消去しなくてはならないほど彼女に与えた衝撃が大きかったのだと思うとそれもまた悲しい。シルディアとともにいたその瞬間は、他者にとって害となる。故に、人々の記憶から、シルディアは消去されていく。

もうとつくに慣れてしまったこととは言え、虚しいことに変わりはなく、シルディアは「あーあ」と溜め息を吐いて再び寝台の上に転がった。

「……カグワなら、俺のこと、ずっと覚えててくれるだろうになあ」

嘆き半分にそう呟くと、寝台の横に立つオレークが「そうでしょう」と頷く。シルディアは仰向けに転がったまま、彼の顔を見つめた。

ポーカーフェイスの得意な男であるが、その裏側は様々なことを考えているのだとシルディアは知っている。三年もの年月シルディアの世話役を続けられたこの男は傑物だ。軍からの信頼も厚く、シルディアでさえ知らされない機密情報を多々握っている。

「……カグワ、いつ、殺されてしまうの？」

小さな声でそのポーカーフェイスに問いかけると、さすがに驚いたようにその瞳が揺らいだ。軍からその機密情報を知らされなくとも、シルディアにはそれらを聞いてしまう『力』がある。盗み聞きというわけではない。シルディア自身、聞きたくなかないのに、聞こえてしまうのだ。

オレークは寝台に転がったシルディアを見つめて、その顔が全てを受け入れるかのように諦観していることに気付き、ふうと溜め息を吐く。彼もこの皇太子に隠し通すことなど無理だと知っているためだろう。諦めたように腕を組んで、小さな声で答えた。

「私とて、その詳細までは存じておりませんが………昨晚のうちに西

国との戦に反対する勢力は全て処罰したはずですから、そろそろということでしょう。あと二、三日、あるいは今日明日という可能性もございます」

「……そう」

思ったより早いな、と思いながらも、シルディアは頷いた。全ては軍の決めたことである。それに逆らうことなどできない。シルディアにはこの国の向かう方向など、そのために何をすべきなのかなど、何もわからないのである。国政の権利は全て軍が握っていた。シルディアには皇太子として、国民のために、軍の政治の邪魔にならないよう頷くことしか許されていないのだ。

西国の巫女を弑す。

軍がそう決めたことならば、シルディアは黙ってそれに従うしかない。

「俺、どうして皇太子なんだろうな……」

小声でぼやくと、オレークは何も答えなかった。聞こえなかったのかもしれないし、聞こえていても反応の仕方がわからなかったのかもしれない。

全ての仕事を冷徹にこなすオレークは、シルディアにとっても、今までで一番居心地の良い世話役であった。

初めて彼が世話役としてシルディアの元を訪れた時は「またか」としか思わなかった。また、新しい犠牲者が増えてしまったと、思った。なにしろ自分の世話役はこれで五十人目だ。中には命を落とした奴もおり、あるいは死にまでは至らなくとも回復不可能な傷を精神に負って今も尚狂い続けている奴もいる。せめて少しだけでもましになればと、『力』の干渉を防ぐ効力を込めた玉音石と呼ばれる石を授けたものの、期待などしていなかった。こんなものは気休めだ。すぐにシルディアの『力』に巻き込まれて逃げ出してしまっ



に違いない。

だが、オレークは恐ろしく優秀だった。今までの世話役が、「皇太子の世話役」という役職に対して誇りを持ち、皇太子の身の回りのことならば何でも行い皇太子の言うことならば何でも耳を貸し、何にでも干渉してきたのに対して、彼は皇太子との間に一線を引いた。己が世話役としてやらなくてはならない最低限の仕事を見極め、その他例えば食事の用意や掃除、誰でも出来る仕事を他の小間使いにうまく立ち回らせた。しかしだからと言って他人行儀にはならず、皇太子がその時思っているであろうことをぴたりと言い当てて、彼の望むことを提供した。すなわち、洞察力や観察力、判断力に恐ろしく優れていた。

今までの世話役は、シルディアの傍にいてただ日に日に衰弱していき、最終的にはシルディアの心の闇に同調し、「お可哀想に」と狂ったように嘆いたまま逃げ出すか、精神を病むか、あるいは死んだ。だがオレークはいつでも冷静で、衰弱もしない。玉音石の効力のみによるものだとは思わない。彼は上手く、シルディアの心の闇を避けた。

「ねえ、オレーク……」

そんな彼だと知っているから、かつての世話役には聞けなかったようなことも、聞くことができる。彼ならば上手く躲すだろうと思うから、シルディアは気を遣わずにおれた。

「お前は、俺のことを忘れるなよ」

そう告げるとオレークは目を丸くした。しかしすぐにいつもの調子を取り戻して、「ええ」と頷く。

「忘れはしません……一日たりとも」

その強い決意にも似た返答に、シルディアは満足して「うん」と答えた。

これから先、オレークもシルディアの傍を去ることがあるかもしれない。否、絶対にその時は訪れるだろう。悲しいことにシルディ

アには未来さえ見えてしまうのだ。彼は何かしらの理由でシルディアの元を去る。だが、それでもいいと思っっている。この世の中に、一人でも、自分のことを覚えてくれていてる人がいれば。

「カグワでさえ、死んでしまうんだ……お前は、生きて、生き延びて、俺のことを忘れないでくれ」

「殿下……」

シルディアの何やら含みのありそうな言葉に、オレークは戸惑いを見せた。それはそうだろう。まるでシルディア自身死にいくような言葉だ。シルディアはくすと笑って、首を横に振った。別に、死ぬつもりはない。ただ、シルディアには未来が見えるのだ。

「シルディア、と……お前は俺の名を呼ばないね」

突拍子もない話題の転換に、オレークは眉をひそめる。だが、不快そうな顔はせずに、静かに頷いた。

「名前は、呪縛であるという言い伝えがありました……」

「ふうん？」

面白そうな話だなと耳を傾けると、彼はその冷徹な表情の上になわずかに微笑みを乗せた。

「東国に古くから伝えられる話です。名を呼ぶことによって知らず知らずのうちに呪い縛られ、やがては抜け出せなくなると」

「へえ？ それは、無闇に他人の名を呼んだり、あるいは他人に名を呼ばせたりするものじゃないってという教訓の話なの？」

「いえ、ただの伝承ですから……特に教訓のある話ではございません。ただ、名前をよぶことによって人は人に呪い縛られるというのは事実ではないかと」

「お前は、俺の名を呼んで縛られるのが怖いのか？」

「そうですね。縛られることがなにも全て悪いとは思いません。何事も使い方次第でしょう。ただし、私にはまだその呪いの上手い使い方がわからない。だから躊躇してしまうのです」

「ふうん……面白いね」

シルディアは寝台の上に転がったまま、天井を見つめた。

カグワはシルディアの名前を躊躇なく呼んで、その上己の仗身である獣人にさえ己の名を呼ばせる。結果、あの獣人はカグワという存在にがんじがらめに縛られていると言って間違いないだろうし、シルディアもシルディアである少女に魅入られた。あの少女は、上手な名前の呪縛の使い方を知っているのだろう。

「東国の伝承か……。よく知ってたな」

心底感心して言うと、オレークは恐縮するように首を竦めた。

「私は昔から、読み物ばかり読んでおり、それはそれは暗い子供でしたから」

「昔から知識欲が盛んだったんだな。お前は何でも知っている」

「まさか。……世の中には、私の存じないことばかりでございます」

謙遜するわけでもなく、本心からそう思っているらしい口調である。

シルディアはそれ以上は彼を賞賛することもなく、「そうか」とだけ呟くと、それきり口を閉ざした。見慣れたはずの天井の様子が昨夜の『力』の暴発によってぼろぼろに焼きただれている。

知らないのならば、知らないままでもいいと、シルディアはそう思っていた。世の中には知りたくもないのに聞こえてきてしまうことばかりだ。もう聞きたくないんだと耳を塞いでも、もう見たくないと目を瞑っても、様々な情報が交錯する。

??西国の巫女を、弑する。

ふと、そんな声が聞こえたような気がした。どこの誰が喋ったのかまではわからない。だが、シルディアの人並みでない『力』がその声を聞きつけてきた。当然聞き違いなどではなからう。

北軍の出陣の始まる時はすぐそこにまで迫っていた。シルディア

は皇太子として、軍の出発を見守ることになるのだろう。そしてそのはなむけとして、西国の巫女の命が捧げられるのだ。

未来は怒濤の勢いで、押し寄せていた。

## 21、襲撃

水面下で静かに火種が投げられる。導火線が煙を吹く。まだ何も知らないのは、当事者ばかりだ。西国の巫女も、そしてその仗身も、まだ何も知らぬ。

そしてユタヤの待つ部屋にカグワが帰ってきたのは、雪のやんだ朝方のことであった。

「おはよう、ただいま」と言っただけで帰ってきた少女の様子はいつもとなんら変わりなく、まるで昨夜あったことなど全て忘れてしまったのではないかと思えるほどだった。しかし、おかえりなさいませ、と言っただけで彼女にいつも通り頭を下げたユタヤは、それ以上動けず、いつも通りの振る舞いができなかった。??カグワから、シルデアの匂いが漂った。一晩彼の寝床で寝たのだから匂いが移ったと不思議なことではなかったが、それに気付いてしまったことと、気付いて気にしてしまう自分に嫌悪を抱いた。

「……………どうかした？」

そんなユタヤの異変に気付かないほどカグワは鈍感ではなく、首を傾け問うてくる。そこで、

「……………昨夜、あの娘を無事保護しましたということを、思い出しています」

かなり苦しい言い訳をした。しかしカグワはそれに対しては満面に笑みを浮かべて「よかった」と喜んだ。

貴女の体から皇太子の匂いがすることが気になって、とは、口が裂けても言えない。

胸の奥にわだかまりを抱えるユタヤの心情とは裏腹に、時間はあまりにも平和に流れていった。のんびりと朝日が昇り、小間使いのユーリがやってきて、昨日のことを心配しながらも朝食を用意して行った。そしてカグワもまた、平常通りだ。ユーリに「貴方が早く私を呼んでくれたから、私も早くシルディアに会うことができたわ」と言つて彼女は笑顔でありがとうと礼を述べた。ユーリはまさか謝礼を言われるとは思つていなかったのだらう、拍子抜けした後に、「私なんか何の役にもたてず」と赤面した。ユタヤは、カグワが人の心を柔らかく魅了していくその瞬間を、遠い心地で見守つた。

カグワに魅了されるのは、当然ユタヤだけではない。否、それどころか、彼女と出会う全ての人は少なからず彼女に魅了されているのではないかとユタヤは思う。もちろんそれは、男女の慕情のような物に限らず、人としての魅力だ。ユタヤも、人として、主として聖女や巫女の君として、彼女に魅了されてきた。そのはずだった。それなのに、彼女が皇太子の匂いを全身に纏うことがとても嫌で、そんな感情を抱く自分を誰か罰してくれないかと他力本願に願う。

「ゆたや……？」

朝食が済み、食器類も全てユーリによって片付けられて大分経つ。ユタヤは窓の外を眺めてぼんやりとしていたらしい。彼はカグワに声をかけられて、はっと我に返つた。

彼女はユタヤの隣に立つてその顔を覗きこんでくる。我に返つたユタヤは少女を直視できずに視線を逸らして宮殿の屋根に積もつた銀の雪を見つめた。太陽の光を反射させて、それはきらきらと輝いている。

「なんとも……平和ですな」

視線を逸らしてしまつたからには何か言わなくてはと、口をついて出たのは面白くもない呟きだ。カグワはユタヤの様子が妙なことは知つていながら、それには触れずに頷いた。

「そうね……時々、なんのために自分がここにいるのか忘れそうになるくらい」

カグワの暢気な台詞が、今はとても耳に痛かった。

そもそもカグワが此処ラウグリアに呼ばれたのは北と西のいさかが発端であった。しかしあまりにもこの皇宮の中には情報が入ってこないために、それすら忘れてしまいそうになる。なにしろ既に此処にきて、一月以上が経過してしまっているのだ。彼らはまだ一度も見たことのない西国の宮殿よりも、ずっとこちらの方が馴染みがあった。

「駄目ね、こんなに平和だと……頭が惚けて自分はずっと此処にいるんじゃないかなんて気が、してくるわ」

何気ないそんなカグワの呟きに、ユタヤは小さく動揺する。

??カグワがずっと此処にいればいいのに。

朝日が上るより早い早朝にやってきた皇太子のこぼした言葉が思い出された。

彼はそれが不可能だとわかっていると聞いたけれども、それを望んでいるのも事実だろう。その上カグワ自身までもがそれを肯定してしまつては、??困る。

「そういうわけには参りません。我々は、一刻も早く西国へ戻らなくては」

ユタヤは低い声色で答えた。そしてそれは己へも言い聞かせる暗示だ。

「かくわ様は西国の巫女であらせられます。西国へ帰らなくてはならない。私には貴女を無事に帰す義務があります」

なぜそんなにも献身的にカグワに尽くすのか。この北国に来て、ユタヤは何度もそう問われた。その動機の一つに、やましい私情が含まれるのも真実だ。甘んじて認めよう。だがしかし、それだけではない。彼女は西国の巫女だから、西国を護るためだから、だから、

自分は彼女に尽くすのだ。全ては西国エウリアのためだ。ユタヤはそう自分に言い聞かせた。

全ては西国のため、全てはエウリアの国のため。

そう自分に言い聞かせなくては平常でもいらなかった彼は、とてつもなく、気を緩めていた。カグワの言ったように、あまりにも平和で、頭が惚けてしまっていたのかもしれない。とにもかくにも後宮にいた頃でさえカグワの周囲に常に気を使つて、彼女を護ろうとしてきた彼は、この時、ものすごく気を抜いていたのである。

??故に、外から突如押し寄せてきた物騒な動きに、全く気付かなかった。

それは、彼が獣の性を封印されていたためとも言えよう。そして同じく『力』を封印されたカグワもそれに気付かない。二人が事態に気が付いたのは、荒々しく部屋の扉が開かれたその瞬間になってからであった。

誰が来るにしろ、必ずノックされてから上品に開けられるその皇宮の扉が、ばたんつという破壊的な音とともに開かれた。二人が驚いてその方を眺めると、音とともに部屋の中に倒れ込むように入ってきたのは、小間使いのユーリであった。

「ユーリっ?」

カグワが驚いて彼の名を呼ぶ。今朝方も朝食の用意をしてくれた彼は、元気にはつらつとしていた。それなのに、今の彼は何故か全身に擦り傷や打ち身を負っていて、痛々しい。少年はそのまま床の上に転がると、せえせえと息を切らしながら、カグワを見上げた。

「……カグワ、様……」

「ユーリ! 一体、どうして、どうしたの……!?!」



「早く……お逃げくださいっ！」

金切り声で叫ばれたその言葉は、事態がただごとではないことを物語っている。一体何事だ、とカグワとユタヤが顔を見合わせると同時に、再び荒々しく扉が開かれ、今度は見た事もない軍人が三人ばかり無作法に入室してきた。

「西国の巫女をお連れしにきた！」

軍人の一人が部屋に入るなり、高らかに述べた。「お連れに」とは言っているが、明らかにそのような生易しいことをしようとしているようには見えない。ユタヤは慌てて一歩前に出ると、カグワを己の背に庇った。

「此処は、皇宮だ……！ お前らのような軍人が勝手に足を踏み入れていい場所ではない！」

床に倒れていたユーリが息も絶え絶えに叫ぶ。軍人はそれを見下し、鼻で笑った。

「何度も言っただろう？ 今は非常事態なのだ」と

「このような、野蛮なやり方で押し入らなくてはならないような非常事態など、存在しない！」

「吠えるな、皇室の犬が……。これは上意だぞ。刃向かうのであれば、お前も国賊として捕えるまでだ」

そう吐き捨てて、軍人は後ろに控えている二人の軍人に「行け」と指図した。それに従い二人の軍人が腰の刀を抜く。刀はカグワを背に庇うユタヤに向けられ、「退け」と低い声で命じられた。だが、当然、退けと言われて退くわけにはいかない。

「ゆたや」と背後から、カグワの戸惑う声が聞こえた。突然の闖入者を前に、何が起きているのかわからないのだろう。ユタヤにだってわからない。何故彼らが軍人禁制のこの場所に踏み込み、そしてどこへ彼女を連れて行くこうとしているのか。連れて行かれた彼女はそこで何をされるのか。??もはや、人質としての価値がないということなのだろうか。

情報の一切入って来ないこの場所で平和に暮らしていたユタヤに

は、何一つ判断材料がなかった。ただ、抜き身を向ける彼らには明らかなる敵意がある。

「その男は殺しても構わんと言われた。後ろの巫女を捕える」

どうやら三人の中では少し位の高いらしいその軍人は、力なく転がっているユーリを軽々捕縛すると、「やれ」と残りの二人に命じた。残りの二人はそれを合図に容赦なくユタヤに刀を向けてくる。

ユタヤにはもちろん戦う武器などない。ひとまずカグワを後ろに下からせると、一人の振り上げた刀を避けて、もう一人の顎を足で蹴りあげて粉碎した。「うぐっ」と呻くような悲鳴があがり、蹴られた男がその場に血を流して転がる。その男の持っていた刀を拾い上げると、もう一人の男に投げつけた。急所は外したが、見事にそれは軍人の脇腹を貫通させ、軍人は悲鳴をあげてその場にうずくまった。

その間、わずか数秒である。驚いたのはユーリを捕縛していた軍人で、「くそっ、こいつ、本当に人間か？」とほざいた。巫女の隣に獣人が控えていることさえ知らされていないのだから、それほど地位は高くないのだろう。

「かぐわ様、こちらへ……！」

ユタヤはあつというまに倒れた男たちを見て唾然としているカグワの手を引き、部屋の外へと飛び出した。ユタヤはずっとカグワの仗身をしてはいるが、実際にユタヤが戦闘している姿をカグワが見た事はない。そもそも仗身たちの戦闘訓練は聖女に見せるような物ではなかったためである。

「待て！」と慌てたように取り残された軍人が後ろから追いかけてくる。とりあえずあれから隠れなくてはとカグワの手を引き角を曲がると、丁度そこで十数人も軍人とでくわしてしまった。

「伍長殿、助勢に参りました！」

軍人の一人が叫んだ。どうやら、部屋にやってきた軍人は伍長という役職らしい。それがどれほどの地位なのかユタヤにはさっぱりわからないが、そんなことはどうでもよかった。今度は一人でこの

十数人を相手にしなくてはならない。

「ゆたや……！」

軍人を睨みつけるユタヤを見上げ、カグワが悲壮感たっぷりに首を横に振った。ユタヤが一人で彼らを相手にしようとしていることを悟ったのだろう。「もういいわ」と彼女は言うが、いいわけがない。此処で諦めてしまったら、カグワは北の軍に囚われ、何をされるかわからない。

「いいぞ、その男を殺せ！」

伍長と呼ばれた軍人が叫ぶと、一度に十数人の軍人たちがユタヤを取り囲んだ。が、しかし、場所はさして広くもない皇宮の廊下である。彼らが一斉に刀を抜いたところでうまく動けはしない。ユタヤは相手が全員得物を持っていることを逆手に取って、味方を傷つけないようにと遠慮がちな動きをする刀など全てかいくぐり、獣人の力で敵のあばらをへし折った。肋の骨は折れやすく、折れば痛みから人は動けない。それを知っているユタヤは一気に三人拳や足で肋をへし折ると、彼らの持つ刀を奪った。軍人たちが、そのあまりの強さにどよめく。??伊達に仗身修行をさせられてはいない。獣の姿に変化できればこんな男共一発で倒せるが、人の姿のままでも応戦はできる。

「もうその男はいい……！ 巫女を連れて行け！」

ユタヤを倒すのには手間がかかると気付いたのだろう、伍長が叫んだ。何人かがそれを受けてカグワを捕えようとする。そうはさせるか、とユタヤは前に立ちはだかる軍人二人を奪った刀で斬り捨てて、カグワの元へと走った。

「かぐわの君……！」

そしてあと少しでカグワを捕えようとする男たちに手が届き、奴らをも斬り捨てられるという、その時である。

ちくり、と首筋に痒い程度の痛みが走った。虫にでも噛まれたのだろうと気にせず一歩前に踏み出すと、突如視界が揺らいだ。

「……ゆたや！」

目の前のカグワの姿が揺らいで、見えなくなる。圧倒的な重力に勝つことができず、ユタヤはその場に倒れた。ずしん、と大きな音がする。体を動かそうにも、動かすことができない。

「……巫女を護衛するのは獣人だ。獣人には正攻法では勝てん」  
聞き覚えのある声があった。かつん、かつん、と近づいてくる足音を聞いて、カグワがぼつりと呟いた。

「……オレーク」

その呟きを受けて、ユタヤは己の動きを止めたのが皇太子の世話役であるオレーク・ナイザーであると知った。首に受けた痛みは、針か何かによるものだ。そしてその針に、毒薬か何かが入り込まれていたのだらう。オレークはユタヤの首筋めがけて針を投げ、見事命中させた。確かに正攻法ではないものの、その腕は確かである。

「ナイザー殿……おかげで助かりました」

「中将から、十数人で巫女を捕えに向かったと聞いてな……十数人では獣人には勝てぬ」

ユーリに対しては勝ち気だった軍人たちも、オレークには慇懃に対応した。それだけ皇太子の世話役の地位は高いのだらう。

「オレーク……」

カグワのどことなく寂しげな声が聞こえた。オレークはそれを受けて、彼女の方を向く。

「ご安心下さい、眠りを誘う鎮静剤です。命に別状はございません」

ユタヤに差された薬のことだ。道理で眠く、体の動けないわけだとユタヤは納得する。そうこうしている間にもどんどん記憶は遠のいていくばかりである。

「オレーク……これは一体、何なの？」

カグワの問う声だけが聞こえる。視界はもはや、真っ暗だ。

「上意です。ゆえに、私にはそれに従うしかできません」

オレークの言葉は答えになっていない。

上意とは誰から下されるものなのか。皇帝か、皇太子か、あるいは

は將軍か。軍人たちが皇宮の中へ闖入してきたことからしてその答えは明らかだろう。??彼らは軍から下される主命にのみ従う。

オレークの主は、皇太子シルディアではないのか。何故彼は軍の命令に従うのか。皇太子シルディアは??彼は今、何をしている??様々な疑問が頭の中で渦巻くまま、ユタヤは深い眠りの奥底へと沈んで行った。薬によって強制的に、記憶が遠のいて行く。

かくわの君を、護らなくては。

その強い意志のみが残り、だがしかし、体は全く言う事を聞いてくれない。

それは、雪の止んだ寒い冬の昼間のことであった。

## 22、正義

??西国の巫女を殺し、その首を持って西への出陣祝いとする。

軍がそう決定を下したのは、丁度オレークがシルディアの部屋に新しい家具を運び込んでいる頃、今朝方のことであった。同時に、「カグワはいつ殺されるの?」と問うてきたシルディアはそのことを実は知っていたのではないかというほどに勘がよく、あるいはこれが『力』の成せる技なのかもしれない。シルディアには、皇太子として王宮の上から処刑を見守るといふ役割が課され、彼はそのため正装にと着替えさせられていた。

主である皇太子にその旨を伝え、ひとまず役目の終わったオレークは、なんとなく王宮の石階段を下る。上意のみに従う自分を客観的に見て、不意に、虚しくなった。

世の中の全ての事象には必ず動機があり、世の中は動機の連鎖で出来ている。これはオレークの持論であり、また、これこそ真実だと彼が信じて疑わないものだ。

オレークは、西国の巫女を捕えるために、彼女のいる部屋へと向かった。その途中で暴れている獣人ユタヤを見つけ、彼を麻酔で静めた。それは何故か。??軍の下した上意だからである。

では何故、オレークは上意に従うのか。それが国の意思だからだ。王宮に生まれ小間使いとして育てられたオレークは、幼き頃からこの国のために尽くすという忠義を植え付けられた。故に、この国のためになら、なんでも出来る。それが上意であれば、何にでも従う。

だが、果たして、この上意は?? 国のためになっているのか?

それは、決して自問してはならない問いかけだった。だって、もしも軍から下される上意が国のためにならないのだとしたら、今までのオレークの人生は全て無駄であったということになる。ずっとずっと、上意に従って生きて来たのだ。何故なら、それがこの国を発展させると信じて疑わなかったからだ。

気付けば、オレークは宮殿の外、王宮の敷地内に作られた囚牢の前に立っていた。普段、此処には主に国賊が閉じ込められている。国家の意思、すなわち軍の意思に従わない者を閉じ込め、罪の軽い者は更正させられ、罪の重い者は処刑を待つ。しかし今は、先日の一斉処刑により囚牢の中はほぼ空にされていた。代わりに今投獄されているのは、西国の要人と、西国の要人を庇った可哀想なオレークの弟分である。

オレークは別段、この囚牢を目指して歩いて来たわけではなかった。ただ、己の主である皇太子を唯一救える存在である巫女を捕えてまで、己がずっと可愛がってきた弟分が捕われるのを黙認してまで、従う動機は何なのだろうかと考えて、気付けば此処に到着していた。まるで、引き寄せられたみたいだ。巫女の処刑は午後になることだろう。今頃処刑台の周囲に軍人たちが呼び集められ、その準備を整えている頃だ。??つまり、今ならまだ、彼女に会うこともできる。

会って何を言うのだ。敵国の人間でありながら。彼女の仗身を捕えた身でありながら。無言で彼女が連れて行かれるのを見送った、そんな身分でありながら。

頭の中には様々な御託が並ぶが、オレークはそれらを一扫して、足を前に踏み出した。綺麗ごとを並べても仕方がない。今まで己は上意に従ってきただけの人間だ。綺麗ごとで飾れるような身でもない。

囚牢の入り口には、見張りが一人眠たそうに立っていた。本当なら彼も、今頃盛り上がっているであろう処刑台の広場に行きたかったはずだ。なのにこのつまらない見張りという役割を与えられたのは、彼が信頼されているからなのか、あるいはその逆か。??今にも居眠りしそうなその状態から答えは一目瞭然だ。

「……ご苦労。少し入るぞ」

オレークが声をかけると、見張りははっと目を覚まして、慌てて「了解!」と声をあげた。皇宮務めのオレークは、王宮の敷地内のことなら何でも知っている。そして王宮の敷地内に務める者ならそれが小間使いであれ軍人であれ誰にでも顔が知れている。皇太子の世話役を三年も務めた小間使いとして、オレークは有名だった。たった一言断るだけで、入れない場所はほとんどない。

しかし、そんな彼でも、囚牢の中に入ったのは初めての経験であった。普段、此処に監禁されているのは軍人ばかりだ。監禁された軍人に興味はない。そもそも、軍人にはそれほど興味はない。

囚牢の中には入り口から薄暗い湿った廊下がまっすぐ続いていて、その両側に、狭い牢屋が何部屋も置かれていた。此処はさほど位の高くない罪人を置く場所だ。その廊下の手前に小さな階段があり、位の高い者はこの上に監禁されていた。オレークは迷わずその階段を上った。

上階に置かれた牢は、ただ格子を張られただけの狭い空間でしかなかった下階のそれとは異なり、扉や窓のある頑丈な作りをした部屋であった。広さも下の牢の十倍程度あり、その中には居住空間が構築されていた。

だが、やはりそれでも囚牢であることに違いはないので、大した暖房器具もなく、廊下は寒い。石造りの冷たい廊下を歩くと、かつ



「んかつーんと冷たい足音が響き渡った。

「……誰かいるの？」

その足音に反応して、一つの牢屋から声がする。若い女の声だ。姿は見えないが、今此処に監禁されている若い女は彼女しかいないので、確信する。オレークはまっすぐその声のした方を目指した。

「……オレーク・ナイザーです。巫女君」

そしてその部屋の前で姿勢を正して起礼する。この部屋の形をした牢の前には扉と窓しかその中と繋がる場所がないため、膝を付いても相手にはそれが見えないためだ。

顔をあげて広い窓から牢の中を覗くと、薄暗い部屋の真ん中、小さなベッドの上に小さな少女がちんまり腰掛けていた。こう見るとこの少女が隣国の巫女だなんてことも忘れてしまふ。こんなにちっぽけな少女を一人殺すことに果たして何の意味があるのか。オレークの中で上意に従う意思が揺らいだ。

「オレーク……ゆたやは？」

ちっぽけな少女が、窓の外の男を見上げてまず最初に問いかけたのは、己の仗身のことであった。自分がこれからどうなるのか、何が起こっているのか、何も問わない。それどころか、今まで良くしておきながら突如態度を変えて自分たちを捕えたオレークに恨み言の一つも零さなかった。

「麻酔がよく効いて……今頃下の階で眠っているでしょう」

オレークはその仗身の姿はまだ見ていないため確かなことはわからなかったが、恐らく自分が眠らせたからにはわざわざ殺すようなことはまだしていないだろうと予測し、告げた。少女は「そう」と少しだけ安心したように呟く。だが、それも時間の問題であった。少女が弑されるのだから、その仗身とて、命の保証はない。

「シルディアは？」

少女が次に問いかけたのは、やはり自分のことではない。あろうことか、敵国の皇太子のことだ。よもや、「貴女を処刑する準備を整えています」とは言えず、オレークは「今日は具合も良いようで

す」と適当にはぐらかした。カグワはそれ以上詮索はせずに「よかった」と微笑んだ。オレークの胸の内に、初めて強い罪悪感というものが浮かんだ。

「巫女君は……何故私をお責めにならないのか」

オレークは彼女の顔を真正面から見ることができずに、床を睨みつけて、思わず問う。そんな問いかけがどれほど無意味であるかもわかっているのに、問わずにはおれなかった。責められるのには慣れたものだ。今までにも上意だと言って、大勢の人間を葬って来た。そんな過去がある。そのたびに「呪ってやる」と何度暴言を吐き捨てられたことか。だが、死を間際にして、これほどまでに慈愛に満ちた人物とは出会った事がなかった。

「責める……？ どうして？」

それでも少しの憎悪も見せない少女は、その顔に怯えさえ浮かべない。彼女の『力』は確かに今、皇太子によって封印されているはずなのに、その毅然とした振る舞いに、オレークは『力』のような強い威圧感さえ覚えた。

「きつと西の国は返事を寄越したのでしょうか？ だから、北国はそれに応えるんだわ。？？そして、戦が始まるのね」

その通りである。オレークは黙って俯いた。

西国は、北国ラウグリアの寄越した文書を焼き捨て、その文書を運んで来た軍をまるまる一軍皆殺しにしたという。それが西国の答えだ。北軍が、東国をも己の領土としてその領土を拡大していくことに危機を覚え、真っ向から対立してきた。北軍としては、西に攻め込む理由を欲しがっていたところである。これを好機として、西へ進軍する所存だ。そしてその饑として選ばれたのが、西国の巫女の命であった。

オレークはその全てを知っていた。ずっと前から知っていた。知りながら、彼女が殺されることを知りながら、「巫女君」と呼んで丁寧に接して来たのである。それでも罪悪感など抱かなかった。何故ならそれが上意だったから。

「私は巫女なのね。初めて実感したわ。聖女だ巫女だと今まで散々持ち上げられて来たけれど、今までは「だからなんなの」って、「私はただの女よ」って、そんなことばかり思ってた。でもそれでもやっぱり私は、巫女なのね。巫女らしいことなんて何一つしなかったけど、私の存在にはそれだけの意味と価値があるんだわ」

少女の言葉は、全てを言い得ている。このような少女を弑すことに何の意味があるのかと、オレークも彼女を見ている限りでは思わざるを得ない。だが、そういうことではないのだ。北軍は、この少女を殺そうとしているのではない。西の「巫女」を弑すことに意味がある。少女は「巫女殺し」のついでに殺されるだけのことだ。

ふと、オレークの脳裏に、金髪の少年の顔が浮かんだ。彼の部屋にいて眠っている時、笑っている時、拗ねている時、その様々な瞬間をオレークは知っているが、あの少年もまた、ただの少年でしかなかった。だが、彼は「皇太子」だ。故に彼はその存在に異常なほどの価値を持ってしまふ。??彼の恐ろしいほどの「力」は、その価値から逃れんとするための、彼の悲痛な叫びだったのかもしれない。

「私は……果たして、正しかったのでしょうか」

つい、口を付いて言葉に、自分でも驚いた。何を言っているのだ、とどこか冷静に思う自分もいるが、止めようとは思わない。敵国の巫女を前に、高貴な虜囚を前に、彼は何故だかどうしても、懺悔しなくなったのだ。

「私は皇家に仕える小間使いとして生まれ、育ちました。皇家に仕えるからにはこの国を護ることこそが私の使命だと、思っていました。この国では軍が絶対で、軍の意思こそが上意であると。それに従うことがこの国を護ることなのだ」

一度口にしたら、止まらない。例え思ったとしても、絶対に口には上らせないことばかりであった。他の小間使いの前では決して口

にできない。自分は皇太子付きの小間使いであり、彼らの頂に立つ存在なのだから。軍の前でも、皇室の前でも絶対に口が裂けても言えない。オレークにとっては彼らが絶対だ。

「そんな中で、殿下に仕えることとなり、私は殿下に絶対の忠誠を誓いました。それが上意であつたからです。殿下の『力』がこの国を守る。その殿下に仕えることは、国を守ることでもありました。ですが……それは正しい見解だつたのでしょうか」

疑問を呈さずにおれないのは、それによつて国を守っているという実感が全く湧かないためだ。皇太子を追いつめ、国を戦火の渦に巻き込み、こんなことがしたかつたわけではないのにと我に返つて思う。そんなことのために、皇家に尽くしてきたわけではなかつた。

「正しいかどうかは、貴方が決めることよ……その人が何を信じるかによつて、正義はかわつてしまうから」

冷たい牢の中、佇む少女は嫌な顔一つせず、真剣に答えてくれる。少女は立ち上がると、オレークの立つ窓の傍までやってきた。長い黒髪をなびかせ、まっすぐとこちらを見上げてくる。

「オレークにとっては……何が正義だつたの？」

「私は……」

この国を守ること、と答えようとして、オレークは口を噤んだ。もちろん、それも正義だ。だが、それだけか？

脳裏に浮かぶのは、たつた三年しか仕えなかつた主の顔である。初めて世話役として彼に出会つた時のことを、オレークは鮮明に覚えていいる。彼の発する圧倒的な覇気に気圧されて、危うく身震いしそうになった。これからこの人が己の主になるのだと、何度も自分に言い聞かせた。言い聞かせなくては恐ろしくて信じられなかつたような真実が、いつのまにか日常になつて、もう幾日過ぎたことだろう。今となれば、オレークの主は、彼一人のみだ。

「……私にとつての正義は、あるいは……殿下に仕えることであつたのかも知れません」

オレークはぽつりと呟いた。

それが上意だから、それが己の役目だからと割り切って仕えてい  
るつもりであった。だが、実際のところはどうかだろう。何をするに  
しても、オレークの思考の中心には必ず彼の存在があった。

「私の前に、殿下に仕えた世話役たちは、皆全て殿下の『力』の強  
さに圧倒され、辞めていきました。しかし私は、それが役目である  
からには辞めるわけにはいかない……殿下の『力』から一定の距  
離を保った。だから、忘れていたのかもしれない。私にとっての  
正義は、殿下への忠誠だ」

それなのに、とオレークは顔を覆う。自分は、彼のために何をし  
てあげられただろう。

彼が本当はとても弱い人間であることを、オレークは知っている。  
皇太子という立場も、『力』の強さも、それらがあまりにも重すぎ  
て、背負えずもがき苦しみ続けていることも知っている。なのにオ  
レークは、『力』に食われそうになっている彼を助けることもでき  
なければ、それを唯一助けてあげられるであろう少女すら、彼から  
奪ってしまうのだ。何のために？ 国のために？ まさか、そんな  
わけがない。これが、国のためになるわけがない。

「私は殿下への忠誠を正義としながら……一度だって殿下のために  
何かをしてさしあげられなかった。彼に近付くこともなく、彼の心  
を慮ることもなく、ただ軍の言いなりになっただけだ……」

「……そうかしら？」

俯いたオレークに、少女の柔らかい声がかげられる。顔をあげる  
と少女は窓から外、どこか遠い所を見て、ぽつりと呟いた。

「私とシルディアとでは、あまりにも持つ『力』の大きさが違うか  
もしれないけれど……それでも、私も『力』を持つ者。西国にいた  
頃、私の周りに仕えていた人達も皆、『力』は持っていなかったわ  
でも、私の持つ『力』に対して、それに負けないくらいの愛情で応

戦してくれた。だから私は自分の『力』を持って余すこともなく、ここまで育ってこれたの」

「愛情……？」

「シルディアがおそらく最も欲しているものよ」

言つて、少女はその声と同じくらいに柔らかく微笑んだ。冷たい牢獄の中に、一筋の光の差すようだ。これから冬の来ようとしている北国ラウグリアに、春をもたらすような、そんな笑みである。

「貴方は例え一定の距離を保つても、軍の言うことに従ったとしても、確かにシルディアを愛していたのでしょうか？」

「私は……」

「愛情は、彼のために何かをしてあげることではないわ。近付きすぎて結局辞めてしまうのであれば、それも違う。一定の距離を保ちながらも必ず彼の傍に寄り添つて、彼の辛いことも悲しいことも全て見守つてあげてきたのだから……やっぱりそれは貴方の愛情なのよ」

オレークは言葉を失った。そんな風に考えたことは、なかった。

どうしていいかわからず、縋るように少女の顔を見つめると、にこりと少女は笑う。彼女は「大丈夫」と言い切った。

「大丈夫。貴方は何も間違つたことなんてしてないわ。貴方にとつての正義がシルディアへの忠誠ならば……これからも、彼に愛を注げばいい」

「……はい」

オレークは、目を伏せた。こんな牢の中にいても尚神々しい彼女は、神の使わしめ、真正正銘の「巫女」なのだ。牢の中にいるのは彼女の方で、自分は牢の外にいるのに、だんだんと自分こそが咎人であるような気がしてきた。巫女の前にて懺悔する、咎人だ。

「ついでに……私からも一つだけ、いいかしら？」

巫女が言つた。はい、とオレークは頷く。巫女の手を無碍にはできない。

「ゆたやのことなんだけど……きっと全てが終わったら、彼も殺さ

れてしまうのよね」

全てが終わったなら、というのは、巫女の処刑がすんだらという意味であろう。自分が殺された後、一緒に仗身であった彼も殺されるのだらうと、少女は言う。確かに、そうだらう。オレークもそう思っていた。だがまさか、それを巫女自らの口から聞くことになるとは。

「私には何の権限もないけれど……もし、できたら。もしできたら、でいいわ。もしできたら……彼をシルディアの護衛にしてあげて」  
オレークは大きく目を見開く。予想だにしていなかった。

「今、彼の獣の性を封印しているのはシルディアよ。彼の主はシルディアも同然。彼は獣人だから、他の人間よりも圧倒的に戦闘力も高いし……いい護衛になると思うの。だから、ね？」

己の死を知りながら、自分は命乞いすらしない。まるで天女のような笑みを讃えて、己の仗身の命乞いをする。嗚呼、だから、巫女なのか、と思った。紛いなき巫女だ。

「……わかりました。尽力致します」

絶対にそうするという約束はできず、そう告げて頭を下げることしかできなかった。それでも巫女は満足したように、「ありがとう」と微笑むと、ふと、思い出したように言う。

「それから……ユーリにも、伝えて。ありがとう、と」

彼女は涙一つ浮かべないのに、何故かこちらが泣きなくなった。

北国には西国のような宗教観念はない。故に神に縋る気持ちもわからないし、西国にとっての巫女の実在意義とて感覚として理解することはできない。だが??。

オレークは唇を噛み締めた。人が、彼女に縋るわけだ。人が、巫女に縋るわけだ。

それからややあって、残酷な足音とともに迎えがやってきた。そ

れはカンカンカン、とオレークがたてたもの以上に冷たい音をたてて、近付いてくる。

その足音を聞いて、巫女は少しも動揺した素振りをみせず、「それじゃ」と短く言った。とてもではないが、オレークには答えられなかった。

現れたのは、数人の軍人であった。そこにオレークの姿を見つけると、驚いたような顔をして、「何をしておられる？」と当然の疑問を投げつけてくる。オレークが言葉に窮していると、巫女が澄ました顔で「私の遺言を聞いてもらったのよ」と言った。軍人たちは怪訝そうな顔をしながらも、「そうか」と頷いて、彼女を縄できつく縛って牢屋の外へと連れ出した。

冷たい足音とともに、寒い冬の空気の中へと少女は連れ去られて行った。向かう先は、冬の空気よりも冷たい、死の扉の先である。

オレークはその後ろ姿を見送って、頭を押さえた。

何が忠誠だ。何が愛情だ。と、思う。こんな行いが、正しいわけがない。

もっと広い世界を知りたいなあと、漠然と願った。こんな狭苦しい王宮の中だけでなく、軍人に支配された冬の国ラウグリアだけでなく、もっと、広い世界を。

胸を張って正義を貫けるような人間になりたい。

オレークは、あまりの自分の視野の狭さを、呪った。



## 23、仗身失格

夢すら見れないほどの、深い眠りであった。

眠りというよりも、意識を失っていたという方が正しいか。暗闇の中に閉じ込められて、何も考えることさえ思ふことさえ許されず、時間の経過もない。そんな彼が暗闇から目を覚ましたのは、昼時を越えた頃のことであった。

外から痛いほどに冷やされた空気が入り込んでくる。あまりの寒さに起きた瞬間まず震え、体を震わせると同時にがしゃがしゃ金属のぶつかり合う音がした。

ユタヤは虚ろな視界の中、自分の置かれた状況を確認した。

どうやら自分のいる場所は、とてつもなく狭い石の部屋のようだ。まるで、牢屋のような作りをしている。体を動かそうとすると、再び金属の音がして、動かすことができなかった。右手首と左手首にそれぞれ鎖が巻かれ、壁に固定されていた。礫されたような状態で、眠っていたらしい。

(……かぐわの君！)

自分の置かれている状況をざっと確認してから、彼ははっと覚醒した。意識を失う前的一件事が一拳に思い起こされる。

突然軍人禁制の皇宮の中に軍人がやってきて、西国の巫女を、と言ってカグワは連れ去られてしまった。ユタヤはそれをぎりぎりまで阻止しようと、彼女を護ろうとしたが、薬によって眠らされてしまい、そこからの記憶がない。??カグワは、どうなった？

いてもたってもいられず、両手首が頑丈に固定されていることを知りながら無理矢理にでも引つ張ると、がしゃんがしゃんと冷たい金属音が石牢の中に響き渡った。すると、それを受けて牢の外から突如男の音がする。

「……あまり動くな。さすがにお前の腕力でもそれは取れん」

声を聞いて、ようやくそこに誰かがいたことを知った。狭い石牢には太い鉄格子がはめられており、その外には廊下が続いている。声の主は、その廊下によりかかっていたため、石牢の中からはその後ろ姿しか見えないが、背格好と茶色い癖っ毛から、それが誰であるかは瞭然であった。

「……オレーク殿」

その名を呼ぶと、青年はちらりとこちらを振り返る。壁に磔られたユタヤを見るなり、複雑な表情を浮かべて再び視線を逸らした。そういえばユタヤを薬で眠らせたのはこの男であった。そのことを気にしているのかもしれないが、今はそんなことはどうでもいい。ユタヤは鎖に繋がれたまま前に身を乗り出して、がしゃがしゃと音をたてながら彼に問うた。

「かぐわの君は……っ？」

最も聞きたかった問いかけをすると、彼の返答は、低い。

「……連れていかれた」

ぞく、と背筋は震える。

「……どこへ？」

「……」

問いに対するオレークからの返答は、なかった。が、返答のないことが返答のようなものだ。ユタヤには言えないようなところへ連れていかれたということである。仗身のユタヤがこんな冷たい石牢に閉じ込められ、鎖で磔にされているのだ。主は??無事である保証なんてない。

そう悟った瞬間、全身の毛穴から汗の噴き出すような妙な感覚に襲われた。さあ、と血が下がって行く。

勝手に体が動いて、鎖に繋がっていることは頭でわかっているのに、前に進もうとした。金属音が響き渡る。

「動くな。その鎖は頑丈だ。あまり動くと怪我をする」

絶え間ない金属の音に、耐えかねたようにオレークが声をあげた。確かに、鎖が取れるわけもないのに力づくで動くと、両手首が鎖とこすれて皮が剥け、わずかに血がにじんだ。だが、こんな怪我など怪我のうちに入らない。そんなことより、カグワを助けにいかなくては。

そんなユタヤの心の内を読み取ったかのように、オレークはこちらを振り返った。そして、言う。

「巫女君は??お前のことを、大変案じておられた」

その言葉にぴくと反応し、ユタヤは一瞬動きを止めた。

「俺は、つい先刻まで……巫女君と一緒にいた。なので、巫女君は俺に、言葉を託された」

そう続けるオレークの顔は苦虫でも噛み潰したような、居たたまれないような、渋い表情を浮かべている。

「自分にもしものことがあったら、お前を殿下の護衛にしてやってくれ、と……お前は獣人だから役に立つだろうと、おっしゃった」

なんだったって、とユタヤは息を呑んだ。後頭部を鈍器で殴られたような、強い衝撃に苛まれる。頭が痛み、くわんくわんと目眩さえした。

あまりにも、彼女らしすぎる言葉であった。以前、まだ西国の後宮にいた頃、彼女は巫女選定の儀式の前に、他の聖女、一の君ネイデーンに対して言った。??もしも貴女が巫女になったら、ゆたやのことも護衛として雇ってあげられないかしら。??嗚呼、何故かの人は、仗身でしかないこんな自分にも、獣人の分際でしかないこんな自分にも、そんなにも情けをかけてくれるのか。いつそ優しさが痛いくらいだ。

「お前に薬を打った俺を、巫女君をただ黙って見送った俺を、許してくれとは言わない。ただ、お前と同じように、俺にも護りたいも

のがある。??果たしてそれが護れているかどうかは、別の話だがな」

オレークの護りたい物が何なのか、それを彼が護れているのかどうか、ユタヤは何も知らない。だが、その言葉の意味は悲しいほどによくわかる。ユタヤにもどうしても、護りたいものがある。だが、それを自分ごときが護れるのかどうかはわからない。それでも??傍に控えて、護りたい。

「俺にとっては、軍から下される司令が、絶対だったんだ。お前にとって、巫女君から下される司令が絶対だったように」

そうだ、ユタヤにとってはカグワが絶対だった。ずっと、カグワの言うことを信じ、彼女についてきた。??否、そうか？

ふと、心の中に疑問が浮かぶ。自分にとって、本当に彼女の言うことが、絶対だったのだろうか。本当に彼女に逆らったことなど一度もないと、言えるだろうか。

「だから、お前の辛さが全くわからないわけでもない……。主に従えないことはさぞ無念だろう。??だから、彼女の最期かもしれない司令を、お前に言い届けにきたんだ。生き延びて、殿下の護衛となれ、と」

「???違う」

突如否定から入ると、「え」とオレークは間拔けた声を発した。

ユタヤは俯いて、齒ぎしりする。??違う、違う。自分は、そんなに忠実な僕ではない。

「俺は……貴方みたい、立派な配下ではない……」

脳裏に浮かぶ主の顔は、どれもこれも楽しそうなものばかり。笑ったり、拗ねたり、時には悲しい顔もするけれど、いつでもユタヤを幸せな心地にしてくれた。だから、それを護ろうと、ユタヤは思ったのだ。それが命令だからではない。そんなに忠心の篤いわけではない。

「かぐわの君が聖女だから、巫女だから、と、そんな理由で従ったことなど、一度もなかった……。聖女であるとか巫女であるとか、そんなことは俺にとってはいつでもよかったんだ……。かぐわの君だから、従った。否、それさえ嘘かもしれない。俺は、かぐわの君にさえ、従ったことはないんだ……」

「どういうことだ、とオレークは眉をひそめた。上意を絶対とする、この真面目な男にはきつとわからないだろう。オレークはそれが上意であれば、感情を殺してなんでもできる男なのだ。例えそれが主を殺せというものであっても、上意であれば甘んじて従うだろう。だが、ユタヤには、出来ない。」

「俺の傍にはいつもかぐわの君がいて、彼女を護ることが誇らしかった。それが自分の役目だからと言いついて、本当は、ただ彼女の傍にいたかっただけなんだ……。そのために、都合の良い言い訳を探していた」

「だから、例えそれがカグワ自身からの命令であっても、カグワの傍にいられないのならユタヤにとっては意味がない。本当は、従いたくなんかない。それでも従おうとするのは、彼女に「良い僕だ」と思っただけからだ。その彼女がいなくなってしまうのなら、どんな主命も意味を成さない。」

「以前、オレーク殿は俺に、何故巫女に忠義を誓うのかとお聞きになったな……。これがその答えだ。自分勝手に、実に不純な動機だ……。こんなことでは仗身失格だ」

「それがどれだけ思いついた動機であるか、ユタヤにもわかってる。たかが獣人の分際で何を言うか一蹴されても仕方ない。だが、

「だが……。止められないんだ、どうしても……。今この瞬間にも、かぐわ様になにかあるのではないかと思うと……。止められない」

「つん、と鼻の奥が痛くなり、目頭が熱くなった。はっと驚いたようにオレークが息を呑む。「お前……」と彼は小さく呟いた。

「正直に言おう……。俺にとっては巫女なんてどうでもいいし、西

国なんてどうでもいい。巫女制度なんて廃止になればいいと思うし、西国が滅びたつていいんだ……当然、この北国ラウグリアが何を考へても関係はないし、何が犠牲になったつていい」  
ぼろぼろと、目から熱い物が溢れ出した。それはすぐに頬を伝って滴り落ちて、北国の冷たい空気にあてられると冷水になった。

「世界が消滅したつていいんだ……彼女さえ生きていれば」

目からも鼻からも水分が滴り落ちて、顔がぐしゃぐしゃだ。途中に嗚咽さえ混じり、きちんと言葉も伝えられない。こんなに泣くのはいつ以来か。きっと、初めて獣の姿になって、大人に殺されかけたあの瞬間、そしてそこを天女に救われたあの瞬間以来だ。

「他の誰より、国家より、世界より、世界中の人間の命よりも、彼女の存在が大切なんだ、オレーク殿……っ！ 頼む、此処から……、此処から、出してくれ……！」

後半はほぼ、悲鳴であった。大人の男の泣き叫ぶ声は大層聞き辛いであろう。聞いていて心地良いものでもないし、不愉快にさえ思える。

それでも、オレークは眉間に皺一本寄せずに、ユタヤの言葉を聞いてくれた。あるいは、呆気に取られていたのかもしれない。それも無理はない。大の大人の泣き叫ぶところなど、滅多に見れるものでもなからう。

「頼む……彼女の傍へ……行かせてくれ」

嗚咽を繰り返しながら、尚訴える。それで「どうぞ」と言ってくれるような男でないことは知っていた。上意を絶対だという彼は、感情で動くユタヤなんぞよりずっと忠義が篤く、出来た臣だ。

そう思っていたから、彼の行動に、ユタヤは愕然とせざるを得なかった。

かたん、と音がして、オレークが廊下から動く。かつんかつんと歩く足音は二歩。

「???わかった」

え、と、今度はユタヤが啞然とする番であった。

彼は宮廷服の内ポケットから大量の鍵の束を取り出し、その中の一つを探り当てると石牢の格子にかけられた錠を開ける。がちゃん、と軽い金属音がして、錠が開いた。

「……鍵」

オレークの本業は皇太子の世話役だ。当然、牢屋の見張り番ではない。なのに、何故彼がこんなちっぽけな牢の鍵を持っているのであろうかと啞然としながらも彼の動作を見つめていると、彼は内ポケットから取り出した鍵の束を撫でて、不適に笑んだ。

「俺は皇太子の世話役であり、皇家仕えの小間使いの中では最上位だ……宮廷の中の鍵なら全て開けられる」

軍は知らない皇家の秘密だがな、と付け加えて、彼は石牢の中へと入ってきた。彼は鎖によって磔られたユタヤの前に立つと、鍵の束の中から最も小さな鍵を探る。啞然としたまま彼を見上げるユタヤは、驚きのあまり涙も止まっていた。

「俺にできるのは、鍵を開けるところまでだ。外には牢屋番もいるし、巫女君のおられる処刑場はこの牢屋の裏側だが……大広間になっついていて、そこには今大勢の軍が集って決起集会を行っている。その数何百という単位だ」

淡々と説明しながら彼はユタヤの右手首を縛り上げていた鎖の錠を外し、次に左手首の錠も外そうと鍵をあてた。そんなオレークの動作を見て、ユタヤは動揺を隠せない。彼にとっては上意が絶対だ。囚われた獣人を解放することが上意のはずもない。それなのに。

「……何故」

自分を解放しようとしてくれている彼に、小さく呟くように問うと、その言葉少ない問いかけだけでもオレークには通じたようだった。彼はちらりとゆたやを見上げ、ふんと鼻で笑う。

「好奇心だ、と答えておこうか。……残念ながら、俺にはお前の気持ちかわからない。涙してまで敵に懇願し、世界よりあの女が大切だと訴えるその気持ちはわからん。だが、わからないからこそ興味がある。その動機を持つ者が、どのような運命を辿るのか」

ユタヤはユタヤで、オレークの言っていることがさっぱりわからなかった。しかし彼も理解してもらおうとは思っていないようで、吐き出される言葉はまるで独白だ。

「今の俺には何が正義かさっぱりわからない。上意だからと安易に従ううちに、視野が恐ろしく狭くなっていったのだと思う。広い世界を知りたい。宮廷の中にはない、様々な動機も心も知りたい。そしてその結果も、知りたい」

彼は言つて、ユタヤの左手首の錠も取り払った。鎖のほどけるじやらじやらという音が響いて、ユタヤは両手ともに解放される。手首には彼が暴れた時にできた鎖状の傷があり、赤く血が滲んでいたが、痛みなどほとんど感じなかった。そんなことよりも、カグワの元へ行かなくては。

「オレーク殿……感謝する」

逸る気持ちを堪え、せめて一言感謝だけと思つてオレークに礼を告げたが、彼は少しも喜ばしい顔はしなかった。

「感謝などするな。俺はお前に死ねと言っているようなものだ」

此処にいれば、まだ生きながらえる方法はあったのに、と彼は言うが、そんなものはないとユタヤは思っている。カグワにもしものことがあるば、ユタヤも死んだも同然だ。

「……恩に着る」

「脱ぎ捨てろ、そんなもの」

オレークの軽口にこんな状態でありながら思わず苦笑してしまいつながら、ユタヤは石牢の冷たい床を蹴り飛ばした。

廊下に出ると、ずっと先までユタヤの閉じ込められていたような小さな牢屋が連なっていた。出口はどちらだとわずかに首を回して、



明かりの差し込む方向を見つめる。彼は、全速力で冷たい廊下を走り抜けた。

連なる牢屋はほぼ空っぽで、どうやら今はユタヤしか閉じ込められてはいないようであった。故に、監視もおらず、いたのは出口に欠伸をしながら立っていた見張り番一人のみだ。

見張りは最初欠伸をしていたが、牢屋の中からユタヤが出てきたことに気付くと、「うわあ、お前、どうして！」と悲鳴に近い声をあげて、抜刀した。しかし、刀を持つ手が震えている。戦いの心得などないのだろう。ユタヤの敵ではない。

ユタヤは震える彼の腕を掴んで鳩尾と首の裏に一発ずつ打撃を与えると、彼の握っていた刀を取り上げた。見張りは苦しそうなうめきをあげた後、気を失った。恐らく当分は起き上がれないであろう。

ユタヤは取り上げた抜き身の刀を片手に、巨大な囚牢の裏側へと走って回った。オレークは処刑場はこの裏だと言った。確かに言われてみれば裏側の方が何やら騒々しい。その雑音を頼りに、ユタヤは走った。

早く、早くかぐわの君を助けなくては、とその心ばかりが逸る。助けると言っただって、こんな北の地で、どうやって彼女を助け出してどうやって逃げ出せばいいのか、勝算なんてこれっぽちもなかった。だが、そんなことは関係なかった。早く彼女の元へ、と気持ち切迫していく。

長い囚牢の横を走り抜けると、ようやくその裏に位置する広大な処刑場へと出ることができた。処刑場は寒空の下、延々と広がっており、木の一本も生えていない殺風景な場所であった。普段は罪人が殺され、処分されるための空間なのであるが、今日は違う。オレークの言った通り、そこには何百という数の軍人が整列しており、彼らは皆、王宮の方を見上げていた。そしてその王宮の欄干に立つ

て何百という軍隊を見下ろしているのが??恐らく將軍と思われる男と、シルディア皇太子殿下だ。

「……皆の衆、時はきた!」

將軍が、拡声器を使って叫んだ。うおお、と軍隊が声をそろえる。それは低い地鳴りのように、不気味に寒空の下へと響き渡っていった。

「いざ西国の巫女の首を討ち取り、いざ西国へと出陣しよう!」

將軍のかけ声とともに、どこからともなく太鼓を叩く音が響いた。リズムカルに奏でられるその音に、軍隊の士気があがっていく。ユタヤはカグワを探して必死に処刑場の中を駆け回った。整列している軍人たちは、ユタヤに気付くことなくまっすぐ前を見ている。

奏でられる太鼓の音が早くなり、同時に軍人の歓声がこだました。ユタヤはそれにつられて顔をあげる。そして、目を見開いた。

軍隊の最前列、王宮のすぐ麓の所に、小高い台が設置されていた。そこには誰か権力者が立つのだろうと思っていたが、どうやらそういうわけではないらしい。その台の上に連れてこられたのは、縄で捕縛された小さな少女、カグワであった。

「……かぐわの君!」

思わずユタヤは声を荒げる。そこで初めてユタヤの存在に気付いたように、近くにいた軍人たちがこちらを向いた。だが、何百という軍人の束の中で、ほとんどは彼に気付かず西国の巫女を殺せと太鼓の音に合わせて叫んでいる。

それなのに、まさかこんな遠い距離でこの声が届くはずもないのに、捕縛されたまま下を見ていた少女が、はっとしたように顔をあげた。声は聞こえない。だが、彼女の口が確かに、小さく、「ゆたや」と自分の名を呼んで動いたように見えた。

ユタヤは、いてもたってもいられなくなって、何百という軍人の中に突っ込んでいった。彼女がいるのはこの群衆の最前列だ。なんとしてでもそこまで辿り着かなくては、とそればかりが頭を占める。

突然列の中に飛び込んできた男に、なんだなんだと軍人たちが喚きだした。中には、彼を殴って止めようとする輩もいる。ユタヤはそれを器用に避けると、持ってきた抜き身の刀で斬り捨てた。

殺すことを躊躇っていたら、あそこまでは辿り着けない。否？？殺さなければ、殺されてしまうのだ。自分も、かぐわの君も。

ユタヤは抜き身一本を武器に、何百という軍の中で暴れた。突如軍人を物凄い勢いで切り倒し始めた男の存在に、軍隊は混乱する。慌てて何人かは抜刀して対抗してきたが、腕力も俊敏さも、ユタヤに匹敵するものはいなかった。何しろユタヤは獣人だ。いくら人の形をしていても、普通の人間とは潜在能力から異なる。

十人斬り捨て、二十人斬り捨て、刀が使い物にならなくなった。急いで死んだ軍人の刀を抜いて次の軍人と相対するが、きりが無い。何百という数の軍人を斬り捨てている間に、カグワが殺されてしまう可能性さえあった。

軍隊は混乱する。だが、それ以上に巫女を助けなくてはとユタヤの心が混乱する。

こんなことでは駄目だ。人の形では限度がある。

ユタヤは奥歯を噛み締めた。あまりに力を込めて噛み締めてしまったが故に、口の中から血が流れる。

駄目だ駄目だ。こんなことでは駄目だ。早く、早く巫女の元へ……！人の力では足りない。獣の力が欲しい。他の誰でもない、彼女を助けるための、獣の力が欲しい……！

刀を振り回しながらそう心の中で叫んだその時である。ぷつりと、何か切れたような音がした。

次の瞬間に、突如津波に攫われたかのような感覚で、上も下も右も左もわからなくなる。何かを押し寄せてくるような、そんな感覚だ。あまりにも強い勢いで押し寄せてくるそれに、ユタヤは耐えきれず、転んだ。

地面を揺るがすような轟音に包まれて、目の前が真っ白になる。かと思えば、すぐに真っ暗になった。此処がどこかもわからない。自分が誰であるかすら、忘れてしまいそうだ。

ただ、一つだけ。頭の中を占めていたのは、たった一つの想いだけ。

???かぐわの君を、助けなくては。

青年は、その瞬間、人の心を、失った。

## 24、解放

???西国への出陣祝いを行いますので、殿下も準備をお願いいたします。

皇太子シルディアがその報を受けたのは、その日の昼過ぎ、丁度カグワとユタヤの捕えられた頃のことであった。

その知らせを持って来たのは、いつも自分の世話をしてくれる付き人のオレークではなく、他の小間使いだった。正装をするために身なりを整えなくてはならないから、それ用の小間使いが現れたのだろう。出陣祝いと濁してはいるが、それはつまり西国の巫女を弑するための集会なのではないのか。尋ねたいことは多々あったが、身なりを整える役目しか持たない小間使いには詳細はわかるまい。シルディアは疑問を飲み込んで、無言のまま従った。

儀式の詳細さえ聞かされずに、自分の役割さえ知らずに、皇室専用の立派な正装服だけ着せられて、軍の前へと差し出される自分は本当に、木偶だ。まるで心を持たない操り人形でしかない。だが、生まれた時からそうやってずっと生きて来たがために、今更そんな生活に嫌気の差すこともなかった。例え唯一自分の「力」を止めてくれる愛おしい少女が殺されようと、それを見届けなくてはならないのだとしても、逆らう気も起きなければ悲しくもなかった。あるのは???僅かな虚しさだ。

木偶の皇太子は正装に着替えると皇宮を後にして、軍人ばかりたむろする政殿へ向かった。そこには下級兵士がすでに待ち構えていて、膝について皇太子に敬礼する。

「……出陣祝い、決起集会は処刑場にて行いますので、刑部の方へ

参りましよう」

兵士はそう告げると、皇太子を連れて政殿の西を目指した。

刑部は政殿の中でも、罪人の裁きや刑の制定、刑の執行を行う部署である。刑部の窓からは広い処刑場が見え、そこで罪人の処刑が行われた。人の死に敏感なシルディアにとっては、あまり訪れたいはない場所である。

訪れた刑部の中は、いつもなら働く人もいるのだろうが、今日からはらんとしていた。この決起集会のために、空けてもらったのだらう。

「殿下??すでに処刑場の方には五百の兵士が集まっております」

やってきた皇太子を見るなりそう告げたのは、軍の最高峰、将軍スターリンだ。彼は皇太子を此処まで案内した下級兵士に「下がれ」と命ずると、シルディアに向かって笑った。

「決起集会に集ったのはたったの五百でございますが、西国への出陣の合図が出れば、この首都から西へと七千の兵卒が向かいます。国境付近にはすでに三千の兵卒が配備されておりますから、その数合わせて一万」

「一万……数が多ければいいってもんでもないんじゃないの。我ラウグリア軍には、俄の兵士が多い。儲かるから、とか、優遇されるから、とかそういう理由で軍入りした奴がごまんというじゃないか。奴らはろくに刀も握れない」

「そのための、決起集会です。彼らの士気を上げ、統率力を高める……。そして、なんといつても、巫女の処刑だ。古来より、戦の勝敗は敵陣の長を討ち取ることによって決まるという風習もあるが、今回の西国との戦は、最初に敵陣の長を討ち取るところから始める」

「長……巫女は、宗教上の長だと聞いたけど」

「なら、尚良いではないか。西国は宗教国家です。奴らから神を取り上げることによって士気を奪い、一挙に攻め込む。最強と信じていた巫女さえ北軍には勝てないのだと西に思わせることができれば、

それでいいのです」

將軍はどことなく満足げに言った。シルディアは「ふうん」と答えて目を伏せる。シルディアには国政のことなど何もわからなかった。特に、戦の手法など、説明されたところでさっぱり理解できない。

將軍も、シルディアに理解してもらおうとは思っていないのだろう。それ以上の説明はせずに、「では参りましょう」と彼を促した。向かうは、処刑場全体を見下ろすことのできる、刑部の広い欄干だ。

欄干に出ると、北国ラウグリアの冷たい風が頬に突き刺さった。

これから冬が来ようというのに、ラウグリアは冬ごもりの準備ではなく戦の準備をしている。処刑場に集った誰も彼もが、血走った目で欄干に立ちただかる將軍と皇太子を見つめていた。

「……皆の衆、時はきた！」

欄干に立つて、五百の兵士を見下ろして、將軍が叫んだ。するとそれに兵士たちが「おお！」と叫びで応える。たかが五百の群衆であるが、全員が口々に叫びをあげると、地鳴りのように不気味に響き渡った。

「いざ西国の巫女の首を討ち取り、いざ西国へと出陣しよう！」

再び將軍が叫ぶ。それが合図となっていたのだらう、五百の群衆の最前列、処刑台の前に控えていた楽器部隊が太鼓を奏で始めた。どんどんどんどこと、人の死を促す軽薄な音の調べと共に、刑部の一階から処刑場へと連れ出されたのはカグワだ。

(……カグワ)

シルディアは、今朝方まで同じベッドの中で寝ていたその少女を見下ろして、目を細めた。

小さな少女は逃げ出す力もなかるうちに、これでもかというくらいに太い綱で縛られて、まるで犬かなにかのように処刑人に引っ張られる。

嗚呼、可哀想なカグワ。何の罪もないのに、ただ国同士の権力争いのために、見せしめにされて殺される。西の国で大切に育てられたであろう少女は、こんな寒空の下で哀れな生涯の最期を迎える。

『力』あるものは、ろくな最期を迎えやしない。カグワも、もしも普通の少女として生まれたならば、巫女にも選ばれず、他国に攫われることもなく、当然何百の観衆に囲まれて「殺せ」という残酷な煽りの中で命を落とすこともなかっただろう。

(カグワは、俺を、恨むだろうか……)

シルディアは、小高い処刑台の上へと引つ張り上げられる少女を見下ろして、思った。

彼女はシルディアを救ってくれた。人の死んだ魂を吸い取って、人の恨みさえも吸い取って、死人の辛さや悲しみを全て感じ取ってしまうシルディアに、手を差し伸べた。『力』が暴発し、部屋中の物を破壊して、危うく女中を死に追いやるところであったが、そんなシルディアを止めてくれた。それなのに、そんな恩人を、シルディアは見殺しにしようとしている。??彼女が死んだ後の魂は、どんなものだろう。やはりシルディアに取り憑いて、苦しみを与えるのだろうか。

処刑台の上に立った少女に、処刑人が座れと命じた。彼女は刀で首を落とされる。少女はその前に、欄干に立ったシルディアを見上げるだろうか。そして「この恩知らず」とシルディアに向かって恨みを吐くだろうか。

(いつそ、それでもいいから、顔を見せてくれないか……)

シルディアは、少女を見下ろした。それでもいい。最期に生きた少女の顔を見たい。まだ、きちんと言葉を吐き出せる状態で、彼女の言葉を聞きたい。



そう願って見下ろした少女は、しかし、全く欄干の方など向かなかった。代わりに、まっすぐ五百人の整列する軍人の衆の方を眺めて、小さく零す。

「ゆたや」

恐らくそれは、隣にいる処刑人にさえ聞こえないような小さな呟きであつたことだろう。なのに、それをシルディアが聞き取ることができたのは、『力』のなせる技だ。シルディアは、どこにいる誰の言葉であろうと、『力』を使って聞き取ることができた。

(……ユタヤ?)

シルディアは首を傾げた。その名を持つ彼女の仗身は、すでに殺されたか、あるいはどこかに捕えられているはずだ。

そう、思ったのだが。

突如、五百人の群衆の最後尾から、騒動が起きた。

うわああ、と悲鳴にも似た雄叫びが走る。綺麗に整列していた軍隊が、後ろから崩れはじめた。

最後尾、その様子は細かには見えないが、血飛沫が走つたように見える。そして、一人、また、一人、と軍人が死んで行った。

「なんだっ? 何事だっ?」

隣に立つ将軍が、突然の出来事に、声を荒げた。

軍の最高指揮官である将軍でさえ状況を把握できず、場は混乱した。突如現れた何者かによって、軍人が滅多切りにされていく。

その者の戦闘力の高さはずば抜けており、何百という敵軍の中にもありながら、少しも怯む様子を見せず、かすり傷一つ負わなかった。軍人たちは、抜刀する隙すら与えられずに、ただ急所を一付きされて死んで行く。この一瞬で、二十近くの間人が死んだ。

「……ユタヤだ」

シルディアは小声で呟いた。しかし、混乱している将軍にはシルディアの呟きは届かない。彼は最前列にいる軍の上部の間人たちと、

「一体何事か」ということについてまだ話し合っていた。

???生きていたのか、と思う。

とつくに殺されたと思っていたカグワの仗身は、とんでもなく強かった。何百という軍人の衆の中に飛び込んで来た度胸もさながら、それだけではなく実力も伴う。とは言え、たった一人で五百を相手にするのは無理というものである。最初は不意打ちで、一気に二十を切り捨てることができたが、残りの四百八十はそうはいかない。刀同士での戦いならまだしも、飛び道具を用意されたら太刀打ちできまい。

と、そう思った時だった。

突如、ぱんつ、と音がして、シルディアの中で何かが揺らぐ。

(なんだ……?)

シルディアは胸を押さえて、瞠目した。??初めての感覚であった。どこからか、ぐいぐいと『力』が押し戻されてくるような感覚。??これは、なんだ？

と、思って顔をあげて、さらに愕然とした。他の誰にもわからなかったろう。だが、シルディアにはわかる。ユタヤを取り巻いていたシルディアの『力』が、すなわち、ユタヤの獣の性を封印していた『力』が、弾かれたのが見えた。シルディアの元へ『力』が戻ってくる。

「……封印が、解かれた」

「え？」

今度の眩きは聞き取れたらしく、隣の将軍が、聞き返してきた。が、それに丁寧な答えてやっている余裕などない。『力』を弾かれたのなんて、初めての経験だった。そして『力』を弾いた方は、当

然ながら、封印されていた本来の力を取り戻す。

軍人たちの集団の中から、次々に悲鳴があがった。

それまで刀を持って二十人を切り捨てるなど暴れていた男が、突如巨大化した。かと思えば、それはもはや人間ではなかった。大人の背丈の二、三倍はあるうという、熊のような背格好、そして骸骨のような顔、目はくぼんで絶望の色に染まり、長い爪は一本一本が刀のように鋭利であった。

「……すごい、あれが、獣人……」

初めて見る獣人の獣の姿に、シルディアは呆気に取られていた。隣にいる將軍も、そうだ。だが、獣人を前にした軍人たちは呆気に取られるどころではなく、初めてみる化け物の姿にただひたすら悲鳴をあげて逃げ惑った。処刑場に広がる阿鼻叫喚、出陣の祝いは、地獄絵図と化した。

獣は、それまでの人型をした仗身とは比べ物にならない、強さであった。

腕の一振りで、三人の人間をなぎ倒し、後ろ足で蹴り飛ばして二人が気を失った。中には勇敢な軍人もいて、あるいは自暴自棄になっただけかもしれないが、刀を持って獣を倒しに向かう。しかし、刀では、獣の肉はおるか毛皮さえ斬ることができなかった。熊のそののように見える柔らかそうな毛皮はしかし、研ぎすまされた刀よりも頑丈だった。

獣は、目的を失ったかのように殺戮を繰り返した。人型の時には、軍人を殺めながらも、「巫女を護るのだ」という確かな目的があったように思える。だがしかし、獣になった瞬間、彼はただ人を殺すことを目的にしているようにしか見えなかった。そういえば、とシルディアはかつて彼の言っていた言葉を思い出す。??今でこそ殿下や巫女の君の術によって「獣」を制御しておりますが、術さえ解けてしまえばただの獣と同じ。??なるほど、確かに今の彼は、理

性も何もない、ただの「獣」だ。

五百の軍隊では、獣には全く歯が立たなかった。焦った将軍が、「砲筒を用意しろ！」と喚いている。刀剣では勝てないと悟ったのだろう。

「私の縄を解いて！」

騒ぎの中、甲高い声が響いた。この男しかいない処刑場の中で、女の声がするとなれば、それは一人しかない。シルディアは、処刑台の上を見つめた。捕縛された少女が、啞然としたまま動けなくなっている処刑人を強い眼差しで睨みつけていた。

「私しか、彼を止められないわ。早く、解いて」

「しかし……」

言いよどむ処刑人を、少女は睨みつけた。

「解いて」

そう告げた少女の目には、「力」が込められていた。

それに気付いてシルディアははっとする。

暴れ回る獣に気を取られて気付いていなかったが、いつの間にもあろうか、カグワにかけたはずの封印もまた、解かれていた。カグワにみなぎる「力」が見える。??そして、ふと、疑問に思った。初めてカグワがこのラウグリアに来た時、初めて彼女と出会った時、彼女はあるに強い「力」を持っていただろうか。

正直なところ、初めてカグワを見た時、シルディアはとんでもなく期待はずれだと思った。西国一の「力」の使い手が来るのだと思つて、彼女の到着を心待ちにしていたのだ。それなのに、現れた少女は少々「力」が使える程度で、それなら北軍の司令部の中にもちらほらいる「力」の使い手と変わらない。西国の巫女も、大したことはないなと、そう、思っていたのだが??。

処刑人に縄を解かせたカグワは、処刑台から地上へと降り立った。その姿は、ただの平服を纏った少女でしかないというのに、いっそ

神々しいほどだ。そして目を凝らすと、少女の周囲に、何やら力が集まっているのが見えた。

(あ……死んだ魂が)

シルディア以外は、誰も気付いていないようだった。それはそうだろう、あれは、『力』を持つ人間にしか見えない。

獣が暴れて人が死ぬ。死んだ人の魂は、彷徨って、カグワの元へと集まった。どうりで、とシルディアは納得した。これだけ大勢の人間が目の前で死んでいるのに、シルディアは死んだ魂に心を食われない。いつもであれば、この人数の魂が死ねば、とつくに『力』が暴発している頃だ。

カグワの『力』は神々しく、シルディアのそれとはまるで違った。シルディアは人が死ぬとその死んだ時の苦しみや恨みまで吸って『力』を膨張させるが、カグワは違う。死んだ魂はカグワに近付くとまるで浄化されていくように澄んで、恨みも苦しみもなく、美しい状態で少女に吸収された。

その姿は、まさに神の使い、巫女である。

「ゆたや！」

少女は暴れ狂っている獣の前に、立ちはだかった。すると、それまで暴れていた獣が、ぴたりと動きを止めた。しかし今の彼には人の心も理性もない。彼はただの獣だ。カグワをカグワとして認識はしていないだろう。

「ゆたや」

それでも、獣が動きを止めたのは、恐らくカグワの纏う神々しいほどの『力』に圧倒されたためだ。獣は『力』に敏感だ。巨大な化け物が、ちっぽけな少女に気圧されたように、全く身動きとれなくなってしまう。それと同じように、周囲で逃げ惑っていた軍人の衆たちも、少女に気圧されて、ぴたりと一歩も動けなくなる。

「ゆたや……もう、いいよ。もう、いい」

同じ言葉を二度も繰り返して、少女は一步、獣の方へと近付いた。獣はびくつと恐れるように身震いする。

「……かえろう?」

少女は巨大な化け物を見上げて、小首を傾げた。化け物も、少女から視線を逸らさない。くぼんだ闇のような目で、少女を見つめている。

そして化け物がゆっくりと動いた、その時である。

ずどん、と地底まで響くような音が響いた。ぐらり、と化け物の体が揺らぐ。

「ゆたやっ!?!」

カグワが悲鳴に似た声をあげた。何事か、とシルディアが音のした方に視線を向けると、將軍の命令で何人かの兵士が巨大な砲筒を運んで来ていた。低い音は、砲筒が火を吹いた音だ。

「やった……! 効いたぞ……!」

「さすがの化け物も、火のついた鉛は避けられんだろう……! 今度は頭を狙え!」

駄目だやめろ、とは言えず、だが、今此処であの獣が死んだらどうなるのだろうと誰もが目を見張る中、第二弾が発砲された。

それは見事に命中し、獣の頭を粉碎する。

頭蓋骨に似た顔にヒビが入り、首の辺りから、鮮やかな赤が流れおちた。それはねつとりと地面の上に赤い染みを作り、嗚呼、獣の血も赤いのだなと観衆に暢気な感想を抱かせる。

巨大な獣はそのまま己の赤い海の中へと、沈んで行った。どおおん、という重量感のある音とともに地面の上に倒れこむ。それから獣は、ぴくりとも動かなかった。

「……ゆた、や……?」

誰もが動けない。身動きを取れない。まるで金縛りにあってしまったかのように、動けないのだ。その中で、赤い海の中へゆっくり

進んで行く少女は、己の服がその赤に染まることも気にしない。

「……ゆたや」

小さく少女の呟いた声に呼応するように、獣の体から、魂が抜け出した。これが見えるのは、やはりシルディアくらいなものだろう。そしてそれが「死」を意味していることも、シルディアはよく知っている。

「ゆたや……」

少女はそれに気付いただろうか。少女ほどの『力』があれば、体から抜け出す魂も見えるはずだ。そしてそれを少女が吸収していることも、自分でわかつているはずだ。

「……もう、いいよ」

そう少女の語りかける相手は、抜け殻である。魂のない、抜け殻である。少女はそれをわかつているはずなのに、真っ赤に染まった獣の毛皮に縋り付いた。

「もう、私なんかのために闘わなくて、いいのよ……」

軍人たちは、誰も身動きを取ることができなかった。おそらくそれは、カグワの『力』によるものだ。彼女の『力』に圧倒されて、動くことさえ出来ない。

唯一彼女の『力』に対抗できるシルディアは、欄干の上で一歩前へと進んだ。そして、他の多くの軍人たちと同じように金縛りにあっている將軍スターリンを見上げる。

「……スターリン、彼女たちを西国へ返すよ」

スターリンは何も答えない。答えられないのだろう。この欄干と、少女が獣の横に蹲る場所とはかなりの距離があるが、それでも身動きが取れないくらいに、少女の『力』は強い。

「もう、いいだろう……西国の巫女を捕えたのは事実なんだ。北国の力は十分見せつけられたはずだ……。それに、巫女を返してやる温情もまた、戦では役に立つんじゃないのか」

シルディアには戦における戦法など何もわからない。だから、適当なことを言っているのだという自覚はある。だが、それ以外に言葉が思い浮かばなかった。とにもかくにも、彼女たちを返そう。そう思う。

「今のカグワには……巫女には、誰も勝てない。闘うよりも、西国へ、返そう」

そう告げて、シルディアは片手を高く掲げると、『力』を発揮した。

空間と時間の両方を操り、さらに物理的にそれらを出現させるこの技は、シルディアほどの『力』があっても難易度は高い。精神力体力ともに消費する技であるが、出来ない訳ではなかった。黙って瞑目する。

北国の首都、西へ西へと下って田園地帯、軍隊の配備された国境付近、越えて西国の領土、民家の少ない田舎を南下し、さらに西へ向かうと栄えた首都が見えてくる。西国の最西端、首都の端に控えた巨大な宮殿を覗き込んで狙いを定めると、シルディアは目を見開いた。

「……はっ！」

『力』を込めてぐつと拳を握り締めて、カグワ達の上空に、時間のない空間を作り出した。此処を通って向かえば、一瞬で彼女たちを西国へと送ることができる。

旋風が巻き起こり、カグワとユタヤの抜け殻を時間のない空間の中へと吸い込んだ。空っぽになったユタヤの体とともに送ってやるのは、優しさからではない。此処に置いておいたところで、北軍の士気を下げるだけだとわかっているからだ。



二人を遠い西国の地へ送ると、シルディアは空間を閉じた。途端、全身を倦怠感が包み込む。やはり、時間と空間を一挙に操るこの技は、生半可ではない体力を消耗した。

カグワがいなくなると、まるで魔法が解けたように軍人達が動き始めた。彼らの中に意識はあつたらしく、体が動かせるようになる。と途端にざわつきはじめた。口々に「獣人」「巫女」とその単語ばかりが繰り返される。

体力を使い切ったシルディアは、重力にさえ耐えられなくなつて、欄干の上にそのまま転がった。「殿下！」と驚いたように將軍が声をあげている。この男は『力』を使えとは命じてくるくせに、実際にシルディアがそれを使つているところなんてほとんど見た事がなかった。どれだけシルディアが『力』によつて身を削っているかなんて、彼は知らないのだ。

欄干の上に仰向けに転がったシルディアは、冷たく高い北の空を見上げて、ふうと息を吐いた。吐き出された息は白く濁り、一瞬で消えて行く。

国境を越えた遙か遠くに落ちた少女とは、もう二度と会うことなんてないのだろうと、思った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9892x/>

---

西国の巫女

2011年11月7日09時04分発行